
ネットゲの世界に取り込まれたから個人タクシーを始めた～高津タクシー物語～

fumia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトゲの世界に取り込まれたから個人タクシーを始めた〜高津タクシー物語〜

【Nコード】

N2901S

【作者名】

fumia

【あらすじ】

詰らなくなつたので長い間離れていたネットゲームを、暇つぶしに久々に起動させてみたら、突如画面いっぱいに眩いばかりの真っ白な光が広がって目が眩んだ途端、気が付くとパソコンごとネトゲの世界に転送されていた？しかも元の世界に戻る術がない？！仕方がないからこのゲームでの俺の職業である個人タクシー事業を再開しようとしたら、最寄の運転試験場で試験を受けて免許を取れたと？……生活の為に金を稼ぐタクシーの話。

第一話：ゲームの世界に来てしまった……

>> 新太郎

目が覚めたら知らない天井がそこにあった。

いや、正確には知らない場所どころか、ある意味で物凄くよく知っている部屋の天井なのだが、生身なら到底辿り着けない筈のその部屋にいる意味が理解できず、

「どうして……？」

と俺は唯々阿呆の様に呆然としながら呟いた。

だって、もし目の前の事が夢ではなく現実であるとしたら、つまるところ俺はゲームの世界に入り込んでしまった……という事になるからである。

そもそもの始まりは、ここ暫く遠のいていたオンラインゲームを、暇だからという理由でPCのHDDに入っていたそのゲームのソフトを起動させた時だった。3ヶ月振りに動かした所為だろう。大量のアップデート情報を読み込むのに1時間近くも待たせられた挙句やっとログイン画面に入ったと思ったら、突然ウィンドウモードがフルスクリーンモードに切り替わり、モニター全体が真っ白になってストロボの如く目が眩むばかりに輝き出し、あまりに極端に高い光度のお陰で昏倒し、気が付いたら本来俺のアバターが出現する筈の、ゲーム内でプレイヤーに宛がわれているワンルームアパートの部屋を模した仮想空間に、生身の人間である俺がどういう訳だか出現してしまっていた。やはり意味が分からない。

俺がやろうとしていたゲームは、もはやゲームというよりは総括的なSNSでの仮想空間と称した方が差し障りのない、自分の分身であるアバターを用いたプレイヤー同士が同じゲームの世界で疑似的な社会生活を送りつつゲームも行つという、所謂シミュレーション

ンゲームと各種MMORPGやFPSを一緒にして無理矢理一つの世界のゲームとして集約して糞ゲーに成り果ててしまった物であり。そのあまりの力オスぶりに、あれ程はまっていたのにも関わらず一度は見切りを付けてしまったゲームである。

元々オリジナリティーが乏しいというか、もう既に他社で制作・運営されていてそれなりに人気があるようなゲームと似た様な物を次々とラインナップに入れ、決して大きな会社でも無いのに大規模な多人数参加型のオンラインゲームを10本近くも抱えて運営している時点で不安要素は十分にあった訳だが、二番煎じとは言えオリジナルに負けない位華麗なグラフィック、そこまで高性能じゃないラップトップ式のPCでもサクサクと軽快に動く軽さ、それにも拘らず充実して使いやすいシステムと俺の様なソロプレイヤーにも優しい仕様である点で俺はこれらのゲームを評価していたし、実際ゲームによってバラつきがあったものの、それなりの数のプレイヤーが集っている様に見受けられていた。

俺がやっていたのは、アバターを用いて割り当てられたプライベート空間で自分好みに作成した女キャラ、PPCと略称されるプレイヤーズパートナーキャラクターとの疑似恋愛や、仮想空間に作られた街で他のプレイヤーとも交流できるソーシャルコミュニケーションゲームと、実写さながらの繊細なグラフィックが圧巻な、東京の様な都市高速が縦横無尽に広がる大きな街を舞台にしたカーレース風MMORPGの2つのゲームだった。特に後者はゲームの基本シナリオを全て終了してある一定のレベル以上になると、運営から『タクシー事業用試験』というクエストを受ける権利がプレイヤーに付与され、実技とペーパーテストで構成されるそのクエストを完了すると今度は『二種免許所持者』という称号が与えられ、その状態で幾つかあるタクシー事業者用のギルドの一つに加入すると、自分が持っている車をギルドが指定する範囲でタクシー車両に改造し、NPC相手に個人タクシーを運営してゲーム内通貨と経験値が得られ、また同じようにトラックを使った運輸業を始める事も出来る面

白いシステムや、車のグラフィックの基本情報を全て公開し、必要であればラインナップに無い自動車でもユーザーが勝手に作成して、ゲーム内通貨をやり取りする事で他のプレイヤーにも譲渡する事が出来、そうした車を製造して売買する車屋と呼ばれるプレイヤーや、同様に自分で勝手にエアロパーツやステッカーを拵えて売るショップと呼ばれるプレイヤーが彼方此方に跋扈しているという自由度の高さから、廃人とまではいかないまでも、その一歩手前辺りに至る位俺はのめり込んでいた。

ところがやはり経営的には厳しかったのだろう。そうかと言って既に多くのユーザーから課金されているゲームを終了してそれらのデータを消しさるというのも忍びなかったのか、多すぎるゲームを減らす為にこの運営が取った方法は、複数のゲームを纏めて一つのゲームにするという前代未聞な方法だった。

まず、俺がやっていたレースゲームとソーシャルゲームが統合された。ところがこの2つのゲームはどちらも現代日本の都市や町を舞台にしている物だったので、人は車道を歩けなくなったとか、車は信号などの交通ルールを守らなくてはいけなくなったとか、そういう事を除けば大した混乱はなく、シミュレーションの方に車というアイテムが加算されたと思えばどうって事なく感じる程度の物だった。

次に戦争物の自称本格派FPSなる物がこれに併合されたが、確かに平和な日常風景に戦闘ヘリや戦車や武装した兵士に幾許か違和感を覚えたものの、そういう近代兵器も現実世界に存在している物である以上、FPS側は判らないが少なくとも此方にとっては、取り立てて文句を言いたくなるような物ではなかった。

誰が得するんだよ！と、言いたくなる位事態が悪化したのは、その頃その会社が制作運営していたゲームの中で最も人気があり、頭

一つどころか他のゲームと比べて10倍近くもプレイヤーが多かった、中世ヨーロッパとその周辺を舞台にしている、所謂剣と魔法のファンタジーと一般的に呼称されるような代物に、新ステージとして我々のゲームが統合されてしまった時だった。

戦闘機や迷彩服の兵士までは許容できたが、流石に街中に突然恐竜最盛期の時の首長竜の様な大きなモンスターが現れて大勢のハンター達と戦闘を繰り広げた挙句、それが決着するまでの間ずっと通行止めで足止めを食らった時は、普段は仏の様に優しいと他人から言われる俺ですら堪忍袋の緒が切れそうになったし、しかもこれまた良く分らん理由で街中のNCPが殆ど居なくなつて、タクシーでフィールドを何周も回つても一銭にもならない様な体たらくになつてしまったので、俺はこのゲームから手を引いた。恐らく俺以外にも相当数のユーザーが、退会まではしないにせよ、引退してしまつたのではないかと思う。それ位酷い様相を呈していた。

じゃあ3ヶ月ぶりとはいえ、何でお前はそんな糞ゲーを再び始めようと思つたのだ？と問われると返答に窮するものがあるが、既に冒頭で述べたようにその時の俺に恐ろしい程やる事が何も無く、暇を持て余してしよがなかつたから気晴らしに遊んでみようか、と変な気まぐれを起こしてみた、ただそれだけの事である。

さて、何が何だか判らない内にゲームの世界に来てしまつたみたいだが、兎に角これからの身の振り方を考えよう、と思つた俺は部屋の傍に置かれた薄い青色のベッドカバーが掛けられたベッドから上半身だけを起こして辺りを見回した。

俺から見て直ぐ左側にある壁際に備え付けられたベッドの傍、右の方へ顔を向けた途端大きく視界に入つた全身用の姿見で確認すると、このゲームで遊んでいる時には見慣れた姿……俺の作成した俺自身のアバターの姿が目に入った。

自分の腕や腹、足等を改めてよく見てみると、今し方まで着てい

た筈の普段着ではなく、今鏡の中に映っているアバターと同じ装いを自分が身に付けている事に俺は気が付いた。念には念を入れて、試しに右手を肩の上まで上げてみると、俺の動きにシンクロするように鏡の向こうのアバターも左手を上げた。どうやら俺はアバターの姿でこの世界に取り込まれたらしい。

左の手首に視線を落とすと、普段している腕時計の代わりに、G・ショックの様な厳ついデジタルの腕時計を更にハイテクニカルにカスタマイズした感じがする、黒いウォッチ型の何かのデバイスが本体と同じような色の黒いゴム製のリストバンドによって俺の手首に嵌め込まれていた。何なのか無性に気になって紺碧の色をした小さな3cm平米もないであろう小さなタッチパネルに手を触れてみると、突然パネルが青く光り輝いて、空中に蒼白いスクリーンの様な半透明の画像を立体的に映し出した。

突然こんな小さな3D立体投影機というところでもない代物を目の当たりにして面食らったが、ここはゲームの世界で、造られた偽りの世界である事を思い出して、そうか…こういう演出なのか、と俺は妙に感心してしまった。

手元の機械から投影された3インチ程度の横長のスクリーンを興味津々に覗いてみると、白く輝くとても小さな文字で次の様に書いてあった。

『プレイヤー名：Shintaro

総合レベル：53

ドライバーレベル：82

所持ライセンス：A級ライセンス・第二種免許・タクシー乗務員総合労働組合会員証・個人タクシー協同協会認定営業許可証（仮）

職業：個人タクシー事業主

所属ギルド：個人タクシー事業者連合

営業所拠点：初奈島第1地区34番アパート0345号個人・高津タクシー営業所

営業域：全域

現有資産：3,504,560G

備考：保有RCを枚数×1,000でゲーム内通貨に統合』

どうやら現時点における俺のスペックらしい。ざっと一見した時に150万程度しかなかった筈のゲーム内通貨が一気に増えている事に気が付いて驚いたが、単に所持していた2千円程のリアルマネー分が加算されただけだと判るや否や、糠歎びしかけていただけに俺のテンションは一気に下がってしまった。

まあ、それは置いて俺のスペックを再確認しよう。どうやら俺はまだギルドと業界団体に所属していて、今いるこの部屋を営業所にして今直ぐにでも個人タクシーを再開出来る身分であるらしい。尤も、あくまで客が居れば……の話だが……。ただ、一つ気になる事があるのだが、この営業許可証に付いている『(仮)』のマークは一体何なのだろう？俺の記憶が間違っていないければ、大分前からウチは正式に営業許可を受けてタクシーを営業していた筈である。別に更新期限がある訳でもなし、タクシー乗務員総合労働組合や個人タクシー協同協会といった業界団体への会費や所属しているギルドへの定期献金は、手持ちのゲーム内通貨から月毎に自動で引き落とされている筈だから何も問題も無い筈だ。

何処となく嫌な予感がしたが、他の機能も確かめる為に、俺はこの小さいながらも凄いい性能を持つ機械を色々と弄ってみた。

ここで一つはつきりした事がある。どうやらこの機械には空中に光り輝く半透明なスクリーンを映し出す機能以外に特にギミックは無く、そのスクリーンに投影される情報も、スペック表やアイテム一覧といった、普段画面の隅でよく見たり出したりするウィンドウのそれと同じ物である。ただしエモーション画面とチャット画面、そしてログアウトの表示画面がどれだけ探しても見つからなかった。チャット画面やエモーション画面などはいい。必要があるなら自分の口で言葉を交わせれば良いのだし、今なら態々画面を操作しなく

ても自由に体を動かせる事が出来る。VR化に関して余分だと思われる機能は全部削ぎ落とすのだらう。

しかしちょっと待て。どうしてゲームを中断して退場するというゲームとして大切な機能までもが消失してしまっているのだ？今日はまだいいが明日からは普通に大学の方へ出掛けなければならないし、そもそもトイレに立ちたくなくなったり空腹で食事が摂りたくなくなったり、何らかの緊急事態が発生した場合にはどうすればいいのだろうか？ひょっとしてこの部屋の何処かにそのための仕掛け等が用意されていたりするのだろうか？そう疑問に思いながらも俺はベッドから起きて床一面に敷き詰められた薄桃色の羊毛の毛織物の絨毯の上に立ち上がると、しげしげと辺りを見渡した。

背後の壁には先ほどのベッドが、すぐ右側には例の鏡と窓があり、小さなベランダを通じて外の青い空の光りが部屋の中に燦々と降り注ぎ。眼下の方、少し離れた所に緑の丘と白い砂浜の間に灰色の舗装道路が走っており、砂浜の向こうに所々に白い波を輝かせながら空の青い光を反射して紺碧の深い光を満遍なく湛えた広大な海が横たわっている様子が良く見渡せた。今までは部屋の中の様子を見る事は出来たが窓の外の景色までは見る事が出来なかった事もあり、眼前に広がる光景を目の当たりにして、俺は感動のあまり声を発する事すら忘れて思わず見入ってしまった。

我に帰って自分の左側を見渡すと、ベッドの傍にこの部屋の中で唯一外界へ通じるドアがあり、その隣に色んなアイテムを収納する事が出来るクローゼットがあるのが見えた。ベッドと反対側の方の壁には窓の方から順に木製の本棚と20インチ位の薄型テレビが置かれたラックが並べて備え付けてあり、そのテレビとクローゼットの間に茶色くて丸い卓袱台が置かれていて、どういう訳か先刻ゲームを起動させる為に使っていた自分のノートPCが閉じられた状態で置かれていた。

そして更に不可思議な事に、その卓袱台にはPCの他にも煎餅が

盛りつけられた今まで見た事もない漆器の菓子皿が置かれており、その煎餅を手にとってムシヤムシヤと食べながら此方に背を向けて正面のテレビの画面に映し出されている映像を夢中になって見入っている、背中まで掛る濃い亜麻色のストレートのロングヘアで、胸が大きく出るところは出ているが引つ込む処は引つ込んだスタイルが良い、黄色いミニスカートと黒いパンストを穿いて白いシャツの上に桃色のガーディガンを羽織った女……俺のPPCである玉緒が座っていた。

その玉緒の何処か造られたキャラクターとは一線を描いた、何とも人間臭い仕草を奇異に思いながらじっと観察していると、俺の視線に気が付いたのか不意に玉緒が此方の方へ振り向いた。

「あら、お帰りなさい、あなた。いつ帰っていらしたの？居るなら居るで、声を掛けてくれたら宜しかったのに……。」

まるで帰宅した夫に面倒ながらも応対する古女房のような玉緒の言動に、俺は内心仰天していた。少なくとも俺が最後にプレーしていた時は、玉緒はコマンドで決められた杓子定規な対応しか取る事が出来ないヴァーチャルな造形を与えられたロボットプログラムに過ぎなかったし、イレギュラーというか、本来コマンドで指定されていないような状況にも随時対応できるような賢さも学習機能も殆ど備えておらず、こんな人間臭い態度が取れる様な娘では到底無かった。

俺は何も答えずにじっと玉緒の顔を見据えてゆつくりと彼女に近づくと、不思議そうに俺の顔を眺めている彼女の二の腕にそっと手を掛けた。柔らかく、そして暖かった。間違いない、玉緒の体の感触は生身の人間のそれと全く同じ物だった。とてつもない衝撃が頭の中に降り注ぐのを虚ろに感じながら、

「玉緒……お前……人間なのか？」

と尋ねると、数瞬の間呆けた様に俺の瞳を覗き込んだ後、何がおか

しいのか判らないが玉緒は唐突に腹を押さえてケラケラと大声を上げて笑い出し、

「もう…嫌だわ、あなただったら……。わたしもあなたも人間に決まって居るでしょう？もうお昼も大分過ぎているんだから、寝惚けていないでシャキツとして下さいな。」

と、まるで俺の方が阿呆か何かの様に茶化しながら彼女は俺の背中をバシバシと叩いてきた。その生きている人間の物だとしか考えられない位生々しい温もりの余韻を背中に引き摺りつつも、やはり目の前の事象が信じきる事が出来ず、半信半疑のまま俺は今現在の暫定的な自分の立場を頭の中で整理しようと試みていた。

玉緒の俺に対する態度を鑑みるに、どうやらこの世界では俺と玉緒は夫婦という設定らしい。でもって、ただのPPCという俺専用の人形だった筈の玉緒は生身の人間となり、それ相応の身体と人格を得て俺の前に現れ、更に彼女から見たら俺は久々に家へ戻って来た旦那という訳だ。

何と言うか……。まるで子供の頃に近所に住んでいた女友達とよく遊んだおままごとでもやっている気分だな……。と思いながら俺は右手を後頭部へ回して髪を掻いた。別に俺自身は嫁も彼女も居ない独り者なので、こういうシチュエーションを悪い物だとは思わないが、まるで自分のテリトリーに他人が居座っている様な気がして妙に落ち着かなかった。

でもまあ、そう言っても仕方がない。その内嫌でも馴れるだろう……。そんな事を考えて覚悟を決めていると、急に玉緒が俺の方へ振り向き、

「そう言えばあなた。あなたの留守中にギルドの方から何か書留が届いていましたのですけれど……。」

と声を掛け、如何にも書類や薄い書籍が入って居そうな大きなA3サイズの青い封筒を俺の足元に放り投げてきた。

パタンツと飛び込んできたそれを屈んで拾い上げると、俺は少々

乱暴に糊が貼られたフラップの部分をビリビリと破り開け、中に入っていた書類群を纏めて抜き出して卓袱台の隅にドカッと置き、中身を確認始めた。

手始めに一番上に置いてあった1枚だけの白いA4サイズの紙に印刷された文書を手に取ると、俺は書いている内容に目を通し始めた。

『 個人タクシー事業者連合ギルドマスターから、所属する全ての職員・団員へ通達する大切なお知らせ

4月を迎え新年度となり、暖かくなると同時に各営業所及び支部の諸氏の闘志も新たな季節に向けて一念発起し、益々盛んになっているところだと思われます。

さて、去る3月13日の『リライフ』のアップデートから現在に至るまで、本ゲームにログインしたプレイヤーが全員がゲーム内の世界に取り込まれるという、異常な事態が発生しています。諸君がこの書面に目を通して居るという事は、恐らくアップグレード後にアクセスして転送された、という事でしよう。現実世界へ戻る手段を試行錯誤されている方も勿論居られると存じますが、運営に問い合わせたところ、今現在までその手段は無いし付ける気も一切無いとの事です。諦めて下さい。

また、運営の説明によると、今回の騒動はアップグレード時のパッチのプログラムに組み込んだ魔法陣の魔法（意味不明、詳細な説明無し）が発動した事で各PCから直接的にプレイヤーが具現化したゲーム世界に転生した事によって発生したとの事です。

更に運営によると、プレイヤーはゲーム内の通貨を各個人の間でやり取りする事で、自由に経済活動を行って永続的に当ゲーム内で日常生活を営む事が出来、食事排泄もゲーム内で済まして問題ないとの事です。

ただし、現実世界におけるプレイヤー不在時についての社会的な

保障の有無は不明です。恐らく無い物と仮定して各人対応して下さい。様お願い致します。

次に、当ギルドに所属する各事業所の事業主（タクシー運転手）の皆様へ。

今までと違い、生身の人間がゲーム内を行き来する事で、ゲーム世界内で事故が続発し、秩序が保てなくなる可能性があります。

そこで、運営によってこの度自動車の走行における交通法規規定が定められ、この規則に準じた試験によって取得できる免許証を交付された者に限り、公道上を自動車で行走する事が出来るようになりました。

その為、協会も営業許可規定を改定し、今までの基準に第一種運転免許証の取得を加えた新しい規則へ移行しました。よって各事業主には至急各地の運転試験場にて第一種免許の交付を受ける事をお願いします。これを無視して無免許運転で営業した場合、最悪営業許可証を永久に剥奪され、ギルドから破門宣告を受ける場合がございます。

なお、現在第一種免許を取得されて居られない場合、ステータス画面のライセンス条項における営業許可証の所に（仮）の印が付加されています。お確かめ下さい。

なお、各地の運転免許試験場の位置や試験の内容については同封した冊子でご確認下さい。』

そうか、戻りたくても戻れないのか……、というのがこの文章を読んだ時の俺の最初の感想だった。と同時に、大変な事態が我が身に起こっているにも関わらず何故か安堵している自分が居る事に俺は気が付いた。ひよっとしたら、少なくとも2ヶ月近く前の3月中旬から既に同じような境遇に居る人がかなりの数居るらしい事を察した時点で、もう俺はここを自分の居場所とする事を受け入れていたのかも知れない。それ位俺の心は平静を保っていた。

次に引つ掛かったのは、運転免許を取らなければ営業許可が貰えない、という事実を知った事だった。さっきステータス画面に出て来た（仮）の意味が判明して一応納得はしたものの、既に現実世界で免許証を所持している身としては面倒臭いと思った。

だが、営業する事が出来なければ一銭の収入も得られないのだ。俺と玉緒……高津家の生活を守る為には商売道具を使う事が出来なければお話にもならない。是が非でも第一種免許とやらを取って一日でも早く個人タクシーの営業を再開しなければ！

運転免許を取る手順や試験の内容を知る為に、俺はさっき読んだプリントの下に積み置かれている『交通安全の手引き』道路交通法・運転試験要項』と銘打たれた、色々な色や形をした自動車が沢山走り回る街中をパステル調で描いた絵を表紙にした薄手のB5判の冊子を手にとるとその本のページを開いた。

早い話、その本に書いてある事は、道路交通法で規定されている事項をドライバーに周知徹底する為に巷の自動車教習所や運転試験場で講習や更新の度に配られる教則本や教科書と丸きし同じ物だった。些細な違いがあるとすれば、

『同じ幅員の道路同士の交差では、先に交差点に到達した方が優先である。』

とするアメリカ合衆国の交通ルール等、他国のルールであって日本のルールでは無い物が幾つか混じっている程度だった。

この冊子によると、運転試験場での試験は毎日行われていて、試験はマークシート式の筆記試験と、実際に試験場内のコースとその周辺道路を助手席に試験官を乗せた状態で車を運転する実技試験をし、簡単な適性検査と書類審査を受ければその日の内に免許証が交付されて車を運転出来るようになるらしい。しかも、今自分が居る初奈島という島の北側にも一応運転試験場が存在するという事だそう。うだ。じゃあ、善は急げ！で早速出掛けようかと思っただが、

『受付時間

平日（月～金）午前8：30～午前10：30 試験開始時間午前
11：00

午後12：00～午後2：00 試験開始時間午後

2：30

土・日・祝日 午前9：00～午前11：00 試験開始時間午前
11：30

受付時間が終了してからの受付は一切応じて居りません。きちんと
時間を守った上でお越し下さい。』

と明記されている事に気が付いて、思わず左手首に付けた機械が投
影するスクリーンを見て今現在の時刻を確かめた。

『16：27』

時計のデジタル表示を一瞥した途端、何故か急に体中の力が抜け
落ちた気がして、俺はその場でへたり込む様に胡坐をかき、玉緒と
並んでボーっとしながら何も考えずにひたすらテレビの画面を注視
した。そうして、今日はもう終わったから明日：金曜日に朝一で出
掛けるか……と、そんな事を考えた。

テレビを見ても特に面白いとも思えなかったし、玉緒の方は相変
わらずテレビの方に釘付けで話し相手になりそうにはなかったので、
仕方なく俺は先程の書類や冊子と一緒に封筒に同封されていた、ギ
ルドに所属するに当たって決められているルールが書かれた真新し
い薄群青色の会則本を手にとるとパラパラと流し読む様にページを
捲っていた。

特に変わった事も無く、表紙の色がモスグリーンから変わった事
以外は、表紙も薄手の紙で造られた安っぽくて薄っぺらなA3判の
書籍という位の感想しか抱かなかったが、車両規定の所まで来た時
に、そのページにだけ二重丸の中に『重要』とボールペンの赤イン
キで書かれたオレンジ色のポストイットが張り付けられている事に
気が付いた。どうやらその部分だけ新しく書き換えられている様だ
った。

『第3章：車両の規定』

第35条：当ギルドに所属する個人タクシー事業者は、以下に定める基準に則した自動車以外で個人タクシーを営業してはならない。

- 1．車体色は白・黒・銀・青及びこれらに近しい色。
- 2．乗務員席も含めて最低3つのシートを有し、且つ運転席・助手席へ通じる2枚の前扉以外に、車両左側に少なくとも1枚以上後席へ通じる独立した、それ自身が自由に開閉出来る扉を設けた車。
- 3．日本国が定める車両法や道交法が許可する範囲で改造等が施された車両（ノーマル車の場合もこれに含む）。
- 4．使用する車両のメーカーは特に問わない。

第36条：当ギルドに所属する個人タクシー事業者において、例え上記基準に則した車両であったとしても、軽自動車を営業車として使用する事は認められない。』

古い方にはシートの数までは規定されていなかったから、ここだけ気を付けなければならないが、ウチで使っている車両は全部3ナンバーの4ドアセダンだからこの基準に抵触する心配は無い筈である。

しかしまあ、何と云うか……。何時見ても緩いなあ、と思わざるを得ない車両規定である。

例えば第35条の第1項。車体色がこれだけ自由に選べる個人タクシー事業者ギルドはウチ位のものである。都営協の規定に順守したカタツムリ型の行燈を採用する『個人タクシー事業者連盟』は特定の白色以外は認めず、ギルドカラーである赤く縁取られた青いラインを車体のサイドと、ボンネット・ルーフ・トランクリッドやバックドアの左側に計3本引く事を強要するし、一応ウチと同じ提灯型の行燈を使っている『タクシー事業者同盟』の指定色はアイスランドグリーン1色だけである。他にも黄色い車体以外は認めない『YCA（Yellow Cab Association）』とか、

空色一択の小規模な地方のギルド等、大なり小なり大抵のグループが単一、または精々2色の色で揃える事を強制してくる事と比べて見れば、如何に連合の車体色の選択が幅広い事が良く分かる。この基準で行くと俺の車の様なシルバーメタリックは固より、ホワイトパールやガンメタリックやピアノブラック等、他のタクシーギルドや団体なら絶対に撥ねられるような車体色の車でもタクシー車両として自由に採用する事が出来る。

次に同第2項。尤もらしく書いてはあるが、基本的に運転席と助手席と後部座席があつて車体の左側に2枚以上のドアが付いている車なら何でもありである。

例えば当然俺が乗り回している4枚ドアの高級セダンは余裕でこの基準をクリアするし、勿論5ドアのステーションワゴンやミニバンだつて該当するし、左側にしかスライドドアが付いていないハイエース等のライトバンやパジェロの様なSUVだつて使う事が許される。他の団体では大概セダンとステーションワゴンとミニバン以外の使用を認めていない事を考えれば、これも如何に選択肢の幅が広いかという事が良く理解できる。

しかし、自由だといっても左ハンドルのライトバンの一部の様に後部座席へのスライドドアが右側にしか付いていない車両や2ドア・3ドアクーペの車は勿論使用する事が出来ないし、マツダのRX-8の様に、4ドアの車であつても使用する事が禁じられているケースも存在するので一概にそうだとも言えないが……。 (RX-8の様なタイプの開放的な観音開き仕様の車の後ろ扉は前扉を開けない限り開く事が出来ない。また、観音開きにした状態で前扉を先に閉めると後ろ扉を閉じる事が出来ず、必ず後ろ扉 前扉の順で閉めなければならぬ為、『後席へ通じる独立した、それ自身が自由に開閉する事が出来る扉を設けた車』という規定に引っ掛かる。またこの手の車は後ろ扉にセンターピラーを内蔵し、後ろ扉に付いたピラーに前席乗員の為のシートベルトが装備されている事が多い為、実用面の事を考えると、やはりタクシーとして使う事は難しい。)

そして第3項。この規定の有る無しの差が、他ではなくこのギルドへ加入する事を決めた俺の決定的な理由である。

合法的な範囲であれば車をチューンアップしたりドレスアップしたりする事が許される。他の多くの団体では改造車は異端扱いが禁じられている（連盟に至っては後部の窓ガラスにプライバシーガラスを使用する事すら禁止している）事を慮れば、この差は十分大きい。

最後に第4項の『メーカーは特に問わない』！国内外を問わず様々なメーカーの中から好きな車を自分の営業車として使用する事が出来る。この項目も他のギルドとは大きく違う所だと思う。ニユーヨークを走るイエローキャブをリスペクトしている『YCA』のように、アメ車やマツダの車も使用可能な所もあるにはあるが、大抵トヨタ車か日産車の中から選ばされ、中々ホンダやスバル等の車を使う事が出来ない場合が多いから、事業主からすれば、やはり色々な車を自由に選べる事に於いて『連合』を所属団体として選択する事は余りあるメリットがあるのだ。だからだろう、連合に加入している個人タクシードライバーは全体の約半数にも上っている。

ただしデメリットもある。基本的に『連合』は他と違って各事業者の営業区域を指定していないので各々自由に走り回る事が出来るのは結構な事なのだが、その時客の一番近くにいる空車に早い者勝ちで配車されてしまうので、加入人数が一番多い分同じグループ内で客の奪い合いが至る所で日常茶飯事に発生し、弱肉強食の呈を成して弱小ドライバーは食っていけず、しばしば他団体へ移籍してしまう事も多くある。

まあ、そうであつたにせよ。配車業務なりでドライバーをサポートする職員は皆良い子達だし、今回の様に頼んでもいないのに異常事態の発生に対して運営に問い合わせしてくれる等、事業主に対するアフターケアも充実しているので、俺自身は当分移籍せずに頑張る心算だ。

何はともあれ明日に向けて今日はもう寝よう。そう思った俺は立ち上がると、そのままベッドの上に倒れ伏そうとした。が、

「あ、あなた待って！」

と叫ぶ玉緒の金切り声を聞いて慌てて起き上がり、彼女の方へ振り向いた。

「もう寝るんですか？ だったら今お風呂の準備を致しますから少し待っていて下さいな。」

そう言うと、彼女はこの部屋の唯一の出入り口であるドアを開けて外へ出て行った。

待っていても良かったが、この部屋の外の様子がどうなっているのか無性に気になったので、俺は玉緒の後を追いつけて部屋の外に出た。

そこは白々しく明るい色のフロアリングが敷き詰められた、ワンルームのアパートでは良く見かける小さなキッチンだった。左手に小さなステンレス製のシンクと電磁コンロを備えたシステムキッチンがあり、その前には白いフカフカしたタオル地の敷物が水気からフロアリングを守る為に敷かれ、反対側の壁には扉が2枚並んでおり、開けてみると手前に洋式のトイレ、奥の扉に脱衣所とそこから続く浴室があるのが見て取れた。

さらに奥の壁にも扉があるのが見えたので開けて中を覗いてみると、靴箱が付いた小さな玄関があった。靴箱の上には何故か『ガレージ：B3階C-15』と書かれた薄黄緑色のメモ帳の紙片がセロテープで張り付けられていた。恐らく俺の車が置かれているガレージの場所をメモしたものだろう。もしかしたら、俺が迷う事が無いように玉緒が貼ってくれたのかも知れない。

俺は玉緒の心遣いに感謝しつつ、風呂に入る準備をし始めた。

第二話：運転免許を取ろう

>> 新太郎

朝が来た。

ベッドから起きてメガネを掛け、現実味を感じない位澄みきった青空を眺めながら玉緒が作った朝食を摂り、仕事着である濃いグレーのスーツに着替えた俺は、早速試験場へ向かう為に部屋の外に出た。

部屋の外に出ると、まるで巨大なホテルの客室フロアのように何処までも長く伸びる廊下の壁の両側に、5m位の一定間隔で何枚も同じ様な扉が並んでいるのが見て取れる。実際足元には安っぽいフェルト生地とはいえ深紅色の敷物が敷き詰められているし、壁にも壁紙が貼られ、昔ながらの白熱球色をした電球によって薄暗く照らされているので、アパートと言うよりホテルと称した方がしっくりくる代物だった。

一応ドアの所に付いている表札に俺の名前が書いてあるものの、迷ったらどうしよう……、と思いながら俺はエレベーターホールを探して漂流者の様に歩きだした。

どうにかこうにかエレベーターを見つけて下に降り、目の前に現れた正面玄関を抜けて建物の外に出ると、俺は興味深げに辺りを見回した。

群青色の空の下後ろを見上げると、横に長くて物凄く高さもある大きな薄黄色の建物があり、此方から見て右側面の壁には地下の駐車場に降りる為のスロープが取り付けられている。そして棟番号だけ違う同じ様な建物が団地の如くそこかしこに何棟も建っている光景に俺は少しだけ圧倒された。

視線を正面に向けると、コンクリート製の灰褐色をしたタイルが

一面に敷き詰められた殺風景な広場が広がり、その奥に2 m位下に見える道路に降りる為と同じ様な色のコンクリートの階段があり、左側に目を向けると広場の横を通って道路に出るように造られた下り坂の車道があるのが見えた。

広場を抜けて階段を下り、歩道に降り立ってふと顔を右側に向けると、なだらかな下り坂の2車線道路の緩やかな右カーブの途中に、そこそこ広い歩道を少しだけ切り崩し、凹ませて造形した様なバス停が道の両側に並んでいるのに目が付いた。

一本足をした四角柱のような、『初奈島第一団地裏門前』とバス停名が書かれた表示盤の所に行くと、何本かバス路線があつてその内の一つが目的地の運転免許試験場が続いている事が判つたので、俺は金を節約する為にこのバスを使つて行く事にした。

さて、現在の時刻が丁度8時半だから、それ以降で10時半までに向かう事が出来るバスはあるだろうか、と思いつきながら時刻表が貼つてあるだろう方へ回り込んだ途端、信じられない物を見て俺は啞然とした。

そこには各路線の時刻表など一枚も張り付けられておらず、縦長の長方形の形をした白いスペース一杯に、『信じていれば、いつか来る!』

と、何かの標語の様に大きな文字が書き込まれているだけだった。いつか来るって何なんだよ? 信じるも信じないも、時間通り来てくれないと公共交通機関として終わっているだろ。というか、来ない事が普通にあるのか、このバスは……。

呆れながらもそんな突っ込みを入れながら待つっていると、坂の下の方で唸り声が聞こえ、見ると大きなバス、高速バスや観光バスとして良く見かける橙色をした少し古い型のエアロクイーンが俺の目の前でハザードを焚きながら停車した。

前照灯の間に設置された行き先表示灯には『12-1・初奈島循

環内回り』と書いてあるから一般道を走るごく普通の路線バスなのだろうが、何故乗降性に優れた路線バス用の2ドア車両ではなく、こんな前方にドアが1枚しか付いていない高速バス専用の車両を態々使っているのか意味が解らない。

しかもバスのドアの後ろの側面の所に、『PBA-Private Bus Association 個人事業バス協会』と白い字で書かれた青い正方形のステッカーを貼り付けていた。

バスなのに1人1車制の個人営業？と不思議に思っただけで、目の前でバスの扉がゆっくりと開き、運転台でハンドルを握っていた運転手が、

「お客さん、乗るの？乗らないの？」

と、怪訝そうに俺の方を見つめて来た。俺は運転台から半身を乗り出した、紺色のスラックスに白いYシャツを着て、青いネクタイを締めて紺色の制帽を被った運転手に向かって話しかけた。

「すみません。『初奈島運転試験場前行き』のU5系統って何時位に来ますか？」

「さあなあ。U5……U5か……。ちょっと判んないなあ。」

そう言うと、その運転手は運転台シートの右側にある車体との隙間に手をつ込み、A4サイズの紙が10枚位クリップに挟まれた紺色のファイルを取り出すと開き、紙を捲って何かを調べ始めた。

「U5……U5……と。あ、今日の当番は『川島バス』さんか……。あの高速メインで走る事が多いし、昨日何かデカイ仕事終えて帰ったばかりって言うていたし……。今日は休んでバスを出さないんじゃないの？多分待つていても来ないと思うよ。」

「え？あ……そ……そうですか……。どうもありがとう。」

疲れたから今日は出さないって……、公共交通機関がそれでいいのか？というか、その場その場で客を拾い次第逐一チャーター契約を結ぶ俺達タクシーならいざ知らず、不特定多数の人間を大量輸送しなければいけない大型バスは規定されたダイヤ通りに運行しないといかんだろ。悠々と走り去って行ったエアロクイーンの後姿を見

送りながら俺は呆れていた。

さて、『バスで行く』という選択肢は限りなく高確率で潰えた様なので、これからどうしようか……、と思いながら俺は辺りを見回した。

すると、先程バスが走り去って行った方向から、反対車線を同盟所属の車らしい薄黄緑色のクルーのタクシーが此方の方へ坂を下つて来るのが見えたので、俺は右手を軽く上げてそれに合図を送った。俺の存在に気が付いたのか、タクシーはハザードランプを点滅させて反対車線のバス停に一度停車すると、操舵角を右に大きく切つて車体を右に向け、何度か前後進を繰り返して切り返しながらUターンをすると、俺の目の前で左後部ドアを開けて停車した。

俺が乗り込むと、白いYシャツの上に緋色のVネックのベストを着た運転手が此方に顔を向け、

「どちらまで？」

と声を掛けてきた。

「運転試験場までお願いします。」

と答えると、

「わかりました。」

と言つて車の自動ドアを閉めると、運転手は車を発進させた。

車が走りだして暫くしてから、不意に運転手が俺の方へ話しかけてきた。

「運転試験場って事は……免許を取りに行かれるのですか？」

「え……ええ。」

当たり前だろ。それ以外に何があるのだ？そう不思議に思いながら、俺はルームミラー越しに運転手の顔を見て訝しんだ。そんな俺の視線に気が付いているのかいないのか、運転手は話を続けた。

「車でも買われるんですか？」

「いや、車は既に持っているんですけれどね……。」

「……………」

「昨日の夕方来たばかりなんですよ。」

「ああ、そうなんですか！」

そう納得したような声を上げると、此方が強いて訊いた訳でもないのに、その運転手は親切にもどういう流れで試験が進んでいくのか事細かく具体的に教えてくれた。

特に俺にとって一番参考になったのは、この世界における車の運転感覚についての話だった。

乗客として後部座席から運転方法を観察していた時から気が付いていたが、一見した所この世界の車も実車をベースにして造ってあるだけあって、基本的な操作方法は実在する自動車のそれと何ら変わらない様に思われた。だが、操作方法が同じだからと言って、車両感覚、制動・加速等の体感性能、細やかなハンドリングといった本能的な、あるいは精神感応性的な部分まで同じだとは限らない。特に客を探したり不特定の目的地へ向かったりと、何かと運転以外のところで集中力を削がれながら運転する場面が多いタクシーの営業では、基本的に手足の一部の様に車を操れる位の技能を普通に要求される。それに例えそうで無かったにせよ、ステアリングの遊びが大き過ぎて細やかな動きが出来ないとか、急発進と急停車しか出来ないとか、コントローラーでは気にならなかった事でも実際に自分が乗って運転するとなると実用面で不便になる事はかなり多い。運転者の立場として、その辺りの事がどうなっているのか非常に気になった。

そうして、彼の話によれば、そういう心配は皆無だそうで、普通に現実世界にある車の運転感覚となんら変わらないのだそうである。重箱の隅を突くように細かい所が気になって仕方がないような神経質な人ならいざ知らず、少なくとも彼にとっては何も違和感が無かったそうだ。それを聞いて俺は少し安心した。

運転試験場の正門の前に着くと、運転手はハザードランプのスイッチを押して車を正門の前に広がるロータリーの路肩に横付けた。さて、この段になって俺は考えた。支払い……どうしよう……。

以前だったらモニターの右上端に出てきた所持金額を表示するサブウィンドウの中の数字が料金分だけ勝手に減額されるシステムだったが、今現在はどうなっているのだろうか？

そんな風に俺が途方に暮れていると、先の運転手が、タクシーメーターとケーブルで接続された、何やらICカードの読み取り装置の様な黒っぽい機械を取り出すと、

「その腕時計型の機械をこれに翳して下さい。」
と言って、俺の目の前に差し出した。

言われるがまま差し出された機械の、読み取り部分だと考えられる、平らな上面部に腕時計型立体プロジェクターの投射ディスプレイを、左手首を押し付けるように重ねると、ピツという電子音がプロジェクターの方から聞こえ、ディスプレイを起動させて所持金を確認してみると、確かにタクシーメーターに表示されている分だけ金額が引かれていた。どうやらこの世界ではこの機械を使って、ICチップを使って買い物する時と同じ要領で金銭のやり取りをすればいいようだ。便利だな……。

だが、ふと疑問に思ってしまう。客の所持金がメーターの表示料金より少なかった場合はどうなるのだろうか？

「ねえ、運転手さん。」

「はい、何でしょう？」

「これ……、もしも私が持っている所持金が足りなかった場合はどうなるんです？」

「え……？……まあウチの場合は、あるだけ頂いて後はサービスって形にしますかね。法人さんの場合は知りませんが……。でもまた何でそんな事を？」

本当に不思議に思ったのだろう。運転手は腰を捻って此方に顔を向けて小首を傾げながら俺に尋ねてきた。

「いやあ、実は私も個人タクシーをやっている……。」

と答えると、彼は驚いた様に目を丸くした。

「ああ！同業の人だったんですか……！」

「ええ……、まあ……。」

「へえ……。どこのギルドなんですか？」

「あ……、その……連合なんですけれどね。」

「ああ！連合ですか……！」

一応同じ提灯系のギルドだからか、運転手は特に嫌な顔をする訳でもなく、

「頑張ってください。」

と、降車した俺の背中に向かって声を掛け、ドアを閉めると車を発進させて行ってしまった。

この手の公共設備によくあるような、施設名が書かれているプレートが取り付けられた部分を境にして車両が通る所と人が通る所を区別した、鉄製の薄紫がかったベージュ色の門扉が付いた正門を通り抜けると、日焼けしてやや茶色がかったコンクリートの塀に囲まれた運転試験場のただ広い敷地内へ俺は足を踏み入れた。

施設の敷地の中に入ると直ぐに20台位駐車できそうな駐車場あり、その直ぐ傍に灰褐色をした3階建ての大きな建物が建っていた。よく見ると建物の大きな正面入り口の自動ドアの傍に、薄っぺらなベニヤ板のプラカードの足元に重石を付けて立たせたような、ちゃんな造りをした立て看板が立て掛けてあり、そこに大きく黒い文字で、

『運転試験を受験される方はこちらの本館へ！更新の方は　の別館で手続きをして下さい。』

と書かれた白い模造紙が貼られていたので、俺はその指示に従って目の前の建物の中に入って行った。

灰白色の小さな正方形のブロックを組み合わせで大きな菱形を沢

山作りつつ、その周りを同じ形状の赤褐色の物を並べた帯で覆うようにブロック材が床中に敷き詰められ、壁も薄緑色に霞んだ直方体のレンガで造られた、凄く広さがあるものの心なしか薄暗い屋内へ入館すると、入り口の側にいた、紺色のスーツを来ているスタッフらしいメタルフレームの眼鏡を掛けた女性が、

「お早う御座います。試験を受けに来られた方ですか？」

と、俺に向かって声を掛けて来た。

「そうですか……。」

と答えると、

「じゃあ、まず此方にある申し込み書類を取って、そちらの方で太枠内の所に必要事項を記入してから丸2番と書かれた窓口へお越し下さい。」

と言つて、『?』という紙が貼られ、申込用紙の束と見本とボールペンなどが置かれている白い鉄製の立ち机が幾つか置かれているスペースへ案内された。

用紙にユーザー名や職業、生年月日や住所等、必要事項を記入して『?』という書かれたプレートが掲げられた窓口へ向かい、言われるがまま窓口を順番に回って手続きをし、視力検査等の適性検査と簡単な証明写真の撮影、そして受験票を受け取って試験会場となる講習室の前に来た頃には、もうそろそろテストが開始されるだろうギリギリの時間になっていた。

講習室に入ると、試験監督役を仰せつかったらしい、薄いグレーのスーツを着た頭が禿げたおっさんの教官が1人で教卓の所に立っている事を除けば、俺以外の受験者は、スエードグリーンの丸首のトレーナーに青いジーンズのロングパンツを履き、かなり黄色い黄土色のニット帽を被った自分と同年輩位の小太りな男と、白いゴスロリ調のワンピースに水色のガーディガンを羽織った、青い髪のセミロングの若い女の2人しか居なかった。

？形式の2択問題と危険予知が組み合わされたマークシート方式の筆記試験を終えると、受験者が3名しか居なかった為か、30分も経たない内に『合格』という結果が返ってきて、俺はそのまま第一種普通免許と第二種免許の技能試験を同時に受ける事になった。第二種免許の筆記試験は、以前個人タクシーを開業する為の営業許可を受ける為に遂行したクエストによって免除される事になったらしいから、この実技試験に合格してしまえば晴れて運転免許証の交付を受ける事が出来る、という訳である。

本館の裏口から外に出て広大なテストコースへ出て来ると、ロータリーの所に3台の白い教習車仕様のコンフォートが縦列で駐車されていた。その3台の車を見た瞬間、ああ…たぶん源さんのところの車だな……、と俺は直感した。

源さんと云うのは、俺がギルドに加入して個人タクシーを始めた頃、ギルドのマスターや他のメンバーに紹介されて以来、必ずそこで新車をオーダーしている、ウチで使っている車の殆どを造ってくれた車職人の事である。

実車を凌駕する位ディテールがきめ細かに凝っている洗練されたエクステリアに、中の方も実物と見違えてしまう位繊細に造り込まれ、他の自動車職人の作る車とは一線を画しているので、目の前の教習車を見た瞬間、彼が製作した車両だと判ったのである。

実際目の前のコンフォートは安い教習車とは思えないくらい迫力があつた。実車と寸分変わらぬ寸法にフェンダーライン等の細かい部分もよく再現された外観、そして実車に乗った事があるからこそ感嘆せざるを得ない、些細な点や質感まで考慮して造形された内装、神業と言つても過言ではない職人芸によつて実車以上に実車らしく完璧に再現されていた。

少し青っぽいグレーのスーツを着た男の教官からキーを受け取つて周囲の安全確認を終えてから、その中の真ん中に停められていた『2号車』と横つ腹に書かれた車のドアを開けて運転席に乗り込む

と、俺は心底源さんの神振りに感心した。シートの座り心地といいステアリングホイールの握り心地といい、まさに実車のそれである。

助手席に先程キーを貸与した第一種免許の技能試験の教官が、後部座席左側に第二種免許の試験監督が乗り込むと、助手席にいる教官の指示に従い、俺は車のスロットにキーを挿し込んでエンジンを掛けると、ドライビングポジションを調節してシートベルトを締めると、右後方 右ドアミラー ルームミラー 左ドアミラー 左後方の順に安全確認し、ブレーキを踏んでPレンジからDレンジへシフトチェンジする。前の車が発進するとサイドブレーキを解除して右ウインカーを点滅させ、もう一度右ドアミラーと右後方を目視し、ブレーキから足を離してクリープ走行させながらステアリングを右に左に切つて、俺は車をゆっくりと発車させた。

テストコースをグルリと回って、S字・クランク・縦列・車庫入れ・坂道発進等の基本的な技能試験を受け、その後駐車場の方を回って正門の外に出て、客役になった後部座席の教官の指示に従いつつ第一種と第二種の路上試験を併行して行い、また出発地点のロータリーに戻って車に停車措置を施し、降車してキーを助手席にいた教官に返却し、

「合格！」

と、その場で結果を伝えられると、俺はニット帽を被った男と共にさつき試験を受けた講習室へ戻り、係員から出来たてホヤホヤの免許証を受け取った。

階段を降りて先程申し込みの手続きをしたロビーに辿り着くと、運輸関係の業界団体のお偉方が長テーブルを並べて簡単な窓口を拵えている所に出会った。どうやら合格した事業者の再登録の手続きを今から行うらしかった。

個人タクシー協同協会の窓口へ向かうと、協会の幹部であるGM

陣に並んで、俺が所属しているギルドである『個人タクシー事業者連合』の長で、見かけも実際も俺より大分年長者の男性であるギルドマスターが座っていたので、手続きをするついでに挨拶も済ませておこうと歩み寄ると、向こうも俺の存在に気が付いたのか、

「おっ！」

と、右腕を軽く上げて親しげに声を掛けて来たので、俺の方も頭を下げて会釈した。

「お久しぶりです。」

「久しぶり！何時来たのさ？」

「昨日の夕方です。久々にログインしたらこんな目に……。」

「まあ……、災難だと思って諦める。それに、慣れると案外快適なものだぞ。」

「そういうものですかねえ……。しかし、外の世界じゃどうなっているのやら分からないのが気掛かりですが……。」

「一応ネットやテレビで外の情報は入ってきているぞ。」

「そうなんですか？でもそうだとしたら、今の私って、現実の世界ではどういう扱い何でしょうかね？」

「初めから存在しない事になっているか、生死不明の長期失踪者として処理されてしまっているみたいだな。」

「え……？」

ギルドマスターの言葉に俺は一瞬ゾツとして背筋が凍りついた。

「俺さ、現実世界じゃ某地方都市の市役所の職員として住基番号の管理をしていたんだよ。」

「はあ……。」

マスターの突然のカミングアウトに困惑しながらも、俺は彼の話聞いていた。

「こっちに着てからすぐ位の時にさ、こっちに一緒に来たPCを使って役所のサーバーにアクセスしたらさ……。」

「……………」

「どういう訳か、俺の名前と番号が綺麗サッパリと無くなっている

んだよ。」

「……………」

「俺、初めからこの世に居ない事になっていんの！ハハッワロス！」と、ギルドマスターはケラケラと乾いた笑い声を上げていたが、俺の方は完全に固まって呆然と立ち尽くしていた。

「そんな馬鹿な……………」

「俺だって信じたくないが、現実だ。まあ、あいつらの言う『魔法』って奴だろ……………」

と、近くに座っている協会の幹部や周りにいる試験場のスタッフの方を見渡しながらギルドマスターは吐き捨てた。

「魔法…ねえ…………。ところでマスター、どうして今日は此方に？」

「ああ、純さんやデロやん達と持ち回りだね、各地の試験場を順番に回っているんだよ。」

「そうなんですか…………。御足労様です。」

「新ちゃんの方もお疲れ様。免許交付おめでとう！…………じゃあ、再登録の手続きを取るからここにサインして…………。」

目出度く再登録手続きを済ませ、さあ…帰ろうか、とその場を立ち去りかけたところ、

「あ！新ちゃん！ちよつと待って！」

と、慌てふためくギルドマスターに呼び止められたので、俺は後ろを振り返った。

見ると、ギルドマスターは何やら車の鍵らしき物を右手に持って振っていた。そしてその鍵と一枚の真っ白な紙片の引換券を俺に渡すと、

「これを持って、さっき技能試験を受けたロータリーに行って、係の奴にこの鍵を見せてその引換券を渡してくれないか？」

と、妙な笑みを口元に漂わせながら言った。

「何ですか？これ…………。」

と、思わず訊き返すと、

「免許交付及び再登録した事を記念する褒賞品のプリウスだよ。」
という答えが返って来た。

「プリウス？」

「そう、源さん所で詠えた連合特注仕様のプリウス！しかも3代目の最新型だぜ。」

余程の天下一品なのか、ギルドマスターは胸を張って誇っていたが、いくら源さんが造った車であってもプリウスなんて要らない、と俺は思った。

だが、祝いの意味も込めてタダでくれると言っている物を無下に断る気にも全然ななかったので、渋々ながら有り難く頂く事にした。それに拾えるか分からないタクシーや恐らく来ないであろうバスをあてにするより、自分の車で帰る方が安くて確実である事もたしかだからだ。一時のしのぎとして使うのならプリウスでもいいだろう。

貰ったプリウスは、特注品と豪語するだけあって、自動ドアが付いていたりタクシーメーターを設置するラックが後付けされていたりと、タクシーとして使用するのに適した装備を満載し、アルミホイールを装着してはいたが、それ以外は至って普通の白いノーマルのZVW30だった。

タダで貰った物だから文句を言うことは出来ないが、御世辞にも格好いいとは言えない上に、何故かリアフェンダーのボルト痕等安っぽくて幻滅させられる負の部分まで詳細に造り込まれたエクステリアデザイン、ゲーセンにあるレースゲームのアーケード機に付いているシフトレバーの様なちやちなCVTのシフトレバー、モーターの補助があるとはいえやっぱり非力な1.8Lの直4エンジン等、様々な部分に不満を抱きながら俺はプリウスを発進させた。

自宅のあるアパートの方には直帰せずに、島の西側にある、廃車場や解体工場等が立ち並ぶエリアへ俺は車を走らせた。

大抵何処へ行っても、やや郊外へ入った寂れた所に行けば、レースゲームだった頃を彷彿とさせるこのような自動車関係の販売店や工場が集中している地区があるのだが、源さんの工場である『舞原オートセンター』もこのエリアの一番奥まった所にひっそりと人目を忍ぶ様に建っていた。

売り物の車が野晒しで放置された広大な敷地の中にある、いかにも町の小さな修理工場といった感じの、自動車を2m以上まで持ち上げられる巨大な昇降機やエンジンを吊り下げるリフト等の大型の機械が幾つも設置され、5台位までなら一度に整備できそうな程規模が大きいのが、何処か古めかしくて陰湿な雰囲気を感じる工場の中に入ると、俺は車を停めて外に出た。

車が入ってくる音で気が付いたのだろう。大きな機械が並んでいる、その更に奥まった所にある事務所から、薄緑色の作業着を着て同じ色の野球帽を被り、金色のメタルフレームの眼鏡を掛けたガタイの良い男性が外の様子を窺うように現れた。この如何にも町工場の経営者という身形の男こそ、この『舞原オートセンター』の主にして、俺が今乗ってきたプリウスの製造者でもある、源さんこと舞原 源治その人だった。

俺は源さんの姿を目に留めると、真っ先に右腕を上げて、

「源さん！」

と、彼に声を掛けた。

彼の方も俺の存在に気が付くと、

「お、誰かと思ったら新ちゃんか！」

と言いながらこちらに駆けつけた。

「お久しぶりです。」

「久しぶり、君もこっちへ来ちゃったのか……。で、今日は何の用で来たの？」

「ええ、実は……。」

このプリウスを下取りに出して新しい車を買いたいんだけど……、

と言おうとした俺の口を遮るように源さんは話を続けた。

「あ、それ俺が造った30じゃないか！という事は、無事に一種免許が取れたんだね？」

「ええ、お陰様で。」

「そうかそうか、じゃあもう今日からタクシーを再開するつもりなの？」

「それはまだ……。何せ昨日久々にログインしたばかりですし。前と違って地形が変わったり新しい道が出来ていたりしている所もあるみたいだから、暫くは車で回って道を覚えないと……。でも、遅くても1週間以内には営業再開する心算ですよ！何せ2人分の『生活』が懸かっていますから。」

「そうか、そうか。……で、今日は何の用で来たの？」

ここで漸く俺は本題を切り出した。

「実はですね……。源さんには申し訳ないけれど、このプリウスを下取りに出して、営業再開を祝して景気付けに新しい車でも買おうかな、と思ひまして……。」

「え　！？」

露骨に不本意だと言わんばかりに、苦虫を噛み潰した様に表情を歪ませながら源さんは不満を口にした。な……何か悪い事を言ってしまっただろうか？

「いやさ、車屋としては、新しく車を買ってくれるのは凄く嬉しいんだけどさ……。そのプリウスも新ちゃんの手元に置いておいてやってくれないかなあ……。新ちゃんまで返品されちゃったら丁度30台目になっちゃうんだよ……。どうしてみんな気に入ってくれないのかなあ……。これ一応俺のここの一番の力作なんだよ？」

と、源さんは何とも情けないしよくれた顔をしながら不甲斐なくそう言った。

源さんは本気で解っていなかった様であるが、俺は何となく源さんのプリウスの評判が芳しくない理由が察せられて、どう反応すれば良いか判らず苦笑した。

ただ単にプリウスの負の部分まで完全再現しているからだという単純明快な理由だけではない。もともとプリウスが好きになれない俺は気に入らなかったが、中にはあれが良いと思う奇特な運転手だって沢山いるだろう。

問題は排気量と車格の割にプリウスのサイズが大き過ぎるという事である。

連合だけでなく、大抵のギルドでは車体のサイズでタクシーの料金を区分する時、排気量や全高の上限に関わらず、全幅1.7m未満で全長4.6m未満の車を小型タクシー、それ以上の大きさの車を中型タクシーと規定している。そして小規模なギルドによっては中型規格の車の中で排気量が2Lを超える車を大型車としてより高い料金を取っている所もある。

さて、プリウスは一応5ドアハッチバックセダンという名目で売られているが、早い話が一般的に言うコンパクトカーである。そしてコンパクトカーであるからには、小型車が廃止されて中型車に一本化された法人タクシーならいざ知らず、小型枠がある此方からすればやっぱり料金が割安の小型タクシーとして運用したい所である。だがこの車、全幅が1.745mもある3ナンバー車である。

残念ながら大き過ぎて中型車としてしか営業する事が出来ない。

しかしながら、先述した通りモーターの補助があるとはいえ、この車の排気量は1.8Lしかない。中型車に排気量の制限がある所なら兎も角、中型車の中に3Lや3.5L車がゴロゴロいる連合や連盟のような組織の中で鑑みると、どう考えても非力過ぎるのである。特に俺の場合高速道路を飛ばして全世界規模で営業しているから、どうしてもパワーと余裕が必要になる分、使用する車の排気量も大排気量と称されるレベルのモノになってくる。乗り心地やお客様へのおもて成し等も考慮に入れば6気筒以上で2.5L以上の車でないと対象外となってしまう。

でもまあ、源さんがそれ程嫌がるのであれば、下取りに出すのは止めてこのプリウスも私用車として残しておこう。ただ、今持っている営業用の車も全て私用で使う事を前提に注文し、実際に使っているからプリウスを運転する機会があるかどうかは定かではないが……。

「わかった。それじゃあ、プリウスはこのまま手元に置いておくから、新しく車を造ってくれませんか？」

そう俺が言くと、源さんはパツと表情を明るくして喜び、

「よし来た！じゃあ、どの車を買う？」

と言って、俺達は商談を始める事になった。

「そうだなあ、大概の欲しい車は造ったから……。あつ、そうだ！源さん、あれ造ってよ！マキシマ！」

「マキシマ？」

「そう、J30の後期型。出来る？」

「そりや出来るけれど……。また古くてマイナーな車を選択するなあ。まあ、俺は好きだけど……。で、やっぱり高津タクシー仕様にするのかい？」

「勿論！エンジンはVQ30DETでお願いします。」

高津タクシー仕様というのは、俺が源さんの所に車を注文する時に、ノーマルのままだと物足りないという理由で、エンジンやミッションや過給器といった基幹部分の部品や足回りの部品等を交換して特別に造って貰っている、俺専用の特注の仕様の事である。

具体的なパッケージとしては、エンジンは基本的にNAならチャージャー付きの3.5L6気筒エンジン、ターボなら3Lツインターボの6気筒エンジンで統一する。足回りはエアサスに5穴ハブの大型ディスクローターを付けた4ピストンの対向ピストンキャリパーのブレーキを装着し、しかも4輪ともディスクブレーキ化する。

外観も大幅に修正し、マフラーは左右2本出しステンレス製直管

マフラーに交換し、ホイールは20インチ鋳造アルミホイールでドレスアップし、勿論フルエアロにし、サイドカーテンやLEDのハイマウントストップランプが付いた小型のリアウィングも取り付け

る。
前照灯のフォグランプは必ず付け、バンパーにウィンカーとフォグが並ぶ場合はウィンカーとポジションランプをLED化して一体化させ、エアロを交換する事でフォグのデザインも俺好みに作り替える。

俺のタクシーの一番の特徴としては、ルーフウィンカーを屋根に付ける代わりにドアミラーウィンカーを取り付け、更にトランクリッドに装着したリアスポイラーのハイマウントストップランプの両端にも、小さな黄色のLEDが輝くハザードランプを取り付けている点である。ドアミラーウィンカーを付けた車ならよく見るが、このハイマウントハザードランプをストップランプと共にリアウィングに装着している車は、俺の車以外で今の所お目に掛かった事がないので、高津タクシーの車両を見分ける大きなポイントになっている。

最後に、色は絶対シルバーメタリックか、それに近い色に塗装し、『個人・高津タクシー』と書かれた金文字の透明なステッカーを運転席と助手席のドアに貼りつければ高津タクシー仕様車の出来上がりである。

こうして完成した車をそのまま乗って帰っても勿論良いのだが……。

「おい、龍！出番だぞ！」

「ほーい！」

今、源さんに呼ばれて奥から出てきた髭面茶髪で、作業着をだらしなく着崩している若い男が、源さんの弟にして舞原オートセンターのカスタム担当の龍さんこと、舞原 龍蔵：源さんの弟である。

互いに、

「久しぶり。」

と軽い挨拶を交わすと、俺は龍さんにインパネの中央部上に電気式油圧・油温・水温の三連メーターの設置、A V ー体型マルチナビの装着とカーナビの音声を能登声に変更、ナンバープレートを後ろだけ字光式にし、ガラスに70%の透過率の黒いフィルムを貼りつけてフルスモークにし、更にエンジン・ミッション・ボディにアフターパーツを取り付けてチューンアップするカスタマイズを行う事を注文した。

実際やる事は彼らが持っている個々のデータを組み合わせ、それらを実際に実体化させる大きな魔法の機械に入力するだけなので、新しい車は直ぐに製造されて、ちよつとした大きな物置のように薄灰色のシャッターが付いた、くすんだ白色をした巨大な機械からベルトコンベアに乗った状態で吐き出された。初めて間近で観察したが、シャッターが開いて車が排出される様子は壮観で、かなり興味深い物だった。

そうして出来た車の出来を入念に確認した後、俺は会計をする為に源さんと向かい合った。

源さんから差し出された明細書を確認する。

『車両本体価格：105,000G

特注仕様部品代及び交換手数料150,890G

その他カスタム費：54,320G

車両登録費・他諸費用：5,000G

総計：315,210G

支払い方法：一括支払

利率：なし

総支払額：315,210G』

まあ、こんな物だろう。安物の軽自動車なら3万Gから購入する事が出来る事を考慮すれば高い買い物には違いないが、大体いつも30万から50万位で1台を逃えるから、今回は大分安く済んだ方だと思う。

支払を済ませて車をプリウスからマキシマに乗り換えた途端、煙に巻かれたようにフツとプリウスの車影が跡形もなく消え去って驚いたが、どうやらガレージへ自動転送されたようだ。ゲームでは当たり前のように起こっていた事が下手に現実味を帯びてくると怪奇現象じみてくるから吃驚する。

舞原オートセンターを後にし、購入したばかりの新車でアパートまで戻って来ると、俺は裏門から入って34番棟横の地下へ降りるスロープから地下の駐車場へと降りて入った。

「俺の記憶が確かなら……『B3のCの15番』だったな……。」「と独り言を言いながら駐車場の中を進んで行き、地下3階のCエリアと書かれたエリアで目的の15番ガレージに到着した。

見たところ、真向かいと両隣にブラツと並んだ他のガレージと同じ様に、地下空間の車1台分の幅が開いた灰色のコンクリートの壁の間に黒いシャッターを取り付けた個別のガレージであるみたいだった。

シャッターには大きく白い文字で『C-15』と書かれていて、その傍のこちらから見て向かって右側にあるコンクリートの支柱にも同じ番号が刻印されたカードリーダーと超小型モニターを組み合わせた様な機械が取り付けられてあった。

何だろう、と思つて車を止め、降りて傍まで近寄ってみると、『手首に付けている情報集積装置をこの機械に翳して下さい。』と、直ぐ下の方に説明文が白い文字で真つ黒なモニターの画面にくつきりと表示されたので、その通りに俺は左手首のプロジェクター

を支柱の機械の読み取り部分にくっつけた。

そうした途端、

『認証を開始します。……………確認しました。』

と言う電子音声が機械から聞こえてきたと思ったら、いきなりゴツゴツゴツという重厚な低音と共にゆっくりとシャッターが開いて、中から床に銀色のステンレス製の板が敷き詰められた1台分の駐車スペースが現れた。

俺は車に再び乗り込んで一旦前進すると、ギアをRレンジに入れ、ブレーキを踏んでゆっくりと後退しながらステアリングを左に切り、横列駐車のを要領で車を駐車スペースにバックで駐車した。

そして少しだけ前進してハンドルを真っ直ぐに直して停車措置を施すと降車し、施錠してからキーをイベントリへ転送し、ガレージから出てから先程の機械に向かい合い、モニターに出てきた指示通りにシャッターを閉めてからエレベーターを探す為にその場を立ち去った。

どうにかこうにかエレベーターホールを探し出して3階へ向かい、0345号室へ帰ってくると、朗らかな顔をしながら玉緒が出迎えてくれた。

「ただいま！」

「お帰りなさい、あなた。どうでしたか？免許……………」

「ああ、無事に交付されたよ。」

「そうですか。お疲れ様でした。」

「うん。これでまた営業する事が出来るぞ。」

「それは良かったですね。おめでとうございます。」

「ありがとう。」

「時にあなた……………」

「何だ？玉緒……………」

急に玉緒の様子が豹変し、声色が陰しくて冷たい物に変化したので、俺は内心戸惑いながら彼女の様子を窺った。

「今さっき確かめたら、急に何だかお金が物凄く……30万位減っている様な気がするのですけれど……、わたしの気のせいでしょうか？」

「ああ、営業再開に先駆けての縁起担ぎに、さっき源さんの所で新しく車を買ったんだ。」

「……………」

「……………」

「……………」

「そうですか……………」

何だかよく分からない奇妙な間の後、そう一言だけ漏らすと、かなり遅めの昼食を用意する為に、俺一人を部屋に残して玉緒はキッチンの方へ出て行った。そしてそれ以降、一緒にベッドに並んで眠るまでの間ずっと、表には出さなかったもののその日は虫の居所でも悪かったのか、事ある毎に鋭く冷淡で毒々しい視線を俺に向かって浴びせかけたので、その度に俺は戦慄を覚えるとともに非常に閉口した。

俺……何かあいつの気に障るような事でも言っただけかなあ？ 訳が分からず俺は首を傾げていた。

第三話：たまには女房孝行も良いものだ

>> 新太郎

俺がこの世界に来て最初の日曜日がやって来た。

免許を交付されてから一両日、車で島中をグルグルと回ったり地図を眺めたりしている内に、どうにか初奈島とその周辺の本土の道の道路地図は一応頭の中に叩き込めた。

だからそろそろ島の中だけでもいいから営業を開始しよう、と画策しながら玉緒が作った朝食を摂っていると、突然玉緒がテレビの方を指さしながら俺に声を掛けて来た。

「ねえ、あなた……。」

「ん？何だ？」

何だろうと思いつつ言われるがまま画面の方へ視線を向けると、本土の方…帝都にある秋原葉という、この世界における中心的で規模も大きな繁華街に新しく出来た大きな家電量販店の開店セールのコマーシャルを丁度放送していた。

「これが、どうしたんだ？」

玉緒の真意を大方推し量る事が出来たが、念の為に一応俺は彼女に確認した。

すると彼女はエヘへと微笑みながら、その家電量販店のセールを報せる新聞の折り込み広告を一枚俺の眼前に差し出した。

「行きたいのか？この店に……。」

と尋ねると、玉緒は黙ったままだったが、そうだと言わんばかりにコクンと頷いた。

「何だ？何か欲しい物でもあるのか？」

と、また問いかけると玉緒は上目遣いで俺を見ながらモジモジと俺の背中にその柔らかい乳房を押し付けてきた。不覚な事に驚いてドキマギと顔を赤らめると、そんな俺の反応を確かめるように右肩の

上に頭を載せて撓垂れ掛かり、まるで水商売の女が客の男にそうする様に強請り始めた。

「はい……。実は、そろそろ冷蔵庫が古くなって調子が悪くなったから買い換えたいなって……。」

「……………」

背中に彼女のマシユマロのような胸の感触を感じて男根を猛り立たせながらも、彼女の言葉を怪訝に思って聞き返した。

「え？あれ買ってからまだ2年も経っていない筈だけど、もう壊れてしまったのか？」

すると、玉緒は憂鬱そうにしかめ面をし、

「そうなのよ。」

と不満を口にした。そして再びお強請りモードに突入し、

「あと洗濯機の調子も今一つだし、安売りをしているならこれを機会に新調したいな、って思ってる……。ねえ、いいでしょ？あ・な・た」

と、ジリジリと俺に詰め寄った。

どうせ洗濯機や冷蔵庫の調子が悪いなんて嘘八百だろう、そう疑いつつも仕事で使うからと自分に言い訳して欲しい車を金に糸目を付けずに購入しているという後ろめたさも手伝って、まあ……たまにはいいか、と思うと共に、久々に帝都の方へ出て中心街の道路状況も一緒に確認する良いチャンスだとも考えたので、

「いいよ。分かった。それなら今から出かけるか？」

と、俺は了承した。

服を寝間着から空色のカッターシャツと薄いベージュ色のチノパン、焦げ茶色の革靴という格好に着替えると、余所行きの紺色のワンピースを着て黒いパンストの上に黒い革製の婦人靴を履いた玉緒を連れて俺は部屋を出た。

駐車場の自分のガレージの前に立つと、例のモニターに左手首の記録装置を接触して認証させる。

『認証しました。』

という白い文字が現れると、昨日とは打って変わって車の小さな写真が付いた細かいリストがズラッとガレージの方のモニターに表示され、

『車を選択して下さい。』

と、リストの上の方に小さく案内文が表示されていた。

画面をフリックして長いリストを一気にスクロールさせると、俺はリストの一番下に表示された車、このゲームを初めてから今現在までの中で一番所有年数が長いGSE20レクサスIS350の後期型を選択した。

ゴオオオオオウウンガタアアアアアンと重厚なシャッターの向こう側で大きな機械が動くような凄い音が辺りに響き渡ると、ピッという警告音と共にゆっくりとシャッターが上昇して開き、銀色の車体をピカピカに輝かせる精悍な顔つきをしたISが此方に頭を向けて駐車されているのが目に入った。

20系レクサスIS350の後期型……運営によって中レベルの能力を持った国産高級車として販売されているこの車を、高津タクシー仕様にする為に源さんの所でエンジン周りから足元、内外装にいたるまで手を入れ直した高津タクシーの第1号車両である。現時点でもう走行距離が4万キロを優に超えている筈だが、全くヘタっている様子が見られず、むしろ再び走りだすのを待ち侘びていたかのような、何とも言えぬ頼もしさを感じた。

車の運転席のドアを解錠して開けて、中を覗き込む。少しダッシュボードの上に埃が着いていたので払ったものの、ずっと屋根が付いたガレージの中で保管されていた為か、外装同様内部もそれ程汚れているようには見えなかった。これならこのまま営業に出掛けても差し障りが無さそうだ。

玉緒を助手席に乗ると、俺も運転席に乗り込んでエンジンを掛け、ドライビングポジションを調節してシートベルトを締めると、ブレ

ーキを踏んでシフトをPレンジからDレンジに切り替え、サイドブレーキを解除して左ウインカーを点滅させると、ブレーキを離して惰性走行させ、ステアリングを左に切りながら駐車スペースから車を出した。

すると、車が出庫したのをセンサーが何かが検知したのか、ゆっくりとシャッターが自動で下降していくのが左側のドアミラー越しに見えた。今更だが結構凄いハイテク装備を搭載しているな…このガレージ、と俺は素直に感心した。

前照灯のロービームとフォグランプを点けて駐車場内の通路を移動し、アパートの建物の横のスロープを登って外に出ると、車幅灯だけ残して前照灯を切ってフォグランプだけは点灯したまま、俺は裏口へ向かい、出口を右折して公道の上を走り始めた。

別に真っ昼間で明るいことから、視界を確保するという見地からライトを点灯して走る意味は全然無い。だが、他者に自車の存在をアピールして被視認性を上げるという意味では十分に効果が期待できる。タクシーの行灯を屋根に付けて営業している時は、空車だと屋根の上の行灯も黄色く輝いているから、客が空車の車を探す事が容易になるという利点もある。この為俺達のギルドではこの『昼間前照灯点灯運動』、所謂デイルイト運動がトワイライト運動（夕方になったら早めにライトを点けましよう的なあれ）と共に推奨されていた。

本来はロービームを点灯するのがより良いのだろうが、車のヘッドライトはバイクやスクーターのそれに比べるとずっと明るくて眩しいので、道行く車が皆ヘッドライトを点けていると、ライトの光力が弱いバイクやスクーターが前照灯の波の中に飲み込まれて発見しにくくなる危険性がある。その為俺は車幅灯と、ヘッドライト程ではないが前方を明るく照らし、霧や悪天候時でも視認性・被視認性の両方を確保出来るフォグランプを点ける事でヘッドライトの代わりに使用していた。

もつとも、シヨップによつては後付けの『デイルイト』と呼ばれるスターターと連動して常時点灯する白いLEDの小さくて細長い灯火類を販売している事があり、そうした後付け部品を装着している車も多く見掛けるが、尾灯も点灯して後方からの被視認性も確保できるという意味でも、俺はそういう物は取り付けずにフオグランプを使う事に拘っていた。

島の中心部にあり、島の中に幾つかある商店街の中でも随一の規模を誇る中心街：初奈島第一商店街の近郊の繁華街にある中央通りを経由して高速道路に向かう為に、海沿いの片道一車線道路を左手に海を眺めながら南の方へ向かつて下って行く。ある程度走って岬の麓にある住宅街までやつて来ると、岬を登って峠越えをする為に道は大きく右へ逸れ、一転して急な上り坂と急なブラインドカーブが連続する狭い九十九折の峠道に変化した。

俺は気持ち強めにアクセルを踏み込み、エンジンブレーキを効かせながらテンポよくハンドルを捌き、30km/h制限の道路を最高60km/hを少し超える程度までスピードを出しながらヒルクライムを駆け抜けていった。

峠道の頭頂部、上りからなだらかに下りに転じる、左手の方に壁のように切り立つ崖がある緩やかな右カーブに差し掛かった時、前から10t位の濃紫色のスーパーグレートのカンブカーが、スピードを出してセンターラインから車体をはみ出しつつ対向して来るのが見えた。俺は出来るだけ道路左端にISの車体を寄せながら、ハザードランプを点滅させてトラックに向かって数回パッシングした。カンブの方も此方の方に気が付いたのだろう、詫び代わりに一度だけパッシングするとハザードランプを焚き、排気ブレーキを使って急減速して車体を道の左側に大きく寄せ、徐行しつつ俺達の車と離合した。

トラックとのすれ違いを終えてハザードを切り、ステアリングを微妙に右に切り込んで車線の中央に復帰すると助手席の玉緒が話し

掛けてきた。

「何だったの？さっきのあれ……。危ないわね！何を考えているのかしら？！」

「仕方が無いだろ、この道トラックが走るには狭い方だし、ここから麓までは緩やかとはいえ長い坂道と高速カーブが続くんだしさ。勢いを殺さずに安全に登り切るにはああするしか無かったんだろ……。別に危なくはなかったと思うぞ。ちゃんと離合する時左にいったい寄ってくれたし……。」

「でも、あなたハザードを点けていたじゃない。」

「ああ、あれは単に対向車や後続の車に『対向車が来るぞ、気を付けろ！』って注意のサインを互いに送っていただけだから。この手の峠道では普通に見られるマナーだよ。」

そう彼女に説明しながら、ギアをDレンジからマニュアルセレクタに変更して、2速まで落としてエンジンブレーキを大きく効かせつつ、ステアリングを右から左に切り返して俺は坂道をどんどん下って行った。

中心街へ向かう中央大通りとの交差点にたどり着いた。ここに限らずこの片道4・5車線の大きな通りに交差する道路との交差点は、この大通りの特殊な構造上、全て部分的に立体交差する造りになっていた。

先ず、それぞれの方向へ走る車の流れを完全に分離する長くて幅も広いコンクリート製の中央分離帯が鎮座し、中央にある2車線は完全立体交差になった高速道路のような構造をした100km/h制限の自動車専用のバイパス道になっており、さらに1車線分のゼブラ模様の安全地帯挟んで側道のように並走する60km/h制限の2車線の車道と歩道が取って付けたように設けられている。そして交差点へ近づく度に、2つの道は安全地帯からコンクリートの防壁によって完全に仕切られ、バイパスは地下を潜ってノンストップで交差点をパスして地上へ迫り上がり、一方の歩道と一般道路はそ

のまま真つ直ぐ交差点へ突き当たり、信号機によつて交通整理を受ける事になる。また、バイパスと一般道を区別する安全地帯は、時々消失して加速車線と減速車線を兼ねた新しい5車線目となり、その付近だけでバイパスを走る車と一般道を走る車が入れ替わる時がある。そんな新御堂筋や都市高速道路を彷彿とさせる造りをした道路だった。

ちなみにこのバイパス道路はそのまま速度無制限の高速道路に直結していたりもする。

信号が青に変わり、陸橋の手前の道を左折して中央大通りに入ると、直ぐに地下を通つて陸橋をくぐつてきたバイパス道が地上まで上がつて来る所にぶつかつた。直ぐに分離帯と安全地帯が途切れて加減速車線が現れたので右ウインカーを点滅しながら車線変更をし、タイミングを見計らつてからバイパスの左車線へ合流し、僕は本土へ繋がる高速道路に向かう為に車を飛ばした。

追い越し車線を120km/hの速度で流れに乗りながら繁華街の中を駆け抜けて行く。車間距離を詰めて走らなければいけない程道路の上に溢れかゑつた自動車の中に一般車とか普通車と言えそうな車はあまり走つてはいない。殆どが俺みたいなタクシーやADバンやハイエースやサンバーのような民間業者の営業車、大小様々なトラックや大型バスである。その一般車にしたつて買出しに行くようなミニバンや軽自動車、若しくは走り屋仕様のスポーツカーとかそういう物ばかりである。これが平日の昼間ならまだ分からなくもないが、今日は日曜日である。島髓一の繁華街なのに家族連れらしき姿を一切見ない事に俺は空恐ろしい物をひたひたと感じた。

暫く走ると、急に上り坂になつてバイパスは高架道路になつて中央大通と別れて高速のランプに向かつて一直線に伸びて行く。そして暫くすると、

『初奈島東料金所 2KM』

『渋滞あり、前方注意！スピード落とせ』

と書かれて並べられた緑色の案内標識と黄色い警告表示が見えてくる。

そして暫くすると料金所の2つあるETCレーンに並んだ車の列に合流して停車した。料金所のバーを潜って左腕の機械から自動的に高速料金が精算されると、いよいよここから先は全線速度無制限の高速道路である。まずは先払い式の『本初高速連絡橋（初奈大橋・H1）』を通過し、その後本土にある高速道路で、後払い式の高速3号線を通って行けば帝都まで一直線で行く事が出来る。

俺はETCのバーを無事に通過して片道3車線の本線に突入すると、限界まで一気にアクセルを踏み込んで車をキックバックさせた。20……60……100……160……200……270km/hと、エンジンとマフラーから重低音が心地良い轟音を響かせながら物凄い勢いでISはぶっ飛んでいった。流石スーパーチャージャーまで装着して無理矢理500PSまで性能を引き上げたモンスターマシンは伊達じゃない。

大きな吊り橋の追い越し車線を270km/hまで表示できる速度計の針が振り切れる程のスピードを出して巡航していると、

『間もなく発券所。車線減少につきスピード落とせ！』

と書かれた警告標識が視界の先に見えたのとほぼ同時に、前方を走る車が次々とハザードランプを点滅させながら制動灯を赤く明滅させ始めたので、俺も左ウインカーを点けて左ドアミラーに視線を移し、左後方を目視してから一番左のレーンにやや強引に車線変更すると、同じ様にハザードを焚いてかなり強くブレーキペダルを踏み込んだ。

リアを持ち上げ、前輪がタイヤハウスのフェンダーに接触する位フロントを沈み込ませながら急減速し、慣性で前方に引っ張られてつんのめった所為だろう、

「きゃっ！」

と可愛らしい叫び声を上げると、

「危ないじゃない！いきなりこんな急ブレーキを踏むなんて！」
と、玉緒が俺に向かって嘸み付いてきたから俺の方も応戦した。

「急ブレーキなんて踏んでないぞ！」

「どう考えても急ブレーキじゃない！」

「後ろの車にぶつけられてないから、これは急ブレーキとは言えない。強いて言うなら、やや強いブレーキだ！」

「……………」

呆れた様にジトツとした目で此方を見つめている玉緒の視線を極力意識しない様にしながら俺は渋滞の一番後ろに着いて停車し、シフトをNレンジに入れてサイドブレーキを掛け、後続車が停止するのをルームミラー越しに確認すると、ハザードを消して両手を前方へ伸ばして伸びをし、ハンドルの上に顎を掛けてハンドルを抱えるように蹲った。

発券所のETCでチケットを受けると、俺は気合を入れるように座り直し、またアクセルを踏み込んで車を加速させ、2車線ある内の左側の方へ車を進めた。

走りだして直ぐに、

『六郷JCT 帝都 陸南自動車道・高速3号線(M3) 陸南
地方・田淵』

と書かれた緑色の案内標識が目に入り、左車線と右車線を隔てる白い破線がだんだん太く短くなっていき、やがてゼブラ模様の安全地帯が出現して左右へ道路が二手に分かれる分岐点までやって来た。ここから標識の案内に沿って左の方へ曲がって行く道にそのまま入って行けば、やがて高速道路3号線こと、首都である帝都と陸南と呼ばれる南東部の一地方を結ぶ陸南自動車道(M3)の上り車線と合流する。

前を走る15tの有蓋車のトレーラーに続いて、加速車線から加速しながら右ウインカーを点けて本線へ車線変更しようとして右の

たので、俺はハザードランプを点滅させ、ブレーキを踏んだり離したりしながら徐々に車を減速させていった。

料金所でこれまで高速道を走った料金と、これから走る都市高速の定額料金を纏めて精算すると陸南自動車道は終結し、そのまま都心部まで向かう帝都高速3号線（3）に接続する。そして、都心部まで来ると、都心部の周囲を時計回りに4車線の道が一方通行でグルグルと回る帝都高速中央環状1号線（C1）に合流する。この道を周回して秋原葉の最寄りのランプで降りれば目的地に到着である。

この街にはこのゲームを運営している会社のゲーム内での本部営業所が設置されているので、ゲームに入り浸っていた頃はほぼ毎日訪れていた、勝手知ったる行き慣れた場所の筈だったのだが、たった数ヶ月足を遠のいていた間に物凄く様変わりしていたから俺は心底吃驚した。

彼方此方に大きな雑居ビルやモールが整備されたり建設されたりして其処彼処で工事が行われており、以前は運営が直営するアイテムショップしか存在しなかった筈なのに、今では運営とは無関係の民間事業者のオフィスやショップが沢山軒を連ねていた。

目的の家電量販店は、そうした新しく出来たダウンタウンの広大な一角にドンツと構えた、地下にも駐車場を備えた10階建ての大きなビルだった。

地下の立体駐車場に車を駐車してから地上に上がってみると、その広大な店舗と見渡すかぎり並び置かれた大量の展示商品に改めて俺は度肝を抜かれた。

「す…凄いな、これは……。」

と、目の前に飛び込んで来たワンフロアの3割近くを占めるPCの展示スペースと、国内外を問わず展示されている商品のヴァリエーションの豊富さに目を奪われて思わず呟いていると、

「さ、あなた。そんな所でポケットとしていないで、早く冷蔵庫を見に行きましょう！」

と、玉緒に催促され、そのまま彼女にシャツの袖を引っ張られる様に俺はエスカレーターを使って2階に上がり、2階から上階にジャンル毎に並べられた生活家電を玉緒と一緒に1つずつ見て回った。

買い物を終えて駐車場に停めた車に乗り込んでから、俺は隣に座ってシートベルトに手を掛けている玉緒に愚痴った。

「なあ、冷蔵庫と洗濯機だけじゃなかったのか……？結局こんな物まで買わされて……。」

と、後部座席に置いた高性能多目的型電子レンジと高機能電気炊飯器、そしてホットプレートの入ったダンボール箱をミラー越しに一瞥した。

「別に良いじゃない。欲しくなっちゃったんですから。」

と、気にする風でもない玉緒の嬉しそうな姿を眺めていると敢えて責める気力も喪失したので、

「はあ……。」

と軽い溜息を漏らすと、俺はシートベルトを締め、スタートボタンを指で押してエンジンを始動させ、発車措置を施すとロービームとフォグランプを点灯し、右ウインカーを点滅してクリープ走行で前進しながらステアリングを右に切って出庫した。

高性能大容量の最新型の冷蔵庫とドラム式の全自動洗濯乾燥機を購入して自宅まで配送する手続きを取った所までは良かったが、応対した白いYシャツの上に赤い法被を羽織った、やたらテンションが高いお祭り男のような店員に、

「只今新規出店出血大サービス期間中で、一度に纏めてお買い上げられた方がポイントも大量に付く上に、お値引きの方も頑張らせて頂きますからお得ですよ。」

と唆され、電卓で叩き出した数字に目が眩み、玉緒がその気になっ

た所為で御覧の有様である。結局冷蔵庫に1万G、洗濯機に7千G、炊飯ジャーとオーブンレンジに4千Gずつ、ホットプレートに千Gと、合計26,000Gも払う羽目になってしまった。いや、実際は片道350Gの高速道路の通行料と自宅までの配送料100Gが加算されるからもう少しだけ掛かる訳だが、どちらにせよ格安の軽自動車をギリギリ買えない程度の大金を、雀の涙程度のポイントと引換に一度に支払ったのである。

こんな事を言うと、

「あなたが昨日使った30万に比べたら……、わたしにだって、たまにはこの位の事をしてくれても罰は当たらないでしょう？」
と、玉緒に窘められそうだし、認めたくはないが俺自身そう思う所が少なからずあるので、これ以上は言わずに黙る事にした。

まあ、そんな俺も、何故か電気屋の6階に店を構えていた本屋で『最新版・全国ロードマップ』というのをちゃっかり購入していたりする。いくらカーナビゲーションが車に付いているとはいえ、タクシードライバーがいつもカーナビに頼って運転しては格好がつかない。家に帰ったら一通り目を通してイメージトレーニングをし、何処に行くにはどういうルートを取れば良いのか大方の道順を頭の中に叩き込む心算だ。道が分からないなんて、タクシートの運転手としては致命的とも言える欠点だからだ。

本当は一週間程自分の車で走って回りながら体を使って覚えるつもりだったし、実際その方がほぼ一発で記憶する事が出来るのだが、思い掛け無い出費が続いたので、悠長な事は言っては居られなかったから明日から早速仕事に出る事に俺は決めた。

駐車場から地上の道路に出て来ると、もう日が暮れて辺りが真っ暗になっていた。目の前には2つ一組の尾灯や制動灯を赤く明滅させる車の列が、対向車線を白や黄色に輝く眩しいばかりの光の河が道路の上をゆっくりと流れて行く。

一番近くにあった高速道路のランプから環状線に入って帝都高速3号線に進み、来た道を逆に辿るように俺達は帰路に着いた。

そして翌日の早朝、玉緒と一緒に冷蔵庫の中を空にし、家にあった青色のクーラーボックスの中に一時的に移す作業を行うと、昼頃に来る予定の新しい冷蔵庫と洗濯機の到着を待ち侘びてウキウキしている玉緒を一人残し、俺は久々に仕事へ向かう為に家を出ていった。

第四話：営業再開

>>新太郎

駐車場へ降りてガレージの前に立つ。

昨日と同じ様に認証すると操作パネルに車のリストが表示される。さて、今日はどの車に乗ろうか……。そう思いながらリストに目を通すと、たまたま目に付いたというだけの理由で、俺はスーパーチャージャーを装着したV63・5LエンジンのGRS200系クラウン・アスリートの後期型を選択した。

そして昨日と同じ様にガタゴトと大きな音を立てながらガレージはシルバーマトリックの200クラウンを吐き出した。

俺は左手首に着いている機械を操作してインデックスを呼び出すと、アイテム一覧から、青い字で『個人』と書かれた黄色い提灯型のタクシー行灯と、ICリーダーが付いているLED電光掲示式の実空車表示機と連動したタクシーメーターを選択すると、俺は車の取り付け枠にドラッグして取り付けた。その瞬間、ガチャンツという音と共に、何もなかった筈の空間からまるで魔法のように、車の屋根の上に提灯と電源ケーブルが、助手席前のダッシュボードの上にスーパーサインが忽然と現れた。もう慣れて然るべき事象なのだろうが、いきなり出てくるので、やっぱり俺は吃驚してしまった。

クラウンに乗り込んでキーを電源プラグに挿し込み、エンジンスタートボタンを押してドライビングポジション、ハンドルやミラーの位置を調節し、シートベルトを締めてブレーキを踏みつつギアをPからDへ変速し、サイドブレーキを解除して左ウインカーを焚き、ヘッドライトとフォグランプを点灯してからステアリングを左へ切って俺は車を発進させた。

駐車場のスロープを登り切ってロービームだけを切り、地上に出て裏門まで車を回し、左ウインカーを点けて路肩に寄せると、俺はハザードを点滅させて車を止めた。

さて、どちらに向かうか。左折して坂を上がればやや寂れた第二商店街や運転試験場が、右折して下つていけば海沿いの住宅地や山向こうの賑やかな中心街の方へ行く事が出来る。

やはり、人が多く賑やかで、いざとなれば初奈島中央駅の正面口のロータリーで客待ちをする事が出来る中心街の方へ車を回した方が客を拾う事が出来る確率が高いだろう。俺は右折して坂道を下る事に決めた。

ハザードを切って右ウインカーを点滅させ、メーターを作動させてスーパースインを『空車』表示にし、発車措置をしてステアリングを右に切ると俺はアクセルを踏み込み、後輪をスライドさせながら勢い良く車を発進させた。

坂道を下りて最初に差し掛かる緩やかな左カーブを走行中、頭に黄色い提灯を乗せた白いY33シーマのタクシーが向こうから対向してくるのが見えた。

運転手は誰か判らないが、同じ連合に所属している車である事は間違いない。俺は、

「よっ！」

と、軽く挨拶をするような感じでシーマに向かって右の掌を上げて合図を送った。すると相手の運転手も白手袋をした右の掌をこちらに向けてきた。

同じ組織や提携企業同士の車が出会った時によく見られる、ある種形骸化した運送交通業界特有の習慣で、ただ互いに掌を上げて挨拶を交わすというだけの珍しくも何とも無い日常的な光景だが、どいう訳か知らないけれども、これをやると何となく、如何にも仕事しているような、妙な実感が湧いてきて気分が良いので、俺はこの仕草をするのが好きだったりする。

さて、昨日通った時と同じ様に峠越えをして中央バイパスまで出て来ると俺は左折をし、自動車専用道へ入らずにバイパスの側道を70km/h位でゆつくりと走り出した。3km程走った所にある、初奈島中央駅のバスターミナルの出入口と、タクシープールと地下駐車場の出口を兼ねた交差点を通過し、その100m先にあるバイパスを跨いで一般車線から反対側の一般車線へ方向転回する為の自動車専用の陸橋を右折し、それを跨いで反対車線へUターンした。そして先程通過した交差点の手前側に設けられているタクシー・一般車両用の入り口に入る為に、俺は左ウインカーを点滅しながら車を路肩にしっかり寄せて減速すると、駅のロータリーに沿う感じで駅前の方へ逸れて行った歩道の代わりに設けられた2本の左折専用通行帯の内、左側の一般車駐車場・タクシープール用のレーンに進入、信号で交通整理を受けたので停止線の内側で停車した。

そして信号が青になると、ステアリングをグルグルと大きく左へ切っていき、植木が植えられた分離帯で仕切られた、手前側に大きくUの字を描くようにせり曲がった通路に入っていった。車の向きが正反対になる位まで旋回すると、今度は地下の駐車場へ真っ直ぐ下がっていくスロープと、タクシー乗り場に向かう為に右側に新しく出来た通行帯との分岐点があったので、俺は当然のように右ウインカーを点けて右側へ車線変更してタクシープールへ入って行った。

タクシー乗り場のタクシー車両の待機場では、既に多くのタクシール車両が駐車場に整然と並んで客待ちの順番を待っていた。

俺はその中の一角に他の車と同じ様に頭から駐車スペースに車を入れると、前の車が動いて順番が回ってくるまで暫く掛かりそうだったので、スーパースインを『回送』に切り替えると、ハザードを焚いて停車措置をし、シートベルトを外して車の外に出た。

背伸びをして周りを見渡してみる。殆どがそれぞれのギルドカラーに染められた単色を基調とした個人タクシーばかりだが、中には東京無線とそっくりの深緑色の車体に黄色い斜めの帯状のラインが入り、東京スカイツリーを模した行灯を頭に載つけた『帝都無線』の車両や、車体の運転席と助手席の扉に大きく三つ葉のマークが入った『八栄グループ』の車両等、各民間企業共同体に所属している法人業者のタクシーもチラホラと見受けられた。

しかし、驚くべきはその車両の車種の偏り具合である。八栄グループの車にこそコンフォートが多く見られたが、殆どの法人タクシーの車両がNHW20プリウスの後期型である事が信じられなかった。だって法人タクシーといえば、昭和の残り香を今なおプンプンと匂わせているY31セドリック・セダンや、クラウン・セダン、コンフォートやクルーなど、フェンダーミラーを装着した渋いセダンだろ。常識的に考えて！エコだか何だか知らないが、猫も杓子もプリウスを無条件で支持している昨今の世相を見るにつけて、車好きとしては複雑な気分に分かれた。

法人タクシーとは一転して、やはり個人タクシーには多種多様な車種が使われているようである。古いも新しいも関係なく4ドアセダンが主流のようで殆どはそういう車だが、少なくとも特定のモデルだけで固まっているというような異常な光景になっていない分、俺は少しホッとした。ただ、色やグレードこそ違うとはいえ、今自分が乗車している車と同じ200クラウンが10台以上も停車しているのを視認した時には、被ってしまったている事に内心頗るがっかりとしたが……。まあ、個人タクシーの定番車種である以上、被るのも致し方ない事だろう。

そんな事を考えながら、休憩がてら周りに停まっている車を見回していると、

「高津さん……ですよね？」

と、後ろから急に声を掛けられたので、俺は驚いて声がした方へ振り向いた。

するとそこには、俺の車の右隣に停車している神々しい位純白に輝くボディーを持つ連合所属と思しきF50シーマの後期型の運転席側のAピラー付近の屋根の上に左肘を載せて頬杖を突き、限りなく白に近いグレーをした変な色のスーツを着て同じ色の中折れ帽子を被り、白いワイシャツに緋色のネクタイを締め、更にはツンと尖った顎に態とらしく無精髭を生やしている縦長の二等辺三角形を逆さにしたような感じの顔をした長身の胡散臭い男が俺に向かって高く上げた右手を振っていた。

無論知らない男だが、俺の名前を知っている事と、あまりにもそれらしくない格好だが連合所属のタクシーの運転手らしいという事から考えると、一応『お仲間』ではあるみたいだ。しかし、何処の誰だかがどうしても思い出せない。こんな目立つ格好をした奴と擦れ違ったら間違いなく記憶に留めて置ける自信は十分過ぎる位ある。だが判らない。

俺は、何処の誰なのかを思い出せずにいる事を相手に悟られないよう、時間稼ぎをする為にそつと俯いた。

すると、そこへ丁度良いタイミングで、奴のシーマの助手席側のドアにキラキラと輝く金字で書かれた『個人・加山タクシー』という文言が目に見えび込んで来た。加山タクシー……加山……加山……あつ、そうだ！思い出した。前に俺がこのゲームに頻繁に出入していた頃、タクシーの仕事を休憩している時等に一緒にチャットで喋っていた仲間の1人であった『Polnareff（ ）』だ。確かその当時彼が乗っていた白いJCG10型ブレビスの前扉にも今の物と同じ文言が書かれていたと記憶している。

ただ、あの時は全員がそれぞれの車の中にいて、相手の車の外観は判るが中にどういう奴が乗っているのかは判別出来ない状態でチャットをしていたから、正確に言う俺はポルナレフと知り合いで

あるが、一度も奴の生身の姿を拝んだ事も声を聞いた事も無かった。だから、たとえ今更ながら目の前に立っている飄々とした感じの優男がポルナレフであると思当付けたとしても、あまりにも俺が抱いていた奴のイメージとはかけ離れていた為に、俺は奴だと断言できる自信が持てなかった。

「ポ……いや、加山さん？」

と、俺は半ば当てずっぽうで目の前の男に問いかけた。するとやはり正解だったのか、男は益々にこやかな笑顔になり、俺に向かって車越しに捲し立てた。

「やっぱり、高津さんだったんだ！お久しぶりです！」

「こちらこそ、久しぶりです。」

「こっちは何時来られたんです？」

「先週の木曜日だから……、4日前ですかね……。」

「そうなんだ！いやあ、嬉しいな。また高津さんと一緒に仕事が出るだなんて……。」

「そうですね……。」

こうやって文字に起こしてみれば取り留めのない普通の会話のようには思えなくもない。しかし如何せん、はつきり言つてこの時の奴のテンションの高さは尋常ではなかった。お陰様でただ会話をしているだけで、俺はまだ仕事を始めたばかりなのにも関わらずどっと疲れたような感じがした。

尤も当然ながら、同じタクシーの運転手同士、最近の客入りの様子や他の仲間の安否等の有益な情報も彼から得る事が出来た。当たり前といえばそうなのかもしれないが、定期的に来るものの本数が少ない上に料金が割高な列車や、全く宛にならないバスなんかよりも、数が多くてその辺で気軽に停められて行きたい場所に自由に乗り付けるタクシーの需要がこの世界の住人の間ではかなり高いらしく、努力と機会があればかなりの額を荒稼ぎ出来るらしい。ただし、相手は今までのNPと違って生身の人間であるので、無銭乗車や悪

質なクレーマーやタクシー強盗に遭うリスクも背負い込んだ上での話らしいが……。少なくとも現実世界と違ってタクシー運転手の収入の展望が明るい傾向にあると判明した事は、俺にとっては嬉しい情報だった。

そんな風に10分弱程世間話をしていると、突然後ろに停まっていた連盟所屬らしい100系クレスタの後期型から、数回のパッシングと共に長いクラクションを鳴らされた。

不快に思っと思わず後ろの車の運転手の方を睨みつけると、運転手の方も俺の方を睨み返し、しかも

『さっさと前に出ろ！』

とでも言うかのように口を激しく動かしながら右手を払うようなジェスチャーをした。

呆氣に取られつつ反対側、つまり車の前方へ目を向けると、なんと俺と加山の車の前に2台ずつ止まっていたタクシーが既に発進してしまい、俺達の車の前だけ2台分ものスペースが丸々開けられていた。もうすぐしたら俺達の所にも客が回されてくる。これは怒られても仕方がない。俺だっって後ろの車と同じ状況に遭遇したら全く同じ事をやってしまうだろう。

「おっと、いけない。次、順番だ。それじゃ、俺はここで。また会いましょう。」

「了解。それじゃあ、また。」

そう言っって、慌てて車に乗り込んで客が待っているタクシー乗り場の方へ発進していく加山を見送ると、俺も自分のクラウンに乗り込んでシートベルトを締め、ハザードを消してスーパーサインを『空車』にし、シフトをPレンジからDレンジに入れてサイドブレーキを解除し、車をゆっくりと前進させて駐車スペースから外に出て、右にステアリングを切りながらロータリーのタクシー乗り場へ車を横付けると、停車措置をして運転席とドアの間に付いている操作ノブを上へ引き、後席左にある自動ドアを開放し、停車措置をしながら

ら客が乗り込むのをじつと待った。

客はすぐに現れた。俺が今停まっているタクシー乗り場から前方へ十数m程離れた所に見える初奈島中央駅の正面東口（タクシー乗り場方面出口）から出て此方に向かつて真っ直ぐ向かつてくるのは、口論するように顔を強ばらせて互いの顔を見つめながら、肩をいきり立たせて激しく口を動かす一組の男女だった。

一瞬、よくある痴話喧嘩の風景かとも思ったが、どうもおかしい。向かつて右側を歩く颯爽とした二枚目な男は、アルマーニだろうか、仕立ての良さそうな黒い高級スーツを着こなしている。恐らくあの雰囲気はビジネスマンだろうか？その割には手ぶらというのが引かなかった。

男の右隣を寄り添うように歩いている、肩までの黒いロングヘアで大きな胸がよく目立つ女は紺色のスカートのスーツを身に付けている。右肩にハンドバッグを下けているが、何故か左手にも男用のジュラルミン製のアタッシェケースを提げている。銀色に輝く鞆は、どうやら彼女の物ではなく男の持ち物のようだ。

どうやら女は男の秘書だったようである。俺の車に乗り込む時に、先に車の方に到達しておきながら男の方を先に入れて奥の後席右側に腰掛けさせ、自分は後から乗り込んで左側に座るという女の所作でそれを窺い知る事が出来た。

「伊織町の2番地、勇栄ビルまでお願いします。」

女に開口一番、怒鳴りつけるように行き先を告げられて出鼻を挫けられたような感覚になりつつも、

「畏まりました。扉を閉めますからお手元にご注意下さい。」

と言って、俺は自動ドアのレバーを押し下げてドアを閉め、料金メーターを作動させてスーパーサインを『賃走』にした。

右ウインカーを点滅させながらシフトレバーをDレンジに入れてサイドブレーキを解除し、ステアリングを右に切って車を発進させ

る。

駅前の交差点へ行く途中、バスの停留所が並んだスペースと交差する部分を通り切るので、左や斜め右の方から出入りするバスに注意しながら俺は駅前の交差点へ出て、駅の西南の方にある伊織町へ向かう為、左ウインカーを出しつつ左折レーンに入って既に前に停車していた青色の古い日野・ブルーリボンのノンステップ仕様車の後ろに停車し、ギアをNレンジに入れてサイドブレーキを掛けた。すると、車内に静かに響くアイドリング音とウインカーのチカチカ音に混じって後ろに座る男女の会話が聞こえてきた。

「間に合うでしょうか？」

「大丈夫なんじゃない？」

「絶対無理ですよ……。どうしましょう……。」

「まあ、何とかなるって。」

女の方は随分焦燥感に駆られたような声だったが、対照的に男の方は呑気にも程があるように感じた。実際、ルームミラーで覗き見ると、股を大きく広げて鷹揚と寛いでいる男のスーツの袖を掴みながら泣きそうになっている女の姿が鏡面に映し出されていた。

「何とかなる！ つじや無いですよ、社長……。折角初奈島に我が社が進出出来るチャンスなんですよ！ 無理を言ってアポを取った以上遅刻だなんて許されませんよう……。」

「仕方ないでしょう。電車が遅れちゃったんだから。だから単線の列車って嫌なんだよ。それに間に合わないって言ったって、後10分強はあるだろう？……運転手さん！」

突然男の方に呼びかけられて、驚きのあまり少し取り乱しながら俺は男の方へ振り向いた。

「はい、何でしょうか？」

「伊織町の勇栄ビルまで5分で行ける？」

「さあ……。勇栄ビルって、たしか桜街道沿いにある大きな10階立ての董色のビルですよ？ 道路状況にもよりますが、上手く飛ばせばギリギリで行けるかも……。しれませんね？」

「じゃ、なるべく急いでくれ。」

「か……畏まりました。」

男の思いの外力強い声に若干圧倒されつつ、文字通り畏まりながらも発車措置をして、走りだしたバスに続いて初奈島中央街道へ左折し、バスを追い越しながらバイパスへ入る。幸い時間帯と島のどん詰まりまで行く下り方向の所為か道路が物凄く空いていたので、150km/h近いスピードで俺は車を疾走させ、桜小路の手前にある1つ先の出入り口でバイパスを下りると、丁度いいタイミングで青信号になったのでそのまま左折し、片道2車線の桜街道を南下して伊織町にある勇栄ビルという名前の大きなオフィスビルの前に車を停止させた。ジャスト5分だった。

メーターの料金を見ながら呟くように、

「お客さん、着きましたよ。126G戴きます。」

と、二人に向かって声を掛けた。いつ事故を起こしたとしてもおかしくなかったし、本当に運が良かった。いくら俺が危険運転の常習者だからといえど、あんな運転を強要されるのは二度と御免だ。

一方、お客の方はただ一向感嘆している様だった。

「凄い……。本当に5分で着きやがった……。」

「運転手さん、有難うございます！お陰で助かりました。」

と、男は呆然とし、女の方は感激のあまりなのか涙まで流しながら100Gもチップとして上乘せして払ってくれた。

俺が自動ドアを開けて女に袖を引つ張られて引き摺り降ろされて行く男を見送る間際、男が俺に向かって話し掛けてきた。

「運転手君、君は何処の誰なのか教えてくれないか？」

「個人タクシー連合所属の高津です。」

「連合の高津？そうか、覚えておこう。ありがとう。」

そう言いながら男は秘書らしい女と共にビルの中へ走り去って行った。俺の復帰初のお仕事、一先ず無事に終了である。

いい機会だから、ここで一つウチの料金体系について簡単に説明しておこう。基本、初乗り運賃50Gに2km毎に12Gが付加される。

有料道路を走ればその区間だけ1km毎に10Gが加算され、深夜料金は3割増、50kmを超える長距離料金になると半額になる遠距離割引が適用される。

さらにこれに信号待ち等の待ち時間料金が0.5分毎に4G、ハイヤーと呼び出しを受ければ配車料金として別途100Gを頂戴する事になる。

ちなみに、深夜料金の適用時間帯は22時半から翌5時半まで、遠距離割引は一般道のみで途中の高速道路分には適用されないので注意が必要だ。

これはウチのギルドで決められている中型車の料金の規定だが、何処のギルドでも遠距離割引の割引率や深夜料金の割増率の些細な違いを除けば、個人タクシー協同協会が定めた同じ料金体系を遵守している。ついでに言えば、法人タクシーも同じ様な料金体系で動いているらしい。現実世界と違ってこの世界には自由化による生存競争という潰し合いが存在しないのだ。

考えて見れば、タクシー乗務員総合労働組合に加入している既存のタクシー事業者による大きなカルテルとも言える代物だから、新規に参入したいと思う人からみたら、彼らの進出を阻む鬱陶しい悪しき習慣に思えるのかもしれない。客から見ても、もつと安く出来る筈なのに協定を結んで暴利を貪っている様にしか見えないう。だが、俺達タクシー事業者にとってみれば、この料金体系は生活費を確保する命綱とも言っても過言じゃない代物である。この料金体系だからこそ、たとえ一日一件短距離の客を乗せる事しか出来なかったとしても、最低限の収入は確保出来る。

実際、勇栄ビルの前で客を下ろした後、あの辺り半径3km位を流し運行していたが、一人も客を拾えぬまま昼を迎えてしまった。

今日は客の入りが芳しくないな。そう思いながら俺は車のスーパースサインを『回送』に変えると、少し早いかないと思いつつも昼食を摂る為に、一昨日車で巡回している時に目を付けた、第一商店街の外れにある十数台の屋外駐車場を設けたラーメン屋へ車を走らせた。

まだ11時代と早い時間帯だったからだろう。よくある一軒家のラーメン屋の建物に隣接したアスファルト舗装の駐車場には1台も車が停まっていなかった。俺は道路から歩道を跨いで駐車場の中に入ると、両側に等しく並んだ縦列駐車スペースの内、向かって右側のだ真ん中の所にステアリングを右に切りながらバックで駐車し、停車措置をしてエンジンと灯火類を切ると、車を施錠して店の方へ向かった。

薄暗いがテレビの音だけはよく響いている店の中に足を踏み入れると、恐らく時間的に客は来ないと踏んでいたのだろうか、厨房の端で素早く新聞を畳み込んで慌てて立ち上がった店主の男と目が合った。

「い……いらつしやいませ！さ……どうぞ、こちらへ。」

と、店主に言われるがまま、10席程あるカウンターの真ん中辺りにある席に俺は通された。

ふとカウンターのの上の方を見ると、驚色の壁紙の上から『一松ラーメン75G』『醤油ラーメン80G』等とメニューが書かれた白い紙が彼方此方にやや乱雑に画鋏で貼り付けられている事に気が付いた。

さて、何を食べようか……、とも思ったが時間が時間だけに特に腹が減ってはいない。出来れば軽く済ませたいが、目の前のカウンターの奥に広がる厨房にあるステンレス製の馬鹿でかいシンクの中に大量に重ねられて仕舞われた丼の大きさから鑑みるに、どれも少食気味な俺には少々量が多過ぎるような予感がするものばかりだと思われたので、どれを頼もうか、と俺はメニューの上に視線を走らせつつ逡巡した。

そして、店の名前を冠した看板メニューであるという『一松ラーメン』を店主に勧められるままに注文した。

注文を取ってラーメンを作る為に店主が此方に背を向けてから暫く経った頃、歩道を跨いで駐車場に車が入庫するような音が外から微かに聞こえてきたかと思ったら、ガラガラガラと店の出入口の引き戸が開いて誰かが店の中に入って来た。

「いらっしやいませー。」

客に背を向けているとはいえ、よく通る店主の声が聞こえているのかいないのか、その客は下を向いて俯いたまま俺の右隣の席に座り込み、

「醤油1つ。」

と、かなり投げやりな感じで注文すると、

「はぁ……。」

と、此れ見よがしに態とらしく大きな溜息を吐いた。

何だ？こいつ、と些か不愉快に思いながらも、一体どんな奴だろうと少しだけ興味を持った俺はその客の方へチラリと視線を向けた。それは俺より少し年下のように思える、縦に細かい藍色のスリッドが入ったワイシャツに紺色のスラックスを穿き、ラメが微かに入った緑青色のネクタイをぎこちなく締めた、如何にも法人タクシーの新人運転手といった風貌のあまり精気を感じない男だった。

こう云うのも何だが、なんか一緒に座っているとこっちまでツキが落ちそうだなあ、と失礼極まりない事を考えていると、いきなりそいつが俺に向かって話し掛けてきた。

「ねえ、表のクラウン、あんたの車？」

その質問があまりにも唐突過ぎたから少しだけ面食らったものの、

「ああ、そうだけれど？」

と、俺はなるべく平静を装いつつ答えた。

「随分手を加えているんだね？」

「かなり趣味も入っているからね。」

「全部で幾ら位掛かったの？」

「車両本体と改造費込みで？……そうだなあ、全部で大体30万G位かなあ。」

「30万か……。儲かっているんだな……。」

そう呟くと男が黙り込んだので、注文したラーメンを店主が差し出すまで俺達は沈黙を守ったまま座り込んでいたが、羨望と嫉妬と陰湿な感情がありありと込められた男の声を耳にした途端、秘匿していた後ろめたい物を暴かれた時に感じるような、平常心を掻き乱された不快感がして俺は隣にいる男に猛烈な嫌悪感を抱いた。

もし俺が気性の荒い破落戸だったとしたら、怒り心頭に発するに任せて立ち上がり、喧嘩腰になって相手の胸倉を掴んで表に引き摺り出す位の事はやったかもしれないが、俺自身は一応常に紳士的である様に努めている性分だし、第一印象が大きく作用する客相手の商売をしている身なので、イライラとしながらも喉元にまで出掛かった文句を押し殺した。

こんな嫌な奴とはものの数瞬であつたにしても同じ空気、同じ時間を共有したくはない。

出来るだけ素早く流し込むようにラーメンを食べ終わると、

「勘定！」

と店主に声を掛け、手首の機械を通して入口付近にあるレジスターで会計を済ませると、俺は店の外に出て駐車場で待っている自分の車の元へ向かった。

駐車場へ回りこんだ時、がら空きなのにも関わらず、態々俺のク라운が駐車しているスペースの左隣に停められた帝都無線の20プリウスの後期型のタクシーが見えた。恐らく十中八九先程の男が運転していた車だろう。

自分は会社から宛てがわれた安物の営業車、対する此方は自家用車でもある高級車。きっと彼の目には、自分達個人タクシーが花形

のように思えて無意識の内に癖みが表に出てきてしまったのだろうか。実情はそれ程きらびやかな物では全然ないのだけれど……。そう思って苦笑しながら俺は自分の車に乗り込んだ。

第五話：人間万事塞翁が馬とは言っけれど……

>> 新太郎

あれから、第一商店街から初奈島中央駅の間のエリアを中心に流し営業をしていたが、結局ゴミ（初乗り運賃以内の距離しか利用しない短距離客）を3組乗せた以外はさっぱり客が捕まらず、結局午後5時になろうとしていた。もう日が傾きかけて外の景色は綺麗な橙色に染まって輝いている。

「今の所、稼げたのは376Gか……。」「
と、俺は内心苛立ちながら呟いた。

376G……、現実世界の円に換算すれば4千円弱の金額である。少ない。一日の稼ぎとしてはあまりにも少ない。生活費の事を考えたらせめて一日の稼ぎは最低でも千Gは欲しかった。

これっぽっちの稼ぎじゃ流石にやばいな、絶対に玉緒が般若の如く怒り出すのが目に見えている。俺は車の流れを乱さない程度で出来るだけ速度を抑えて走りながら、タクシーを探しているような人が居ないかどうか、キョロキョロと方々に視線を走らせつつ車を運転していた。

すると手首に巻いた機械のディスプレイが、突然目が眩むくらい青白く光り輝いたかと思うと、物凄く激しく明滅し始めた拳句、機械からブルルルルル……という電話が掛かってきた時のそのような少し高い電子音が車内に響きだした。

何事かと思いつつハザードを焚き、車を路肩に寄せて停車すると俺はディスプレイを右手の人差指でタッチした。

その途端、光は消えて電子音も鳴り止んだが、その代わりにピツという音と共に、

「やつほー！高津さん、高津タクシーさん、聞こえますか？」
という元気な女の子の声が手元の機械から聞こえてきた。ディスプレイ

レイを見ると、

『個人タクシー連合所属オペレーター：ナツキ』

と表示されていた。どうやらギルドの方から直接俺宛で連絡が来たらしい。

「ちよつとー、高津さん！みんなのアイドル、ナツキちゃんですよ！もしもし！」

「もしもし、失礼しました。高津です。どうしましたか？」

あまりにも煩いオペレーターの声に応戦するように俺はディスプレイに向かって声を張り上げた。

「あ、高津さん。ギルドより連絡です。お客様が直々に高津様を御指名されています。」

「え？本当ですか？」

俺は我が耳を疑った。

俺達小規模の個人タクシー事業者は大手の法人タクシーと違い、直接客の元へ駆けつけるという予約運行に関して言えば、認知度と事業社としての信用の無さから太刀打ち出来ず、競争にすらならない事が多々ある。だからこそ、高い会員費を収めつつもギルドという組織に所属する事で、大手に負けない位認知度と信用度が高いギルドに大口の窓口となつて貰つて適宜客を振り分けて頂く事で、こんな小さな事業者でも予約運行もする事が出来る。そしてそれは、その時客に一番近い所にいた空車の車に割り振られるので、此方もある客が宛てがわれるのか判らないし、客の方もどんな車がやって来るかは判らない。というか、余程運転手と客の仲が良くて彼らの間で信頼関係が結ばれてもいない限り、客の方から運転手を指定する事は滅多にない。

だからこそ、俺は驚いたのである。以前NPC相手に営業をしていたとはいえ、営業再開初日で客の方から直接指名されるなんて思つても見ない事だった。上手くやれば次回以降も継続して自分の所を利用してくれるお得意様になつてくれるかもしれない。俺は思わ

ず胸を躍らせた。

「す、直ぐに向かいます！お客様の氏名と指定場所を教えてくださいませんか？」

「はい。フルセ カツヤ様で、初奈島市伊織町3の3の11、勇栄ビル正面口前へお願いします。もう一度繰り返しします。フルセ カツヤ様、初奈島市伊織町3の3の11、勇栄ビルへお願いします。」
「……………」

さっきまでの高揚感は何処へ行つたのやら、オペレーターの指示を聞いて、俺は呆然として二の句が継げなかった。

今朝方最初に乗せた客を下ろした建物の正面玄関の前に、ライトを全て切つてハザードだけを点滅させた状態で車を停めると、俺は車から降りて蛍光灯の真つ白な光が煌々と漏れているビルの中へ入つて行つた。

床には薄い灰色の大理石の正方形のブロックが敷き詰められ、壁や天井は薄く紫色掛かったクリーム色に塗られた、よくある感じのオフィスビルの中へ入って行くと、受付カウンターの近くに、薄いベージュ色のカーペットの上に黒い革製のソファアが何脚か置かれた休憩スペースが設けられているのが見えた。更によく見るとそのソファアの一脚に、此方に背を向ける形で、今朝の男女が並んで座っているのが目に入った。

俺は二人の元へそつと近付くと、

「大変失礼しますが、フルセ様でしょうか？」

と、男の方へ声を掛けた。

いきなり後ろから話し掛けたのが不味かったのか、ビクつと少しだけ肩を震わせつつ二人は俺の方へ振り向いた。

「なんだ、今朝の運転手さんか……。驚かさなくてくれたまえよ。」

そう言いながら苦笑する男性の首には、先程まで会議か何かをやっていたのだろうか、プラスチックの透明なケースに入れられた名札が青い紐に通されて胸元辺りにぶら下がっていた。名札には『古

瀬 克也』という名前が印字されていた。

「失礼致しました。私、個人タクシー、高津タクシーの事業主兼運転手をしております、高津と申します。御指名して頂いた古瀬様です。ね？」

と、俺は詫びながら男に向かって確かめた。

「ああ、そうだ。待っていたよ。」

「それは申し訳御座いませぬ。大変お待たせしてしまいました。表の方に車を停めて居りますので、御案内致します。」

そう言つて俺は車に乗せる為に二人を促した。その時、ふとあの女が男のアタッシェケースをまだ持つてゐる事に気が付いた。だから、

「あの、宜しければ、それ、車まで運びましょうか？」

と、女の方へ声を掛けたが、

「いいえ、結構です。」

と頑なに拒まれたので、俺は客の荷物を何も持たずに二人と共にビルを出て、車の左後部ドアを開けて二人を車の後部座席へと招き入れた。

車に乗り込む瞬間、古瀬氏が俺に皮肉るようにこう言つた。

「何か、ハイヤーみたいなタクシーだな。どうせなら頭の上のランプを外して来てくれれば良かったのに。」

「迎車料金の他に入庫までの回送分の料金も掛かるので割高になつてしましますが、ハイヤーで指定して頂ければ、ハイヤーとして、タクシー灯と実空車表示を外した状態でお伺いする事も出来ますよ。」

と答えると、

「それでは、扉を閉めさせて頂きます。お手元にご注意下さい。」
と言つて扉を閉め、俺は運転席の方へ回つて車に乗り込んだ。

運転席に腰掛けてロービームとフォグランプを点灯し、メーター

を作動させてスーパーサインを『賃走』に変えると、

「どちらまで？」

と、俺は後ろの二人に話し掛けた。

「世戸ヶ谷まで頼む。」

「世戸ヶ谷？！」

古瀬氏が発した言葉を俺は驚嘆しつつ鸚鵡返しした。世戸ヶ谷と言えば、帝都の中心部の一角にある、それなりに名の知れた高級住宅地及び商業地域である。今いる地点から直線距離で大体200km位は離れているから、行き帰りの高速代金を差し引いたとしてもかなりの金額を荒稼ぎする事が出来る。正しく願ったり叶ったりの状況だった。

「ん？やはり遠過ぎるのかな？」

「いえいえ、そんな事は御座いません。何処へだって喜んでお送りさせて頂きます。世戸ヶ谷ですね？畏まりました。」

内心で有頂天になりながら古瀬氏に対して愛想良く振舞うと、俺はハザードを切って右ウインカーを点滅させ、発車措置をすると静かに車を発進させた。

夕闇の中、前方彼方まで続く赤色の光が漂う河の流れを追い掛けるように、夕闇で鈍い藍色に染まった高速道路を、真っ白なハイビームと白熱球特有の黄白色のフォグランプの光のコントラストで目の前の路面を眩く照らしながら200/km近い速度で走行していると、不意に古瀬氏が俺に話し掛けてきた。

「しかし、いい車だねえ。」

「ありがとうございます。」

感心したような表情をしてポンポンと左の掌で黒い本革シートの座面を叩く古瀬氏をルームミラー越しに見ながら、素直に俺は礼を述べた。お客様に自分の車を褒められる、個人タクシーを操業していてこれ程冥利に尽きる事はない。何故ならこの車こそ、俺達運転手にとって自分の城であり、誇りであり、分身でもあるからである。

だから、他人から自分の車の事を褒められると、まるで自分が褒められたかの様に嬉しく思ってしまった。

秋原葉と丁度正反対の所にある、世戸ヶ谷地区の中心部にあるC L1の『山町ランプ』から一般道へ下りると、俺は古瀬氏の秘書の華音嬢の道案内に従って、世戸ヶ谷区の外れ、高級住宅地の一角にある古瀬氏の邸宅の門扉の前でハザードを点滅させながら車を停止させた。車の中から望んでいる上にもうすっかり辺りが暗闇に包まれているので、真っ黒に聳え立つ屋敷の影しか判別出来ないが、中々立派な豪邸であるように俺は感じた。

「本日は御利用有難う御座いました。1,353G頂きます。」

そう言って、俺はメーターに繋がっているICリーダーを差し出しながら後ろを振り向いた。

「じゃあ、これで。」

と、古瀬氏は左手首に着けた例の機械をリーダーに押し付けた。

俺は自分の立体ディスプレイを起動させ、きちんと料金が入金されているか確認した。

『1,553G』

ディスプレイに表示された金額を見て驚いた俺は、思わず古瀬氏の顔を凝視した。だが、彼は俺の失礼な行動を咎める事もなく、明朗に笑いながらこう言った。

「チップだ。受け取ってくれたまえ。……また、機会があれば頼むよ。」

「あ……、ありがとうございます！」

と慌てて口にする、俺は急いで自動ドアを開いた。

「またの御利用を心よりお待ちしております。」

降車していく華音嬢と古瀬氏の背中を見送ると、俺は自動ドアを操作して車の後部左扉を閉めると、ハザードを切って右ウインカーを点滅させながら静かに車を発進させた。

山町ランプは出口専用のランプなので、その先にある『世戸ヶ谷JCT』に直結する『世戸ヶ谷IC』からCL1に合流する。

4車線ある本線の右側にある加速車線から本線の追越車線へと合流する形になるので、緊張しつつアクセルを限界まで踏み込みながら加速車線を走っていると、左後方からギューイイイイイイイン…と盛大に鳴り響く、自分の車の物とは違う変に甲高いエンジン音が物凄いスピードで近付いて来るのを感じて、俺は思わず左側のドアミラーに目を向けた。

するとそこにはすぐ後ろから、本線の追越車線をもの凄い勢いで疾走する複数の車のハイビームが鏡面に大きく反射していた。そして次の瞬間、左ウインカーを焚きながら本線へ合流しようとしていた俺の車の傍を、滅茶苦茶速いスピードを出して疾駆する3台の自動車が続け様に駆け抜けて行った。

帝都高速は、有料道路だし全線が高速料金の適用区間でもあるが、あくまでも制限速度が設定された一般自動車専用道路である。そして、現在俺が走ろうとしている区間の制限速度は70km/hで、俺自身の現在の瞬間走行時速は100km/hを少し超える速度である。どう考えてもさっきの車達は制限速度を大きく超過したスピードで疾走していた。

だが、これが本来このゲームの醍醐味だった。不特定多数の集団で行う公道レース。俺も嘗ては色々な車に乗って、こうした暴走行為に参加して、環状高速道路を馬鹿みたいに何周も周回していたものである。

久しぶりにCL1をグルグル回ってみようか……。そんな事を考えながら車を左へ寄せて追越車線に入ると、気合を込めてアクセルを踏み直して車を加速させた。

ルームミラーをチラリと横目で流し見ると、前照灯とフォグランプの4つの白い明かりが後方から追い駆けて来るのが目に留まった。

どうやら前の3台の他にも走り屋が屯しているようだ。俺だってタクシー運転手の前に走り屋である、追い越せるものなら追い越してみるのがいい。俺はテンションを揚げる為にインパネのセンターコンソールにあるオーディオのボリュームの摘みを回して音量を上げると、鼻歌を歌いながら他の車の間をすり抜けるように車線変更を繰り返し、後ろの連中を振り切るように、そして前を走っているだろう先程の3台を追い掛けるように180km/h近いスピードで車を走らせた。

暫く走っていると、さつき最後に追い抜いて行った車の物らしいテールランプの赤い光が前方に見えてきた。ブレーキを踏んでいるのか、横に2つ並んだその光は強くなったり弱くなったりしている。どんどん近付いて行くに連れて、段々と前を走行する車の色と車種が判別出来るようになってきた。白いFC3SのRX-7の後期型だった。

前を走るFCの後ろに続きながら、だからあんな変な轟音を上げていたのか、と俺は納得していた。目を凝らしてよく見ると、FCの前方の左から3本目の走行車線を暴走しているのは、『走るラブホテル』とも称されたバブルの申し子、マツダのロータリーエンジンの歴史上唯一の3ロータリーエンジンを搭載したユーノス・コスモである。金色に輝くゴールドメタリックに塗装された重厚な車体を、有り余る馬力を駆使して疾駆させていた。

更にコスモのすぐ前を激走しているのは、何故か尾灯を青色の灯火に変更している黄色のFD3SのRX-7の前期型である。本来であれば尾灯は赤色の灯火でないといけないだろうと突っ込まなければならぬのだが、それすら野暮ったく思える程格好良いと俺は思ってしまった。

ふとルームミラーで後方を視認した時、またまた俺は驚いた。さつきヘッドライトの光くらいしか分からなかった後続車が、もう十

分車種が判断出来るくらい近くまで迫っていた。しかも現行型のブルーマイカ（マイカとは、塗料の中に雲母を混ぜる事でキラキラと輝かせた色の事。因みにメタリックは、塗料に鉄粉を混ぜる事でさらにキラキラと輝かせた色の事。）のRX-8である。前を走る3車と違ってNAエンジンである為に、少し苦しそうに見えるが、ロータリー車特有のキン…という甲高い、まるで航空機のそのようなエンジン音をかなり立てながら頑張っている掛けている。

今夜はロータリー車だけで構成されたチームが走行会を催しているのか、前後を往年の名車達に囲まれて、俺はワクワクと子供の様に興奮してならなかった。

暫くの間、この4台の車達と並走しながら夜中の都市高速の環状道路を何周か回っていたが、やがて4台は左ウインカーを焚きつつ本線から離脱していき、帝都高速5号線（湾岸線）へ入るJCTの分岐線の方に走り去って行った。

左ウインカーを点滅しながら左から二番目のレーンへ車線変更し、ブレーキを掛けて120km/hまで減速すると、そろそろ家に帰ろうか、と思いながら俺も3号線とのJCTへ向かって車を走らせた。

CL1から3号線に入ってから、前を走る車を次々と追い抜きながら俺は順調に追越車線を160km/h近いスピードで巡航していた。本来は追い越しや追い抜きが終わったらすぐに左側の走行車線へ戻らなければいけないのだが、走行車線を走る車の流れが遅い為に、車線変更するタイミングを逸したまま、何時までも追越車線を走り続けるような形になってしまっていた。

そうやって走行車線を走っている車の中に、1台だけ妙な雰囲気纏った車、一見するとフルスモークのVIPカーの様な見えなくもないが、営業車が履くような安物の16インチの鉄チンホイー

ルの細いタイヤとアルミ製のホイールキャップを装着し、車高を落とす訳でもなく、寧ろ屋根の真ん中辺りが不恰好に少しだけ膨らんでいる白いY31セドリック・セダンのブROOMがいる事に気が付いたが、特に意識する事もなしに俺は他の車と同様にそいつを追い抜いて行った。

すると、そいつは俺の車が前に出た途端、急に加速を開始すると追越車線へ車線変更をし、そのまま俺を追い掛けるように10m程の距離を保ちながら後ろにぴったりと張り付いて来た。

そして1分半程そんな風に走っていた時、突然セドリック・セダンは3度もパッシングをしてきたので、ルームミラーに反射する上向きの前照灯の明かりに目が眩んだ俺は、怒りの余り思わずルームミラーで後方を確認した。てっきり後ろの車が俺の車を煽っていると思い込んでしまったのである。

だが、セドリックは俺の予想に反し、屋根から反転式の赤いパトランプを跳ね上げて赤く明滅させ、バンパーのエアロの部分に仕込まれた2つの前方警告灯のリトラクタブル式の力バーを取って赤く点滅させると、ウ……………！と凄まじいサイレンを

鳴らしつつ俺の車を追跡してきた。

「前を走る銀色のクラウンのタクシーの運転手さん！銀色のクラウンのタクシーの運転手さん！スピードの出し過ぎです。至急、減速して左の車線に移りなさい。繰り返す、『初奈島330 あ 3361』の車の運転手、抵抗しても無駄だ！すぐにスピードを落とし左へ車線変更しなさい！」

どうりで変な車だと思った筈だ。覆面パトカーじゃないか。俺はトホホと悲嘆に暮れながら、警告通り左へ車線変更し、降伏する意思を示す為にハザードランプを点滅させるとブレーキを踏んで静かに減速していった。そして覆面パトカーは、助手席の窓を全開にして窓から左腕を伸ばすと、着いて来いと誘導するように後ろから前へ振るジェスチャーを繰り返し、俺の車を追い越した。覆面パトカ

ーを後ろから見ると、後ろの窓の後部座席のヘッドレスト後方に備え付けられた電光掲示板が、黄色い文字で『パトカーに』と『続け！』と書かれた2つの表示を交互に点灯させていた。

結局、誘導されるに任せて緊急退避用に設けられた路側帯の出っ張った部分に車を止めると、助手席から降りて来た、警察官とも兵士とも区別がつかない紺色の制服に黒い防弾チョッキを羽織って白いヘルメットを被った屈強な男に導かれるまま、左側に俺を連れて来た男、前方に同じ様な格好をしたもう一人の男に囲まれて、俺はパトカーの後部座席の右側に座らされた。

彼らは、自分達はこの地区の保安を警察より委任された自警団に所属する保安官と副保安官だ、と名乗ると俺を尋問した。

「免許証と、営業許可証を確認させて下さい。」

「はい。」

隣にいる副保安官の命令に従って、俺は素直に自分の手首の立体映写機を作動させて免許証と営業許可証の確認ウィンドウを表示させると、彼に向かって提示した。

「高津 新太郎さん……ね。分かっていると思いますが、あなたには速度超過と通行区分違反により切符を切らせて貰います。」

「はあ……。」

俺は自分が情けなくて溜息を吐いた。

「はあ……、じゃないですよ。本当に解っているんですか？あなたの走っていたこの道路の制限速度は時速100キロ、我々の計測だとあなたの車の速度は160キロ。60キロの超過です。何をそんなに急いで居られたのですか？」

「そのう……、出来るだけ早く家に帰りたい物ですから……。」

副保安官に厳しく問い詰められて、咄嗟に俺はこう答えた。半分は本心、半分は出任せである。だが、目の前の保安官達は厳しい表情を崩そうとはしなかった。

「早く帰りがかった、ですか……。でもね、高津さん。飛ばそうが飛ばさせまいが、自宅は逃げないんですよ。急いで帰宅する必要があったなんて言い訳にはなりませんよ。」

「はあ、済みません。家で女房が待っているものですから、つい……。」

「奥さんが待つているなら、尚更制限速度を守って安全運転をしなきゃ駄目じゃないですか！もしあなたが事故を起こして帰らぬ人になったりしたら奥さんがどんな気持ちになるか考えた事があるんですか？事故を起こせば、あなただけの問題で済むと云う訳では決まてないのですよ。ましてタクシーの運転手をしているのなら、ああいう運転をする運転手がどういう末路を辿るのか、身に染みて解っている筈でしょう？」

「はあ……。本当に済みません。反省しています……。」

運転席の保安官に厳しく怒られて、思わず俺はシュンツと縮こまった。

そんな俺の様子を見ながら保安官は副保安官と互いに顔を見合わせる、俺に向かってこういった。

「まあ、今回は初犯のようですし、大目に見て上げましょう。制限速度違反10点と通行区分違反2点、計12点を減点。罰金千Gの赤切符を切らせて頂きます。」

「え……。？赤切符？青切符じゃないんですか？」

「赤切符です。」

保安官に断言されて、俺は軽く絶望の淵に叩き落された様な気分がした。

反則金をその場で払えば終了となる青切符とは違い、罰金という名目の赤切符は刑事罰扱いになり、簡易裁判所へ出向いて支払いの手続きをしなければならぬ上に、1年間無事故無違反を貫いたら消失するとはいえ、前科歴が付くから俺自身の経歴にも傷が付く事になる。しかも支払いを拒否すれば督促状が舞い込む程度の青切符

と異なり、罰金を払う事を拒むと問答無用で刑務所で一月程お世話になる羽目になる。

さらに最悪な事に、この罰金の所為で本日の稼ぎの殆どが消えてしまった！帰ってから玉緒に何て弁解すればいいんだ？俺は気が進まなかったが、赤切符にサインをして受け取ると、やっと解放された。

重い足を引き摺りながら我が家へ帰還する。これから直面する事態を想像して憂鬱になりつつ玄関のドアを開けると、軽快に鼻歌を歌いながら楽しそうにステップを踏んで夕食の用意をしている玉緒の姿が視界に飛び込んできたので、予想に反して彼女の機嫌が頗る良い事に、却って俺は少なからず戸惑った。

何だかおかしいぞ、と不審に思う俺の目に、昨日玉緒にせがまれて購入した真新しい冷蔵庫が目に入った。そうだ、今日は新しい冷蔵庫と洗濯機が家に来る日だった。ははあん、だから妙に機嫌が良いのだな、と俺は推測した。そして、ひよっとしたら上手く誤魔化せるかもしれないと邪な考えが頭の中にちらついた。

取り敢えず玄関の上り框に上がり込み、

「ただいま。」

と言うと、玉緒が俺の方へ振り返った。そして、

「お帰りなさい、あなた。」

と言いながら、彼女は俺に抱きついてきた。

「おいおい、どうした？止めてくれ、照れるだろ。」

「えへへ、だって嬉しいんだもの。」

冷蔵庫と洗濯機如きでここまで喜べるものなのか、困惑している此方の事などお構いなしとでも云うように、玉緒はこれ以上にならない位密着してきた。

これは、ひよっとすると本当に有耶無耶に出来るかもしれない。

そんな事を考えながら玉緒と共に夕食を摂っていると、

「そう言えば、あなた。今日の稼ぎはどうでしたの？」

と、突然玉緒が立ち上がって、床の上に置かれたノートパソコンを立ち上げて本日の収支をチェックし始めた。

やばい！と思って慌てて適当に言い繕うと口を開けかけたが、最早手遅れ、先程まで天使の様に微笑んでいた玉緒の表情が、まるで亡者の様にこの世の者とは思えぬ程おっかない顔に変化する過程を刻々と、額に冷や汗を掻いてゴクリと息を呑み込みながら俺はじつと見つめていた。

「…… たった、これだけ？」

ピンと張り詰めた湖水の水面の様に静謐な調子で呟きながら、玉緒はゆっくりと俺の方へ振り向いた。その顔は静かに微笑んでいたが、目だけは据えて獲物を狙う蛇の様に俺を睨みつけていた。

「一日中働いて。 たったの154Gって、どういう事なのかしら？」

「す、すまん……。 実は帰りに交通機動隊のパトカーに捕まっちゃって……。 千Gの罰金を取られてしまった。 本当に、済まないと思う。」

「……………」

「……………」

嫌な沈黙が流れていた。玉緒の震える肩から湧き上がるとす黒い怒気によって部屋中の空気が澱んで行くのを俺はヒシヒシと感じた。もうやばいとかそういうレベルの問題ではない。冗談抜きでこのまま彼女に殺されるかもしれない。本気で命の危機を覚えた。

もう駄目だ……。 と全てを諦め掛けた刹那、突如俺の手首の機械にギルドから着信が入ったので、俺はこれ幸いと藁をも掴む思いで電話を取った。

「もしもし、こちら高津タクシーでございます。」

「あ、もしもし、こちら個人タクシー連合の新見と申します。 お疲

れ様です。」

相手のオペレーターは聞きなれない声で若い男のようだった。新入りだろうか？

「こちらこそお世話になっております。……それで、え　　っと、
どういう用件でしょうか？」

「はい、先程古瀬様というお客様から、高津タクシーにハイヤーを出して欲しいとの御指名がありました。」

「は……ハイヤーですか？」

「はい。明日朝9時に世戸ヶ谷区川本町11の2の38番地、電話番号0010の9887の205、古瀬氏の御自宅前に来て貰いたい。との事です。」

「すみません。もう一度繰り返して頂けませんか？」

「はい、わかりました……。」

俺はメモを取りながら、新見というオペレーターから更に詳しい仕事の内容を聞き出した。

朝9時に古瀬邸に出向き、彼の指示に従って送迎する。期間は丸一日。送迎に関しての車種の指定は特になし。ハイヤーは距離別料金は設定されず全て時間料金で換算されるから、1日チャーターした場合、24時間×60分×2×4G＝11520Gに200Gの配車料金（帰りの駄賃も含む）が掛かるから、締めて11720Gを得る事が出来る計算になる。まあ、実際には精々10時間までが関の山だろうが、それでも相当の金額を荒稼ぎする事が出来る。

図らずも汚名返上、名誉挽回の大チャンスが訪れた。

「玉緒、喜べ！明日朝一からでかい仕事が舞い込んだぞ！」

「あ！あなた、何処へ行きますの？まだ話は終わっていませんわ！
！」

善は急げ、悪は延ばせ。俺は玉緒に背を向けると、明日の車を準備する為に俺はガレージへ向かって逃げ出し……いや、飛び出して

行
っ
た。
。

第六話：メルセデス！メルセデス！メルセデス・ベンツ！

>> 新太郎

早朝、早めの朝食を済まし、何着かある仕事着の1着である真っ黒な国産ブランドのスーツを着て白い軍手を詰め、仮面ライダーのショッカー軍団のそれを彷彿とさせる翼を広げた鷲を象った個人タクシー連合のシンボルマークの真鍮製のバッチが取り付けられた運転士の制帽を頭の上にきちんと被った俺は、地下の駐車場へ下りてガレージの前に立つと、3・2LV6エンジンを3・5Lまでボアアップしてスーパーチャージャーを取り付けた高津タクシー仕様のメルセデス・ベンツのEクラスのW210後期型のE320を引っ張り出し、ボンネットフードを開くと、エンジンルームの簡易点検を行った。

ウインドウ・ウォッシャー液良し、ラジエーターのクーラント液、ブレーキオイル、エンジンオイルの量も確認、液漏れもしていない。バッテリー、マフラー等のエンジン周りの吸排気系やベルトも異常なし。一通りチェックすると、俺はボンネットフードを閉め、きちんとロックするまで力を込めて抑えつけると、タイヤが目減りしていないか、車体や車内に目立った汚れ等がないか目視で確認した。

そして左側の助手席のドアを開けて車内に半身乗り込み、ダッシュボードのグローブボックスに填めていた軍手を放り込んで閉じると、ドアを閉じて右側の運転席に回り込んで乗車し、スーツのポケットに突っ込んでいた運転手用の白手袋を嵌め、左手首の機械を操作して車にタクシーメーターだけを取り付けた。

これだけで、普段タクシーと使っている車両が銀色のハイヤー車両に早変わりする。いや、正確に言えばハイヤー用の車を普段はタクシーとして使っているのだが……。因みにこう云う車を巷ではハイグレードタクシーと言うらしいが、俺にとってはどうでもいい事

だ。

兎に角、今日一日のでかい山を無事に終わらせる、その事だけが俺の頭を支配していた。

深呼吸をしてエンジンを掛ける、特に重要視しなければいけない警告灯が点灯していないかメーターを確認する。特に無かったが給油ランプが点灯していた。高速に乗る前に24時間営業している中央バイパス沿いにあるスタンドに立ち寄って給油しよう。

俺は発車措置をすると、ロービームとフォグランプを点灯し、左ウインカーを点滅させて左へステアリングを切りながら車を発進させた。

どんよりとした青紫色に染まった早朝の空の下を白いヘッドライトと青白のフォグランプを点灯した銀色の高級セダンで駆け抜けて行く。早朝という事でまだ外が薄暗い上に人や車の通りも少ないので、俺は前照灯を下向きから上向きのハイビームに切り替えて走行していた。

だが、それでも車の通りはあるもので、道の向こうから対向車のライトが近付いて来る度にヘッドライトをロービームに落とし、擦れ違い終わると再びライトを上向きに戻した。

そんな感じでいつも通る街の中心部へ向かう峠道に差し掛かると、前方に白い2代目の日野・セレガが、巨体を振り回しながら力強く坂道を登っているのに追い着いたので、俺は前照灯をロービームに落としてバスの後ろに続いた。

バスは安全に狭い峠道の急カーブを通過する為に、センターラインを少しだけ越えながらも、同じプロドライバーとして見ても、上手いなあ、と舌を巻くようなドライビングテクニックを駆使して山岳路を駆け抜けていた。

突然、セレガがブレーキランプを点灯してハザードランプを焚きながら目一杯左に寄せて減速した。

ああ、対向車が来るのだな。そう思っただけで俺も倣って車を路肩の方に寄せてスピードを落とし、ハザードランプを点滅させた。

やがて右カーブの向こうから自動車の前照灯の黄白色の光が二組、此方に向かって走って来るのが見えた。近付いてきたのは白いT170系コロナの後期型のセダンとシルバーメタリックのB13サニ―の後期型だった。

2台ともハザードランプを焚きながら、バスと俺の車と擦れ違う瞬間、挨拶がわりに一回パッシングをしたので、俺も対向車の2台に向かって、それぞれ『お早う!』という意味を込めて一度ずつパッシングをした。

ハザードを切って暫く走っていると、また前方を走る高速バスがハザードを点滅させて制動灯を点灯した。

なんだ、こんな早朝にこんな道でまた対向車が来るのか?と首を捻りつつも、再び俺はハザードランプのスイッチを押すと、ブレーキペダルに足を掛けて踏み込んだ。

だが、何か様子がおかしい。下りの左カーブだとはいえ、バスは白い破線のセンターラインを大きく越えて対向車線を走りだした。

意味が解らず混乱したまま、バスと俺の車はそのまま停止した。

よく見ると、ハザードを消したセレガの前にも白いY11ADバンの中期型が制動灯を点灯させたまま停車していた。さらに、その前の左側の路肩には180系クラウン後期のロイヤルサルーンの白黒パトカーが、ブーメランみたいな4灯式のパトランプを明滅させ、ハザードランプを点滅させながら停まっていた。

パトカーの後席後ろのリアウィンドウに装着された電光掲示板に何か文字が流れている。

『ただ今事故処理中!通行規制注意!』

よくよく目を凝らすと、パトカーの前の方に制服を警官が赤く明

滅する誘導灯を振って交通整理をしており、他にも何人かの警官や保安官が何か作業をしているようだった。

さっきの対向車のパッシングは挨拶じゃなくて、これを教える為だったのか！そんな感慨に耽っていると、ウ

ウウウウ……ピ　　ポ　　ピ　　ポ　　……と鳴

り響く救急車のサイレンが聞こえ、そして遠ざかって行った。

それを合図として交通規制が一時的に緩和されたのか、前に並んだ車の制動灯が尾灯と入れ替わり、ゆっくりとだが順番に前に進み始めた。

バスが前進し始めたので、釣られて俺もハザード切ってブレーキを緩め、惰性走行し始めた。

ゼロクラウンのパトカーの傍を通り過ぎると、その前に同じ様にハザードを点けたR34スカイラインの後期型の白黒パトカーが停車していた。そして、続く急な右カーブの頂点の直近の付近のアウト側の崖に激突して停止した、ボンネットがペツシャンコに潰れ、窓ガラスやライトレンズの殆どが粉々に砕け散り、車全体がくの字に折れ曲がって普通の車ならセンターピラーがあるとこで車体が真二つになってしまった黒い後期型U12ブルーバードのピラーレスハードトップが、辺り一帯にエンジン等の部品の破片やオイルや血痕を撒き散らしつつ凄惨な姿を晒していた。

恐らく100km/h超のスピードで右カーブに特攻して、案の定曲がりきる事が出来ずに正面の崖に突っ込んだ……、というところだろうか。車両火災を起こさなかったのが不幸中の幸いだろう。だとしても、その時のブルーバードの運転手の恐怖を想像しただけで、俺は背筋が縮み上がった。

あの車の運転手は大丈夫だろうか……。救急車が走り去って行ったという事は、今の時点では息が合って懸命の救命作業が行われているのだろう。しかしながら、恐らく助からないだろうな、と思っ

た。自分も車を運転するドライバーである手前、どの位壊れた事故ならどんな被害に遭うか程度の大体の予想は立てる事は出来る。少なくとも俺は、もしも自分があの黒い車の運転手だったとしたら、とてもじゃないが助かる気がしなかった。脳挫傷や全身を強く打って即死するか、良いところで意識不明の重態後死亡というところだろう。俺は心の中で名も知らぬ運転手の冥福を祈った。

今日は自分とは無関係の赤の他人だった。だが、次は自分の番かも知れない。俺はステアリングホイールを握り直すと、絶対に事故を起こさない、と決意を新たにしながら車を発進させた。無機質に煌々と輝く、レスキュー隊の赤い4代目フォワードの消防車とギヤラン・フォルティスの白黒パトカー、RAFの青い6代目エルフのキャリアカーの赤いパトランプの光が目には沁みて胸が苦しくなった。

峠道を降りて中央バイパスとの交差点で停止した時、ピ

ツと唐突に車内に警告音が響いた。どうやら本格的にガス欠になりつつあるらしい。

信号が青に変わり、左ウインカーを出しながらハンドルを切って左折すると、自動車専用道には入らずに側道を進む。そうして50m程進んだ道沿いにある、煌々と輝く白い水銀灯の明かりに照らされた、10台位が一度に給油出来る位大きなガソリンスタンドに滑り込んだ。

この車は車の右側に給油口が設けられているから、俺は車が給油装置の左側に来るように停車した。最近のガソリンスタンドの給油機のホースは凄く長いので、ぶっちゃけどちら側に止めても差し支えないのだが、たまに短くて反対側に止めるとホースが届かない場合があるので、俺はいつも車の給油口の位置に合わせて止める場所を決めている。

因みに日産やスバルや近年の英国車の様な例外こそあるが、給油口は大体その車を造ったメーカーがある国のハンドルとは逆側にあ

る場合が多い。（欧州・北米なら右側、国産なら日産とスバル以外は左側に給油口がある事が多い。）

閑話休題。兎に角俺は給油をする為にガソリンスタンドに寄った。車が入って来た事に気付いたのだろう。背中まで届きそうなストリートロングの茶髪をピンクのゴム輪で括ってポニーテイルにし、面長な顔の目がパツチリとした二重で円な瞳をした若くて可愛い女の子の店員が俺の車まで走ってきたのが見えたので、俺はパワーウインドウのスイッチを一気に押して運転席の窓を全開にした。

「いらっしやいませ。何に致しましょうか？」

「ハイオク満タン！それと、これから長時間高速に乗る可能性があるから、空気圧見てくれる？」

「かしこまりました。宜しければオイルチェックも致しましょうか？」

「ああ、それは出かける前に確認したからいいや。」

「そうですか……。窓の方は如何でしょうか？」

「ああ、お願い。」

そういうと、俺はガソリンを入れる為にシートとドアの隙間に手をつ込んで給油口のリッドを開けるフックに手を掛けた……。心算だった。

「はい、トランク開きました！」

「ごめん！間違えた！」

そう叫んでから今度はきちんと給油口の蓋を開くフックを引くと、俺は慌てて車から降りて後ろに回り込んでトランクリッドを閉め、また車内へ戻った。

パワーウィンドウを操作して窓を全開し、給油が終わるまでの間リラックスをして待っていると、さっきの店員の女の子が白い布巾と霧吹きを持って俺の車へやって来た。

フロントガラスに霧吹きに入った洗剤を吹き掛け、布巾で汚れご

と拭き取る。セダンには長いボンネットという物があるから、フロントガラスの中央部を磨こうと思ったら、ガラスを固定するピラーの所から腕を伸ばし、体がガラスに着く位まで身を乗り出さなければならぬ。俺は店員のお姉ちゃんの大きな胸がガラスに当たってボンボヨンと潰れて変形する様子を車内からまじまじと見つめつつ目を肥やした。

タイヤの空気圧のチェックも終えて、燃料計の針もFULLを指した。

「お待たせしましたハイオク80Lで、1440G戴きます。」

「はい。じゃあ、これで。」

と言つて、俺は店員に左腕を突き出した。

会計を済ませると、俺は運転席の窓を閉め、発車措置をすると左ウインカーを焚きながら車を前進させ、ステアリングを一端右に切つてから歩道の手前で左に切り返して停車した。目の前に立ったガソリンスタンドの店員の女の子が、抑え付けるように左の掌を此方に向けながら、安全に俺の車を車道へ出す為に右から来る車の流れを見つめていた。

やがて、右から走つて来る側道の車の流れが途切れた。

「はい、オッケーです。どうぞ。 。ありがとうございました
！」

平身低頭にお辞儀する店員に見送られながら俺はアクセルを踏み込むと左折して側道に合流した。

バイパスの専用道に移行する為、車をキックバックさせて急加速させる。右ウインカーを焚きながら加速車線に車線変更し、右後方から来る車の流れをミラーと目視で視認しつつ機会を窺う。

すると、本線の走行車線を走行し、直ぐ後ろに迫っていたシルバーメタリックのいすゞ・ギガの10t有蓋車が、左ウインカーを点

減して減速しながら1回だけパッシングし、

『入れてあげるよ！どうぞ！』

と、合図を送ってくれたので、俺は急いで本線へ合流し、

『助かった！ありがとう。マジ感謝！』

と、ハザードランプを3発点滅させて後ろのトラックにサンキューハザードを送りながらスピードを上げた。

160km/hで東の方へ直走り、初奈島大橋を渡ろうとする頃には日の出を迎え、前方の空の下の方が赤く輝き出し、藍色の早朝の夜空と美しいコントラストを奏で、やがて白く煌く太陽が橋の向こうに広がる本土の山稜から顔を覗かせる。

薄明かりにぼんやりと照らされて赤味掛かった橙色に染まる大地。そこを白い光や赤い灯りを灯した自動車が空を切って駆け抜けて行く。殆どの車は惰性でヘッドライトを灯したままでいるが、幾台かの車はもう前照灯を落とし、ポジションランプだけとか、フォグランプとスモールランプの組み合わせ、補助前照灯のみの状態とかで走行している。

俺はメルセデスのロービームとフォグランプを点けたまま朝焼けの中を帝都に向けて一直線に走り抜けた。

本土に入って陸南道に合流し、山越え上り坂に差し掛かる頃には、日は完全に昇り、辺り一面うつすらと董色に霞む位で地面に街灯の光が映らない程明るくなったので、俺は車幅灯だけ残してヘッドライトを完全に切った。前を走る多くの車も、トラックやタクシーやオートバイ等の一部の車両を除けば、次々と尾灯を消していた。

俺は前を走行するトラックやバスや軽自動車をどんどん追い抜きながら追越車線を220km/hのスピードで飛ばしていた。

走行車線を200km/h弱のスピードで走る200系ハイエースのロングバンの前期型を追い抜こうと接近しつつあった時、不意にルームミラーで後ろを確認すると、俺の車の後ろからかなりの速

さで距離を縮めて来る車影がある事に俺は気が付いた。

フェラーリだ！フェラーリ・テストロッサだ！子供の時実車を目の当たりした時から俺を虜にした奴らの内の1台、憧れの真っ赤なスーパーカーが俺の車を追走している！朝日を前方に浴びて真紅の車体を輝かせながら跳ね馬が追い駆けて来る。

俺は迷った。このままハイエースを追い抜いてから走行車線に車線変更するか、それとも一先ず減速してハイエースの後ろに着いて今ここでテストロッサに進路を譲るか、どうしたら良いだろう？

その時、後ろのテストロッサが中央分離帯に寄って右ウインカーを数発点滅させながら、リトラクタブルライトをパカッと開けてライトを点灯してパッシングし、また閉める動作をするのが運転席側のドアミラー越しに見えたので、俺は今この瞬間に譲ってテストロッサに先に行つて貰う事に決めた。（一番右ノ左側の車線での右ノ左ウインカーは、前を走る車に対しては『邪魔です。退いて下さい。』、後続する車に対しては『対向車、または障害物がある等の理由で、今ここで私を追い越すのは大変危険です。』という意味がある。）

俺は軽くブレーキを踏んでハイエースの速度に合わせると、左ウインカーを焚きつつ真ん中の車線へ退避すると、『進路を塞いですまない！』という意味を込めてハザードを3発だけ点滅してテストロッサにゴメンハザードを送った。

俺の車が前を走るハイエースの5m程離れた真後ろに移動するや否や、テストロッサは急加速してあつと言う間に坂道を駆け上がり見えなくなってしまった。

俺は右ウインカーを点けて追越車線に車線変更すると、アクセルを限界まで踏み込んでハイエースの前に出て左ウインカーを焚いて左車線に戻り。追い越しを終えてからハイエースに向かってサンキユーハザードを3発灯し、そのまま後続車を振り切った。

山を越えて後は帝都まで一直線に下って行くだけになった時、I
Cの合流を通過しようとする、左側の合流車線から1台のスポー
ツカー……ガンメタリックの日産・スカイラインGT-RのBNR
32の後期型が、急加速して他のトラックやバスの間をすり抜けな
がら強引に追越車線走る俺の車の前に割り込んで来た！

突然丸い赤い環が2つずつ連なった特徴的なテールランプを持つ
2ドアクーペの後ろ姿が目と鼻の先にいきなり現れたので、俺は反
射的にブレーキを踏んでGT-R32と距離を置くと、ステアリン
グホイールのホーンボタンを掌で思い切り力を込めて押し、パ

ン！と盛大にクラクションを鳴らしながらウ
インカーレバーを手前に引いてクラクションを作動させている間ず
っとハイビームを点灯してパッシングしていた。

「危ないだろ！何考えているんだ？あいつ。殺す気か？！」

届かない事など判りきっていたが、それでも俺はこそこそと逃亡
を図ったスカイラインに向かって怒鳴りつけずにはいられなかった。
俺はアクセルを限界までグツと踏み込むと、車体の後部を地面に
押し付ける様に沈み込ませながら急加速し、GT-Rを追走した。

どんどんスピードを上げていってスカイラインと距離を詰めて行
く。前を走る車の後部が視界一杯に広がる位、車間距離が1mを切
るまで急接近する。そして中央分離帯の方に車体を寄せ、俺はスカ
イラインへ向かって何度もパッシングし、パ　　パ　　パ
パ　　ン！と狂ったように何度もホーンボタンを押し

て煽りまくった。

初めこそ、俺の車に対抗するように、スピードが落ちない範囲で
ブレーキを連続で何度も踏んで制動灯を点滅させる事で威嚇してい
たが、やがて臆病風にでも吹かれたのか、スカイラインは左ウイン
カーを点滅させるとそそくさと左車線へ車線変更して視界から消え
て行った。俺はそのまま加速するとGT-R32を振り切るように
追い越した。

日もすっかり昇って頭上には青空が広がっているものの、まだ7時半である。予定より大分早く到着しそうだったので、時間を調整する為に、俺は帝都高速へ入る直前にあるSAに寄って休憩する事にした。

SAが近い事を示す、フォークとナイフのマークやWCの記号が書かれた緑色の標識が道路の左側に見えてきたと思ったら、やがてSAに入る分岐と減速車線が前方に現れた。

俺は左ウインカーを点けて3車線ある内の真ん中の車線から一番左のレーンに車線変更すると、そのまま減速車線へ入ってハザードランプを焚きつつスピードを落とし、SAの敷地内へ徐行で入って行った。

SAの駐車場の駐車スペースの一つに、ハンドルを軽く左に切りながら頭から斜めに進入して一番SAの施設のすぐ前の歩道に一番近い場所に車を止め、停車措置をしてエンジンを切ると、俺はシートベルトを外して車から降り、鍵を掛けるとSAの施設の建物の方へ向かって歩き出した。

白手袋を外して背広のポケットの中に突っ込むと、俺はトイレに入って用を足してから手を洗い、スラックスのポケットからハンカチを取り出して手を拭くと、軽食を摂る為にサービスエリアの建物内にある食堂へ向かった。

入り口で食券を購入して順番待ちの番号札を受け取り、番号を呼ばれてからカウンターで注文したラーメンを番号札も兼ねた食券と引換に手に入れると、俺は開いている席に腰を下ろして食べ始めた。そして食べ終わると、トイレの洗面所へ向かって口元と手を濯ぎ、ハンカチでよく拭いてから白手袋を填めると、俺は車に戻って運転席に乗り込み、発車措置をしてステアリングを右へ切りながら、ゆっくりと車を発進させた。

8時50分を少し過ぎた頃、やや早過ぎたかなと思いつつも、古

瀬邸の門前に車を寄せた俺は古瀬氏に電話を掛けた。

「……もしもし。」

腕に着けた機械から、半ば寝惚けたような声をした古瀬氏の声が聞こえてくる。

「もしもし、お早う御座います。本日御予約を頂きました、高津タクシーの高津です。少し早いですがお迎えに上がらせて頂きました。」

「ああ、ありがとう。だが、少し立て込んでいるから、ちょっと待っていておいて貰えないかな？」

「全然構いません。いつでも都合がいい時に出てきて下さい。」

9時を5分程過ぎた時、屋敷の門扉が開いて、極細の白いスリッドが縦に疎らに入った黒いスーツを見に纏った古瀬氏と、スカートの薄いグレーのスーツを着て大きな黒色のスーツケースを2つ持った華音嬢が現れたのが見えたので、俺は運転席のドアノブに手を掛けて車から下りると、トランクリッドを開いてラゲジルームに2つのスーツケースを収納し、リッドを閉めてから後部座席左側のドアを開け、二人を車内へ通した。そして、

「扉を閉めます。お手元にご注意下さい。」

と言って、ドアを閉めると自分も運転席に乗り込んだ。

「改めてお早う御座います。本日は高津タクシーを御利用頂きまして、誠に有難う御座います。」

「こちらこそ。よろしく頼むよ。」

「……ところで、今日はどちらまで参りましょうか？」

そう俺が問い掛けると、珍しく細長い二等辺三角形を二つくっつけたようなレンズの形をした、レンズの上側にナイロンの糸が張られた銀縁のハーフフレーム眼鏡を掛けた華音嬢がこう言った。

「まずは、親宿にある我が社の本社ビルまで行って頂いて、その次に会食を兼ねた取引先の要人の方々との会議がありますので青坂プリンスホテルまで、その後14時半までに灰田空港まで行って下

さい。」

「畏まりました。」

俺は右ウインカーを焚いて発車措置をすると、そつとアクセルを踏み込んだ。

13時半頃、俺は帝都の中心部、運営の本部や各業界団体の多くが本部事務所を構える地区の青坂という場所にある『青坂プリンスホテル』、通称『青プリ』という高級ホテルのエントランス前のロータリーの直ぐ目の前にあるタクシーとハイヤーの専用駐車場に停めた車の中で休憩を取りながら古瀬氏と華音嬢が出て来るのを待っていた。

流石この辺り随一の高級ホテルとだけあって、エントランス前のロータリーや駐車場で待機している車は、センチュリーとかプレジデント、歴代のメルセデスのEクラスやBMWの7シリーズやキャデラック、ロールスロイスにマイバッハと、名だたる高級車のハイヤーや、クラウンやフーガ等のハイグレードタクシーばかりが並んでいた。

今、このホテルの何処かで、大手企業の経営者や業界団体の幹部、運営のお偉方が集まって立食パーティーを兼ねた会合を開いているが、実際にはもうそろそろお開きになっているだろう筈なのにエントランスからは誰も出て来てはいない。

俺個人の都合から言えば、もうそろそろ古瀬氏と華音嬢が現れてくれた方が非常に嬉しくありがたかった。というのも、灰田国際空港に向かうのであれば、渋滞などのロスタイムも鑑みて、1時間位の余裕は欲しかったのだ。万に一つもタイムリミットまでに間に合わず、彼らが飛行機に乗り遅れた暁には、彼らの出張先である北東地方の仙谷という都市まで高速道を約10時間近くぶっ飛ばさなければならぬ。その分稼げるかもしれないが、コストと疲労度から考えると、とてもじゃないが割に合わない。

だから古瀬氏達が早く戻って来ないかなと指をくわえて待っていると、20分程経ってから彼らがホテルの中から此方へやって来るのが見えたので、俺はスロットに差し込まれたキーを回してエンジンを作動させると、ブレーキを踏みながらギアをDレンジに入れ、サイドブレーキを解除すると、エントランス前に車を回す為にW210を発進させた。

帝都高速C11から空港方面へ向かう帝都高速1号線へ入った時、後ろに座っている華音嬢が俺に向かって話し掛けて来た。

「間に合うでしょうか？」

正直間に合うかどうか定かではない程逼迫していたが、俺はアクセルを限界まで踏み込み、道路を走る車の間を縫うようにすり抜けながら250km/hオーバーのスピードで120km/h制限の片道3車線の自動車道を疾走した。

すると、目の前に、130km/hのスピードで道幅いっぱい並走する、青色のいすゞ・スーパークルーザー・プレステージの観光バス、白いR70ノアの前期型とシルバーマトリックのC26セレナの前期型が目の前に現れた。

正直追い越したいが、他の都市高速道路と同じ様に、この道路には路側帯が殆ど整備されて居らず、道路の左側は頑丈なガードレールと鉛色をした背の高い防音壁で覆われているので、路側帯を使って強引に追い越すと云う反則技が使えない。

どうしようかなあ、と当惑しつつバスの後ろに続くと、200m程先の道路の左側に、ちょっとした分離帯がある高速路線バス用のバス停が設けられている事に気が付いた。幸いバスも停まっていないうちに、目の前の二階建てバスも素通りする心算のようで減速する気配は見せていない。

俺はアクセルを調節して徐々にプレステージとの距離を詰め、ステアリングを左へ切ってバス停の中に侵入し、一気にアクセルを吹かして急加速すると、バス停からの加速車線から並走していた3台

の車の前に割り込むように本線へ合流した。

「えらく強引な事をしたねえ。あんな事をして良いのかい？」

と、愉快そうに笑いながら古瀬氏が真後ろから声を掛けて来た。

「駄目ですよ。」

俺も笑いながらそう答えると、空港へ向かって一路車を走らせた。

空港で二人を無事に降ろし、代金として2、840Gを受け取ると、俺は玉緒に向かって電話を掛けた。

「もしもし？あなた？丁度良かった！」

「あ、もしもし、玉緒か？新太郎だけど。今、無事に仕事を終えたから一旦家に帰るよ。悪いけれど、軽いもので構わないから昼飯を用意しておいてくれないか？」

「あ……。わ、わかりましたわ。……気を付けて帰って来て下さいね。」

「ああ？……分かった。」

玉緒が何か言い掛けたような感じがして引っ掛かったが、俺は右ウインカーを焚いて発車措置をすると、アクセルを踏み込んで帰路に着いた。

地下のガレージに車を停めてタクシメーターをインデックスへ回収し、上に上がって帰宅すると、玄関からキッチンへ続く扉がバタンツと大きな音を立てながら勢い良く開いたと思ったら、玉緒が俺に飛びついて来た。

吃驚して思わず、

「どうした？！」

と怒鳴ると、

「あなた、丁度良かった。聞いて欲しいお願いがありますの。さ、早く上がって、上がって。」

と、早口で捲し立てつつ彼女は俺の背広の袖を引っ張ってきた。

そのまま玉緒に引き摺られるように靴を脱いで家の中に入り込み、リビングに入ると、紫陽花の柄が入った薰色の品が良い着物に濃い紫色の兵児帯を締めた、透き通るような色白の肌に、腰まであるストレートロングな銀色に輝く白髪、まるでアルビノの如く真っ赤なルビーのような色をした瞳という、特徴的な容姿をしたほっそりとした美少女がテレビの前の卓袱台に座っていた。

俺が入ってくるのに気が付いたのか、彼女はすっと立ち上がると、「初めまして。わたくし、氷室 ヨネと申します。」

と、その幼ささえ感じる容姿には全くそぐわない、まるで老婆を思わせるようなやや囁かれた声を発した。

俺は物凄く戸惑いながらも、後ろに立っていた玉緒の方へ振り返り、

「え　　っと、この人……、何処のどういう方なんだ？」

と尋ねた。しかし、彼女は何も教えないどころか、

「取り敢えず、この人の話を聞いてあげて。」

と、ただそう言うばかりであった。

「はあ……。」

俺は深く溜息を吐くと、仕方が無いなと思いつつ目の前の白髪の少女の話を聞く事にした。

第七話：ヨネ婆さんの話／手掛かりのない人捜し

>> 新太郎

俺は部屋の卓袱台の傍まで移動すると、ヨネさんと真正面に相対する位置に胡座し、俺達二人の間を取り持つように、俺の左側に玉緒が正座した。

「さてと、氷室さん。あなたが置かれている状況を私が把握する為にも、先ずはあなたの身の上について出来るだけ詳しく話して頂けませんか？」

と、俺は静かに口火を切った。すると、ヨネさんは滔々と彼女の事について話し始めた。

先ず彼女は東京の某所に長男の家族と暮らしていた、後数年で喜寿を迎えるような未亡人だった。

息子の家族との関係は至極良好。本人も健康その物である上に、大分前に先立った旦那さんの遺産も十分過ぎる位あった事もあり、彼女は何一つ不満も不自由も無しに暮らしていたという。

特に長男夫婦の3人の子供の内、末娘の次女である香澄とはとても仲が良く、6人いる孫の中でも一番可愛がっていた女の子なのだという。

そんなヨネさんの生活が一変したのは3ヶ月前、そう……あの例のアップデートが行われた時の事だった。

当時17歳の女子高生だった香澄は、この糞運営が運営管理していた無料ネットゲームの1つに嵌まっており、学校やバイトから帰った後や夕飯が終わった後等に、自室に籠ってずっとパソコンと睨めっこしている事が屡々だったらしい。

そして、その日も学校から帰ると、彼女は自室に籠ってゲームに

興じ始めた。

やがて夕飯の時間になり、ヨネさんは香澄を呼ぶ為に2階にある彼女の自室に向かったそうである。

「階段を上がって、香澄や、もう夕御飯だからゲームなんか止めて降りて来なさい、って言いながら部屋の扉を開けたら……、蛻の殻になっていたんですから。そりゃあ、驚きますよ、あなた……。」

香澄本人どころか、彼女が愛用していた机やベッドのような物まで綺麗に消え去って物置の様になった部屋の惨状を目の当たりにして吃驚仰天したヨネさんは、急いで階段を下りて他の家族の元へ駆けつけた。

「ところがですよ、あなた。息子の伸一も嫁の真由子さんも、更には末っ子として可愛がっていた筈のあの娘の兄の和紀や姉の絢香まで、お祖母ちゃん、ウチには香澄っていう娘はいないよ、って云うのよ。信じられる？」

「は……、はあ……。」

家族の言い分に納得が出来ない彼女は、確かに香澄は存在した、と主張したが、彼女の健闘も虚しく、家族からけんもほろろに扱われ、剩えボケ認定まで食らい掛けるという散々な目にあっただけ。それでも諦めきれなかった彼女は、生前夫が愛用していたデスクトップパソコンを引っ張り出して起動させると、香澄が彼女に話していたうろ覚えのゲームの情報を元にこのライフに辿り着き、そのまま彼女もこの世界に取り込まれてしまったのだという。

「このアバラー？ですか……、本当は歳相応の物があれば宜しかったのですけれど……。まあ、仕方がないですわねえ。」

と、両手を広げて自分の姿を見下ろしながら、寂しそうに彼女は呟いた。どうやら白髪頭の老婆っぽいアバターを作ろうとしたらアルビノのようになってしまったらしい。そう言えば、この世界に来てから年寄り臭い資格好をした奴は見かけても、年寄りを見掛けた事が無い事に俺は今更ながら思い当たった。

そして現在、ヨネさんはこのアパートの1265室で運営から月3千Gの生活保護費を受給しながら一人暮らしをしているのだという。

「ゲームを開始する時にパートナーを選択しなかったのですか？ ワンルームとは云え、御年配の方の独居は何かと大変でしょうに？」

SNSゲームの開始時に、自分のアバターの他に作成する玉緒のようなPPCを設定するが、場合によっては『後から作成する』という欄にチェックを入れる事で作成せずに済ます事もあるというのを聞いた事があるが、PCの操作に不慣れそうなお婆さんが……、いや、不慣れだからこそチェックボックスにチェックをしてしまった事に気付けなかったのか……、PPCを作らずにこの世界で一人暮らしをしている事が意外に思った。

「いえいえ、大丈夫です。この世界に来てから何か体が楽になって……。絶対調過ぎて半世紀以上若返ったような感じが致しますわ。

ホホホホ……。」

ヨネさんはそう言って笑っていたが、本当に若返ったのだろう、と考察しつつ俺は黙って彼女の方を見つめていた。

そうして今日、ひよんな事から玉緒と知り合って仲良くなり、俺がタクシーの運転手をしている事を聞いて、俺に彼女の頼みを聞いてもらう為に訪ねて来たらしい。

「それで、ヨネさん。私に頼みたい事というのは、一体どういう物なのです？」

俺は、何となく見当が付いていたものの、念の為にヨネさんに訊いてみた。すると彼女は、強くはつきりとした口調でこう返事をした。

「香澄を……、わたくしの孫娘を捜し出すのを手伝って頂きたいのです。」

俺は卓袱台に両肘を付けて頭を抱えるとそのまま突っ伏した。正

直言って無理だと思った。

だって、名前位しか手掛かりが無いのである。現実世界なら本名と容姿が確定している時点で容易に本人の居場所を特定する事が出来るかも知れないが、名前どころか容姿、さらには性別さえ任意に変える事が出来るネット世界に於いては何の意味も為しはしない。その娘が使っていたハンドルネームやアバターの資格好、主に遊んでいたゲーム等が判れば、まだ搜索範囲を限定する事も可能だろうが、そういう情報が一切無いとなれば、はっきり言って素人にはどうしようもない。俺はあくまでも個人タクシー運転手であって、私立探偵でも興信所の人間でもない。出来る訳がない。

断ろう……。そう思ったが、ヨネさんの不安混じりの真剣な眼差しを目の当たりにして、面と向かってそういう事は俺には憚られた。「解りました。出来る限り力添えをしましょう。」

結局、気が付くと俺はヨネさんに向かってそう答えていた。つくづく俺ってお人好しだな、と我が事ながら俺は自分に呆れてしまった。

さて、人事を尽くして天命を待つにせよ、何処に手掛かりを求めたり助けを求めたりするかで事の結果が左右される訳であるが、その娘のユーザーネームや現在の風貌が不明である事と共に、彼女が免許証のようなそのユーザーの実名が書いてあるような身分証明書を持っているかどうかさえ定かではなく、事件性がある訳でもないので警察に搜索願を出すという事はちとやりにくい。そうかと言って俺には興信所や私立探偵のような、その手の民間企業の関係者である知り合い等いやしない。取り敢えず一番現実的だと思うのは、ギルドマスターに相談して、ギルドに加入している他の同業者にも協力を仰ぎ、どんなに瑣末で断片的な情報でも兎に角集められるだけ収集する事だった。

ならば善は急げ、早速ギルドマスターに事情を説明する為に彼のホットラインへ電話を掛けようとした時、ピンポーン！と玄関のインターフォンの電子チャイムの間延びした高い音が部屋の中に響き渡った。

「あら、何方かしら？」

立ち上がって部屋を後にした玉緒の背中を見送りながら、こんな時に誰だよ？空気読めよ、と内心愚痴りつつヨネさんと向かい合う。俺は煙草が嫌いな嫌煙厨だが、こういう時に煙草が吸えれば上手くこの場を対処する事位は出来るのだろうか等ともどかしい時間を過ごしていると、程なくして玉緒がリビングに引き返してきた。

「あなた！あなたに会いたいわって言っているお客様が来られているのだけれど……。」

俺に会いたい客だと？こんな時間に訪ねて来る知り合いなんて思い浮かばなかったので、不思議に思いながらも、

「すみません、少し席を外させて頂きます。」

と、ヨネさんに声を掛けると、俺は玄関に向かう為に立ち上がった。

玄関の三和土の所に、やや青味が掛かった薄目のモスグリーンのスーツを着て横に長い長方形のレンズの銀縁眼鏡を掛けた、髪を丁寧に七三分けにした面長の角張った顔をした若い男が直立して俺を待っていた。無論何処の誰とも判らぬ知らない男である。

その若い男は俺が来た事に気付くと、左手首の機械を差し出して、空中に社員証の映像を照射した。

「初めまして。私、株式会社モナー損保で勧誘員兼営業担当を承っております谷田部と申します。」

「はあ、どうも。此方で個人タクシー事業をしています、高津です。」

そう言って、俺も同じ様に手首の機械を作動させて営業許可証の映像を映し出し、相手の社員証の情報を電話帳の中に取り込んだ。

そして互いに自分の身分証明書の映像を消すと、谷田部という男

は手に持っていた茶色い革製の通勤鞆の中から、華麗なフルカラーのB3版の薄手のパンフレットを取り出して俺の前に差し出した。

「モナー損保総合自動車保険？」

俺はパンフレットの表題を読みながら目の前の勧誘員に尋ねた。

「はい、お客様の様に2台以上のお車をお持ちの方や毎日のように長距離を走っている個人タクシーや赤帽等の普通自動車を使用している個人事業主の方向けに、弊社がお勧めしている、弊社がお客様に提供している全ての自動車関連の保険サービスを盛り込んだ、お得な総合パックの商品です……。内容と致しましては、補償額無制限の対人補償、対物補償、自損補償、限度額2万Gまでのトラブル保障、無料で御利用して頂きますロードサービスや、弊社の関連会社のモナーリゾートが各地で運営致しております保養施設の特割利用等、諸々のサービスが付随しまして、しめて月々の掛金の方が……。」

と、俺の前でパンフレットを広げて鞆から取り出した電卓を叩きながら、男はペラペラと堰を切った水の如く話し始めた。

が、俺はそういう物に興味は無かったので、

「あの、ちよつといいかな……。」

と男の話を引き止めた。

「何か御質問がありますか？」

「いや、そうじゃなくてさ。ウチはそう云うの、いいから。」

「は？」

男は啞然としたように口を開けながら俺の方を見つめて固まっていた。

「いやさ、ウチはもう個人タクシー協同協会が提供している『個人タクシー総合任意保障共済』に加入しているから、今更他の任意保険と契約する心算は毛頭も無いよ。それに実を言つと、今ちよつと取り込んでいるんだ。悪いけれど、帰って貰えないかな。」

「いや、しかし……。弊社の保険の方が月々のお支払い額も安い上に、保障もサービスも充実しておりますよ？」

「でも、実のところ掛金込みで会員費を毎月支払っているから、任意保障を解約して御社と契約した所で此方が得をする訳では無いし、保障が充実していると言ったって、精々関連会社の保養施設の格安利用の権利が付いているかいけないかの違いだろ？ウチみたいな小さな自営業だと毎日が営業日みたいなものだから、正直言ってそういう所を利用する機会なんて殆ど無いよ。だからあまりメリットを感じないなあ。」

「そうですね……。それでは、パンフレットだけ置いておきますから、また何かお問い合わせがあれば、弊社のお客様相談室までお問い合わせ下さい。……失礼致します。」

この客は駄目だ、分が悪い、とても思ったのだろうか、そそくさと電卓を鞆にしまうと彼は我が家から出て行った。

俺は心の中で、頑張れ、と彼にエールらしき物を送ると、彼が置いて行ったパンフレットを引っ掴んでリビングへ戻った。

玉緒が俺に話し掛ける。

「あなた、どなたでしたの？」

「ん？……ああ、任意保険の勧誘だった。別に今の所から乗り換える心算は毛頭も無かったから、帰って貰ったよ。」

「……そうですね。」

床の上に胡座をかくと、今度こそ俺はギルドマスターの所へ電話を掛けた。

「……もしもし。」

「もしもし、マスターですか？高津です。いつもお世話になっていきます。」

「ああ、新ちゃん！どうしたんだ？急に電話なんて掛けてきて……。」

「ええ、実はマスターに聞いて頂きたい相談事がありまして……。」「相談事？」

俺はマスターに、事の顛末について簡単に説明し、香澄ちゃんを捜す為にギルドや他の事業者の力を貸して欲しいと懇願した。

「う〜〜ん、難しいな。」

珍しくマスターが渋っている。

「もつと他に手掛かりや足掛かりは無いの？ どういう格好のアバターだとか、拠点としていたゲームの場所とか……。自分とそっくりの容姿をしているとは限らないし、下手すると性別まで変わっている可能性だってあるのに、本名と現実世界での容姿だけじゃ、はっきり言って捜しようがないよ。協力して上げたいのは山々だけだね。」

「ですよね……。」

意識した訳では決してないが、俺とマスターは同時に溜息を吐いた。

「お忙しい所をすみませんでした。此方でもう少し手掛かりを探してみます。」

「力になれなくて申し訳ない。」

「いえ、こんな話を聞いてくれるだけで十分です。有難う御座いました。それでは失礼します。」

電話を切ると、不安そうに此方を窺っているヨネさんと玉緒の顔を交互に見つめた。

「すみません、ヨネさん。やはり、探すのはちょっと難しいみたいです。」

俺がそう言うと、

「そうですか、そうですよね……。」

と、ヨネさんは小さく声を漏らした。

「まあ、我武者羅でも行き当たりばったりでも、取り敢えずやるだけやってみましょう。ひょっとしたら何かの拍子にお孫さんの手掛かりが掴めないとも限らないのですから……。」

俺は彼女に向かつて、慰めとも励ましともつかない言葉を投げ掛ける事しか出来なかった。

その後、新しい客を乗せる度に、それとなく香澄ちゃんの行方を知っているかどうか質問したが、有用な糸口を見つける事は出来なかった。

そんなこんなでこの世界に来て1ヶ月が経過した。

お昼までに中遠距離客を5組み程乗せて結構な額を稼ぐ事が出来たので、俺は昼飯を摂る為に何時も使っている第一商店街の外れにあるラーメン屋にやって来ていた。

食事時の所為か、手狭なラーメン屋の店内は客と美味そうな飯の匂いでごった返していた。

そんな中、殆どタクシーやトラックのプロドライバーしかいなかったが、俺の意識はカウンターの1席に座っていた1人のタクシードライバーの男に集中した。初めてこの店にやって来た時に話し掛けてきたあの男である。三池という名前らしい。帝都無線に属している株式会社タニコー自動車に勤務しているそうである。

今、彼はカウンター席で数人の個人タクシーの事業者、何れも俺がここ最近で知り合うようになった他のギルドに所属している連中、に囲まれて何か熱心に議論をしているようだった。

俺が入店した事に気が付いた店主が、
「いらつしやいませ！」

と掛け声を上げると、それに気付いたのか、その話の輪の中に居た内の1人、藍色のブレザーに赤いネクタイを締めて薄いグレーのスラックスを穿き、黒髪をリーゼントの様に立ててちよび髭を生やした、逆台形のような顔立ちをした銀縁眼鏡の男、連盟所属の運転手の葛西が俺の方に振り向き、

「お、高津はん！ええところに來おつたなあ！」

と、少し脂臭いダミ声で話し掛けてきた。

何の話か、と思いつつ彼等の右側に空いていたカウンター席に腰を掛けると、俺の左隣、三池の右隣にいた薄空色のシャツを着たスキンヘッドの丸顔の男、同盟の小野が、

「聞いてよ、高津さん。こいつ独立する気があるらしいんだよ！」

と、ガハハと少し品のない笑い声を上げながら三池の右肩を指した。「独立？三池君。君、法人を辞めて個人タクシーへ転向するつもりなのかい？」

まあ従来の、まるで親の敵を見るような目で個人タクシー業者を見ているような僻んだ性格を三池がしている事を、図らずも知ってしまったている身としては、別段不思議とも意外とも思わなかったが、その場の適切な応答として、俺は一応彼に聞き返して確認した。

すると、三池の代わりに葛西と小野、更に葛西の左隣に居た丸いレンズの黒縁メガネを掛けて四角く角張った顔立ちをしたYMAの遠野という男が返答した。

「そう！それで、移籍するなら何処のギルドがいいか、なんて言うからさ。」

「どのギルドが一番良いのか。」

「僕等が説明している訳だよ。」

「ふーん。」

「だから、高津さんも同じ個タク乗りとしてこいつの相談に乗ってやってよ。」

そう小野に話を振られたので、
「構いませんよ。でも、三池君。君、どんなギルドに加入したいんだ？」

と、俺は三池に向かって尋ねた。

すると彼は、ただでさえ景気が悪そうな陰のある顔を更に渋く歪ませつつ、

「それなんですよね……。今一何処が良いのか分からなくて……。」

「まあねえ……、ギルドっていつでも全国規模の大きな奴から数人しか所属していない地元密着型の小さな所までピンきりだからね……。」

「何処かいいところないですかね……。」

あまり悩んでいるような感じには聞こえない彼の乾いた声に少しだけ引つかりながらも、

「そうだなあ……強いて言うなら……。」

と俺は口を開いた。

「ウチだな！」

まるで斉唱するように丁度いいタイミングで互いの声がピッタシと重なった事に妙な感動を覚えつつも、俺と小野と葛西と遠野は不覚にも顔を見合わせて数瞬の間開いた口が塞がらなかった。

普通ならちよつとした歓声を上げて少々の感慨に耽ってしまうようなそんな場面も、そこは競合する同業他団体の間柄である。一気に険悪な気配が辺りを取り巻き始めた。

「高津さん、冗談を言っちゃいけませんで！移籍するなら絶対ウチのギルドの方が良いですって！」

「またまた葛西さん御冗談を……。あなたの所みたいに車両から営業範囲に到るまで、規範でギチギチに縛り上げてくるようなギルドの何処がいいんですか。入るのなら規範も緩くて選択肢の幅が広い初心者にも優しいウチみたいなギルドでしょう。常識的に考えて……。」

「何が初心者に優しいねん！初心者もベテランも関係なくお互いに共喰いをしているような無法者しか居らん癖によく言うわ。ウチだったら少なくとも客を取られて食いつぱぐれる、って云う事はあらへんで！」

「そんな事を言ったらウチだってそうだよ。連合程じゃないが、連盟と違って車の改造だって認められているしね！」

「同盟は専用色がダサイ上に塗装を特注しないと行けないのがなあ……。」

「おい、三池！ダサいつて言うな！それに塗装を特注しないといけないのは連盟や『YMA』だって同じだろ！」

「まあ、ウチなら格好良いから女の子にモテモテだけだね……。」

「YMAは大手4団体の中で断トツに規模が小さいじゃないですか……。そこがちよつとなあ……。」

「でも、規模だけで考えるなら必然的にウチになるぞ。自分の所属団体だから悪く言いたくはないが、ウチは営業範囲や配車業務のシステム的に、上手く行けば一攫千金の荒稼ぎも可能だが、大抵の奴が稼ぐドライバーに喰われて他団体に逃げて行く事も多いギルドだからな。自由と引換に背負うリスクは結構大きいぞ。」

「う~~~~ん……。」

ますます悩んでしまった三池の方をチラ見し、湯気で曇った眼鏡を外してハンカチでレンズの曇りを拭いながら、

「まあ、一概に個人へ転向するのが良いとは限らないしなあ。歩合制でも月給が毎月きちんと支払われる会社と違って、個人タクシーは儲け0どころか赤字が続く事も普通にある完全自己責任の自営業だからなあ。独立するにせよ、このまま従属するにせよ。よくよく考えた方が良いと思うよ。」

と、俺は声を掛けた。

その翌日の深夜1時半。陸南地方北部にある国道沿いのファストフードのチェーン店の駐車場。

俺は長距離を乗せた客を下ろした帰り道、休憩を取る為に寄り道をしたその場所で、自分と同じギルドに所属する加山という男が乗務する白いF50シーマと、同じく池田という男が運転している紺色のJCG17型のオリジン（2000年11月にトヨタ自動車が生産累計台数1億台突破記念として千台限定生産で世に送り出した。プログレをベースとして初代クラウンを再現した特別限定モデル。）が仲良く並んで駐車しているのに出くわした。近くにある街灯の光

の逆光になつてよく判らないが、よく見ると2台の車のそれぞれの傍に1人ずつ人影が立っているのも見て取れたので、俺は2台が止めたスペースの通路を挟んで反対側に、シーマと斜向かいになるようにJ30後期型のマキシマをバックで横列駐車し、エンジンを切つて停車措置をしてから降車した。

近くに寄つて見てみると、やはりそれは加山と池田の両名であつた。

「あ！誰かと思つたら高津さんだったのか！」

と、加山が声を掛けてきたので、

「やあ、お久しぶりです。」

と俺も右腕を上げて応えた。

「しかし……、どうしたんですか？そのマキシマ……。前はそんな車に乗つていなかったと思つたけど……。」

「ああ、此方に来た後、源さんの所で新しく買ったんですよ。」

「ああ、そうなんですか……。いいなあ、相変わらず儲かっているんだろうなあ……。」

羨ましそうに此方を見てくる加山と、同意するようにウンウンと頷いている池田の顔を見ながら俺は慌てて首を横に振つて否定した。

「いやあ、全然そんな事無いですよ。昨日今日こそ長距離の客が拾えてそれなりに稼げたけれど、一昨日なんて雀の涙程度しか利益が出なかつたし……。景気づけに車を買つてみたものの、結構貧すれば鈍した生活に甘んじていますよ。」

「またまた……。」

「そうですね。高津さん、1日に10万Gも稼いで殿堂入りした事だつてあつたじゃないですか……。」

そう言つて揃つて茶化す二人に、俺は少しだけうんざりした。

「それだつて、昔のNPC時代の話でしょう……。ああ、あの頃は良かったなあ。その場所に行けば、何時でも確実に客を拾う事が出来るポイントがいっぱいあったもの……。今じゃそんな場所何処に

も無いし、あつたとしてもゴミしか拾えない……。」

「でも、その代わりやたらと金払いの良い客も、最近なんか増えましたよね。悪い意味で。」

「悪い意味で、って？」

何か含んだような池田の物言いに良からぬ物を感じた俺は、彼に問い質した。

「うーん、何と言ったら良いんですかね？何というか……、裏がある、っていうか……。そんな感じを漂わせている人が増えて来たよね。特にこの1週間で。」

「あ　！解ります！解ります！お前絶対、こつち来る前に娑婆で何か良からぬ事をやっただろ！と云う感じの……。」

何だか要領が得ない池田の言に加山が物凄く同意しながら話に加わってきた。

「そうそう、そんな感じ！服装も感じがいいし、言葉遣いも丁寧なんだけど、オーラっていうか、雰囲気がまんま裏稼業で、やーさんの匂いがプンプンしているのとか……。」

「分かります。分かります。絶対お前人殺っているだろ、っていう感じの奴とか……。」

二人の穏やかでない会話を黙って聞きながら、俺は胸中に不穏な物を抱いていた。幸いにも俺はそういう客にはまだ巡り会っていないから事の真偽はよく判らないが、もし彼らが言っている事が事実なら、とんでもなく厄介な事態じゃないか。俺はかなり憂鬱な気分になってしまった。

闇夜の中に消えて行く白いシーマと紺色のオリジンのテールライトを見送ると、俺はヘッドライトとフォグランプを点けっ放しにしていたマキシマに乗り込み、エンジンを掛けて発車措置を施すと、ステアリングを左に切ってゆっくりと車を発進させた。

高速道のICに向けてロービームで交通量のそれなりに多い、セインターラインが1本の橙色の実線の片道一車線の国道を、前を走る10tトラックの5m程後ろを100km/hで走っていると、何処か様子がおかしい事に俺は気が付いた。

対向している車全てが、どういう訳かすれ違い際に俺に向かってピカッピカッと複数回パッシングしてきたのだ。

ライトが球切れを起こして暗くなった訳では勿論無い。やや左側だけ照射範囲が広いロービームは、2つ共ちゃんと点灯していて、フォグランプと共に目の前のトラックの荷台と路面を白く黄色く照らしている。ロービームだから、

『眩しいからライトを下向きに下げる！ボケ！』

という意味のパッシングでもない筈だ。

走りつつメーターを視認し、他の警告灯が点いていないか確認したが、別段走行に差し障るようなトラブルが発生している訳でもない。何か引つ掛けているのかも思ったが、乗る前に車の周囲を軽く確認してから乗り込んだから、そういう事もない筈だ。

警察によるネズミ捕りや検問、オービスやトラブルを起こした車両が先に居るのかとも思ったが、それなら俺だけでなく前を走るトラックにも同様の合図を送るだろう。何故俺の車だけハイビームでピカピカと照らされなければならないのか……。腑に落ちないやら眩しいやらムカムカとするやら……、複雑な気持ちになりながら俺はハンドルを握っていた。

一瞬脳裏に、実は屋根の上に幽霊が……、という典型的な怪談が思い浮かんだが、冗談じゃない。まだ買って1ヶ月しか経っていないような新車に憑かれてたまるか！

その時、そのまま通過すれば良かったのに赤信号になったから停止線の前で強引に止まろうと思ったのだろうか、前を走るトラックが制動灯を点滅させながら急ブレーキを掛けた(車によっては急制動時に後続車に注意を促す為にブレーキランプを点滅させる機能を

備えたものがある。」ので、トラックの陰から歩行者信号の赤信号が見え隠れしていた時点で予想していたからブレーキペダルに右足を添えていたものの、俺は必死にブレーキを限界まで踏み込んだ。

キキ

バコンツバコンツズ

ッ！とロー

ターディスクとキャリパーが接触した摩擦音とABSの作動音、そしてタイヤがアスファルトを削り取るスキール音を上げながらつんのめる様に、衝突する寸前で車は急停止した。荷重がフロントサスに掛かった瞬間、フロントガラスの上の部分に何か長い黒髪のような物体が見えたような気がしたが、直ぐに引込んで見えなくなってしまったし、トラックの台車の下に突っ込んで首チョンパした自分を想像して蒼白していた最中だったので、後から思えばそんな気がしたものの、その時の俺はそんな物に構っている余裕は無かった。

「ふ、危なかった……。」

大事に至らなかった事に安堵しつつ、再び走り始めたトラックの後に続くように俺はまたアクセルペダルの上に右足を置いた。

深夜3時。駐車場に車を駐車して自宅の前まで来ると、

「ただ今。」

と静かに呟きながら俺は自分の部屋のドアを開けた。

すると、まだ電気が点いていたキッチンから玉緒が出て来て、

「おかえりなさい、あなた。おつ……っ?!」

と言い掛けた所で、突然電池切れのロボットのように固まって目を白黒させた。

いきなりの事に此方も仰天し、

「ど、どうしたんだ?!」

と透かさず聞き返すと、玉緒はいつもの如く雰囲気鬼女のそれへ一変させ、

「ねえ……、あなた……。その女……、誰?」

と静かに怒りを湛えつつ俺の後ろの方を指さした。

「は?女?」

こいつは一体何を言っているんだ？と訝しみながらも俺は首を左に振って自分の後ろを確認し、そのまま凍りついてしまった。

確かに玉緒の言う通り、全身がずぶ濡れになって裾や長い髪から雫を滴り落とし、背中までありそうな少し長い焦げ茶色の混じった黒髪を顔の前に垂らして顔を隠し、黙ったまま俯いている少女が確かにそこに立っていた。

第八話：何か最近物騒になってきたなあ……

>> 新太郎

何とも我ながら情けない事だが、俺は腰を抜かしたあまり玄関の上がり框の上に尻餅を着き、顔からさああつと血の気が引いていくのを感じながら女の顔を見上げていた。すると、さっきは不気味に顔を覆いながら垂れ下がる彼女の長い直毛の髪の毛に気を取られたが、彼女が凄く特徴的な服装をしている事に気が付いた。

何と言えば良いのだろうか？一言で言い表せば彼女は忍者……いや、女だからノ一か……の格好をしていた。網状の紺色の鎖帷子の上から濃紫色の忍者装束を羽織り、黒い帯と手甲と脚絆を身に付け、頭には鉄製の額当てが付いた藍色の鉢巻を巻いて、御親切に帯に一緒に巻き付ける形で鞘も柄も鏢もない黒い色をした忍刀を腰に下げていた。そこまでしておきながら、どういう訳か下が袴では無く黒色のスパッツというのが気になったが、兎に角目の前の少女は女忍者のコスプレをしていたのである。

少し開けた着物から垣間見られる、それなりに存在を主張する大きな双丘と深い谷間の風景と相俟って、目の前の女の子からは物凄い色気がブンブンと匂ってきたが、それ以上に彼女の周りに漂う妖気が半端ない物だったので、俺と玉緒は不審に思いつつ彼女の様子を窺っていた。

そして彼女が前髪を払いながら此方に向かって顔を上げた時、俺はまたしても、

「あっ！」

と叫びそうになり、思わず口元を右手で覆ってしまった。

似ている……。茶色の瞳に黒い髪という違いこそあるが、彼女の顔は間違いなくヨネさんのそれだった……。いや、まだそうと決め付けるには早急過ぎる。何故なら、目の前にいる少女は、彼女のア

バターが『魔法』によつて具現化した姿だからだ。いくらパーツの色や形を交換する事で多様なアバターを造り出す事が出来るとは云え、そのパターンにも限度がある。全く同じ顔のアバターなど結構な数があるだろう。

俺は何とか心を落ち着かせて立ち上がると、可能な限り毅然とする事を心がけながら彼女と向かい合った。

「えーと、君……、誰？」

俺がそう口にした途端、突然少女が跪いてその場で土下座をしたので、俺はまたドキリとして後退った。そして、彼女は俺たちに向かってこう叫んだ。

「お願いします！わたしをここで雇ってやって下さい！」

「はあ?!」

くノ一少女にタオルを渡して身体に付着した水滴を拭き取らせてから、一先ず詳しい話を聞く為に俺達は彼女を我が家のリビングに上げる事にした。

「で、雇う雇わない以前に、まずは君の名前、リアルに居た頃の本名ね、と年齢、それからどうしてウチに来たのかという動機とか経緯とかを聞かせて貰おうか。」

俺は、ウチが俺のタクシーによる収入源しかない個人経営である上に、事務家事その他裏方雑事は基本的に玉緒に全権を委任している為、特に割り振る仕事も無いのに金を払ってまで人を雇用するなんて馬鹿馬鹿しいし、そんな余裕なんかこれっぽっちもない。だから、本来なら話も聞かずに門前払いをする心算だった。されど彼女の面影といい、俺の心に何処か引っかかる物を感じたので、取り敢えず彼女の話だけでも聞いてから判断しようと思ったのだ。

「わたし、ヒムロ カスミって言います。氷の部屋と書いて氷室、澄んだ香りと書いて香澄です。リアルでは16歳の女子高生をしていました。」

『氷室 香澄』……。目の前に座る少女の口からこの言葉が発せられた瞬間、俺はハッとして目を白黒させつつ左隣に座った玉緒と互いに顔を見合わせた。彼女も同じ様に気が付いたのか、吃驚したように目を丸くしていた。

俺はすぐさま左の肘で玉緒の右の脇腹を軽く小突くと、香澄には聞こえないように小声で命令した。

「おい、お前。上に行ってヨネ婆さんを呼んで来い。早く！」

「はい、わかりました。」

俺が耳打ちするや否や、急に立ち上がったそそくさと部屋を出て行った玉緒の様子を見て不審に思ったのだろう。

「あの……。奥さん、急にどうされたんですか？」

と、香澄に尋ねられたが、

「何でもない。気にせずに続けてくれ。」

と、俺は彼女に促した。

「はい。じゃあ、それでは……。」

彼女の話によれば、元々都内で女子高生をしていた彼女は、このゲームの運営会社が運営していたゲームの一つである、戦国時代の忍者に成りきって戦う多人数型バトルロイヤル系のアクションゲームに嵌って遊んでいた所、先のアップデートの騒動に巻き込まれてアバターの格好でゲーム内へ転生されていたのだという。

奇しくも、前回のアップデートで全てのゲームが完全に一つの世界に纏められた途端、他の非現実的、または非現代的なゲーム世界と同じ様に彼女がプレーしたゲームの世界も規模が若干縮小され、大規模な遊園地や遊戯施設の一つとして、プレーヤー同士で闘う事を止め、外からの観光客や行楽客を相手に金銭を受け取りながら様々なショーを見せるという大幅な仕様変更をし、彼女もキャストとして働く事でこの4ヶ月を何とか食い逸れずに過ごせていたらしい。「でも、わたし、生来のドジッ娘というか……。事ある毎に大失敗

をやらかしちゃって……。」

顔を赤らめながらテヘツと笑う彼女だが、実際には洒落にならないようなミスを短期間に連続でやらかしたらしく、到頭先日キャスト管理責任者である頭領からクビを言い付かってしまったそうである。

「まあ、だから。わたし、今こんな格好をしていますけど、要は抜け忍なんですよね。」

えっへんと胸を張った彼女に向かって、自分から辞表を叩きつけたのならいざ知らず、向こうからリストラされたのなら抜け忍ではないだろう、と突っ込めば良いのか逡巡している内に彼女が話を続けたので、結局俺は何も言わずに彼女の話に耳を傾けた。

そして、行く当てもなくふらふらと彷徨していた時に、偶然通り掛かった国道沿いのファミレスの駐車場で、俺が他の2人のタクシードライバーと交わっていた立ち話を耳に入れてしまったそうである。

そうして、俺がそれなりに儲かっているという事を聞きつけ、付いて行ってあわよくばバイトとして雇って貰おうと考えて車の後部に隠れ、俺が車に乗り込んだ後屋根の上にしがみついてここまでやって来たらしい。

「ちよつと待て！君、ここまでずっと車の上にへばり着いていたのか……？」

コクンと頷いた彼女を見つめて俺は絶句したが、同時に何故彼女がずぶ濡れなのか、その理由が判って納得していた。

帰り道。高速道路を北上していた時に、局所的ではあったがタイヤが路面を蹴る度に車の後部側面から激しい水飛沫が上がる程の凄い土砂降りに見舞われた。ハイドロプレーニング現象（路面上の水溜りの表面張力によってタイヤが完全に地面から浮き上がり、制御

不能になる現象。一旦起こったら諦めて真っ直ぐ走りながらアクセルを離し、エンジンブレーキを使うなどして徐々に速度が落ちてタイヤが路面に接触する瞬間を大人しく待つしか対処方法がない。雨のスリップ事故の殆どはこの現象によって引き起こされる。」の発生を防ぐ為に100km/h以下まで減速していたとは云え、ワイパーを最大速度まで振ってもまともに視界が確保できない程の強烈な大雨だったから、屋根の上にといたらまともに浴びてずぶ濡れになるのは当然の理だろう。

根性がある娘だなあ、と感心すると共に、その位の根性があるのなら別にウチじゃなくても普通に雇って貰えるのではなからうか……、と俺は考えた。

その時、玄関の扉が開く音がし、

「ただ今戻りました。」

「お邪魔します。」

と言う、玉緒とヨネさんの声が聞こえてきた。

その瞬間、香澄の瞳が一回り大きくなり、彼女の身体が硬直したのを俺は見逃さなかった。

リビングと台所の間を仕切るドアが静かに開き、玉緒の後に続くようにあやめ色の紬を着たヨネさんが入って来た。

「あの……、新太郎さん？玉緒ちゃんから聞いたのですけれど、わたくしにお話って、何かしら？」

「ああ、すみません。氷室さん。実はですね……。」

訝しげに訊ねてきたヨネさんに向かって、尋ね人らしき少女を見つけたかも知れない事を大雑把に説明しようとした時、俺達の会話に突然香澄が割り込んできた。

「も……、もしかしてその声……ヨネお祖母ちゃん？」

その声を聞いた途端、ヨネ婆さんは香澄と同様に目を大きく見開くと、

「ひよ……、ひよつとしてお前……香澄かい？」

と掠れた声を上げ、呆然としたようにその場に立ち竦んだ。

どの位経っただろうか。

正味10秒も無かったかも知れないが、5分ぐらいにも感じる長い間、俺と玉緒が見守る中、祖母と孫娘は互いに沈黙してじっと見つめ合っていた。そして……、

「お祖母ちゃん！」

「香澄！」

と叫ぶと、目から涙を溢れさせながらガシツと抱き合った。

後はまあ、お涙頂戴の感動のドキュメンタリーによくある、生き別れた家族の感涙の再会によくあるような事が俺の眼前で展開されていた。

何だかなあ、と思いつつもこれで良いのだと納得し、俺は肩の荷が下りてすっきりした心持ちで彼女等の様子を玉緒と共に傍観した。

さて、どういう訳だか解らないが、玉緒の心添えという形で何故か俺は香澄をウチの事業所で働かせる事になってしまった。無論通いのアルバイトの事務員として、である。そもそも第一種普通免許も持っていないような素人娘に車を運転させる訳には決していかなしいし、助手として助手席に乗せるにせよ、4人まで客を乗せられるのと3人までしか乗せられないのでは大きな隔たりがある。それに、エンジンにセルモーターが付いて居らず、ピストン部を振動させる為に点火させながら動軸を人力で回転させていた大昔ならいざ知らず、今の車の設備で助手が必要になるシチュエーションなんて殆ど無い。だから、裏方として採用する事しか選択肢を用意する気がなかった。

それでも、やはり俺は人件費という物を払う事を躊躇していた。だがしかし未成年とは云え、ヨネ婆さんという保護者、もとい後

見人がいる以上バイトの最低限の雇用資格は満たしているし、クビになったとはいっても直近の過去に就業経験があるにはあるから断る理由が無い。それにそもそも、事務方の権限の一切を牛耳っている実質副社長の玉緒が必要だと主張する以上、強いてそれに反対する訳にもいかなかった。

それに……、生活保護を受給しているとは云え、無職の老婆と孫娘の一家をこのまま見過ごすという気にはとてもなれなかった。

だからといって、まさか彼女等が三食どころか間食まで我が家にたかりに来るとはさすがに想像出来なかったが……。まあ、兎に角高津タクシーにヨネと香澄という半同居人のコンビが仲間として加わったのだった。

香澄を雇ってから数日が過ぎた頃、夕食を摂る為に家に帰って来ると、ギルドから業界誌と共にまた何か重要な事を知らせる書面が届けられている事に気が付いた。

A4の白い紙の片面に書かれた4枚綴じ合わせの文書を封筒から取り出すと、俺は食事をしながらその文面に目を通した。

『最近多発しているタクシー強盗被害への注意喚起と、営業時において犯罪者に遭遇した時の対処法について』

7月を大分過ぎ、本格的な夏がやって来たのか暑苦しい日が続いておりますが、皆様如何お過ごしでしょうか。真夏日の車中は、車によつては50度を超える場合もあるので熱中症には十分注意して下さい。

さて、去る6月末から今日までの間に、帝都を中心に各地でタクシーを狙った強盗事件が急増しています。さらには先日(7月9日)美優市城東地区にて個人タクシー連盟所属の個人タクシー運転手が強盗被害にあつた拳銃刺殺された事件を受け、この度個人タクシー協同協会が主導となり、タクシー営業時に犯罪に巻き込まれた事態

を想定した対策ガイドラインを急遽作成致しました。

以下、ガイドラインの概要になります。事業主・乗務員の皆様は必ず一度は目を通すようお願い致します。

1・怪しい客は拒否せよ。

如何にも怪しい風貌、指名手配犯と思しき容貌の客を見掛けたら、気が付かなかった振りをして通り過ぎましょう。君子は危うきに近寄らず、です。

2・客を乗せたら、出発する前に必ず行き先を確認しましょう。

必ず実行しましょう。多くの場合、強盗犯やハイジャック犯は明確な目的地を指定せず、

「取り敢えず真つすぐ行け！」

と、行き先を曖昧にした上で人気の無い場所まで誘導します。大方の場所、目の前の車を追ってくれ等であつてもいいから、お客様にタクシーで移動する目的地がある事を確認してから車を発車させて下さい。

（なお、この場合のハイジャックは、逃走中の犯罪者が警察から逃げる為、その場に居合わせたタクシーの乗務員を脅迫して逃亡を図る行為、またはそれに類する行為を定義するものとします。）

3・落ち着いて行動しましょう。

それでも不幸にして犯罪者に遭遇してしまった時には、犯罪者を興奮させるという最悪の事態を招かない為に、パニックを起こさずになるべく平静を保ちましょう。

4・下手な抵抗は止めましょう。

護身術をやっているし体力にも自信があるとか、悪人を許せないとか、下手に正義漢を出して犯人に抵抗するのは絶対に止めましょ

う。多くの場合犯人は何らかの凶器を懷に隠し持っています。乱闘の末に激昂した犯人がその凶器で襲った事で運転手が重傷を負う事件が後を絶ちません。最終的に犯人の要求に屈する事はあっても、犯人を取り押さえるような真似は絶対にしないで下さい。たった一つしか無い命を失ってはどのような罪でもあります。

5・犯人の隙を突いてタクシメーターの緊急通報ボタンを押しましょう。

犯人を刺激しないように、犯人が目を離した瞬間などを狙って素早くメーターの壁面に付いている緊急通報ボタンを押して外部へ助けを求めましょう。

当ギルドに所属しているタクシーの場合、緊急通報システムを作動させると、スーパースインに「SOS」表示、行灯が赤色に点滅した上でGPSと無線を介してコールセンターの方へ異常と車両の現在位置が自動で報告されます。

6・もしも異常が発生している車とすれ違った時は……。

たとえ自分とは関係なくても、緊急表示灯を赤く点滅させて助けを求めている車や、本来なら有り得ない異常事態が発生している車を見掛けたら、すぐに警察へ通報するか、所属しているギルド・会社のコールセンターへ報告しましょう。余裕があれば追跡して現在位置を逐一報告して捜査に協力して下さい。（最近は緊急通報装置の存在を知っている犯罪者が増えてきたのか、乗務員に緊急通報装置を作動させない、または車両無線やGPSを切らせるといった事例も増加しています。皆様の真摯な御協力を切にお願い致します。）

ここまでが2枚目までに書かれていた文書の内容である。この処物騒な事件が続いていて少々気が立ってはいしたが、自分やその周りに被害に遭ったという奴がまだ居なかったという事もあって敢えて考えないようにしていたのに……。

「蒸し返すなよな……。」

と、俺はプリントを読みながら思わず愚痴ってしまった。

「どうしました？あなた……。」

玉緒の声が聞こえたので顔を上げると、女達3名がじつと俺の顔を窺っていた。

「いや、何でもない……。」

俺はそう答えると、また書類の方へ目線を落とした。

その時テレビからニュースを読み上げるグレーのスーツを着た若い男のアナウンサーの声が俺の耳の中へ入って来た。

「……今日、夕方5時頃。初奈島市桜地区においてタクシー強盗未遂事件が発生したとの110番通報がありました。被害にあったタクシー運転手は、初奈島中央駅から強盗犯を乗せて事件現場へ誘導され、金銭を要求されましたが、緊急通報を受けて現場付近を巡回していたパトカーに気が付いた強盗犯が逃走を図った事から、辛くも難を逃れたという事です。警察では強盗未遂事件として、運転手から聞いた犯人の容姿を元に、初奈島を中心に緊急捜査網を敷いて犯人の捜索に当たっています。犯人は依然逃走中です。現在当局から発表されている犯人の特徴は……。」

おいおい、今度はこの辺りにまで強盗犯が出没するようになったのかよ……、冗談じゃないぞ……。そう内心戦戦恐恐していると、まるで俺の心の中を代弁するかのように、

「怖いすわねえ……。」

とヨネさんが呟いた。

改めて3枚目に目線を向けた時、そのあまりの意外な内容に俺は不覚にも、

「おっ！」

と声を出してしまった。

『緊急時電話暗号表』

・ギルドからの異常確認……「曾須様からの伝言を承ったのですが……。」

・運転士からの応答……「こちら（対応番号）号車、ただ今賃走中につき対応出来ません。」

強盗…… 510

ハイジャック…… 819

無賃乗車…… 640

泥酔…… 481

指名手配犯・怪しい人物…… 192

運行妨害・その他のトラブル…… 876

懐に武器を隠し持っていて脅迫している……「代わりに0 - 104号車へ回して下さい。」

緊急通報が発覚、切迫した非常事態……「お客様の御都合に付き、無線を切ります。」

何だ？こりゃ？

いや、いざという時に隠語でオペレーターとドライバーが遣り取りをする為の指針である事は容易に察せられるのだが、もつと他に遣り様が無かったのだろうか……。いくら何でも安直過ぎるだろ。特に最後の文句とかまんまというレベルではないと思うぞ。

まあ、無いよりはいいかも知れないな、と思いつつ俺は最後の紙を捲った。

『第一回新生全世界タクシー大会開催決定！ただ今参加者募集中！』

来る8月25日、可瑠磐地方真砂市真砂市営総合市民公園大駐車場及び周辺にて、法人タクシー総合協会及び個人タクシー協同協会の共催による全世界タクシー大会を改めて開催する事に決定致しました。参加する企業、または事業主の方は同封の「月刊タクシードライバー」の裏表紙にある申し込みフォームに必要な事項を書き込んだ上で、同じページにある返信用封筒に封入して7月末日必着（当日消印有効）で御返信下さい。大勢の事業者様の奮っての参加を心よりお待ちしております。』

お、もうこんな時期になったのか！去年初めて第二回の大会にISで参加した以来だが、今年は実際に車に乗ったり触ったりする事が出来るから、より面白い改造車を見たり、逆に自分の自慢の車をより良い形で披露したり出来る筈だ。

そう考えると、俺は年甲斐もなくわくわくして、思わず頬を緩めてしまった。お陰で、

「何？今度はニタニタ笑い出したりして、気持ち悪い……。」「と女衆から大層顰蹙を買ってしまったが……。

だが、そんな事以上に俺の頭の中を占めていたのは、今年は何のどの車でイベントに参加しようか……。ただそれだけだった。

第九話：深夜ドライブ

8月23日夕方。

空の色がやや橙掛かった群青色に変わった頃、俺、玉緒、ヨネさん、香澄の4名が旅支度を整えた状態で勢揃いしていた。

そして皆が卓袱台の周りに腰を落ち着かせたのを見計らうと俺はすつと立ち上がり、彼女達が見上げる視線を感じながら、こう切り出した。

「え　　つと、皆さん準備が整ったようですので、これから下の駐車場から車に乗り込み、タクシー大会に参加する為に真砂市の方へ移動します。」

その時、白いノースリーブのシャツの上に水色の半袖の薄手のガーディガンを羽織り、青いジーンズ地のミニスカートと白と黒の太めのストライプのニーソックスを穿いた、如何にも今時の女子高生らしく感じる可愛いおしゃれ着を身に纏った香澄が唐突に口を挟んだ。

「社長、質問！」

「何だ？」

「別に今から出発するのは構わないのだけれど……、どうしてこんな時間に出発するんですか？」

「ああ、ちよつと待て、今説明する。」

俺はそう答えると、改めて口上を続けた。

「ええ……では、これから高速に乗ってほぼ丸一日を掛けて彼地へ向かいます。途中給油の為またはトイレや食事、仮眠をとる為に何度か休憩を取りますが、道路状況が良好なら明日のお昼頃には現地入り出来る予定です。それでは、出発！」

「あの……、新太郎さん。」

今度はヨネさんが右手を上げた。

「何でしょう？」

「その……、休憩は何時何処で取る心算なのですか？」

「その場の状況に応じて適当に、です。バスでの団体による移動ではなく、自家用車に乗っての移動ですし、別に急ぎの用事でもありませんから、臨機応変に休憩を挟む心算です。ですから、途中で休憩が取りなくなった場合は遠慮無く俺に言っして下さい。あと他に質問等が有る人は？」

俺は3人の顔を見渡したが、誰も挙手をしなかったので、

「では、出発！」

と号令を掛けた。

部屋の電気を消し、各々手荷物を持って外に出てから戸締りをすると、俺達は地下の駐車場へ向かった。

そして、ガレージの前に立つとコントローラーを操作し、俺は「Y33レパードの後期型を呼び出した。」

3LV6ツインターボのVQ30DETエンジンを積んだ最高グレードのモデルで、かつて日産に存在した高級車である。Y33シリーズ共通の、如何にも日産車らしい格調高い内装も素晴らしい上に、リアバンパーにウインカーとバックアップランプを持っけてテールランプを一面に配したアメ車らしいリアデザインも漢らしくて実に素敵だ。例のごとく高津タクシー仕様にしたお陰で、まず様になった気もする。尤も、この車のカーナビの音声は能登声ではなく、ゆかり様こと青山ゆかりの声を入力しているが……、それ以外は他の所有車と同じ様な改造を施して自家用車兼タクシーとして運行している。

今回、この車でイベントに参加する事に決めたのには幾つかの理由がある。

先ず、この車が俺の好きな車の内の1台だから。そうでなければイベントの展示品として披露するどころか所有しようとすら思わな

い。

次に、この車がとてもマイナーな類の、あまり見かけない珍しい車であると共に、まず滅多にタクシー仕様に粧された車両に出会さないからである。メジャーで何十台も参加するようなクラウンやセドリックのような車だと、どうしても他の車との優劣を着けられ易くなってしまいがちだが、1台あるかどうかという車両だと、そこにあるだけで貴重な物となって色物票を狙う事も出来、宣伝として利用する事も期待できる。

そして何よりもその独特のフォルムである。金が無い時代に設計製造された車体だけあって、エンジン等の駆動部品やシャシーやフレーム等の基礎的なパーツだけでなく、インパネやシートといった内装パネルからドア等の部品に到るまで、殆どの部品を他のY33シリーズのハードトップセダンと同じ物を共有、もとい流用しているにも関わらず、兄弟車であるセドグロ（ヘッドライトレンズの形状やエンブレム等の微細な違いを除けば殆ど同じデザインであるセドリックとグロリアをセットにした言い方）やシーマとは一線を画した、それによってモダンな雰囲気を出している車は他にはない。それに改造している事もあるが、パワーもあるし乗り心地も良いしで、あまり疲労やストレスを溜める事なしに長距離を運転出来るという算段もあった。

俺は他の3人をガレージの傍で待たせて一人先に運転席に乗り込むと、キーをスロットに差し込んでエンジンを始動させ、インテックスから行灯とメーターと無表示にしたスーパーサインを車に取り付け、ロービームとフォグランプを点けて発車措置をし、左ウインカーを点滅してステアリングホイールを左へ回しながら軽くアクセルを踏み込んだ。

そして、通路に出て車の向きが変わった所で車を止めてギアをPレンジに入れると、俺は運転席のドアの下部に手を伸ばしてトランクリッドをアンロックし、ドアノブに手を掛けて車から降りた。

「よし、荷物後ろに載せて、そしたら乗って！」
そう言いつつ車の後部へ回ると、俺はトランクリッドに手を掛けて上方へ跳ね上げた。

玉緒に預けていた黒い中型のスーツケースを受け取るとそのままラゲッジルームへ積み込んだ。そして、それを車の右側の後輪のタイヤハウス付近の奥の方へ押し付けると、今度は香澄から彼女の真紅の中型のスーツケースを持ち上げ、反対側の燃料タンクの近くに押し込めた。

「意外と入るものですねえ……。」

「基本的にこの手のセダンはフルセットのゴルフバックが最低4個は積載出来る様な造りになっていますから、スーツケース2つ位なら余裕で積み込む事が出来ますよ。」

そう、感心していたヨネさんに答えると、俺はトランクを閉めて再び運転席に乗り込んだ。

俺は、普通は元々その車にマルチナビが付いている場合はなるべくその車の純正カーナビを使う事になっているが、時に90年代から00年以前に造られた車に付いている初期のナビゲーションシステムの場合、画面が正方形で小さくて使い難い、またはナビゲーションシステムその物の精度が不正確であるという理由から、ナビが付いていないモデルのオーディオを換装するという形でカーナビ付きマルチシステム高性能オーディオパネルを後付で取り付けていた。オーディオパネルの下半分が普通のオーディオパネルで、上半分の部分からよきよきと薄型のモニターがスライドしながら水平に出た後垂直に直立する奴である。

俺は銀色のオーディオパネルを操作して同色のモニターを引き出してカーナビを立ち上げると、目的地を設定してシステムを作動させ、ロービームとフォグランプを点灯して発車措置をし、そつとア

クセルを踏み込んだ。

夕暮れによって赤く染まった、バイパスまで続く通りなれた道を真っ白のHIDの前照灯と蒼白のHIDのフォグランプで照らし、青白い光のグレイディーションを織り成しつつ駆け抜ける。

途中バイパス沿いにあるガソリンスタンドに寄って、タンクにハイオクを満タンにするついでに簡単な整備をすると、俺は夕方を迎えて交通量が増えたバイパスの側道を流れる車の列へ自分の車を合流させた。

スタンドから左折してすぐに追越車線へ車線変更し、最寄りのバイパスの出入口に着くと右側の分合流車線に入って車をキックバックさせつつ急加速させる。

今日もバイパスの上を、多くの荷物を運搬する大型トラックや旅客を輸送する高速バスの長距離深夜便が闊歩しているが、気のせいとか、空車でもない、そうかと言って営業してもいないタクシーがいつもよりチラホラと多く見受けられる。しかもその殆どが俺と同じ様な個人タクシーである。

あっちには連盟カラーのJ32ティアナの後期型が、そっちには頭の上に提灯を載せてトランクリッドにハイマウントストップランプ付きのリアウィングを装着した黒色のJZX100系チエイサーのツアラーVの後期型が、そのまた向こうには同盟色のクルーの前期型、910ブルーバード、マツダ・カスタムキャブとT140系FRコロナの小型タクシー仕様車が仲良く並走するように走っていた。追い越してから気が付いたのだが、ブルとキャブとコロナは今や珍しい灰色のプラスチックケースに収められているノスタルジックなタイプの丸目4灯の前照灯を装備していた。

高速道路に入り、初奈島大橋を渡っていると、前後をUDのクオンの後期型と現行モデルのいすゞ・ギガの10tの有蓋車に挟まれ

た状態で走行車線をはしるYCA所属の黄色い右ハンドルの現行型フォード・クラウンビクトリアを見掛けた。(以前記述したと思うが、この世界では自由に車を設計して販売出来るので、日本で販売されていない、または導入されても一部のグレードに限られた等、本来右ハンドルが存在していないような車種やグレードでも造っている店があれば手に入れる事が出来る。)

こうして並んで走ってみると、フルサイズが如何に大きな車格であるかよくわかる。レパードもミドルサイズのセダンとしてはかなり大きな方だが、それでもクラウンビクトリアの方が一回りも二回りもでかく感じる。エンジンのフィーリングも、勿論レパードのV6DOHC直噴ツインターボエンジンが織り成す高速域勝負の吹き上がる感覚も官能的だが、伝統的なアメ車らしいクラウンビクトリアのV8OHV自然吸気エンジンが奏でる低速域からのトルク重視の豪快で力強いエンジン音も、それはそれでとても魅力的だ。

ふと追い抜き際に左の窓の景色をチラ見すると、クラウンビクトリアの運転手が右手を軽く上げて此方に手の甲を見せ、人差し指と中指を閉じたピースサインのようなジェスチャーをして合図を送ったので、俺も右手をハンドルのスポークをから離して同じ様な格好の手にすると、掌を掲げるように合図を返し、そのままアクセルを踏み込んだ。

陸南自動車道との交差点、六郷JCTに差し掛かる。

普段は速やかに左車線に入って帝都方向へ抜けて行くが、今回は反対側の田淵市の方角へ向かう為右車線に入る。

分離帯を無事にパスし、陸南自動車の高架の下を潜るトンネルを抜けて右カーブきつい急なスロープを、エンジンを吹かしながら登って行くと本線との合流地帯が見えてきたので、俺は右後ろを視認して後ろから迫ってくる本線上の車の流れに注意を払いつつスピードを乗せ、3本ある本線車線の内一番左側にある車線へ滑らかに車線変更した。

すると、そこに連盟色のフェンダーミラーのY31セドリック営業車のブロアムと、同じく帝都無線のクラシックSVが真ん中の車線を走って来てそのまま追い越して行ったので、俺も加速して右ウインカーを点滅すると、二台の後ろに追走した。

俺もタクシー仕様車じゃない、自家様向けに造られた銀色のドアミラーのY31セドリック・セダンのブロアムVIPの改造車を持っているので、ふと、レパードも良いけれど、Y31セドリック・セダンでも良かったかな、と考えた。が、もう既に高速を走っている上に、特にそこに拘る必要も無かったので、すぐに打ち消してステアリングホイールを握り直した。

M3を山と海の間 of 広大な平野部を縦断するように南下して行く。早くも日は沈んで空も闇に包まれ、規則正しく等間隔に並んだ白や橙色の街灯に照らされた高速道路の路面を前照灯の光で青白く照らしながら風を切って走って行く。

やがて目の前の路肩に近くにSAがある事を示す標識が見えてきた。この辺りを過ぎたら、一旦この高速道路を降り、真砂市へ至る別の高速道路に乗り換える為に暫く一般国道を走行する予定だったので、俺はこのSAで一旦休憩を入れようと思い、左ウインカーを焚きながら車を一番左車線へ移し、前を走る白いY30グロリアの後期型に続いて強めにブレーキを踏んで減速車線へ入っていった。

「ねえ、あなた。」

「ん、何だ？玉緒。」

「前を走っている車、確か同じ様な車をあなたも持っていたわよね？」

「ああ、持っている事は持っているが、5ナンバーだから少し違っていたいな。俺の奴は3ナンバーのブロアムVIPの後期の3レターボ車だから。多分あれはV20かL28じゃないかな？どっちにしろ、俺の方が上のグレードである事には違いないよ。」

と、玉緒の方へ話しつつ俺は駐車場に車を停める為にハンドルを左

右へ大きく切った。

適当に空いていた場所を見つけ、ステアリングを左に切って頭から斜めに突っ込んで止まり、駐車措置をしてシートベルトのバックルを外した。

そしてエンジンキーを抜いて左後へ顔を向けた。

「よしそれじゃ、少しの間休憩を取るぞ。この後暫くトイレとか行けなくなると思うから、今の内に済ませておいてくれよ。後、ついでにここで夕飯も済ますから、皆その心算で！」

そう言つて今度は右側へ振り返り、ドアを開けて外に出ようとした途端、右隣りのスペースとその向こうに駐車された黒いB35ラフェスタ・ハイウェイスターの左前輪の淡い銀色のホイールが、ハロゲンランプ特有の黄味がかつた白い光で照らされた。車が入庫する。俺はすぐに手を引つ込めて後ろを窺った。

思い切り前輪を左に曲げながら1台の3ナンバーのEセグメントサイズの古めかしい青いセダンが停車した。手塚治虫の『ミッドナイト』という漫画に出てくるエリカと呼ばれるタクシー車両にそっくり、というかそのまま再現したかのような車だった。

古き懐かしい昭和末期の日本車のようだが、如何せん車種が判らない。大抵の車種は判別出来る相当な車好きの俺でもベースとなつた車種が何なのか未だに不明である。バブル振興期にトヨタ車や日産車や三菱車でよく見られたアメ車を意識した細長い六角形の大型のフロントグリルに丸目4灯という角張った車体のボンネットフードをヘッドライトの部分だけ、目を半分覆うように延長処理を施し、リアのコンビランプを歴代スカイラインのそれのような丸目4灯にし、球状の制動灯を囲むようにリング上になった、外側にハザードランプ、内側にバックアップランプが並んでいる。因みにテールライトは全てLEDを使っているみたいである。

自分の車からそつと出ると、俺はその車のあまりの出来の良さにまじまじと見とれてしまった。

「どうです？いい車でしょう。」

突然声を掛けられて、俺は車から目を離して顔を上げた。するとそこには、少しだけ開いた運転席のドアの窓枠に肘を着いて、気障なポーズを取っているミッドナイトのコスプレをした首元まで伸びた茶色い長髪で細身の壮年の男が、ニヤニヤと微笑みながら俺の方を見つめていた。

「凄いですね。故手塚治虫御大の『ミッドナイト』に出てくる主人公の車、エリカでしょう？」

「まだ若そうなのによく知っているね。」

「以前学校の図書室で読んだ事がありましたから……。しかし、よくこんな細かい所まで完璧に再現できましたね……。」

「もつとも見てくれただけだね。本家と違って、第五の車輪とか無人走行とか、そういうギミックは一切搭載してないよ。」

「それにしたところで……。だけど、一体何の車をベースにこんな車造ったんですか？」

元ネタが何の車なのか判らないので判断のしようがないが、何となく110クラウンの前期型がギヤランのデューク辺りの3ナンバー車がベースかなとも思ったが、目を凝らして細部まで内外装を鑑みるにどうも違うようなので、俺はオーナーに改造前の車種を尋ねた。

すると彼はまた笑いつつ俺に向かってあつげらんこう言った。

「ああ、これ、フレームから車体の内外装のデザインまで自分で設計して組み立てたんですよ。あ、勿論エンジンとか駆動系は既存の使える物を流用しましたけれどね。」

何だと……。車体を一から造り出したって？そんな馬鹿な……。

そう思つて一瞬魂消たが、よく考えればこのゲーム、いや世界では車両のデータさえあればどんな車でも造り出す事が可能なのだ。だったら、別に既存の市販車やレーシングカー以外にも、必要な設備

と保安部品が装着された上で車両法が認可する範囲にある自動車なら、ユーザーが自由に公道を走らせる事が出来るのである。ならばこういう漫画やアニメ、ドラマや映画に出てきたオリジナル車両の完全再現や、自分でデザインしたオリジナル車両を自作するような猛者も出てくるのだろう。実際現実にも、主に車両規定の緩い北米辺りで車体を造ってナンバーを取っている趣味人は相当数いるらしいし、排ガス規制等も無く、より手軽に作成出来て簡便に登録できるこの世界なら、こういう人達も多いに違いない。

そうか、こういう楽しみ方もあるのか……。今まで既に世に出ている車を少し自分好みに改造する事で満足していたが、自分が考えたデザインの自動車をオーダーメイドするなり自作なりしてみるのも面白いかも知れない。今度源さんの所へ相談を持ち掛けてみようかしら。玉緒が知れば激怒するのは目に見えていたが、俺は少々本気でそんな事を検討した。

SAで軽い夕飯と手洗いを済ますと、俺達はまた車に戻った。そして先に他の3人が乗り込んだのを確認してから俺は運転席のドアノブに手を掛けた。

ドアを閉め、真っ白いLEDのルームランプが頭上から足元を照らす中シートに腰を落ち着かせてシートベルトを締めると、俺はエンジンキーをスロットに差し込もうとした。

だが、突然自動ドアの操作レバーがガタンツと跳ね上がってバコーンと派手な音を上げながら俺の脛を打った。

「いつつ……………」

激痛に思わず涙目になりながらも、誰だよ！思い切り勢いをつけて扉を開けやがった馬鹿野郎は？と激昂して左後ろを睨みつけた。俺は車に昔からある艇子の原理を応用したタイプの自動ドアを取り付けているので、左後部ドアをいきなり開けられると、その動きに連動した操作レバーがこんな感じに跳躍して運転手の手や膝を攻撃する事がままあるのだ。だから、たとえば好意や心配りから来たもの

だとしても、お客さんにドアを開けられる事を内心嫌がっている運転手は多いと思う。無論俺だって例外じゃない。実際半端なく痛いし。そもそも、こう云う事が嫌だから最後に乗車したのに、これじゃあ全く意味がない。

「何しているんだ?!」

少しだけ開いたドアのヒンジを掴んで今にも閉めようとしていた香澄に向かって俺は怒鳴りつけた。

思ったよりも俺が声を荒げてしまったからかも知れないが、香澄は目をウルウルと涙で滲ませつつ上目遣いで俺の方を見つめてこう呟いた。

「だ……だって、このランプが消えなかったから……、ちゃんと閉まっていなかったのかなって……。」

「ああ?」

俺は香澄がドアから手を放した事を確認してからレバーを操作して扉を閉めると、彼女が指差した方、ドアの上の天井に張り付いている読書灯やルームミラーの所に付いている車内灯を見渡した。ドアが開いている事を示す警告灯はメーター内で点灯していないが、エンジンを切っているので、操作スイッチを『DOOR』で固定しているけれどもルーフランプは全て灯った状態になっている。車種によって異なるが、エンジン停止時には15秒から長くて1分程度室内灯が点きつ放しになり、その後徐々に儚く消えて行く、こういう高級車にはよくある仕様である。因みに日産車は車種に関係なく大体15秒点くようになっているらしいが、俺はメーカーや車種に関係なく30秒点灯し続けるように調整している。

「あのなあ、これはただドアを閉めても暫く点いているように調節してあるだけだから、そんな事を気にしなくて良いんだよ。別に半ドア(車のドアが閉まっているように見えて実は開いている状況。走行中に突然ドアが開いて乗員が車外へ転落する危険性がある。)な訳じゃない。……ほら、見ている。」

俺はキーをスロットに挿し込むと一気に回してエンジンを始動さ

せた。

ブ　ンキュルルルルル……グウォンウォンオオオオオ……。
セルメーターが回って点火プラグがエンジン内部で火花を照らし、ポンプを通じてシリンダー内へ充満した気化したガソリンへ引火して爆発し、轟音を上げながら6本のピストンが上下に激しく動き出してタコメーターの針が2,000rpmまで跳ね上がり、やがて徐に1,000rpmよりやや下がった位置まで降りてくる。その間約10秒。その短くも長くも感じる時間の中、エンジンが震える振動に合わせるように照明の明かりが霞んでいき、やがて車内が暗闇に包まれた。

どんなエンジンも、点火時は激しく回転してから惰性状態へ落ち着いて行くものだが、良いエンジンは直ぐには回転数が落ちずに、爆発直後の熱情的で官能的な調べの余韻を残すものだし、良い車はそれを心ゆくまで堪能できるだけのエフェクトやギミックを用意している。そして快適性や利便性以外にこう云った絶妙なフィーリングにも心を砕いてこそ高級車としての価値や貫禄が生まれるのである。エントリークラスの大衆車や低排気量の安物のエンジンを搭載した廉価版モデルでは絶対に味わえない感覚だ。そして一度でも味わったら最後、もう元には戻れない。

ステアリングの操舵軸に付いているレバーのスイッチ等を弄ってロービームとフォグランプを点灯させる。その途端、目の前のSAの通路と歩道と建物を白い光が照射すると共にセンターコンソールのボタンやメーター内に仕込まれたバックライトが一斉に点灯し、手元がぼんやりと明るく照らされる。さあ、出発だ。

「わかっただろ？問題ないって。それと香澄、今度からそのドアを開けるときは此方に一言声を掛けてくれ。……それじゃ、行くぞ！」

香澄に一言注意をし、気合を入れると、俺は発車措置をして右ウインカーを点滅させた。そして、左右をよく確認してステアリング

を右へ切りつつゆつくりと車を前へ出して行った。

歩道とエンジンを切られて静まり返った車達が整列する駐車スペースの間を、歩行者の飛び出しとかに備えて徐行して進んで行く。

大型車や他の駐車スペースに続く通路とぶつかる地点、丁度本線への合流路に入る直前の場所に差し掛かった時、一番本線側にある通路の路肩で車幅灯だけ点けて停車していたビッグサムの最終型後期の15tのトレーラータイプ給油会社の白と赤のツートンカラーのタンクローリーが、エンジンを掛けて真っ白なHIDのヘッドライトを点灯し、のっそりと巨体を揺らしながらこちらへ向かって来るのが見えたので、俺は本線への加速車線に入る前に一時停止し、トレーラーに向かって一発だけパッシングした。

ピカッ。(お先、どうぞ。)
パンツ。(ありがとう。)

タンクローリーは軽くクラクションを鳴らしてのろろと発進すると、去り際に3発サンキューハザードを焚き、赤く輝く2つのテールランプの余韻を残しながら漆黒の闇の彼方へ走り去って行った。そして俺もハンドルを左の方へぐりと回してアクセルを踏み込むと加速車線を下って行き、右ウインカーを点滅させつつ走行車線上を走り出した。

SAを出て暫くすると、ハイビームの明るい光の輪の中に、左側の路肩に立てられた緑色の案内標識が照らされているのが視界に入ってきた。

『2km先高速出口：M3-18戸賀IC』

『R25戸賀市内、戸空線(忍忍ロード)經由空賀市・M1中央高速道路116空賀IC方面接続』

『注意！この先トンネルあり。ライト点灯用意！』

やがて、目の前に山肌を突貫して造成した、まるでドライバーを迎え入れるように橙色のナトリウムランプを煌々と照らして大きく口を開けた1kmもない短いトンネルが見えてきた。

戸賀市……。元は隣接する空賀市と共に戦国忍者系オンラインゲームとして興じていたが、一体化してしまった現在に於いては、隣市と共に忍者の里として観光事業に尽力している街である。因みにこの街にある『戸賀忍者の里』は以前香澄がバイトしていた行楽施設であり、彼女を拾った某ファミレスも市内を走るR25沿いにある。

そして何よりも、海沿いを延々と伸びて行く陸南自動車道が内陸部へ入って山越えをする数少ない地点の一つでもある。

トンネルを抜け、斜度がきつい下り坂にある急な右カーブへ差し掛かると、左前方の山間に人家の黄色い明かりがぼつりぼつりと眼下に広がっているのが見る事が出来る。

そうこうしている内に高速の出口を示す標識と共にS字カーブの出口に設けられた減速車線が見えたので、俺は左ウインカーを点けると、ブレーキを踏み込みながら減速車線へ入った。

スロープを下りつつ急な左カーブを曲がって行き、料金所で精算を済ませると、R25との交差点に到達する。左手に行けば麓の市内へ、右手に進めばR25とR321の重複区間である戸空線、別称『忍忍ロード』という険しい山中を越えていく道路へ至る。

忍忍ロードは、その名を聞くと何だかとても楽しい道路のようだが、片道2車線の上下線と歩行者・自転車専用道の3本の道から形成され、険しい山肌を強引に削って上から順に歩行者道、下り車線、上り車線が設置されており、それぞれの落差が数十m以上ある。

しかも道中に一切の街灯が存在せず、高度が高い所為で時期によっては始終濃霧に覆われて視界が殆ど確保出来ない上に、交通の要所でもあるから大型トラックやバスが引つ切り無しに走り回り、四六時中高速道路並みの100km/h以上の速度を出して走行している(法定速度は60km/h)。その上現時刻は夜中の22時半である。いくら道幅があるとは云え、街灯もなく真つ暗な拳句、急

勾配と限りなくヘアピンに近い高速カーブが連続する山岳路を、走行する他の車の速度に合わせて猛スピードで、それも自分以外に3人もの命を預かった状態で走り抜けなければいけないので、俺は信号待ちで停車している間もこれ以上になく緊張していた。

せめてもの救いは今夜が満開の星空が夜空に広がる位快晴であるという事だけだろう。これで土砂降りに降られたり乳のように白くてどんよりとした霧に視界を奪われたりした日にはその場で降参し、万全を期して市内へ下りて一泊する位の事はしたと思う。実際、この道は一般に言われる意味とは違う意味で『酷道』と称されていて、大型車の横転事故やスピードの出し過ぎによる崖下への墜落事故、濃霧による視界不良で引き起こされた玉突き事故等が後を絶たない、この世界における交通難所の一つとされている。

はつきり言つて、運営が鶴の一声を掛けて戸賀ICと空賀ICの間に新しく安全な連絡道を拵えてくれればいいのだけれど、R25沿いにある店舗や商業施設の面々が黙っていないのか、そのような気配は露程も無い。だから危険な道だと認識していても一番早く確実に着けるルートがこれしかないから仕方無しに使っている。それが実情である。

信号が青に変わって車が順番に動き出す。俺は右折して一旦片道1車線の対面通行のR25に進行すると、R321との丁字交差点まで向かつてそこを左折し、片道2車線で植え込みによって形成された細い中央分離帯で仕切られた道路、R25R321重複区間戸空道路へ入っていった。

100km/h以上の速度を出しながらきつい上り坂を駆け上がって行く。右手を見るとはるか眼下に下り車線走る車のヘッドライトの白い光が点のように見えている。一応追越車線にはガードレールが設けられている区間もあるにはあるが、無い区間が殆どなので、ハンドル操作やアクセルの加減を誤れば50m以上まで一直線に飛んでいく事が余裕で可能だ。しかも頼りになる物が自車のヘ

ツドライトしかないから怖いなんてものではない。前方にワインレッドのCD5型アコードワゴンと、黒い現行型センチュリーと3代目デボネアの個人タクシーが走っていて、彼等の赤く灯す尾灯に先導されなければ恐怖のあまりまともな速度を出す事すら出来なかっただろう。俺はなるべくキープレフトを維持して極力追越車線を走らない事、そして絶対に先頭に出ない事を意識してハンドルを握り続けた。

空賀市内に入り、麓に下りて街中まで到着してから、やっと俺は極度の緊張感から解放されて人心地が付いた。

これからは再び中央高速と呼ばれる大動脈の一つである高速道路に乗っかって真砂ICまで南下するだけである。だからだろうか、寝ていてもいいぞ、と声を掛ける前に後ろから祖母と孫娘の二人分の寝息が細かいながら俺の耳まで聞こえて来た。

俺は加速車線から片道6車線ある本線車道へ合流してそのまま車の速度を上げながら、横目で隣に座っている玉緒の様子を窺った。別に寝ていても構わないのに、律儀にも彼女は静かに前を見据えていた。

その様子を見て、不覚にも俺は玉緒に話し掛けた。

「なあ……。」

「はい？」

「寝ないのか？」

「あなたが運転しておられますから……。」

「別に俺に構わずに寝ていてもいいんだぞ。」

「でも、助手席の人間も起きている方が、運転手が眠気を感じる事が少ないと云いますから……。」

「そうか……。」

好きにしろ、そう思いつつも俺は彼女なりの心配りを嬉しく感じた。

日付が変わった。

流石にずっと運転をしていたから溜まっていたのだろう。肩や腰に痛みを感じる上に軽い眠気にも襲われてきた。いかん、いかん！俺は欠伸を噛みしめると前方へ意識を集中した。

その時、

「あなた。」

という声と共に助手席から玉緒が何かを俺に差し出してきた。1枚のブラックブラックガムだった。

「どうしたんだ？これ。」

「さっきサービスエリアの売店で買っておいなんです。さ、どうぞ……。」

「あ……ありがとう。」

本当、手際がいい奴だ。俺は感心しながら彼女からガムを受け取ると口の中に放り込んだ。メンソールのきつい清涼感が俺の口内を刺激して一気に目が冴えていく。

「紙。」

「どうぞ……。」

「すまん。」「ミ。」

「この中に……。」

俺は噛み終えたガムを包み紙の中に吐き出して丸めると、玉緒が取り出したビニール袋の中へ捨てた。

「もう少しいたらまたSAがあるみたいだから、そこで少し仮眠をとらせて貰ってもいいか？」

「自由。」

「うん……。」

俺はお言葉に甘えて少し仮眠を取る事にした。

夜は静かに更けている。

第十話：長距離を走れば事故の一件位は目撃出来る

>> 新太郎

夜の帳が上がる。

夜と朝の狭間の時間帯に特有な鈍い灰色掛かった藍色に染まった景色をヘッドライトの光で切り裂きながら、並走する沢山の大型トラックの間を縫うように走り続ける。

山脈と山地の間に挟まれたように眼前に広がる壮大な台地のど真ん中を突っ切るように片道6車線の幅の広い高速道路が通り、それを囲むように近代的な工場やコンビナートやコンテナセンターが建ち並んだ工業地帯や工業団地といった施設群が犇めき合っている。そして、24時間引っ切り無しに稼働するそれらの建造物から物資や商品を各地へ搬出したり、逆に搬入したりする大型トラックやトレーラーが出入りし、高速道路を通じて目的地までの長い旅路を疾駆していた。

当然ながら日が昇って辺りが明るくなり、街中が活発に活動を始めるに連れてその数は増していき、更には企業の営業車や一般車の交通量も増えるので、6車線ある広い道路も見渡す限り色とりどりの自動車で覆いつくされ、上下線とも大渋滞を形成していた。

俺はハザードを焚きながら、同じ様にハザードとブレーキランプを点けてのろのろと動いていた白い2代目ランサーバンの営業車の後ろに、後続の青い最終型の三菱ふそうのザ・グレートの10tの無蓋車と挟まれる形で停車した。

左から4本目のレーン。右を見れば深緑色のY32セドグロのグランツーリスモと小型の焦げ茶色のコンテナを2つ載せた車を牽引している灰色の日野・プロフィアの15tのトレーラーが、左側には白いプロボックスとツラウチ（車高調でフェンダーのタイヤハウスのホイールのスリッド面が接触する限度いっぱいまで車高を落と

した状態。ハの字を作る位ネガティブキャンバーになる事が多いので、度が過ぎた状態を『鬼キャン』と蔑称する事もある）にしたどきつい黄緑色の2代目シボレー・カプリスのワゴンが同じ様にブレーキランプを点灯している状態で停止していた。

俺はハザードを切ってギアをNレンジに入れ、サイドブレーキを掛けてシートベルトを緩めると、ステアリングホイールの頭頂部を両手で抱き抱えるように持ち、顎を置くようにハンドルに寄り掛かった。

「ああ、これは……。当分動きそうもないな。」

「困りましたね。あなた……。」

「困るところか、俺からしたら寧ろ歓迎なシチュエーションではあるけどな……。」

「え　　?! どうしてですか? 社長。」

「どうしても何も、単純に休めるからな。これで微妙に動きつづけてブレーキを踏みつ放しでいなければいけない中途半端な渋滞なら最高にイライラするかも知れないが、今は完全に止まっているからなあ……。」

一時的なものだとは云え、実際に運転から解放されて手足の関節を伸ばしてリラックスしていた俺は玉緒と香澄に向かって呟いた。

ただ心配事があるとすれば、バッテリー上がりとオーバーヒートの危険があると云う事位だろうか。全く動けない状態でクリープ制動を越えてエンジンを回せない為にバッテリーへ電力を供給する発電機的能力が一気にダウンし、カーナビゲーションシステムやそれを包括して動かしているマルチオーディオシステム、そして夏真っ盛りで高温になった車内を快適な温度までガンガンに冷やしているエアコン、動き出して止まる度に点灯する制動灯や常時点いているフォグランプやテールライトと、電気をこれでもかと食いまくる電装品がフル稼働している現状では、あまりに長い時間渋滞に嵌っているとバッテリーが上がる可能性が少なからずあった。

何より危惧しなければならぬのはオーバーヒートである。高速走行中の車のように常に前から後ろへと風が流れてラジエーターが放熱した熱が拡散している時とは打って変わって、今はエンジンルーム内にどんどん熱が籠っている真つ最中である。センターコンソールに設置した電気式3連メーターの水温計を見ると、100を少し超える値を示していた。(メーターパネルの中にもタコメーターの右側に共に簡単な水温計が付いている事は勿論知っているが、メーカー純正の簡易水温計は、ドライバーを不安にさせないという理由でオーバーヒートを引き起こすギリギリの、本当に危険な状態に陥るまで針が真ん中から動かない所為で、俺は大抵後付けした方の計器を確認するようにしている。)インタークーラー(エンジンへ送る空気を冷却する為の奪熱装置、主に排気ガス圧で吸気を圧縮するターボチャージャー装着車に取り付けられている。圧縮されて熱を持った空気を走行風で冷ます事で圧縮空気の充填率を稼いでパワーアップを目指す。)をガンガンに作動させている状態とは云え、電動ファンが回っているのにこんな高温(普通は80〜90、120を超えたらアウト。)では少し先が思いやられた。まあ、3連メーターの油温計(潤滑油の温度を管理する為の計器)や油圧計(潤滑油の圧力を測る計器)の針は依然として正常値を指し示していたから、動き出せば何とでもなるだろう、と心配しつつも実の所俺はかなり事態を樂觀視していた。

時たま車の脇を、車列の隙間を縫うように、見ている此方が暑苦しく感じる位の重厚なフル装備をしたライダーが駆る後部の荷台にロープで括られた大量の荷物を積んだ川崎やスズキ等の大型オートバイが2気筒エンジンを軽快に唸らせてすり抜けて行く。所謂積載厨と呼ばれる長距離ツーリング愛好家達か何かだろう。

急に電源が落ちて立往生する事もボンネットから突然白煙が上がる事もなく、渋滞が解消すると共にレパードは少しずつだが動き出

し、俺はシートベルトを締めてシートに座り直すと徐々に速度を上げて行つた。

整然と周辺を埋め尽くしていた工場やビルがまばらになっていき、交差する自動車専用道とのJCTを通過して郊外の住宅地へ入つて行くに連れ、高速道路の車線数が片道6本から4本と減少し、到頭片道3車線の道路がなだらかにカーブとトンネルを連ねながら峠越えをする区間へやつて来た。

必死に車体を前後に揺らつつ前を走る白色のHB23S型キャロルの5ドアに追いついたので、俺は右ウインカーを出してミラーと目視で右後方を視認すると、真ん中のレーンから追越車線へと車線変更した。そして、アクセルを踏み込みながらふとキャロルの黄色いナンバープレートを手元に見した。

『仙谷 530 け 12・0』

仙谷？3000km近い距離を、大部分で高速道路を使わなければいけないような道程をこんなちっぽけで非力な、どんなに頑張つて出しても120km付近で頭打ちになるような軽自動車で移動してきたのか？何というか、御苦勞様です、と俺はキャロルの運転手を労いたくなった。

そして白い軽自動車を左のドアミラー越しに見ながら50m前を走る白いノーマルの後期型の100系マーク？の後に続いて走っていると、後ろの方から勇ましい轟音をがなり立てつつ此方を追走する、黒いレンズのレイバンのサングラスを掛けた柄の悪そうな兄ちゃん、の運転する黒いフルスモークの白いKA9レジェンドの前期が、何発もパッシングしながら凄い勢いで迫ってくるのがルームミラーに映つたので、俺は左ウインカーを焚くとそそくさと真ん中の走行車線へ避難し、軽くブレーキを掛けて直ぐ目の前を走るラベンダーメタリックのパスポートCCの速度に合わせた。

哀れ。俺と同じ様に左ウインカーを点滅して走行車線へ逃げよう

としたものの、直ぐ左隣を並走していたパサートに行く手を阻まれたマーク？は、バンパーが接触する位まで非常識な接近をしてきたレジェンドに、10発以上もピカピカとパッシングされるわ、15秒以上もあるような長いホーンを3度も鳴らされるわ、これでもかと云う程執拗な煽り行為を受けていた。左後のドアの窓硝子からチラリと見えているだけであるとは云えど、四角いレンズの眼鏡を掛けた人の良さそうな顔立ちをしたマーク？のドライバーの男性が鬼気迫る形相で必死にアクセルを踏み、冷や汗を掻いている様がよく分かる。他人事ながらも俺は心底気の毒に思った。

しかしここは高速道路。たとえそれが400km/hに迫るような気違いじみた速度であつたにせよ、速い奴が優先。常に360度前後左右に気を配って自らの進路を確保しつつ、後方から自分よりスピードを出している車が来れば速やかに譲らなければならない。それがかつてのアウトバーンの如く全線速度無制限のこの世界の高速道路における一種の鉄の掟として暗黙の了解の元に日常的に高速を利用する職業ドライバー達の間で共有されている。だからマーク？の運転手に個人的には同情を禁じ得なかったが、同じドライバーとして見ると、焦つてまで自分のペースを固持せずに急加速してさつさとワーゲンの前へ出てしまえば直ぐに解決するのに阿保だなあ、とやや蔑みに似た感情を抱いて俺は冷ややかな視線を送っていた。

だが、何故か似合つても居ないのにトランクリッドに黒いカーボン繊維製の馬鹿でかいGTウイングを装着したレジェンドにも俺は一言咎めたかつた。別に煽るなどまでは言わないが、それならそうと守るべき手順があるだろう。いきなり前車に向かつてハイビームを点滅させるとは何事だろうか。マナー違反にも程があるだろう。

先ず、追越車線または片道一車線の道路を走行する前の車を追いつく時には、自分が追い越すという意味表示をした上で相手に譲ってくれるように丁寧に頼まなければならない。即ちセンターライン方向へ（左通行なら右、右が通行なら逆）にウインカーを焚いて、『すみませんが追い越したいので路肩の方へ退いて貰えませんか。』

と合図を送らなければならない。そうして前車が走行車線へ戻る、または路肩に向かってウインカーを出しながら路肩に寄った時（左側通行なら左、右側通行なら右。接近してきた後続車両に対して、『安全なので、どうぞこのまま私を追い越して行って下さい。』という意味がある。）に初めて追い越しを仕掛けなければいけない。勿論進路を譲って貰ったからにはハザードランプでお礼やお詫びの意思を提示しなければいけない。いきなりパッシングとクラクションの連打で煽りまくった挙句、追い抜いた後は何のリアクションも無く走り去って行くなんて言語道断にも程がある。相手が相手ならそのまま追い掛けられた挙句面倒な争いの火種にもなりかねん。こんなドライバー同士のコミュニケーションの中で培われた不文律なルールなど、交通教本や道交法には一切記述されていないが、だからといって公道を走行している以上知らなかったでは決して済まされない。

こうして改めて考えると、車の運転って門戸が広いようで案外閉鎖的な世界かも知れない。ただ単に動かす事以上に、全世界はもとより、例えば『名古屋走り』や『伊予の早曲がり』や『松本ルール』といった、地域毎の違法性の高いローカルルールや俺ルール等も含めると知って於かなければならない、各ドライバー同士の阿吽の呼吸を前提としたルールが多過ぎる。しかもそれに加えて危険予知もしなければならぬ。

そう言えば、現実世界で免許を取る為に教習所に通っていた頃、同乗していた教官がこんな事を言っていた。

「1人前のドライバーになるには少なくとも5年以上、大体3万km分の走行経験が必要だ。そこまで走れば大抵のシチュエーションは嫌でも経験できるから。」

と……。尤も俺は子供の頃からの車好きが高じて、車の運転方法から地方のローカルルール、自動車の特性からその危険性、どういう場所でどういう危ない状況に陥る危険性があるか等、殆どの事は頭

の中に叩き込んでいたので、スピード違反などで検挙された事以外では現在まで運転で苦労した事もなく、どんな車でも少し動かせば、すぐに車両感覚を掴んで自分の手足と同じ様に自由自在に動かせるが、今まで興味がなかったけれど必要に迫られて運転を始めたばかりの人や滅多に車を運転しない人達にとっては分らない事だらけなのかもしれない。いくら速い奴が正義と建前上はなっているとは云え、決して空いている訳ではない道路上の車の流れを読まずにスピードを出して突っ込んで来たGTウイングの根元に若葉マークを貼りつけたレジエンドの若造や、中途半端に遅い速度で追越車線走り続けた拳句、煽られて焦燥感にかられてもスピードを出さずに自分のペースを守る事に固執するおっさんを見て、俺はそんな事を考えつつ、前を走るパサートとマーク？を追い越した。

しかしながら、まあ……下手糞だなあ、と俺は前を走っていたレジエンドを観察して思った。速度出して前の車を纏めて蹴散らしてくれるので、後ろに走っている俺としては楽が出来るので結構な事なのだが、如何せん前走車に迫り着く度に急ブレーキを掛けるのだ。前が詰まっている事が判っているだから、エンブレを使って上手い事速度を調節し、ブレーキを踏まずにスマートな走りをする事は出来ないのか？と3台前と2台前辺りを走る車の動きを基準にしてアクセルを調節して一定速度で走行しながら俺は心の中で毒づいた。

大体追越車線から抜く事が全てじゃないだろう。そんなにスピードが出したいなら左に右に車線変更を繰り返して他の車の間をすり抜けるような危険運転でも余裕で熟せるような運転技術位は持ち合わせておけ。

高地を越えて大都市の郊外から段々と人家も疎らな田園地帯へ景色が移り変わって行くと、急に車が少なくなったので250km/hまで加速し、真ん中の車線から追越車線のレジエンドを追い抜くと、レジエンドはまるでレパードにムキになって対抗するようにス

ピードを上げ始めた。意味が分からない。GTウイングを付けて車高を下けているが、その他ははつきり言ってドノーマルである。恐らくスーパーチャージャーなんて高価な物を装着してはいない普通のNAエンジン車だろう。いくらホンダが誇るVTEC系のエンジンが1L当たり100PSの高出力を誇る高性能エンジンだとしても350PS、下手すると280馬力規制（かつて日本車限定で存在したエンジンの出力規制。80年代後半、車の高性能化と共にスピードが出過ぎる事により死亡事故が多発する事を危惧した当時の運輸省が、89年に国産市販車の中で初めて280PSの壁を破ったZ32型フェアレディZの発売を期に事実上の行政指導をしてメーカーに自主規制を強いた、所謂『自動車馬力規制』の事。2004年に業界団体からの要請で撤廃。現在、その年に発売された現行レジェンドを始めとして続々と300PS超の日本車が誕生している。）下の時の車両だから、実力すら出せない設定に縛られている可能性すらある。自然吸気でSOHCエンジンのFF車が2つの小型ターボチャージャーとその他改造で500PSまでチューンアップした俺のDOHCエンジンのFR車に勝負を挑んだところで、結果は火を見るより明らかだろうに……。それとも一見すると少々派手なドレスアップを施したタクシーである上に、4人も乗っているから重量的にいけると踏んだのか……。だとしたら目測を誤ったとしか言い様がない。

それに俺だってプロドライバーである以上初心者マークを付けているような奴に負けるなんて屈辱的な目には遭いたくはない。だから他の車を間一髪のところですり抜けつつレジェンドを振り切る為に車をキックバックさせた。

250……260……270……。とうに速度計の針は振り切れているがレジェンドはまだ食らいついている。意外としぶとい。

レーンを移動する度に車体が大きく左右に揺れ、高架の橋脚の繋ぎ目のようなごく微妙な段差でさえも乗り上げる毎に跳ね上がる。後部座席の方で悲鳴や念仏が、隣から玉緒の叫び声が聞こえている

気がするが、強いて意識する気にはなれなかった。

「あなた止めて！いくらなんでもスピードの出し過ぎですわ！お願いですから……。」

「煩い！黙っている！集中出来ない。」

俺は玉緒にそう怒鳴り付けると、チラリとルームミラーを見て舌打ちをした。

「ちっ、しつこい奴め……。まだ追い駆けて来やがる。」

一番左の車線から、真ん中の車線を走る黒い現行フォワードの7tの無蓋車の後部と、それを追い越す為に接近しつつあった真っ白な新車のいすゞ・ガラのフロントバンパーの間に出来ていた15m程の隙間に滑り込み、そのまま追越車線へ飛び出してフォワードの前に出ると、俺は目の前に現れた物を見て目が点になり、すぐにハツとしてハザードを焚き、急ブレーキを踏み込んでそのまま車を路肩に設けられた広いスペースへ退避させた。

そうして落ち着いてからもう一度目の前の光景を改めて確認する。目の前には後ろのアルミの箱の観音扉の右の片割れをだらしく開けた1台のオリーブ色の初代プロフィアの10tの有蓋車がハザードを出して停車している。そしてその周り、主に右舷の半ばから後ろ一帯の路上に積荷と思しき梱包用のくすんだベージュ色をした、きちんと折り畳められているダンボール箱の束が一面に散逸していた。どうやら何かの拍子に荷台の扉が開いて御覧の有様になってしまったらしい。先程からトラックの運転台の傍に立っている運転手らしき薄い萌黄色の作業着を着た男が、道路に散在してしまった落し物を回収する為に後続の車に向かって真黄色な火花を煌々と散らす発炎筒を振りかざし、注意を促して停止させている。

気が付くと俺の車のすぐ隣にある左車線に、同じ様にハザードを焚いたフォワードとガラがエアブレーキからプシュ　ツと空気が漏れる音を立てながら静かに停車した。そして後ろのバスの自動扉が静かに開いたと思ったら、運転台から運転手が降りて来る

のが見えたので、俺もシートベルトを外して停車措置をすると玉緒に声を掛けた。

「すまん、ちょっと……。」

そして玉緒の少しむつちりとした柔らかい太腿の上に左手を据えつつ上半身を助手席の方へ乗り出すと、俺はグローブボックスの下の方でスプレー型の消化器や黄色いシートベルトカッター付きの水没脱出用のハンマーと共に常備している赤い発炎筒へ手を伸ばした。

発炎筒を片手に車外へ降り立って後方へ視線を向けると、既に多くの後続車が異変を察知し、出来るだけ路肩の方へ寄る感じで停車しようとしているのが見て取れた。

その時だった。

キキ

ッ……ドスッ！……キュルルル

ルルズゴ

ン……ビ

……………。

突然急ブレーキによるスキール音が耳に入ってきたと思ったら、軽い衝突音と車がスリップして回転するような音が聞こえ、まるで雷が落ちたような轟音と共に俺の車の前に停まっている大型トラックの前の少し離れた路肩に設置されている屈強なガードレールに、例の白いレジエンドが右後部から突っ込んでクラッシュし、バウンドして再度一回転すると此方に向けた状態でやっと第一通行帯上に静止した。そして哀愁の漂う犬の遠吠えの如く虚しくて長いクラクシオンを鳴らすと、レジエンドはハザードを出して力尽きた。どうやら、ダンボール箱を踏んでスリップして車体が跳ね上がった制御を失い、そのまま一度中央分離帯のコンクリート製のガード帯に接触し、そのまま横滑りしながら路肩の方へ吹っ飛ばされて来たらしい。エアロがぱっくりと割れて、ネジ曲がって切断された後部バンパーや破裂したマフラーを頭にし、右側のテールランプにはひび割れが入った上に一部が砕け散って中の反射鏡が丸見えになっている。フレームがやられたのか撥ね開いて閉まらなくなった、惨めなほど締りの無くなったトランクリッドが余計に此方の涙を誘う。

おまけに最初に中央分離帯に接触した部分なのだろう、右のフロントの角、バンパーが少し外れて曲がった場所からフロントフェンダーの頂上辺りに掛けて銀色の引っかけ傷をキラキラとさせつつ大きな凹みが形成されていた。

車内へ目を向けると、役目を終えた白いエアバックがだらしなく垂れ下がったステアリングホイールに寄り掛かって眠るように、件の運転手が失神しているのがガラスフィルム越しでもよく見える。

突然目の前で起きた交通事故を目の当たりにしてどよめきつつも、周辺の自動車から大勢のドライバーが降りてきて瞬く間にレジエンドの周りを囲んでいる。だが、中にいる兄ちゃんを助けだして介抱しようにも、ドアを施錠していたのか、それともクラッシュした衝撃でトランク部分だけでなくサイド全体のシャシーとフレームが歪んだのか、ドアを開ける事が出来ない。時間が経つばかりで手を拱いているしかない状況に陥ってしまった。

周囲に目を向けると、偶然にも俺は事故車から更に200m行つた所に、故障車などを停める為に路肩から更に外側へ大きく張り出した緊急退避所が道路に設けられている事に気が付いた。待避所には絶対に道路管理者や警察・消防へ通報する為の非常電話が設置されている。俺はそこに向かって路肩を走りだした。

退避スペースに着くと、予想通り銀色のガードレールの裏側と盛土の端の隙間に1本の白くて少し太くて短い鉄柱が立っており、まるで鳥の巣箱を彷彿とさせるようなベージュ色の鉄製の細長い直方体のケースの中に安置された非常電話がその上に螺子留めされていた。

俺は『非常電話』と書かれた緑色のケースの蓋を開け、饅頭が詰め込まれた箱の如く縦に長くて幅も狭い直方体の、ボタンが数個取り付けられている事以外はのっぺらぼうな白い機械にコード付きの黒い受話器が取り付けられたようなシンプルだが味気ない非常電話

に目を留めると、迷いなく受話器をとって自分の耳に当て、『事故』と表示されているボタンを勢い良く押した。

「はい。こちら道路管理局です。どうなされましたか？」

電話の受話器から低い男性の声が聞こえて来た。

「ここから200m程手前の所で（非常電話は番号で管理されているので、電話が掛かってくれば、管理者側には高速道路のどの非常電話から掛けられたのか瞬時に判別出来るので、此方から細かい場所を伝える必要はない。また、非常電話以外からの電話でも上下線と道路上にあるキロポストの数字を伝えれば細かい位置を伝える事が出来る）トラックが落とした落し物に後続車が乗り上げて単独事故を起こして道路が通れなくなっていました。あと、単独事故を起こした車の運転手の意識が不明です。すぐに救急要請もお願いします。」

「わかりました。すぐに手配します。通報ありがとうございました。」

俺は受話器を元に戻してケースをやや乱暴に閉めると、事故現場の方へ引き返した。

5分位経った頃だろうか……。

ウ …… ファンファンファン……ピ ポ

ピ ポ …… カンカンカン……と、サイレンを

賑やかに響かせながら、こっちの車線を先のインターから逆走するようにハイビームを点けて赤色灯を灯した、パトカーや救急車といった種々の緊急車両が続々と勢い良く突っ込むように事故車両の周りに停車した。

直ちに警察官や保安官達によって手際良く通行止めの手配が取られ、事故検分が始まる中、レジェンドの周りではレスキュー隊による運転手の救助活動が並行して行われようとしていた。

明るい赤味掛かった橙色の制服を着た一人の隊員がハンマーで運転席のドアの強化ガラスを叩き割ると、ドアノブのドアロックボタ

ンに手を掛けてドアを開錠し、そのまま体重を掛けて右側の前扉を開こうとした。だが、開かない……。

「駄目だ！ フレームが曲がって開かなくなってしまっている！ 誰か、油圧カッター、持って来い！」

「了解！」

別の隊員達が現行プロファイアの赤いレスキュー隊の消防車の中から油圧救助機材を急いで持って来た。

「じゃあ、行くぞ！ それっ！」

ドアの開閉部の蝶番の部分に分厚くて鋭利なペンチのカッターの刃が挿入され、ガシツガシツと鋭い音を立てながらフレームごと車体を切断していく。そしてレスキュー隊員達はドアの窓と下の隙間に細い鋼鉄製のワイヤーを通して結びつけると、威勢よくワイヤーを引っ張ってドアを強引に取り外してしまった。

隊員の一人がサンングラスを掛けた兄ちゃんの肩を激しく揺らしながら大声で呼びかけている。

「もしもし！ 大丈夫ですか？ 意識があるなら返事して下さい！ もしも し！……駄目だ……。意識がない。緊急搬送だ！ 救命班、ストレッチャー急げ！」

「はい！……こっち来て！ よ し、オーライ、オーライ！」

近くにいた警察官の誘導によって、事故車のすぐ近くまで、事前に逆走状態から転回して緊急搬送に向けて待機していた200系ハイエースの救急車が後退して停車し、ハッチバックドアを開けた救急隊員によって、足が折り畳み収納式になっている搬送用の緑色のストレッチャーが運びだされた。

その後、救助したレスキュー隊員達によってストレッチャーの上に仰向けに寝かされたレジェンドのドライバーは、救急救命士達による必死の応急処置を受けながらそのまま病院へ運ばれて行ってしまった。

レスキュー隊が引き上げ、警察官や道路管理局の作業員らによる

事故の検証と落し物の回収作業が無事に終わった後、ようやく通行止めが解除され、警察官等によって交通整理されつつも、事故の影響で渋滞していた車の列が少しずつだが動き始めた。

俺もエンジンを点けっ放しで路肩に放置していた自分の車に乗り込むと、ギアをリバーズに入れてサイドブレーキを解除し、助手席の背もたれに左腕を回して上半身を左後ろの方へ乗り出し、ブレーキを踏みながら徐々に車を後退させて行った。

ある程度さがった所で一度車を止めてギアをドライブに切り替えると、俺は右ウインカーを焚き、本線の車列に入る為に右後方へ振り返った。

丁度俺の車の右の角のすぐ傍の第一通行帯に停車していた派手なピンク色をしたE120系カロラアルティス（カロラの東南アジア仕様）のフルエアロ装備の個人タクシーとスバルブルーのGD型インプレッサの後期の間に隙間が出来ていたので、この両車の間に割り込む為に、ほんの少しブレーキを緩めて車体をなすり着けるように微妙に前進していった。

そして何とか本線に合流して事故現場を抜け、また車が流れだしてアクセルを思い切り踏めるようになった頃、俺は迂闊にも自分がシートベルトを締めずに車を運転し続けている事にふと思い当たった。

「お、いけない！」

「あら？どういたしましたの？あなた。」

「ああ、いや、大したことじゃない。気にしないでくれ。」

玉緒に向かってそう言うと、まるで田舎の直線路でよく見られるそのように、ハンドルを左手で掴みつつ右手をシートベルトに引っ掛け、たとえそれがほんの数秒な間の事であつたにせよ、俺は車を200kmオーバーで走らせているにも関わらず両手をステアリングホイールから離して3点式シートベルトのバックルを填めた。

そう言えば、そろそろガソリンの残量が心もとなくなってきた気

がする。次にスタンド有りのSAが見えてきたら休憩も兼ねて寄って行こうか。そんな事を俺はハンドルを握りながら考えた。

最寄りのSAで休憩を取ってから、本線への出口の手前に設けられた、普通車10台以上、大型車も5台位一度に給油出来そうな大きなガソリンスタンドにレパードは入店した。

俺が車を停めると、少し小太りな、中肉中背の霞んだオレンジ色の制服を着た男の店員が車の所へ近付いて来たので、俺は運転席のドアのヒンジに付いているパワーウィンドウのスイッチを思い切り押した。

「いらつしやいませ。今日はどのような御用でしょうか？」

「ハイオク満タン。それと空気圧。」

「畏まりました。少々お待ち下さい。」

男が去ると今度は逆にスイッチを勢い良く持ち上げて、俺は窓を閉めた。

窓が拭かれ、タイヤのチェックが済み、燃料計がFULLを指した事を確認すると、俺は再び窓を全開にした。

「お待たせしました。請求書です。確認の上、精算の程をよろしく願います。」

「はいはい……。うっ?!」

俺は軽い気持ちで、先程の店員から受け取った紙上に記載された額面に目を通し、図らずも言葉を詰まらせてしまった。

『2,400G』

そう、そこにはボールペンの黒い油性インキで殴り書きされていた。高い！高いよ。昨日仮眠を取る序でに給油した時は、たった千五百20Gだけで済ませられたのに……。

当然、俺は店員へ抗議した。

「2千4百?!冗談だろ?いくら何でも高過ぎるだろ?何かの間違いじゃないか?」

「いいえ、そんな事は無い筈ですが……。ハイオクを80Lお入れになりましたよね？」

「確かに入れたよ？でもさ、それでこの値段になるか？普通。」

「ウチは、ハイオク1L辺り30Gで販売させて頂いて居りますので……。」

何食わぬ顔でこう言い切った店員の顔を、俺は啞然としつつ見つめていた。考えてみる。現実世界でハイオクをリッター300円で売りつけて平然としていられるスタンドがあれば、文句の一つだって付けなくなるだろう。ましてやそれが高速上にある。ある種必要に迫られて入れるような所なら尚更だ。

「30G?!ボリ過ぎだろ!巫山戯んな!冗談を言うのも程々にしてくれ!」

そう叫んだ瞬間、店員の顔が険しくなった。

「ああ?ガソリンを何ぼで売ろうが、此方の勝手じゃろうが!文句あんのか?ゴラァ!」

「はあ?文句あるに決まってるやろうが!客舐め腐るのもええ加減にせえ!しばいたるぞ!せめて3割引に負けるや!高過ぎんのや!」

「はあ?30%も引けるか、ボケツ!そっちも客商売しとるんじやったら判るじやろ?そんな値段で売ったら此方が赤字になるけんのお。」

「んなもん知るか!此方やって仕事柄各地の給油所巡るとるから何処がどういふ値で売っとるか、大体の相場は把握しとるわ!この辺やったら、大体1L19から20Gが相場やろ!何で10Gも上乗せする必要があんねん?客馬鹿にすんのも大概にせえよ!」

「ああ、そうかい。分かったけん。金払う気がないんじやったら、今すぐガソリン抜いてとつと去れ!」

「はあ?別に払わんとは言つとらんやろ!阿保!正規の値段まで下げろつて言うただけやろが!」

逆上したあまり思わずお互いに方言を丸出しにしつつ、俺と店員は車のドア越しにそれぞれ目の前の相手へ罵詈雑言を吹っかけ、払

え、払わない、と云った後から思えば下らない言い争いを、人目も憚らずに大声で繰り広げた。

「あ……あなた……。」

不意に隣から玉緒の声が聞こえて来たので、俺は彼女の方へ振り返った。流石に自分の嫁を睨みつけたり、怒鳴りつけたりする訳にもいかないので、一度前方へ目を向けた時、気持ちを落ち着けようと息を整えたものの、不機嫌な感情が滲み出てしまっていた。が、兎に角俺は彼女の方へ振り向いた。

「何だ？」

「何だ？……じゃないですわ。少し落ち着いて下さい。皆怖がっていますわ。」

「……………」

俺は思わず車内を見回した。玉緒の言う通り、確かに女性陣3人が三者共怯えたような表情をしながら、雰囲気的に遠巻きに見るように俺へ向かって冷めた視線を向けている事に今更ながら気が付いた。そして他人の視線を意識しだした途端、何故か俺は猛烈に心苦しくなり、己の所作が非常に恥ずかしいものに思えてきた。

だが、一度言い出した物を今になって引つ込めるのは、それはそれでみっともない。

どうしたものか、と暫し思索していると、またもや玉緒が、

「人目もありますし、勉強料だと思って払って上げれば宜しいじゃないませんか。」

と助け舟を出してくれた。

「分かった……。まあ、気に食わないが、千Gで、こんな糞な店もあるのだ、と社会勉強が出来るなら、それはそれで良とするか……。」

「

俺は半ば投げ遣りにそう言うと、改めて店員の男と向き合って左手首の機械を押し付けた。

「分かった。払うよ。払えば良いんだろ？ほい、2千4百Gだ！持

って行け、泥棒め！」

「はい、確かに戴きましたよ。またのお越しをお待ちしています。」
「もう二度と来るか！」

俺はパワーウィンドウのスイッチに手を掛けて窓を全閉すると、
発車措置をしてアクセルを全開にした。レパードは車体後部に思い
切り車重を移しつつ後輪をスピンさせ、爆発したかのように白煙を
立てて大きなスキール音を上げながら勢い良く前へとびだして行っ
た。

その後、荒涼とした平原が続く可瑠盤地方へ車は入って行く。思
わぬトラブルの所為で予定より到着が大分遅れてしまったが、この
まま行けば夕方頃までには何とか着けるだろう。

今まさにSAから本線へ合流しようとしていたその刹那、たまた
ま目に入ったインパネのデジタル時計を見て、俺はそんな事をぼん
やりと考えた。

第十一話：イベント当日・朝

>>新太郎

『ようこそ真砂市へ、そしておかえりなさい。』

『ここから真砂市』

市章と一緒にそんなメッセージが書かれた看板が、薄い緑色に染まった草原と森と、所々に点在する畑と住宅が寄り集まった小さな集落達を突っ切る高速道路の傍らに立て掛けられている。

もう午後の3時を過ぎているが、夏場だからまだまだ日は高い。

この分なら確実に日が高い内に目的地に到着出来るだろう……。何だかんだと20時間以上運転してきた疲れが溜まったのか、固まってゴキゴキと軋む両肩と首の痛みに閉口しつつも、後もう少しすれば存分に休憩できる、それまで頑張れ、俺！と自分の身体に鞭打ち、気合を入れて俺はステアリングホイールを握り直した。

ICのETCで料金を精算し、穏やかな丘陵地帯を走る一般道R9を海沿いに西南へ南下する。周囲には地表にうつすらと草木が生えた砂丘が広がり、向かって左側には藍色に輝く透明な深淵が何処までも広がる海洋が臨んでいる。そして、レパードは黄色い中央線が一本だけ引かれた黒々としたアスファルトのなだらかなカーブが続く片道一車線の対面道路を、前を走るR33スカイラインや3代目ボルボ・V70に続いて100km/h程度のスピードで順風満帆に流していた。

たまに道の左右に住居や商店等の一軒家のような小さな建物や狭い田畑が唐突に現れる以外は何もない長閑な田舎道が何処までも伸びている。気のせいか対向してくる車も、勿論基幹路線故に大きなトラックが主体である事には変わりないが、3台か4台に1台程度の割合で、ミラやアルトのような軽自動車とか、ハイゼットやサンバーといった軽トラに遭遇する確率が高くなった。だが、その代わ

りタクシーとすれ違う回数はグツと減ってしまった。いや、並走している事は並走しているのだが、どれもこれも今回のイベントに参加するらしき他市ナンバーの個人タクシーや法人企業の手ばかりで、地元のタクシーは殆ど見かけない事は出来なかった。

こう云う無駄に広大なばかりで人が少ない田舎だと、流し運行ではとてもじゃないが採算が取れないので、専ら迎車運行が主体となる。そんな事を人伝に耳にした事があるが、まさかここまでとは思わなかった。

やがて道は海から逸れ、やや内陸の丘陵地帯の上の方へ登って行き、やがてイベント会場である真砂市営総合市民公園に到着した。

壮大な自然が視界いっぱい広がる、東京ドーム3個分程度の広大な敷地に、キャンプ場や各種スポーツ施設、遊技場やキャンプ場といった諸施設が点在する、公営施設の為に格安で利用出来るレジャー施設である。

その一角にある、2千台以上収容できる大駐車場と、隣接する1万人位までなら野外イベント広場、そしてF1やスーパーGTといった公式種目でも使用可能な本格的なモーターサーキットコースが主な会場として使用される予定だと、事前に主催者側から届いた書状から俺はそう聞いていた。

前を走る白い40系カムの前期型の個人タクシーの後ろに着くように、駐車場のゲート前に続々と一直線に連なった車列にハザードを点滅させながら並び、俺は車を停車させた。

駐車場のゲートに入ると、アイボリー色のジャージを羽織った、左手にタブレット型の銀色の電子端末を持っている一人の若い男のスタッフがやって来たので、俺は窓を全開にした。

「こんにちは！御苦労様です。参加者の方でしょうか？」

「はい、そうですか……。」

「名前と所属、登録番号を口頭でお願いできますか？」

「あ、はい。……高津 新太郎。個人タクシー連合所属個人タクシー事業者高津タクシー。登録番号は確か……。」

俺は係の人から目を逸らすと、スーツのジャケットの左ポケットに丸めていたメモ帳の紙片を出して広げた。

「00681!」

俺がそう答えると、目の前の男は俯いて手元のタッチパネルに何かを打ち込んでいった。

「はい!ナンバー00681、高津様ですね?確認しました。H区画の41番になります。このゼッケンをフロントガラスの外からよく分かる場所に貼り着けて下さい。中で改めて誘導員が誘導しますので、係りの者の指示に従って進んで下さい。」

そう言うとそのスタッフは俺に、ゲートの発券所の中にある灰色の特殊複合プリンターが吐き出した「0068番個人タクシー連合所属・個人タクシー・高津タクシー事業所H-41」という表記と共に個人タクシー連合のギルド章が大きく印字された白いアクリルパネルのゼッケンボードを手渡した。

俺はそれを受け取ると、ダッシュボードの運転席側、計器類を収納する為にそこだけ大きくぽっこりと膨らんだダッシュボードカバの裏側に手を伸ばし、そこに置いていた運行記録書が挟まれた黒いファイルをセンターコンソールと運転席のシートの隙間に縦にして挟み込み、代わりに今し方渡されたそれを立て掛けた。ちよつと寝かせ気味になってしまったが、前からなら車外からも見えないことは決して無いだろう。

見渡す限り白線と黒々とした舗装されたばかりアスファルトが何処までも続いた。ただ広い駐車場の構内では赤く明滅する誘導灯を手にした数十人のガードマンが交通整理を行っており、車で接近すると、誘導灯を左右に振って行き先を指示している。

そして導かれるままに駐車場の中を進んで行くと、やがて左右に一台ずつ駐車スペースを空けて横列駐車する色とりどりのタクシー

の群れが俺達の目の中に飛び込んで来た。

帝都無線、八栄タクシー、市松自動車、ニッセン交通、大和ハイヤーサービス、個人タクシー連合、個人タクシー連盟、個人タクシー同盟、YMO等の大手から、その他中小グループに到るまで、ただのタクシー車両の宣伝と展示会だとは云えそれぞれの企業・団体の看板を背負っているからか、どの車も堂々と構え、どこか誇らしげに見える。

他と同じ様に両側が空けられた『H-41』と白い印が路面に付けられた駐車スペースの前に来た。

俺はハザードのスイッチを入れ、車を通路の左側に少しだけ寄せ、右側に顔を向け、2台先のパーキングスペースの真ん中を通る線に目線を合わせて停車すると、そのままギアをリバースに入れてルームミラーに視線を移し、ステアリングを限界まで右へ切りながらゆっくりと車を後退させ、駐車スペースに滑り込んで行った。そして車が完全に真っ直ぐになって後ろ側に背中合わせに停まる車の後部バンパーが近付くと、ドアを少し開けて上半身を外へ乗り出しつつ、ステアリングを戻してギリギリ白線の外へでない辺りまで進み、ブレーキングして停車措置を施し、全ての灯火類のスイッチとエンジンンを切った後、やや鷹揚にシートベルトを外した。

「よし！着いたぞ！皆、長時間お疲れ様でした。」

と、俺が声を掛けると、

「あ~~~~、やっと着いた！……疲れた…………。」

と、香澄が何とも間延びした声を出した。

「何言っているんだ……。ただ長時間座っていただけじゃないか……。」

「だって……。同じ姿勢でこんなに長い間固定されていたんですよ。疲れちゃいますよう。」

香澄は俺に向かって顔を顰めると、口を窄めた。

「まだまだだなあ。此方は同じ姿勢を取りながらずっと運転をしていたんだぞ。……ああ、肩痛え……。」

俺は左手を右手に回すと、ゴリゴリと関節が唸る肩を揉みしだき、首をグルグルと回した。

車から降りて荷物を下ろし、施錠する。

その後、駐車場を縦断する感じで展示スペースとは別の区画へ移動した。

そこには、年式や車種、メーカーを問わず100台以上のトレーラーヘッドが横列で停められていた。

そしてそれぞれの車には、トレーラーの台車の上に、アルミ製のコンテナの代わりにプレハブみたいな白い無機質な直方体の建物を据えた、所謂トレーラーハウスと呼ばれる物が堂々と連結されていた。主催者側が参加者の為に用意した、今夜から我々が2日ばかり世話になる簡易宿泊施設である。

無論、この公園にも市営の宿泊施設があるにはあるのだが、駐車場から距離がある事と、そっちは祭りに観覧に来た行脚客が使用する事になっている点から、俺達は纏めてこれらの移動住宅を少しの間だけ間借りする事に相成ったのである。

トレーラーハウスの中は左側に白いリノリウム敷の廊下があり、手前にある男女別のトイレと奥にある男女共用のシャワールームを除けば10程の区画に分けられており、それぞれ2畳程しかないグレーのカーペットが敷き詰められた正方形の狭い部屋に、それぞれに白いカーテンが掛けられた緑色の薄いベッドマットの簡単な二段ベッドが二組備え付けられ、正面に見える薄い水色のカーテンが閉められた一枚窓の下に8インチ程のテレビモニターと2つのスピーカーが埋め込まれているという、まるで鉄道の片側通路式簡易寝台客車を少しだけ快適にしたような造りをしていた。

俺は横になれるのならこれでも十分だと思ったが、女性陣は全く

快く思わなかったようだ。

「まあっ……………」

「これは……ちょっと恥ずかしいですわ。」

「最悪！」

早速三者三様にリアクションを取り、そしてじつと俺に冷水のような冷め切った視線を送ってきた。しかしながらこの件に関して俺に文句を言われても困惑するしかないし、2日間の間だけだからと宥めて我慢して貰うしかない。

「まあ、我慢してくれ。幸いな事にこの部屋に関して言えば俺達以外の利用者はいないだし。何処の馬の骨か判らない奴との相部屋や、ずっと車中泊と云うよりは断然良いだろ？」

「それは、まあ……。」

「そ、そうかもしれないけど……。」

「心配しなくても、お前等の身体をガン見するような野暮な真似はする気は無いから安心しろ。特に興味もないし。何よりも疲れた。明日に備えて早く寝たいしな。」

俺がそう断言すると、彼女らは白けたような顔をしながらまた互いの顔を窺い始めた。

「それはそれでちよつと……。」

「興味がないって仰られるのも、妻としてそれはそれで悲しいですわ……。」

もう勝手にしろ、心のなかでそう怒鳴ると、俺は入り口から見て左側の上の方にあるベッドに飛び乗ると、そのまま横になって目を瞑った。

翌朝6時前。

いの一番に起き上がった俺は、他の三名を起こさないように静かに下に降りると、自分と玉緒のスーツケースの中から、前日までに作成していた白いA4サイズの両面刷りのチラシの束と、30cm程の長さのチェーン、そして、

『お気軽に御見学して下さい。宜しければ のチラシも御自由にお取り下さい。ただし当車は禁煙車につき、煙草は御遠慮下さる様お願い致します。』

と書かれた紙が入った透明なヘッドレストカバー等を手にすると、自分の車へ向かって歩き出した。

展示車両が駐車された周囲では、既に多くの人が今日の祭りに向けて準備を進めているようだった。

レパードに乗り込むと、真っ先に俺は自動ドアを制御して左後ろのドアを全開し、ヘッドレストカバーを、表示が後ろを向くように助手席のヘッドレストに取り付けた。その後、持ってきた黄色い鎖の両端に付いた銀色の留め具を、ドライバースシートとコ・ドライバースシートの各々のセンター側、ヘッドレストの高さを調節する真鍮で造られた細い円柱状の金具にそれぞれ嵌め付けて固定し、後部座席から前部座席の方へ移動できないように処置をした。

そして、俺は車検証などの貴重品や金目の物をグローブボックスへ仕舞う為に、辺りを見回した。すると、奇妙な事に普段グローブボックスの下に放置している発炎筒が、どういう訳かセンターコンソールのフロアシフトの付近、ドリンクホルダーの中にすっぽりと収まっている事に気が付いた。

一瞬狐につままれたような気がしたが、よくよく思い出してみると、昨日落日物の現場に遭遇した時に発炎筒を持ち出してから、事故を目撃したどさくさの所為で元の場所に戻さず、そのままになってしまっていた。俺は今更ながら発炎筒をダッシュボードの下方部の定位置へ固定すると、グローブボックスを開いて運行記録簿やその他の雑多な貴重品を押し込むと、キーをグローブボックスの鍵穴に差し込んで施錠した。

後部の左側のドアは開けっ放しにするとして、右側のドアは元からチャイルドロックを掛けてあるからこれでいいだろう。

俺は車から降りると左手首のデバイスからインデックス画面を呼び出し、アイテム一覧から輪止めタイプの車両荒らし対策グッズを取り出し、レパードの右前輪にガチっと固定した。

さあ、車両盗難対策はこの辺でいいだろう。俺は再びドアを開け、上半身を乗り出すと、助手席の上に放ったらかしていた祭り用の広告紙を手にとるとドアを閉めて施錠した。

そして後ろ左側に回ると、紙の束を表が此方側に見えるように助手席の背凭れの裏に付いているポケットに仕舞った。

広告にはこんな事を書いておいた。

『遠出、出張、通勤等、お車の急な手配が必要な時は、是非個人・高津タクシーを御利用下さい。』

個人タクシー共同協会加盟ギルド・個人タクシー連合所属個人タクシー事業所

高津タクシー

当事業所は、初奈島市第1地区に営業拠点を置き、初奈島及び帝都周辺を中心に営業するハイグレードタクシー専門の個人タクシーです。この度は実車見本として当事業所が保有し、操業するJY33型日産・レパードを展示させて頂いております。

当タクシーは次のような方々にお勧めです。

- ・遠距離、高速利用のお客様
- ・企業従業員の自宅への送迎
- ・ゴルフ等プライベートで車が必要となったが、適当な車が無いお客様
- ・車好きな方

当タクシーは複数台の車を営業車として使用し、御予約の際にお

お客様にお好きな車種を指定して頂けます。(指定された車種を当事業所が保有していなかった場合、またはお客様から車種の指定が無かった場合、此方が勝手に御用意した車でお迎えに上がらせて頂きます。御容赦下さい。)

車種は日本とドイツ車を中心に取り揃えております。

トヨタ: JZX81 JZX90 JZX100 JZX110

GRX130 JZS130 JZS140 (マジエ・セダンあり)

JZS150 (セダンあり) JZS170 (マジエ・アスリート)

ト) GRS180 (アスリート) GRS200 (アスリート)

S10 JZS147 JZS160 その他多数

レクサス: JZS190 GSE20

日産: Y30 (セドリックHTのみ) Y31 (セダンあり) Y

32 (シーマ・レパード無し) Y33 Y34 F50 Y50

Y51 C33 C34 C35 R32 (4DGT-R) R

33 (4DGT-R) R34 V35 V36 J30 A31

A32 A33 J31 J32 その他多数

その他ホンダ、三菱、マツダ、スバル、ベンツ、アウディ、BMW、ジャガー、アルファロメオ、ボルボ、キャデラック、クライスラー、ダッジ、シボレー、ポンティアック、現代、起亜の一部車種のみをラインナップしております。

詳しい車種の内訳のお問い合わせは個人・高津タクシー事業所HP (認証バーコード) まで。

その他、御予約お問い合わせは個人タクシー連合(TEL: 0120-840-594)を通して頂きますようお願い致します。なお、御希望があれば営業地区以外の遠隔地へも出張致します。その場合は御利用予定日の2日前までに御予約をお願い致します。

名称

個人タクシー事業者高津タクシー

営業所所在地

本部：初奈島市第1地区緋桜団地34番アパート0345号

代表取締役兼乗務員：高津 新太郎

経理及び庶務管轄副代表：高津 玉緒

皆様の御利用を心からお待ちしております。』

うん、カラーでもなければ写真すら貼っていない。パソコンのワードソフトを使って適当に拵えた、我ながら何ともお粗末な出来の宣伝広告である。一応500部も刷って持ち込んだものの、恐らく大量に余るであろう事が容易に想像出来た。が、足らなくなったよりはマシだろうし、そもそもこういう物は余るのが当たり前だと考えていた俺は深くは考えなかった。あくまでメインはここに置いてあるレパードである。

ただ、そんな俺でも予想外な事が2つも有った。

1つは、同じ型の連盟カラーの車を少し離れた所で見かけた事。まさか同じ車に参加しているとは思わなかったので軽く驚いたが、まあこんな事もあるだろう、と俺は特に気にしなかった。

本当に魂消したのは、自分がレパードを止めた位置から僅か50m以内の場所にブルーメタリックのJY32レパードの後期型が威風堂々と駐車されていた事である。これは本当に吃驚した。だってJフェリーの、あの独創的なエクステリアデザインが生んだ珍妙なフォルムによってトランクの容量が圧倒的に少ない、そして後席のクリアランスがなくて非常に狭く、余程前席を前に押し出さないと必要とされている後席空間（タクシーの後部座席は、乗客の快適性への配慮から、後席と前席との間の幅の長さの最低長が法律で規定されている。）の確保が不可能という短所から、まずタクシー車両として使用する奴はいないだろうと高を括っていたからである。

だからこそ、目の当たりにした刹那、やられた！と冗談抜きで痛感した。存在感も稀少価値も色物度合いも、全てにおいて一線を画している。というより、此方が越えられず苦悩している壁をあつさり超越してしまった様な感じさえ受けた。勝てる気がしない。

そんな事を考えつつトレーラーハウスへ向かって歩いていると、トレーラーが停められている一角の更にその向こう、公園内の緑地帯の森の中の辺りから、微かにいい匂いが鼻元へ漂って来た気がしたから、空き腹を刺激された俺は好奇心にそそられ、発生源を求めてふらふらと彷徨した。

駐車場から公園内に入り、ちょっとした木立を抜けるハイキング道のような土塊た細道を越えた先、周囲を森の木々に囲まれ、一面に芝が張られて草原となった2万5千平米程の正方形の広場に大勢の人達が輪を成して集合していた。そしてどうやら、先程から鼻孔で感じる美味しそうな食べ物の気配が、その人集りの中心から風によって漂流しているらしい、と俺は推測した。

俺は群衆の傍まで接近すると、たまたまそこに並んでいた、水色に赤い花柄のアロハシャツにチノパンのハーフパンツ姿の優男のような風貌の男に話し掛けた。

「お早うございます。」

「……………?!」

後ろからいきなり声を掛けたのが災いしたのだろうか、男はビクッと肩を震わせると、目を引ん剥いたひよつとこのお面のような顔をし、俺の方へ振り向きながら飛び上がった。が、すぐに少し頬が赤味を帯びた、今ひとつ締りが無い真顔になると、

「お、お早うございます。」

と挨拶をした。

「付かぬ事を伺いますが、これは何の集まりですか？」

「これですか？」

男はそう言っていると、俺から目を離し、集団の中へ顔を向けて遠くを見やるように目を細めた。

「聞いていませんか？朝食待ちの行列ですよ。何でもここで野外バッキングをするのだとか何だとか……。あなたも並ぶのなら早く並んだ方が良いでしょう。無くなり次第で終了するらしいですから。」

なんだやはり飯か……。予想通りと言えば予想通りな回答だったが、俺は優男の忠告に従って、玉緒達を呼びに行く為に小走りですレーラーハウスへ引き返した。

特に何も考えずに部屋の扉を開けた途端、普段穿いている茶色いパンストの下に透けて見える白いシルクのレースのパンティに包まれた玉緒の妖艶な尻が、いきなり眼前いっぱい飛び込んできたので、数瞬の間俺は思考停止に陥り、自分の嫁の下着姿に釘付けになった。

そして我に返ってからよくよく部屋の様子を逡巡してみると、玉緒の傍、右側のベッドにそれぞれベージュと薄ピンク色の下着姿をしたヨネさんと香澄の姿も目に入った。どうやら俺は不覚にも彼女らの着替えの最中に乱入するという、大失態をやらしてしまったようだった。

「……………！」

「……………」

あまりの事態に互いに茫然自失しているのか、俺達は無駄に長く沈黙を守りつつ口をあんぐりと開け、ただただ相手の顔を見つめ合う。重い……。部屋の空気が異様に重苦しい。圧倒的な分の悪さから来る焦燥感と、不測の出来事に対する己の処理能力を大きく超える危機的状況に直面した事で、少なくとも俺の方は混乱をきたしたあまり、謝罪するとかそういう事は頭の中からすっぽりと抜き去り、どうすればこの場を上手く切り抜けられるのか、そればかりを考えて必死に策を講じていた。

結局、数十秒間黙考した末に俺が導き出した選択は、
「す……、すまん。」

と、一言遺してから慌てて扉を閉めて屋外へ逃げ出す、という我ながら何とも情けない物だった。

トレーラーハウスの出入口の傍で意味もなく立ち竦む。しかも手持ち無沙汰でやる事がないから暇で暇でしょうがない。こういう時に煙草の一本でも吸えればいい暇潰しになるのかもしれないが、生憎俺は嫌煙者だった。

「ああ、暇だなあ。」

誰も居ない宙に向かってぼやいていると、

「あ、高津さん。お早うございます!」

唐突に声を掛けられた。振り返るとすぐ傍に三池が立っていた。

「ああ?三池君か。君も来ていたんだね。」

「ええ、会社の命令で出向する事になりました……。あ、そうだ。

高津さん、俺、やっぱり今の会社を辞めて個人に転向する事にしようと思うんです。」

「あ、やっぱりこっちに来るんだ!で、どのギルドに移るか決めたの?」

俺がそう訊ねると、三池はバツが悪そうに笑った。

「いやあ、それが……。まだ、これからなんですよ。先立つ物だった必要ですし、まだ会社に辞職する事を伝えていないので……。」

「ふん、そうなのか。じゃあ、車は?」

無事にどこかのギルドに登録され、晴れて営業許可証を取得できても肝心の自動車がなければどうしようもない。

「一応自分の車なら持っていますけど……。」

「へえ、三池君って何に乗っているの?」

「日産のノートですけど?」

「そつなんだ。じゃあ、それに自動ドアを取り付けて、緑ナンバー(リライフの世界における事業用ナンバープレート)の俗称。事業用

の普通以上の乗用・貨物車に交付される緑地に白字のナンバープレート。自家用の白地緑字の白ナンバーに対してこのように呼ばれる白ナンバーと同様に大板と中板が存在し、俺の車の物のような字光式も存在する。貨物用のトラックには白ナンバーを付けた車も多いが、旅客運輸をするタクシーとバスは必ずこのナンバープレートを装着しなければ営業する事が出来ないと法律で定められている。」

「ええ。」

「でもそれって、少し面倒臭くない？」

事業用の緑ナンバーは、新規に取得する時は自家用の白ナンバーと同様、百Gと安価で取得する事が出来るが、既に白ナンバーを取得した車を緑ナンバーに登録変更する場合、変更手続仲介料も込みで千Gと約十倍取られる。また、新造時なら5千G程で装着出来る自動車も、改造工事をするに当たって一度前の座席を全て取っ払う必要があるので、平均1万Gと、此方も金が掛かるし、塗装代だつて必要になる。実際のところ、彼の自家用車をタクシー様に改造するという方法を、俺は個人的に良く思わなかった。

三池は運転に於いては一応プロだが、事業者としては素人である。彼は俺が良い顔をしないのを不思議に思ったのか、

「そうですか……。じゃあ、どうすれば良いですかね？」
と尋ねてきた。

ここで、俺は三池に対して一つ提案をした。

「一番良いのは、やはり新車を新しく購入することだけど……。出来るだけ安く済ませたいのなら、払い下げのタクシー車両を購入するって手があるよ。」

「払い下げですか？」

三池は不審そうに俺の顔を見つめたが、はつきり言ってこれ程やり易い手も無い、と俺は断言する事が出来る。

払い下げのタクシー車両というのは、文字通りタクシー会社や個人タクシーで活躍していた車が廃車手続よってスクラップ市場に流れてきた、故障が少なかった為に解体を免れて修復を受けた登録抹消資産の事である。公道を走行するにはもう一度緑ナンバーを申請しなければいけないが、ゴミ同然なので価格が非常に安価で手に入れやすい上、もともとタクシー車両だけあって既に自動ドアもメーターの取付け口も設置されており、色だけ塗り替えれば何時でも使えるという意味で、かなり手っ取り早い方法だった。

しかも最近では、特に法人タクシーがセドリックやクラウンからプリウスやリーフへの買い替えを全面的に推し進めている傾向が強い所為で、今まで以上にタクシーの廃車処分が相次ぎ、ただでさえ低い市場価格が車両と部品余りの余波をモロに受けて大暴落を起こしている、とデジタルラジオの経済速報で放送していた。要するに、今なら激安な値段で車を手に入れる事が出来るのである。

廃車と聞くと確かに聞こえは悪いかもしれない。事実、酷使されてきた分走行距離も凄く長い物が殆どである上に、一度は登録抹消された車だから購入するに当たって車両本体価格とは別に取得税と自賠責（自動車賠償責任保険の事、だがこの世界では現実世界とは違って自動車保険は基本運転手1人に対してその責務を負うので、既に使用者が保険に加入していれば、2台目以降やそれ以外で運転した他者名義の車にも使用者の自賠責と任意保険の補償が適応され、逆に車が1台しか無くても複数人で共同使用している場合は、人数分の保険料を毎月納めなければならない。ただし自賠責は月極の掛金とは別に、自動車の購入の際に取得税と共に登録分として約2千G支払う。）の保険料と、業者に諸々の登録手続き代行させるのならその分の手数料も上乗せして払わされる羽目になるので、下手すると実際の車両本体価格よりも公道を走らせる為の手続きの方が倍も金がかかるという珍妙な事態になる事が大部分である。それでも元々それ用に製造された自動車であるから自家用車と違って非常に頑丈である（最早21世紀に入って大分久しいのに、今も現役で生

産されているY31セドリックの営業車など、元を正せば80年代末辺りに設計された車体を20年以上も現役で使っていたりする。それだけ元々の車の剛性面や耐久性等における潜在能力が高かったのだろう。」し、大手のタクシー会社の車なら常に適切な整備を受けている上に車の買い替えサイクルが物凄く早い所が多いので、走行距離があるスクラップという割に綺麗で調子も良く、程度が物凄く良い、寧ろ良過ぎる物が非常に多い。地雷が多いとされる中古車・廃車市場に於いては珍しく滅多にハズレに出会さないと意味で、一般のユーザーにも勧められる程度には信用に値する購入方法だ。

それに今日明日の祭りの会場にも、新車や中古車の各販売店のブースと共にそうした廃車や払い下げ車が一同に会した大掛かりな販売会が行われる筈だった。

「今日はサーキットとその近くで大きな販売会も行われて、その手の自動車も沢山売りに出されて選り取り見取りの筈だから、君も行ってみれば？俺も今日は新車を色々と見て回る心算だしさ。」

そう言つて右手で三池の左肩をポンツと叩くと、ガヤガヤと騒ぐ女達の楽しそうな嬌声がトレーラーの中から聞こえて来た。

「ああ、家内達の用意が出来たみたいだな。じゃあ済まないが、僕はこの辺りで暇を乞う事にするよ。それでは、また！」

「え、ええ。また……。」

そうして三池と別れ、少し機嫌が斜めな玉緒達と合流すると、俺達は朝食を摂りにバイキング会場の方へ足を向けた。

第十二話：新車購入！

>>新太郎

朝食を終えると、俺はその場で他の3名を集めた。

「それでは、これから夜まで自由時間にしようと思います。夕食の時間になったら部屋に集合して下さい。それでは解散！」

「え？」

異口同音に呆気に取られたような彼女達の反応を見て、逆に俺の方が驚いてしまった。

「え？って何だよ？そんなに変な事を言ったか？」

「え……？だって……、何か手伝う事は無いんですか？社長。」

「何も無いぞ。基本的に空の車を展示して置くだけだし。たまに見回りに行くかもしれないが、放って置いても大丈夫だ。」

「……………」

「それにどっちにしろ、車のスペックや改造箇所を具体的に答えられるのはオーナーである俺位だろう？手伝ってくれるのはありがたいけど、今回は気持ちだけ受け取っておくよ。今日明日はやる事は無いし、食べ物とかの模擬店も出ているそうだから、ヨネさんと二人で祖母孫水入らずで楽しんでくればいいさ。そういう訳で、解散！」

寄り添うように去って行ったヨネさんと香澄の背中を見送ると、

俺は玉緒と二人つきりになった。

「どうする？お前も一緒に行くか？」

「ええ……。でも何処に行くんです？あなた……。」

「なに、付いて来れば分かる。」

俺はそう言っていると、玉緒の手を引いてゆつくりと、だけど内心では少年の時に感じたそのように高ぶらせながら足を踏み出した。

よし！新車、買っぞ！

公園の敷地の東端、サーキット場と隣接する駐車場の一角に、タクシーとは違う大量のピカピカの新品の自動車と、その周りを囲むようにわんさかと大勢の人々が群がっている。そして今、明らかに青筋を立てて機嫌を損ねている玉緒と、バツが悪くて恐縮している俺もその中に居た。

「付いて来いって、こういう事だったのですね？あなた……。はあ……。」

「見るだけ！見るだけだから！」

溜め息混じりに浴びせられる女房の怒声を掻い潜りつつ俺は懇願した。だって、この祭りの期間に合わせ、様々な自動車屋がタクシー向けの車両をバーゲンセール特価で大放出しているのである。この好機を見逃すなんて事は出来なかった。

人混みに卷かれ、妻と手を結びながらふと周囲へ視線を向けてみる。

『セドリック営業車、クラウン営業車、その他各種営業車格安大放出！タクシー向けコンフォート営業車2L車体本体価格7万Gをセール5万5千G！販売！その他事業用自動車のお求めは中川自動車へ！』

『メルセデス・ベンツ、VW、BMW、アウディ、オペル……ドイツ車専門ディーラー七瀬商会』

等と書かれた、赤や黄色といった派手な彩りの看板や上りなど、彼方此方に『特価』『セール』『安売り』と云った文字が踊り、そうした間に『8万5千』とか『120,000G』と表示された大きな値札をフロントガラスに張られた光り輝く鏡面のように磨き込まれたセダンやミニバンが、威風堂々と陳列されている。

法人だけでなく個人タクシーの需要にも応えているので、主に高級セダンを中心に古今東西、日本や欧米の有名メーカーやその他の

中小のアジアンカーの歴代のフルサイズカーやミッドサイズカーが一堂に会しているのだ。しかも、左側交通という道路事情に合わせてほとんど全てが右ハンドル車なのだから面白い。だから車に興味がなくとも興奮や熱気が伝播しているのか、玉緒の気色も落ち着き、俺達と一緒に色々な車を見て回っていた。

「あ！あなた見て！この車、面白くて可愛い。」

そう言っただけで玉緒が指さしたのは、介護タクシー用にとあるフランス車専門店の店頭に展示されていた黄色い5ドアのルノー・カングー12だった。

「まあ、そうだな……。」

と同意したものの、俺ははっきり言ってこの車が好きではない。というよりフランス車全体に言える事だが、毛色が合わない。フランスという国もフランス料理も好きだが、どういう訳かフランス車の灰汁が強いセンスが好きになれない。

いや、勿論フランス車を否定する心算は毛頭もない。寧ろ冷徹に分析すれば、目の前のカングーも然り、性能も発想も使い勝手だって申し分のない、十分に考えて作り込まれた物だと思っし、あのフワフワとした柔らかい足回りだって石畳ばかりのパリの街並みを颯爽と駆け抜ける為に導きだされた物である事を考えれば、かつて西欧でフランス車が席捲し、多くの人々を虜にしてきた事だって納得できる。特にコンパクトカーとカブリオレに限って言えばルノー、シトロエン、プジョーの3社ともに秀逸なモデルを輩出してきた事は間違いない。それなのにも関わらず、何故だか俺はフランス車が好きになれなかったし、勿論所有してハンドルを握るうとも思わなかった。

だが最近になって、その理由が薄々と自覚できる様になった。単純に許せないのだ。コンパクトカーを作るノリでミッドサイズ以上の4ドアセダンを拵えている事に。そしてその強烈で奇抜、且つ個性的なデザインセンスによって隠されているものの、大きなセダン

なのに随所にコンパクトカーのデザインの流用によって生じた歪さを垣間見てしまう事が不快でしようがないのだと。

だから、少しの間玉緒に付き合って外観を眺める事はあっても、到底試乗なんてする気になれなかったし、当然の事ながら購入などともなかつた。

しかし、屋外に置かれた展示車両を見ていた俺達に気が付いたのか、30m程離れた仮設用の白い天蓋のテントの中から、スーツを着た若いディーラーウーマン、それもあり化粧が濃く、茶髪でボサボサとしたポニーテールの品のないギャルが、その不細工な顔面を更に面倒臭そうな面持ちにして俺達の所へトボトボと歩いて来た。
「いらつしゃいませ」。試乗なされますか？」

ただでさえ買う気が無いのに、変に鼻に付く妙に高い声にイライラとしてますます購買意欲が減退した。

「いえ、単に目が付いて見ているだけです……。」

「今ならナビとサンルーフ付きで1・6リッター車が3万8千Gからお問い合わせになれますよ。如何ですか？」

断つたのにも関わらず、その姉ちゃん俺達を引き留めるようにしつこい位に迫ってきた。

「すみません。悪いけれど見ていただけでカングーを購入する気はないんです。介護タクシーの営業許可を持っている訳でもないです。」

「でしたら、タクシー用じゃない一般向けの物も御用意する事が出来ますよ。」

「だから、カングーを今買う心算は無いんだって！私の趣味じゃない！」

思わず声を荒げ、そのまま玉緒を連れて店を後にしようと思ったが、女店員は咄嗟に興味深げにカングーを眺めていた玉緒に狙いを定めた。

「なら、奥様。お気に召されたのなら奥様のお車として1台如何で

しょうか？」

「え？えつ、ええ？！」

突然話しかけられた所為か、戸惑った拳句玉緒は彼女のペースに飲み込まれそうになったので、俺はすぐに助け舟を出した。

「家内は車の免許を持っていないんだ。それに私だって自分の気に入らない車に態々金を払ってまで乗りたい性分じゃないのね。失礼させて貰うよ。さあお前、行くぞ。」

無理やり玉緒の手を引いてその場を立ち去ろうとした所、

「では、今日はどのようなお車をお探しに来られたのでしょうか？」と後ろから声を掛けられた。仕事熱心と言えば聞こえがいいが、ここまで空気が読めていないと往生際が悪いという方がしつくりと来る。しかも見掛けによらず無駄に言動が慇懃である故に、無碍に断り辛いので余計にたちが悪いと感じた。

「ん、まあ……。フルサイズ……。Eセグメント級の4ドアセダンがあれば買おうかな、とは考えていたけれど……。」

すると女店員はパツと明るい笑顔を俺に向けると、

「でしたら、お客様にぴったりの車が御座いますよ。」

と、車が並べられた中を奥の方へ俺達を案内した。

「此方なんてどうでしょう？」

そう言って女店員が指し示した先には2台の乗用車、黒いルノーのラティチュードの2010年モデルと、フランス大統領の専用車でもあったシルバーマタリックのシトロエンのC6の2005年モデルだった。

ラティチュードの方はセダンらしいセダンだったが、残念ながら俺の食指は動かなかった。いくらルノー・サムスンが製造元だとはいえ、レクサスLSの40系とACV40系カムリを足して2で割ったような風貌はどうにかならなかったのか？オーソドックスなセダンは嫌いではないが、幾ら何でもこれは酷い。大体自車の旗艦車種に子会社のパクリカーを持って来るってどうなのよ？そもそも安

い韓国車として購入するならこんな質の悪い内装でも、まあ嫌いではないからこれはこれでありかなとも思うが、富裕層向けの仏車として買うとなると話は変わってくる。最安値で12万Gは流石にないぞ。こんなの買う位なら素直に日産車を買った方が千倍はマシなレベルと言っても良い。

対して、シトロエンのC6の方は、良い意味でも悪い意味でもフランス車といった趣を感じる。3LのV6エンジンと聞くと最上級の旗艦車種とすれば弱い気がするが、フルサイズとしては十分なレベルだし、何よりも大統領専用車として採用されているだけあって豪華、しかも優雅で堂々とした風格をした彼の国を象徴するような車だと言って良い。限りなく『変』の一言で集約できるその前衛的なスタイルに言及しなければの話だが……。俺のように日独米でよく見かけるような正統的なセダンを良しとする人間は、ほぼ全員が一目見た途端に拒否反応を起こすのではないのだろうか？

Cピラーから緩やかに下るルーフとDピラー、そしてそれらに囲まれた大きなリアサイドウィンドウ。そして一見ステーションワゴンかと思いきや、一番後ろにオマケのように取り付けられたトランクリッドが物凄い存在感と違和感を発している。まさに賛否が激しく別れる奇妙奇天烈な容姿を持った車である。

個人的な感想を言えば、どうしてシトロエンはこの車を普通に5ドアセダンにせず4ドアセダンに強引に仕立て上げたのか？正直理解に苦しむ。実際この車の先祖に当たる、LXやCXは普通の5ドア車だった。ひょっとすると名車DSのリスペクトやオマージュとしてこんなデザインに拘ったのだろうが、Cピラーの後ろにある大きな窓と、地面と平行に伸び、その後垂直に線が落下する直線志向のトランクリッドが全てを台無しにしている。

もっと言えば内装がとんでもなく酷い。車内の其処彼処から漂ってくる違和感が半端ない。

先ず目につくのはインパネのコクピット側の計器類が収められている部分である。センターコンソールの真上にナビを持つてきた上に、今や懐かしさも感じられる液晶デジタルメーターも格好良いし好感が持てる。だがその計器類の上に覆いがされていないのは何故なのだろうか、普通の車乗り回してきた者にとつてはとても尋常ではなく感じられる。なら徹底した左右対称主義かと思いきや、よく分からない液晶パネルの基盤の所為でセンターコンソールのエアコンのダクトが助手席側に一つしか付いていなかったりして、微妙に左右非対称になっている所があるから気持ちが悪いつたらありはしない。

次にハザードランプのスイッチがセンターコンソールの一番下、シフトノブの正面という凄く押しにくい場所にある。緊急時以外にも他車とのコミュニケーションや客の乗降時など、普段からハザードランプを多用する事が多い俺達にとつて、使い難いというのはある意味致命傷で有ると言つてもいい。これならまだハンドルの裏のステアリングコラムの上にセットされている方がずっといい。

しかも、まあこれはこの車に限らず左側交通の国の車に共通する事かもしれないが……、左ハンドルから右ハンドルへ仕様変更した時の仕事が増える。特にフロアシフトのゲート構造、上から見るとトヨタ系のそれを左右逆にしたようなレイアウトをしていて凄く使い難い。それもその筈だ。左ハンドルも全く同じ物が詰め込まれているからな。つまり右手なら操作しやすいシフトチェンジゲートを右ハンドル用に左右反転させずにほぼそのまま流用しているのである。そこは手間を惜まずに左右反転した右ハンドル車専用部品を拵えろよ、と切に思うのである。

でもこんな物でも絶賛する人も居るんだよなあ。まあ、人と違う物に乗りたいのなら、これ程までに適切な車もないとは思うけれど、やはり俺の趣味ではないと改めて思った。あえて褒めるとすればシートがふかふかとして柔らかい事位だが、正直な話柔らかい座席よりも固くても良いからホールド性の高いレカ口みたいな物の方が運

転じていて疲れないのだが……。前席後席共に足回りのスペースにもそれなりの余裕が感じられたが、フルサイズの高級車なら足下の空間も広くて当たり前だ。窮屈だったらそれこそ車としてどうかと思う。

「どうですか？中々に宜しいでしょう？」

余程自信があるのか、販売員はしつこく俺に薦めてくる。

「ん、まあ……。悪くはないな……。」

俺の方も真正面から批評する訳にもいかないので軽くお茶を濁した。

「では、御試乗なされますよね？」

何故そうなる？笑顔で俺に車の鍵を押し付けて来た店員の顔をしげしげと眺めつつ、その場の流れで仕方なく俺はC6の運転席に乗り込んだ。

助手席にディーラーの姉ちゃん、後部座席の左側に玉緒が乗車した事を確認すると、俺はUSBチップの様にリモコンキーから鍵の部分を引き出すとスロットに突っ込んだ。

エンジンが軽快に作動し、目の前の液晶のデジタルメーターが点灯し、ナビが立ち上がる。

試しにハザードなどのボタンを押したり、ブレーキを踏みながらガタガタとシフトノブを動かしたりしてみる。新車だから当たり前だが、特に不具合は見られなかった。

「試乗ルートの方はわたしが御案内させていただきますね。では、まずは左の方へ進んでください。」

そう案内する嬢の指示に従い、フォグランプを点けて左ウィンカーを点滅させると、発車措置を施して俺は車を発進させた。

駐車場の通路を左に進み、店から出てさらに左折し、駐車場に接するサーキットの入り口へ向かって徐行する。

駐車場からサーキットへ進入するピットの中に入り、他の車と共に二列縦隊でコースインする順番待ちをする。

ふと、周囲を見渡す。C6の前には黒色のポンティアックの9代目ボンネビルが、その右隣に白い200系クラウン。C6の右隣には銀色のBMWの5代目3シリーズのセダンが静かに停車し、その後ろに銀色の200系ハイエースと白い第2世代のシボレー・アストロが並んで停まっている。

場所は違えど、この世界に来てから何気に見慣れた異様な光景だ。本来なら日本に供給されていない、手に入れるのに非常に困難が伴うヨーロッパや北米やその他の国々の専売車が日本専用車と肩を並べてその辺を走り回っている。しかも本来なら有り得ないそんな光景も、殆どが右ハンドル車で日本の物のようなナンバープレートを付けている所為か、ごく普遍的な風景に感じられてしまっている。

そう言えば、街並みにしてもこの世界は変化に富んでいるように思う。同じ様な近代的な都会の街並みでも日本的な場所もあれば北米を彷彿とさせる物もあり、またヨーロッパのように石畳の道が続く街もある。そしてそれらの都市を長大な高速道路が結び、色々な車が走り回っている。

今、車の走行音が響いているサーキットだつてある意味そうした物の縮図みたいな物だろう。

ピットから右側に出る形で本コースへ合流する。そしてその合流口の手前に停止線と縦型の信号機が2台設置され、時差式のリレー方式で交互に点灯し、右車線と左車線の車を1台ずつ合流車線へ吐き出している。

BMWに続いて、自分の右方で道路の真中にある車線上に設置された信号が青に変わった瞬間アクセルを踏み込んで発進する。そしてスピードを出しながら本線に入り、最初のコーナーの外側を周りながらスピードを乗せていく。車体の大きさとエンジンの仕様の割

にはレスポンスが早く思いの外加速が良かったので、俺は思わず、
「おっ！」

と軽く叫び声を上げてしまった。

「どうですか？お客様。中々の物でしょう？」

「まあ、確かに。」

意外だった。あの前から後ろになだらかに流れるルーフの構造や中途半端なトランクリッドが、単なる優雅なフォルムや奇抜なデザインというだけでなく、空力的な意味でかなりの効力を車体に発揮している。屋根の形状は前から流れる走行風を華麗に受け流し、それを受けたリアの直線構造のトランク部分がうまい具合に空気の渦を創り出し、下向きのグラウンドエフェクトを発生させている。それ故に高速走行中の車体の安定感がとてつもなく強い。これがエンジンアの狙った物なのか、それともデザイナーの偶然の産物かは定かではないが、相変わらずフワフワした落ち着きのないサス周りを考慮したとしても、この車を絶賛する人が少なからずいる理由もよく解る。今もって好きにはなれないが、金を払う以上の対価が十分得られる位の価値は確実にある。俺自身は購入する気は全く無いが、もし知り合いにこの車を買う事を検討している人が居れば、俺は喜んでこの車の素晴らしさを力説してその人の背中を押すだろう。デザインさえ受け入れられれば文句なしに満足出来る、云わば奇乳や魔乳やフタナリものの傑作エロゲのような車だからだ。

全長5km程のグニヤグニヤとカーブが続くサーキットコースを3周してピットインする。駐車場へ戻り車を店まで回想する道すがら、隣に座る店員に話し掛けられる。

「どうでしょう？お気に召されましたか？」

「う~~~~ん……。悪くはない。悪くはないんだけどなあ……。正直エクステリアデザインがやっぱり性に合わないや。ただ、車自体は凄く良いから買ってもいいかなとは思う。尤も、他の店も回ってみたから、今ここで即決する訳にはいかないけれどね……。」

適当に茶を濁して車を元の位置に戻してキーを店員に返すと、俺と玉緒はそそくさとそのディーラーを後にした。

フランス車専門の自動車屋から出て近くにあった休憩所のような所で昼食を摂り、少し進むと、北米ブランド全般を取り扱う、以前からグランプリやコンコードやカプリスといったビッグ3系のブランドの車を購入する度に世話になっている店が展示場を展開しているのを見掛けたので、俺は玉緒を引っ張ってその中へ入って行った。「おお、凄い！とうとう11年モデルのチャージャーが出たのか！」車が所狭しと並べられた展示場の真ん中に鎮座していた1台の白いセダンを見て、思わず俺は声を上げた。それは最新型のダッジ・チャージャーの3・6LV6モデルだった。

フロント側はウインカーの位置が少し変わり、やや顔立ちが厳つくなった事を除けば大して変化していなかったが、リア側は一転して信じられない位に格好良くなっている。

恐らくチャレンジャーのオマーージュだろう。マイナーチェンジ前の小さな台形型のリアコンビランプとは打って変わり、ハザードランプとバックランプを取り囲むように何百個もの赤色LEDで左右が繋がった細長いテールランプを与えられている。

サイドのデザインも様変わりしたようで、地面と平行に走っていたドアの縁のラインが、フロントフェンダーからリアフェンダーに向かつて滑らかに駆け上がっている。

そして何よりも一変したのは、内装のインパネのデザインである。いくら何でもこれは変わりすぎだろう……。全く別の車になってしまっている。勿論良い意味で！これだよ。これこそ俺が待っていた有るべき姿のスポーツセダンだよ。しかも現実には存在しない右ハンドル仕様である事が余計に俺を余計に興奮させた。

玉緒の呆れた視線を感じつつ食い入るように四方八方から車を眺

めていると、グレーのスーツを着た男の店員がスタスタと俺達の方へ近付いて来た。

「お客様、興味が有りなら、試乗なさいますか？」

「出来ますか？」

「外に試乗用の車がありますから、お客様さえ宜しければすぐにも御用意致しますが。」

「是非お願いします。」

そんな訳で早速試し乗りをしてみる事にした。

先の店員が簡易店舗の外へでて少々たった頃、パンツ！と軽快に響くクラクションと共に真紅のチャージャーが静かに滑り込んできた。

店員と交代して運転席へ腰を下ろし、ドラポジを調節する。

「レバーの位置が日本車とは大分異なりますので、不慣れな方だと判らない事が多いと思いますが……。」

「大丈夫です。私もメルセデスとかキャデラックとか、この辺の欧米車を取り継いでいますから。大体の勝手は判っています。」

そうは答えたし、実際に見ればどれがどのスイッチかは一目で判別できるものの、一応コクピットからセンターコンソールにかけて見渡してみる。

この世界のアメ車は、外観は本国仕様のそれにかなり近いが、中身は日本仕様以上に日本仕様らしく造り込まれている。

まず、しつこいようだが右ハンドルである。

そして、速度計がマイル表示ではなくキロメートル表示で、この世界では普遍的な270kmまで指す事が出来る計器を取り付けられている。また、オートエアコンの温度表示が華氏ではなく摂氏で示すように変更されている。

更に、ドアミラーのデザインが部分的に修正され、電動で角度を調節するだけでなく日本車のように折り畳んで格納出来る機能が付

け加えられている。

同じ様な車社会でも、日本とアメリカの車の大きな違いの一つに、日本では独立した橙色の灯火でなければウインカーが、アメリカでは赤色燈のままテールランプと共用させる事ができるという物がある。だが、この世界は日本の車両法に基本的に遵じているので、このままの状態だと違法車両になってしまう。

そこでその対策として、ウインカーの電球だけ緑色の物が使われている。これならレンズカバーの色自体が赤くても、ランプは橙色に点るので、目出度く合法車両として認可させる事が出来るのだ。

この車も当然のように同じ様な処理が車体に施されている。しかもありがたい事にC6とは違ってこの車には右ハンドル用にシフトゲートの形が反転して造り直してあるから違和感というものがなく操作もし易い。ハザードランプのスイッチも手の届きやすい所に設けられているからハード面で特に不満に思うところはない。何よりもスポーティーで格好良いだけでなく正統的なFRセダンである事も評価のしがいがある。FFだって好きだし、運転し易いから好んで乗車しているが、やはり少々トリッキーで危険な側面を持つ後輪駆動車の方が運転していて楽しい。

それに、C6もいい車だったけれど、やはり同じV6型エンジンで600ccの差は大きい。何というか、余裕の有無の差が予想以上に大きい。C6が優美だがピヨピヨンと池を跳ね回る錦鯉だとしたら、チャージャーは巨大な水槽の片隅で存在感を放ちながらひっそりと貫禄を持って佇むアロワナみたいな物だろうか。低く静かに唸るエンジン音、踏み込めば静逸だが力強い加速がダイレクトに、そして踏み込み具合に正確に反応して車体を前へ押し出していく。たとえ低速でも実感できるゆとりもさる事ながら、驚くべきはこのクラスのエンジンを積んでいるにも関わらず、この車が同車種の中でも最下位にあたるグレードだと言う事だろう。5・7LV8の最

上級のS R Tとかどんな化物なのだろうか……？そんな大排気量車だと燃料の食いつぶりや維持費が半端なく高いのでとてもじゃないが買う事が出来ないが、嫌でも気になってしまう。

そうそう、燃料といえばこの車のエンジンには気筒休止システムが使われていて、低速時や巡航時には一部のピストンを止める事で車を低排気量化し、その分の燃料を節約できる機能があつた筈だ。

「ねえ、この車のエンジンって、気筒休止システムは付いているの？」

「いえ、気筒休止はS R Tだけですからこの車には付いてないですね……。」

残念。でも3・6 L位なら別にそこまで燃料を食うわけでもないか……。」

「ぶっちゃけた話。大体実燃費でどの位走れるの？」

「ウチの社員が実測測定した場合ですけど、大体高速で10 km弱つてところでしょうかね。」

まあ、このクラスの高級車ならそんなものだろう。日本のクラウンやフーガだって実測値ではそんなものなのだから、アメ車だから燃費が悪いとは思わなかった。

高速巡航の動きも素晴らしい。大柄のボディーなのにも関わらず、俺のハンドル捌きに細やかに反応してクイックにカーブを曲がって行く。これ位高性能なら、少なくとも日常的な範囲で不自由する事はあまり無いだろう。狭路での擦れ違いを除けばの話だが……。

ピットインして店の前まで帰ってきた。

車を降りた後、後部座席に座ったりトランクの中を覗いて見たりする。これだけ広ければ十分だ。だから、俺は店員にこう声を掛けた。

「これ、買つよ。」

「ありがとうございます。では此方へ……。」

「ちょっと、あなた！」

すんなりと具体的な商談へ移行していた最中、水を差すように玉緒の怒号が飛んだ。

「ん？お前、どうした？」

「どうした？じゃありませんわ。何で勝手に話を進めているんです？また車を買ったなんて！」

「別に良いだろ。俺が稼いだ金なんだから、俺が何に使おうが……。」

「あなたが良くても、わたしが良くないんです！」

ちらつと妻の顔を見ると、熱気がこっちにまで伝わる程顔が赤くなっていた。相当お怒りのようである。

俺は売買の話し合いをする為に腰を掛けていた椅子から立ち上がると、玉緒の方へゆつくりと接近し、正面から彼女を抱き締めた。

「……………っ！あ、あなた？」

「玉緒、この埋め合わせはきちんとするし、今まで以上に稼いで帰られるように頑張るから。……………今回は勘弁してくれ。頼む！」

「……………ふう……………」

頭を下げる俺を、苦虫を潰したような表情で見つめていた玉緒は、まるで何かを悟ったかのように小さくて短い溜息を吐き出した。

「もっ……………勝手にして下さい……………」

玉緒のお墨付きも無事得られたので、商談を進める為に再び席に着く。

「取り敢えず、3・6LV6のラリープラス。ボディーカラーはシルバーでインテリアは黒。これは確定で。」

「オプションの方はどうしましょう？」

「エアバックやABSとかは標準装備だからなあ……………。あと基本、必要になるのはカーナビとセキュリティシステムかな。あっ！それと、このタクシー改造オプションも絶対に必要だ。……………お！こん

な装備まで付けられるのか?!これはいいなあ……。」

俺はメーカーオプションを適当に選択すると、売買契約を結び、契約書にサインをして料金を支払った。締めておよそ15万8千G、下から3番目位、同じエンジンを積んだグレードとしたら最上級の物だったから、決して安くはないがいい買い物が出来たと思った。

もう既に夕方になっていたし、初奈島まで陸送して貰う手筈も整えたので、待ちぼうけをさせていた玉緒を連れて店を出ようとした所、もしかしても三池とすれ違った。どうやら近隣の店で車を見て回っていた所らしい。

「あ、高津さん。」

「よっ!」

「ええつと……、その人は?」

「ああ、これ?ウチの愚妻。」

「主人がいつもお世話になっています。」

「ああ、此方こそ……どうも。……ところで、高津さんも車を見てきたんですか?」

「ああ、というより丁度今し方、あそこにあるチャージャーと色違いの奴を買ったばかりだけれどな。」

「うわあ。出たてホヤホヤの車をもう買ったんですか?」

「安かったからな。」

「いくらでした?」

「オプションと税金込みで大体16万弱だった。」

「うわあ!高い!」

「新規モデルでもある上に、下位グレードだとはいえ腐っても高級車だからな。……ところで、三池君。君こそ何しに来たんだ?ここ、ゼネラルモーターズとフォードとクライスラーのブランドしか扱っていないぞ。」

「いやあ、色々見ていたんですけど……。アメ車のタクシーってのも面白いかなあって思って。何か無いかなあって思って。」

「まあ、色々置いてあるから見てみればいいんじゃないか？」

漠然と言われてもよく分からないので、俺は首を傾げつつも三池に提案した。すると、三池も呟いた。

「そうですね。ところで、ここってどんなメーカーの車が置いてあるんですかね？」

「俺の知る限り、キャデラック、ビュイック、GMC、ポンティアック、シボレー、サターン、アメリカン・モーターズ、オペル、ハマー、デロリアン、フォード、クライスラー、ダッジ、ダ임ラー・ベントツ、ジープ、プリムス……は置いてあった事があつたな。ひょっとしたら他にも昔のブランドを扱っているかもしれないが、大きな車にそこまで興味がある訳じゃないから分らん。」

俺だつて決して小さな車乗り回している訳ではない。寧ろ世間では大きな方に分類される車を運転している訳だが、流石に全長6m近く、幅ほぼ2m、ホイールベースまで3mを超えて来るような本当の意味でのFセグメントクラスのフルサイズカーとなると、V8エンジン等の車両の重量の重さも相俟って一気に取り回し辛くなる。

だから嫌いではないが、昔からあるような大型のフルサイズの自動車は敬遠していたし、戦後、特に二度のオイルショック以後は殆どがダウンサイジングして普通のEセグメントクラスカーになった挙句、残ったとしても日本に入って来なくなつたので、本当に有名な物以外はその手の車種に疎く、バジエンジンニアリングも当たり前のように行われている分、どれ位のブランドが取り扱われているのかは知らなかった。

「兎に角、立ち話しているのもあれだから、隗より始めよって言葉もあるし、まずはその辺にあるのから片っ端に見ていけば良いんじゃないか？一言でアメ車って言っても色々あるよ。」

と、俺はすぐ傍のテントの外の展示スペースに停められている白いポンティアックの7代目グランプリを指さした。

三池はこの車の事を知らなかったのか、車の後ろに回ってエンジンを確認めた。

「え〜〜〜つと……、ポンティアック……グランド・プリックス？（GRAND PRIX）」

「グランプリだ！ポンティアックブランドの北米専売車だよ。」

$$\begin{array}{c} \neg \\ \wedge \\ \circ \\ \neg \end{array}$$

三池は右側の運転席へ回り込むと、ドアを開けて中を覗き込んだ。「うわっ！すげえ！変わった造りをしていますね。」

「まあ、無駄に沢山付いたエアコンダクト、大きなデジタル液晶インジケーター、外装の割に貧相な内装……。ある意味ポンティアックのお家芸だったな。最終型ボンネビルも結構凄かったぞ。こっちはダクトが6個もあるけど、向こうは8つだしな。」

$$\begin{array}{c} \neg \\ \wedge \\ \circ \\ \neg \end{array}$$

「そう生返事しながら、三池はキョロキョロと辺りを見回していた。『そう言えばこの車、ハザードランプのスイッチが見当たりませんね。』」

「ん？付いているぞ。」

「え？何処に？」

「ほら、これだよ。」

俺は車内へ半身を乗り込むと、ステアリングコラムの真上、ステアリングホイールのすぐ裏側にちよこんと貼り付いている黒いハザードランプのボタンをポチッと押した。それと同時にチツカッチカッチカ……と正反対に向き合った2つの緑色の光の矢印がリレー音に合わせて速度計の上で点滅し始めた。そしてまたボタンを力チツと押すと、ハザードのインジケータは消え、車内はまた静かになった。

「へ、こんな所に……。」

「昔は多かったみたいだけれどな。今は日本車も欧州車も助手席から押せるセンターコンソールの上にハザードのスイッチを持って

来る場合が殆どだけど、今でもアメ車はこういう場所に置いてあるのが多いから、知らなかったら大変な事になるぞ。」

しかも、普通ハザードランプのスイッチといえば、ボタンに描かれている三角板を模した二重三角形が赤く塗られていたり、白いままでもボタン全体が赤く塗られていたりといった、パニック時でも目立つように配慮されている物だと思うが、この手の車のボタンはそういう処理がなされていないから、ここに付いている事もあると云う事を知らなければ、何時までも馬鹿みたいにスイッチを探す羽目になりかねない。

そういう意味では、アメ車はあまり初心者には優しくない車だと思う。

まあ、そんなこんなで、後は一人で何とか出来ると言い張る三池と別れ、俺と玉緒は香澄達と合流する為に歩き出した。

第十三話：納車！

>> 新太郎

祭りの日程が全て終了し、そのままレパードに皆で乗り込んで帰路に着いた夕方、俺は至極上機嫌でハンドルを握っていた。

車のオーディオのFMラジオから流れる音楽に合わせてハミングし、ステアリングホイールの表面、ホーンボタンや日産自動車のエンブレムが彫り込まれた辺りを軽快にタップする。

ミラー越しに後ろを見ると、ヨネさんと香澄が不審そうに俺の方を窺い、隣にちらりと目を遣ると、ウンザリした顔をした玉緒が深く溜息を吐く。それでも俺のテンションは高まったまま、近日訪れる筈の納車の日を今から心待ちにしていた。

ウキウキしていると、自ずとそれが運転にも反映されるのか、レパードはハイビームとフォグランプを灯し、ツインターボエンジンのブーストを吹かしながら片道3車線の高速道路のど真ん中を快調にぶっ飛ばしていた。

左車線に大きな銀色のコンテナを引っ張る、比較的新しい赤いマツクのボンネットトラックの15t×2の重連トレーラーと現行型の濃緑色のボルボのFHの15tの大型トレーラーが150km程度の速度を出して並んで走行している見える。追い抜こう！自然とアクセルを踏み込む足に力が入る。

ガンッ！ゲオオオオオオオオオオオオオオオオ……。ヘッドライトを下向きへ落としてアクセルペダリを限界まで押し込んだ途端、トルコンのギアが2段下がり、雄叫びの如くエンジンが低く唸るよーくに歓声を上げる。

誰かがリクエストしたのだろうか？ラジオから流れる曲が杏里の『思いきりアメリカン』に変わった。テンポの早い軽妙な曲が、ド

アに付けられているスピーカーから車内へ響き渡る。俺は左手を伸ばしてオーディオの音量を少し上げた。

そして、ボルボのトレーラーの前へ出ると、アクセルを緩め、前照灯を上向きへ戻した。

急な上り坂だから左車線を走る先の2台のトレーラーや、前方を往く白いダ임ラー製の大型バス、水色のK13マーチが悲鳴のよなエンジン音を轟かせる中、レパードは少し踏み加減を増やしてやるだけで、坂道をすいすいと登って行く。

オレンジ色の中に濃い紫色が溶け合った夕暮れの空の下、次々と赤い光が灯り、幻想的な光のせせらぎを造り出す。

不意に左側から、赤いテールランプと白いヘッドライトを点け、橙色のウインカーを点滅させて黒い160系アリストの後期がスピードを上げつつ本線へ合流してきたので、俺は右ウインカーを焚いて追越車線へ車線変更し、再びヘッドライトをハイからローへ切り替える。

ところが、予想以上にアリストが速かったので、俺はすぐに元の車線に戻ってこの黒い車の後ろへ回った。

だが、このアリスト、どうしてこんなに急いでいるのだろう？ 80 km/h付近から160 km/h代まで10秒足らずで加速した挙句、今の速度が250 km/h程度である。

その時だった。

ウ…………ファンファンファン…………。

何やら賑やかなけたたましい音が後ろから聞こえてくるなど思った瞬間。250 km/h以上で走っている俺の車の両側を、現行カブリスとC35ローレルの後期、そして現行W204のCクラスの白黒パトカーと黒いランエボ？の覆面パトカーが颯爽と追い越していった。

そうしてという訳か、アリスト対パトカー4台によるカーチェ

イスが俺の目の前で展開された。5台の自動車が高速道路を蛇行と妨害運転を繰り返しながら追い掛けっこをしている。

俺はランエボの真後ろにぴったりと追従すると、ワクワクしながら逃走犯と警察の追跡劇の顛末を面白半分に見物しよう、……と思う訳がなく、追い抜く機会を窺いつつ、先刻とは一変してイライラとしながらシフトノブの上に添えていた左手をステアリングホイールの頂上部に置き、右の肘をドアの上縁に置いて頼杖を突いた。

パトカーの隙間を縫って前の方へ進む内に、いつの間にか俺の車は黒い車と警察車両に四方を包囲されていた。

他の多くの車が減速しつつ左によって緊急車両へ道を空けて敬遠する中、まさかタクシーが突っ込んで来るとは思わなかったのだから。

「『初奈島 301 あ 1324』の日産車のタクシー、危ないから下がちなさい！繰り返し警告する！今すぐに下がちなさい！」
そんなパトカーからの警告など馬耳東風に聞き流すと、俺はふらふらとスラロームするアリストとの距離を後方1m未満まで接近し、右手でウインカーレバーを思い切り手前に何度も引き、同時に左手の親指でハンドルを捌きながら掌でホーンボタンを押した。

ビ

！ビビビビ

！！！！！ピ

カッピカッピカッ……。パッシングをして前照灯が下から上向きへ変わる度に、アリストの車体が大きく光りに照らされ、後ろのガラスと車内にあるルームミラーにヘッドライトの真っ白な光が眩しいほどに反射する。

微妙にアクセルの踏み方を変えつつ、傷が付かない、だけれども確実に当たっているとはつきり解る、その位絶妙にレパードの鼻先をアリストのけつに擦り付け、海豹か何かを遊びながら嬲り殺す鯨の幼子の様に、前車を執拗に強引に前へ追いやる。

ただでさえ警察から逃げる為にスピードを出していった方がいいに、後方からグイグイと押されるのだから、アリストの運転

手はさぞ肝を冷やした事だろう。動揺し過ぎてハンドル操作を誤ったのだろうか、アリストは前輪を左へ目一杯に切り、大きく体勢を崩して横転しつつ吹っ飛ぶと、そのままガードレールや防御壁を飛び越えて高架下へ消えていった。

ああ、落ちていったな……。そんな感想を心の中で漏らし、闇の中へ消えていった赤い尾灯の光を横目で窺うと、俺は車を真ん中の車線へ車線変更させ、ギアをセカンドに入れてエンジンブレーキを効かしながら緩やかに200km/hまで速度を落として行つた。前方に車やバイクのテールランプの灯りを確認する事は出来ない、50m程までしか照らせないロービームとフォグランプに照らされて白く輝く目の前のアスファルトの路面以外は、ただひたすら鬱屈とした闇が続くのみである。

今更のようにハイビームに切り替えると、そうは云つても精々100mそこらだが、眼前の景色がこれでもかとライトで照らされ、開けたようにパアツと明るくなった。

だからだろうか、沈黙だけが支配していた重苦しい雰囲気の中、息も絶え絶えに香澄が口を開いた。

「社長……、さっきの車……。」

「気にするな！」

俺は前を向いたまま、だけど自分でも内心驚く程大きな声で怒鳴った。

「でも……。」

「心配するな、あの程度で人が死ぬような車じゃない……。忘れる。」

香澄は、いや他の二名も納得がいかないような顔で俺を凝視していたが、何も言わなくなつた。

あの高架は平地の田畑の上を走っていて7m程度の高さしかない筈だから、上手く落ちれば下の柔らかな腐葉土がクッションになり、大怪我をする事はあつても命を落とすまでは行かないだろう。陰鬱

とした空気の中、俺は自分に向かってそう念じ続けた。

燃料補給と休憩の為に立ち寄ったSAの駐車場で、スペースへ入れた車の前に回り込み、たまたま持ち合わせていた小型のペンライトでフロントバンパーの辺りを照らしてみる。

ひょっとして色を塗り替えた盗難車だったのだろうか、バンパーカバーの真ん中、エアロの取り込み口の上の部分、丁度裏側にバンパーが取付けてある部分に、うつすらと細く真一文字に黒い塗料が付着していたので、俺は後ろに回ってトランクから洗車用の廃タオルを持って来ると、丁寧にそれを拭った。

夜が明け、昼も大きく回った頃、レパードは漸く初奈島の集合住宅の前に停車した。

その直前に玉緒の奴が、近くにあるスーパーへ買物に行きたいと曰ったので、アパートの玄関前で彼女等の荷物と共にヨネさんと香澄を下ろすと、俺は車をUターンさせた。

集合団地から下がった所にある住宅地の中の、片道1車線の細い道沿いにある、普段から玉緒が買い物で利用しているという中位の規模のスーパーマーケットの前の路肩に停車する。スーパーの前にも横列駐車のスぺースが10台程用意されていたが、時間帯の所為か、満車になっていた。

俺は、スーパーを5m程過ぎた所の歩道の辺りを指さすと、

「じゃあ、俺、あの辺で止まって待っているから！」

と、車から降りて助手席側のドアの窓硝子を摘みながら此方の中を覗いていた玉緒に向かって叫んだ。そして、ドアを閉めた彼女がスーパーの中へ吸い込まれて行ったのを確認すると、少しだけ車を前に出し、ハザードを出してそのまま停車した。

30分程経った頃だろうか……。突然助手席のドアが開けられた

ので、咄嗟に左の方へ顔を向けると、俺は両手に食品などでパンパンに膨れたスーパーの白い買い物袋を2つ持った玉緒と目が合った。「おかえり。」

「ただいま戻りました。」

玉緒は助手席に座ってドアを閉めると、締めて10kgはあるのではないかと思われる二つの大きな白い塊をしんどそうに膝の上に抱えた。その様子を横から眺めていた俺は、あまりの分量に啞然とした。

「凄いな……。どうしたんだ？その量。」

「お米と野菜が安かったものですから……。」

「そうか……。でも、それ重いだろ？トランクに入れようか？」

「いえ、トランクの中は暑いでしょうし、傷むと困りますから。」

「じゃあ、後ろの座席にでも置くか？」

「卵が入っているから、落ちてしまったら大変ですわ。」

「うん、だがシートベルトを掛ければ、まあ大丈夫なんじゃない……。」

「自分で持っている方が安心できますから……。」

俺の話を堰き止めるように、しんみりと笑う玉緒の顔を見て、俺は敢えて無理強いする気にはなれず、

「そうか。……。じゃあ、帰るか！」

と言つて、静かに車を発進させた。

9月1日。

昼頃、俺は舞原オートの工場内へ納車されたばかりの新車を停め、源さんと龍さんと共に、残暑の厳しい日差しを反射してキラキラと煌めいた車を囲み、商談という名の雑談をしていた。

「へえ……。これが……。新しいチャージャーか……。」

「えらく雰囲気が変わったな……。で、新ちゃん、これをそのまま高津タクシー仕様にすればいいの？」

「ええ。でも龍さん。いつもの事ですけれど、リアウィングを着け

る時に、トランクリッドのハイマウントランプの電源を落として、そのままりアウイングの方へ繋げる処置をして下さいね。近い所にブレーキランプが2つ以上点いていると何かみつともないですから」

「分かっている。……後、他には何か工事をする必要があるかな？」

「そうですね……。ホイールを20インチの鑄造アルミに変えるのと、後はいつものようにお願いします。」

今朝、待ち焦がれていた11年物のダッジ・チャージャーが小型のキャリアトラックに積載されてアパートまで陸送されて来た。何度も経験してきた筈なのに、欲しい車が実際に手元にやって来た瞬間はテンションが最高潮に上がる。お陰で車のキーを受け取るや否や、俺はチャージャーに乗り込むとエンジンを始動させ、そのまま町内を一周してきてしまった。

そうして今その足で、この車をもっと俺好みに改装する為に、俺は舞原オートセンターへやって来たのだ。

当然、新しく手持ちの工場のコンピューター制御で拵えた車とは勝手が違い、既に出来た他の工場が製造した車に後付で部品を取り付ける場合、一応同じ工業規格で造られている物とは云え、些細な所で不具合や違和感が出てしまうようで、足回りやダッシュボードの中の配線を確認める為に、一時的に車を簡単にはらす必要があるらしい。だからその分いつもより何倍も時間が掛かるらしい。

だが、俺も暇じゃないし、仕事をしなければいけないので、家に帰ってガレージから車を出すまでの間の足として、源さん達から代車としてオンボロの紺色のインペリアルル・バロンの72年型（右ハンドル）を借りる事にした。

6mを超えるようなピラーレスハードトップのフルサイズセダンである。クライスラーが昔設けていた最上級のブランド、インペリ

アルの代表的な一台であり、特にフロント側の両脇に並んだ2つの車幅灯の間にあるフロントグリルの一部が、コンシールドライト（機械式格納ライトの一種、作動部も含めて車体内部へ完全に格納するリトラクタブルライトとは違い、普通の車の普通のヘッドライトを、不点灯時のみ任意でカバーを掛けて覆い隠せるようにしたもの。ライトを点灯させると自動的にカバーが跳ね上がって裏側へ仕舞い込まれ、消した状態でもスイッチ一つでパカパカとカバーを出し入れできる。）のカバーになっている、目が隠れている分悪ぶれた面構えをしている車である。

小さい頃、この手のアメリカ車を映画などで見た時は凄まじい衝撃を受けた。まず、普通のリトラクタブルと違って本当にヘッドライトが付いていないように見えるから、夜中とかトンネルに入った時とかどうするのかと不安になる。しかもその後グリルの裏からヘッドライトがこんばんはと現れた瞬間を目撃して凄まじい衝撃を受ける。

他にも、子供の頃の俺を混乱させたのが、アメ車のテールランプだった。

今なら色々な車を見て目を肥やしてきたから、アメ車の中には現地の車両法によって、テールランプとウインカーが同じ赤いレンズカバーを共用出来ると云う事を知っていて、別々の電球を光らせる事でブレーキランプを光らせたりウインカーを点滅させたりしている場面を簡単に想像する事が可能だが、その頃の俺は、そういう車を見る度に、一体この車のブレーキランプとハザードランプを点灯させたらどうなるのか？と凄く奇妙に思った。もっと正確に言えば、ブレーキライトは一見して点灯パターンを把握できたが、ウインカーの点滅パターンがどうなっているのか全く思い至る事が叶わなかった。兎に角俺にとってアメ車は、その多くの奇抜なデザインも相まって、欧州車や日本車、そして他のどの車とも一線を画した、大きくて特別な趣をした摩訶不思議な魅力を抱かせる、そんな車なの

である。欧州車と違って上記のような特徴が有った為に、日本の車両法に適合するように特別な改造を重ねたり、燃費が悪いとか取り回しがし難いとかネガティブなイメージが刷り込まれていたりで、殆ど日本に入って来ず、馴染みが無かった事もその一因かもしれない。

ドアを開けて運転席に座ってみる。

狭い、見掛けによらず狭過ぎる。年代物だからとかそんなレベルではない。外観が凄く大きく見えるのと、フロントウィンドウが今の車よりも立っていて近い分予想以上に窮屈に感じた。

変速機は極普通の3速AT、そして往年のアメ車らしいふかふかしたベンチシートにコラムシフトである。

ドアやインパネの造形は、如何にも70年代初頭を彷彿とさせる、ドアの上端部に革紐のヒンジ、下部の方に手回し式の硝子開閉装置が付いた飾り気がない薄いドアに、崖のように垂直に切り立った木目調の平べったいインパネという、昨今の高級車の装備や質感と比較すると酷く殺風景な物である。

原動機は7・2LのV8OHVエンジン。まさに古き良きアメ車の伝統的なエンジンだ。ただ時代が古い所為か、実働218PS程と、搭載しているエンジンの割にはえらく少ないような気がしないでもない。まあそれは、現在俺達を取り巻いている自動車達が、当時と比べてそれだけ発達したという事だろう。

よくこういう代車で最悪な思いをしたという話をよく見聞きする事が多いが、この車もその例に埋もれずかなりガタが来ている代物のようだった。

先ず、エンジンが掛からない。一応スターターのモーターが作動している音はしているのだが、点火プラグが異常をきたしているのか、それともシリンドーが何本か逝っているのか、中々回ろうとし

なかった。

漸く動いたと思ったら、これまた音が凄い。

プス……………プス……………プスプスプス……………ブ・ロ・ブロロ……………と、まるで今すぐにもお亡くなりになりそうな位に青息吐息している。アクセルを踏み込んだら踏み込んだで、どう考えても煽った分よりも加速や吹き上がりが鈍い。というか、全くと云ってスピードが上がらない。そうかと思えば、ある一定以上の踏みしろに達するといきなりとんでもなく急加速するので、俺は本気でビビって反射的に急ブレーキを踏んでしまった。どうやらアクセルペダルの油圧系スロットルの一部が狂っているらしい。

とどの詰まりが、この車、ウインカーやハザードが点滅してねえええ！！カチツて音がしたら後はボンヤリと電球が灯っているだけである。この時代はまだ、炬燵のサーモスタットとかでも使われる、異種金属を2枚貼り合わせたバイメタル方式を使っている筈なのだから、電流が流れているのに点滅しないなんて事は物理的に不可能だと思うのだが、もしかしてバッテリーの容量不足によって電流が弱くなり、バイメタルが上手く作動出来ない状態になっているのかもしれない。

どっちにしろこれじゃ使いものにならない。俺はウインカーを使う事を諦め、窓を開けると腕を伸ばし、手信号で周りに自分の意志を伝える事にした。

そして家に帰り、ガレージに一旦インペリアルを入庫させると、すぐにツインターボ化した3LEV6のVQDETエンジンを搭載した自家用仕様のY31セドリック・セダンのプロアムVIPに乗り、メーターと行灯を取り付けると、そのまま俺はいつもの仕事へ向かった。

夕刻、一仕事を終え、Y31から再びインペリアルに乗り換える

と、ボロ車を返却するために舞原オートセンターを訪れた。

「おお！お疲れ！出来たよ！」

と、笑顔で手を上げた龍さんに導かれ、俺は工場内の作業場へ入って行く。

そこには、改造と整備を終えて静かに佇むチャージャーがあつた。
「いえ、此方も。ありがとうございました。」

10万Gばかりの改造費を精算し、解錠してチャージャーに乗車する。

まあ、何だ。比較する事自体が酷だということは重々承知しているが、やはり同じクライスラーの車（ダッジはかつてのインペリアルと同じクライスラーのブランドの一つ。）だと、新しい方が断然良い。最近のアメ車はダウンサイジングが進んで、デザインも昔と違って面白味がないから古い方が良いと言う人も居るが、俺は取り回しがし易く、大きさ的にも日本車や欧州車に近い最近の北米車の方がずっと好ましいと思った。

手首の機械を操作して、早速チャージャーに行灯とメーターを取り付けて舞原オートセンターを後にする。公道へ合流しようと思いい、歩道の手前で右ウィンカーを点けて停止すると、左右を確認してから俺は発進しながらハンドルを大きく右へ切った。

帰路に着く道すがら、寄り道をしていこうと思いい、初奈島中央駅へ出る為に中央バイパスに向かって白い破線が引かれた2車線の裏道をゆつくりと走っていると、白い実線と白い破線で仕切られた路肩の歩行者帯の、道沿いに並んだ陰影の美しい電信柱の内の1本の陰から、清潔感のあるノースリーブの白いワンピースを着た、黒髪の長くて色白の儂気な印象がする若い女が俺に向かって手を上げたのが、ヘッドライトの真っ白な光の輪の中に写りこんだ。

時刻は既に19時近くなり、日が高い夏場といえど夕日も大分傾

き、オレンジ色に輝いていた空にもかなりの割合で濃い紫色が滲むように混ざり合い、うつすらとした暗がりか辺りを覆っている。このまま南東の方へ向かえば中央バイパスの西端へ、北西の方へ進めば舞原オートセンター等の自動車関連工場が並ぶ地区へ出る事が出来る。が、どちらにしる昼間でもこんなうら若き乙女が徒歩で彷徨いているような所でもないし、この辺は山までとは言わないが、高台になっていて人家も殆ど無いような場所である。

時間も時間であるため、少々気味が悪く思いながらも、俺はハザードを点滅させて路肩に車を寄せ、静かに女の傍へ停車した。

自動ドアを開き、女が車内へ乗り込んだ瞬間、キャビンの内部の温度が2度ばかり低下したような、鳥肌が立つくらいの寒さを感じて、俺は反射的にエアコンの操作部に手を伸ばし、設定温度を26度から28度まで上げた。

「扉を閉めます。お手元にご注意下さい。」

そう、後部座席左側に座った女に声を掛けたが、彼女はその長い前髪で顔を隠すように俯いたまま、一言も発さなかった。

「お客さん、聞こえますか？閉めますよ！」

「……………」

今度も無言のままだったが、彼女はコクリと微かに頷いたように俺には見えた。

俺は黙ってレバーに手を掛けて勢い良く閉扉すると、その不気味なオーラをビンビンに発する女の方へ振り向いた。

「お客さん、どちらまで？」

「……………」

依然女は沈黙を守っている。聞こえていないのだろうか？今度は、俺は大きな声で叫んだ。

「何処まで行くんですか？お客さん！何か云って貰わないと困ります。」

その時、彼女が口をか細く開け、ぼそぼそと凄く小さな低い声で

何かを呟いたような気がした。

「はあ？」

と、聞き返しつつグツと身を乗り出し、左耳を女の口元に近付けてよく耳を澄ますと、俺はやっと彼女が何を言っているのかを理解した。

「四月一日町の……、西尋坊……。西尋坊まで行つて下さい。」

女の行き先を聞きとつた刹那、俺はぞつとして背筋が凍りついた。四月一日町は、自動車関連の店が集まつた第13地区車蒲谷町から更に西の方にある、初奈島最北西端に存在する、切り立った海崖に面した集落の名前であり、西尋坊はその崖の中でも一際高く険しく、まるで現実世界の福井県にある東尋坊を思い出させるような物だった。

その所為だろうか、この世界に取り込まれたまま順応する事が叶わず、職に就く事も出来ず、身内さえ居ない言い知れない孤立感を抱いて鬱屈した人間が、人知れずその上から暗く荒涼とした海面に向かつて飛び込んでいくという『事故』が一月程前から多くなり、地元民がそうした遺骸が浮遊しているのを発見する度に、西尋坊の近くに造られた無縁仏の墓所に、寂しい程飾り気のない卒塔婆や十字架といった慰霊塔がその数を増やしていくという、そんな曰くがある土地であった。

昼間だつて勘弁して欲しい場所なのに、これから夜を迎える時にそんな所へ好き好んで行かなくても、と思いつつもこれも仕事だと割り切つた俺は、右ウインカーを出して車を発進させると、10m程先にあつた路地との交差点を越えた後一時停止し、ハザードを出しながら一度左側の路地の方へバックで入り、その後ハザードを切つてまた右ウインカーを出し、そのまま前進しつつステアリングを切つてUターンをした。

一本道を海辺の方に向かって直走る。その間、俺はハイビームで照らされる路面の先を見つめてハンドルを操作しながらも、時々視線をルームミラーの方に向け、後方を視認する序にリアシートに座る女の様子をそっと窺っていた。

車内が真つ暗である事と、未だに顔を下に向けているのとで、女が何をしているのか全然判らなかったが、辛うじてどうやら左のドアに身体ごと凭れ、ボーっと車窓を眺めているようだ。その、ただそこで佇んでいる様子が、一層彼女の悍ましさに拍車を掛けている。俺は、もう彼女と目を合わさないように、ずっと前を見つめ、運転の方に集中した。

高台降りて街中を抜け、海まで至る、殆ど一車線の幅しか無く、ヘアピンカーブの外側等、所々にしかすれ違う為の待避所が設けられていない、霧がうつすらと滞る小高い岬の細い市道を恐る恐る進んで行く。時たま、墨汁のように真つ黒に染まった不穏な雰囲気を纏う海が暗い木立から顔を覗かせる上に、ガードレールが無い崖っぷちである事も手伝って、冷や汗を全身に掻きながら俺は車のシフトノブをマニュアルモードに入れてギアをセカンドに固定し、ゆっくりと慎重にハンドルを切っていた。

やがて、チャージャーは四月一日町へ差し掛かった。

まるで崖と岬の間の狭い土地に何軒かの家屋が身を寄せ合ってへばり付いているような、何とも云えぬ閉塞感に支配された、閉鎖的な田舎の漁師町である。というより、こうして走っていても本当に町民がいるのかどうかさえ怪しく思えてくる、寂れた寒村である。

町の中で唯一、頑張れば普通車同士ならどうにか離合できそうな道幅がある舗装道路である市道を進み、町のどん詰まり、西尋坊の手前に設けられた白線の引かれていない駐車場のような、30m四方の広さのあるアスファルトで舗装された広場のような所のだ真ん中で俺は車を止め、停車措置を施した。

「お客さん、着きましたよ。350G頂きます。」

呼んでみたものの、やっぱり返事がない。しかし、何故か今度はさっきまで感じていた薄気味悪い気配すら忽然と消えてしまった。

「お客さん?!」

驚き慌てて後ろを振り返ると、後部座席の上には何もなく、リアウインドウのデフォッガーの合間から差し込む薄暗くて青白い月の明かりが、シートの上をぼんやりと照らしているだけだった。

無論、ドアは開いていない。自動ドアが開く感触は無かったし、反対の右側の後部ドアもチャイルドロックがしてあるから内側から開けるのは不可能。前後スルー出来ないフロアシフトFR車だから、助手席に移動するなんて芸当も難しい。第一、ドアが開けば自動で室内灯が点灯して車内が明るくなるから嫌でも俺が気付いてしまう。窓を開けて脱出するとしても、セダンなどの場合、後部席のウインドウは硝子がリアフェンダーに干渉するので、上手くリアフェンダーを避けて硝子が下りるような一部の車を除けば、基本的に全開にする事は不可能な構造になっている。いくら細身の女でも、走行中の車から脱出するのは難事だろう。しかも道中信号は車蒲谷町内にあった2箇所のみで、その双方共に此方側が青信号で通行出来た。つまり、俺の車は目的地まで一度も止まらなかったのである。逃げ出せる隙など無かった筈だ。

というか、実際開いた窓から逃亡可能だったと仮定して、ドアも開けずにどうやってその窓を全閉したのだろうか? 運転席側の集中ウインドウコントローラーには、強く押したり引いたりする事で、一発で窓を全開全閉出来る機構が組み込まれているが、このドアに付いているウインドウスイッチにはそういう機能は備わっていない。全閉するにはスイッチを引き続ける必要がある訳だが、ドアを閉じた状態でそんな芸当をすれば、冗談拔で腕が千切れる事は必死だ(パワーウインドウの殺傷力は想像以上に強い)。尤も、こ

の車には事故防止センサーが付いているから、そもそも腕を感知した時点でそれ以上硝子が上がる事はまず無い。

ところが、実際にはどの窓も隙間なく閉まっている状態だった。なら、密室の車内からそれこそ煙のように消失したと云う事か？そんな馬鹿な……。

釈然としないし、料金をむざむざと踏み倒された挙句虚仮にされたような気がして非常に腹立たしかったが、それ以上に理由もなく無性に空恐ろしくなった俺は、運行記録に無銭乗車の件を簡単に記述すると、急いで転回して踵を返した。

夕刻から夜半にかけて、西尋坊から初奈島中央バイパス守矢口インター交差点まで至る初奈島市市道67号鎌谷線、鎌谷ヶ丘から守矢口付近を走行していると、白いワンピースの女に西尋坊へ向かえと言われ、到着すると女の姿が忽然と消えているという、怪談じみた都市伝説の噂を、俺が同業者の寄り合いで耳にしたのはずっと後の事だった。

第十四話：タクシーでバスを……

>> 新太郎

ひと山大きな仕事を、たった今し方終わらせた。

ギルドからの要請で、同じ団体に所属している新谷という個人タクシー事業者をアシストする事になり、客を乗せた30人乗りのマイクロバスに随行するという形で団体の旅程に1週間以上付き合っていた。

要するにバスの前後を場の空気を読みながら付いて行き、擦れ違いが困難な山道に行けば先導して対向車に協力をお願いし、後ろから追従している時に万が一バスが事故を起こしたり転覆したりして立ち往生すれば、直ぐ様最寄りのギルドの営業所へ引き返して救助と応援を請う。つまりちよつとした警備役の空車を走らせるのに担ぎだされたのだ。

いやあ、やけに駄賃が多いから訝しんだものの、付いて行くだけか、と思つて軽い気持ちで快諾したらえらい目に遭つた！

初奈島中央駅の観光バス用のバスターミナルで集合したと思つたら高速道路を走らされて、仙谷より500km程北部にある北海道という大きな島の南西部まで連れて行かれるし、バス旅行の筈なのに『大型車走行不可』の狭小路へ平気で入って行くし……。拳句の果てが、

「おいおい、いくらいすゞのジャーニーQだからって、この道を行くのは無茶でしょう！道幅3mジャストしか無いですよ。すぐ傍に崖もあるし……。対向車が来たらどうするんです？」

と制止したにも関わらず、

「大丈夫、大丈夫。初めて通る訳でもないから。」

「いや、あなた、この経路で30人以上の中型運転するの、今回が

初めてだつて言っていないませんでした？」

「そうだけど……。多分大丈夫でしょ。」

「いやいや……。」

「それに、対向してきても、それを説得して退けさせるのが君の仕事でしょ？じゃ、頼むよ。」

と強引に突っ込んで左前輪を山側の側溝に脱輪し、二進も三進も行かなくなつて辟易した。

丁度その時運転していた14系マジエスタのリアバンパーのフックにワイヤーロープを掛け、綱の反対側をフロントバンパーの鉤に引っ掛けたバスを牽引してみたが、3Lの2JZエンジンをボルトオンでツインターボ化した高出力車の力をもつてしても、此方のバンパーカバーが外れそうになるばかりでうんともすんとも言わなかった。

だから仕方なく俺だけそのまま山道を進んで2時間も掛けて山を降り、最も近所に在った『連盟』の営業所へ助けを求めに行った。凄く恥ずかしかった。

結局、その事務所にいた親切な人にロードサービスを呼んで貰い、軽トラを改造した牽引車で駆けつけて来てくれたサービス会社の人と共に事故現場へ引き返した。

そして脱輪脱出用のアルミ板を側溝に引っ掛かった前輪に添え、今までの苦労が嘘のように難なく路上へ復帰して事無きを得たのだが、俺はその時に交わしたロードサービスのお兄さんとの会話を恐らく一生忘れない。

「ありやりや、こりやあ……。またどうしてこんな大きな車でこんな所に入ろうと思ったのよ？」

「さあ……。」

これだけで済めば、今回の旅の苦労も笑い話で終わらせる事が出来たかも知れないが、その後もサービスエリアや道の駅での客の置

き忘れが計10回！その度に忘れられたお客様を自分の車に乗せてバスを追い掛けてパッシングで合図し、無理やり路肩で停車させて合流させた。

「ちゃんと全員いるかどうか、きちんと確認してから発車して下さいよ！何回繰り返し返せば気が済むんですか？」

その度に抗議したけれど、新谷は薄目の頭髮に覆われた頭をボリボリと掻きながら、

「いやあ、ごめん、ごめん。気を付ける。」

とニヤニヤと笑うばかりで、暫くするとまた同じ事をしでかすのだ。

そもそも毎度置いてけぼりを食らっていた土井という客の、その団体さんの中での異常な程の影の薄さにも問題があったのだろうが、普通トイレ休憩が終わった後に発車する時は、客がちゃんと全員揃っているか座席を回って確認するだろう。

だが、運転席に座ったまま、

「皆さんいますか？」

「いま すー！」

「じゃあ、出発しま すー！」

なんて策な事をやっていたら、そりゃあ漏れる奴の一人や二人も出てくる筈だ。

ギルドの方もこうした事態を予見していたのだろう。5日目の晩の定時報告の時に、初奈島支部の支部長へ、いくら何でも不祥事が多すぎる！と愚痴をこぼしたら、出来の悪い子の子守だと思って暫くの間は堪忍してくれ、といけしゃあしゃあと突き放された。どうやら新谷という奴は手癖が悪い事で有名な奴らしく、支部がバスへ同行させる車を手配しようにも皆に断られて右往左往し、最終的に何も知らずに承諾した俺に白羽の矢を立てたらしい。

新谷を外そうにも、いくら大きなタクシーギルドといえど中型免許を持っている上に実際にバスを運行している組員は数えるほどのし

か居ないので、彼に頼まぬ訳にもいかない。しかも今度の旅程では、一箇所だけ最急傾斜度48度という馬鹿みたいに急で長い坂を登降しなければならぬので、バスを前から牽引して登坂や制動を支援する450PS以上の高出力車が必須だった。エクステリアには手を加えていても、メカニクスにも手を加えて大馬力が出るように改造している事業者は少ないから、此方の方も声を掛けられる人数に限られる。

だからギルドを責めるのは酷だろう。知らなかったとは云え、二つ返事で引き受けたのは他ならぬ俺だ。

でも代わりに楽しい体験をする事も出来た。色々な状況で走って来たけれど、他の車を引っ張って坂道を登るなんてそうそう滅多にある事ではない。

行く手を遮る壁のようにせり立つ坂へ入る手前の休憩所で、互いの前後のバンパー下のフックに白い旗を付けた長さ5mの太くて黒いステンレス製のワイヤーロープの両端を結び、無線で交信して間合いを図りながら発進する。

そして、140km/hまで両車のスピードが達した瞬間、クルーズコントロール(車のアクセルを踏んで調節しなくても、コンピュータが勝手に判断して設定した速度を維持してくれる装置、かつてはカーナビやエアバックと共に代表的な高級車の装備だった。)と衝突回避システムを作動させる。

こうする事で、牽引車と被牽引車は接触する事は無く、一定間隔を保ったまま同じスピードで崖かと思う山道を駆け上がっていく。初めは平坦な道のりをゆっくりと、そして徐々にスピードを上げて段々とせり上がっていく坂道を麓から大体千m弱の高さまで全力で攀じ登るのだ。

周りを見渡せば、2重連接した大型コンテナ車を引っ張る青い日産ビッグサムのトレーラーヘッドの前に、同じ色のボルボ、そして

先頭にマツクのボンネットトラックのヘッドを無理やり連結させた超大型トレイントレーラーや、トレーラーヘッドに牽引された大型トラックやバス等が駆け抜けて行く。普通の道なら絶対に見られない光景だ。

斜度が半端なく、麓で勢いをつけてから挑まなければ途中で力尽きてしまう所為か、道法上は一般道扱いなのに法定最低速度が130km/hなので、最高速度が120km/h未満程度の軽自動車やミニカーはこの道を走る事が許されない。勿論最高速が60km/hもない原動機付き自転車や小型特殊自動車は元より、危険だという事で歩行者の立ち入りも禁止され、実質自動車専用道路、もとい高速道路のようになっていいる。

急坂の頂上を越えると大きなPAがあり、すぐに大分緩くなっているもののそれなりに傾斜があり、大きくバンクが付けられて右へ、その後左へ急旋回する下り坂と共に青い山稜の広がる風光明媚な景色を眼下に見下ろす事が出来た。

PAの駐車場でバスの前部バンパーとクラウンの後部バンパーのそれぞれの牽引フックからワイヤーを外すと、俺は用済みになったそれをラゲッジスペースに放り込んでトランクリッドを静かに閉めた。

初奈島中央駅の駅前ロータリーの一角に駐車したマジエスタの傍で、黄昏の中飲みかけの缶コーヒーを手に呆然と佇んでいると、30m程先にある観光バス専用のバス停の一つにバスを止め、三々五々に退散していく旅行者を見送っていた新谷が右手を頭上に挙げて大きく振りながらゆっくりと此方に向かって歩いて来た。散々トラブルに巻き込んでおきながら、その顔は爽やかだと感じる程に笑顔である。脳天気にも程度と云う物があるだろう。俺は少しムツとし、思わず顔を顰めてしまった。

そんな事に気付いているのかいないのか……、奴は快活に話し掛

けてきた。

「やあ、御苦労様でした！」

どうしてこんなに上から目線なのだろう？確かにヘルプとして入ったが、あくまで依頼主は目の前のこいつではなくギルドの初奈島支部である。『お疲れ様でした』が妥当だろう、常識的に考えて。

まあ、恐らく悪気はないだろう。こんな些細な事で目くじらを立てて気まずい思いをする事は俺だって避けたい。俺は新谷の方へ顔を向けると精一杯作り笑いをした。

「ええ、お疲れ様でした。」

「ほんと……、無事に終わって良かったよ。」

「やつと肩の荷が下りますね。」

俺が口を噤んで会話が途切れた途端、周りを走る車のエンジン音や帰宅を急ぐ人並みからざわざわと漏れ出る雑踏の物音が耳へ流れ込んでくる。ワイシャツの不自然に膨らんだ胸ポケットから白い紙煙草のケースを抜き出し、その中にある1本を口に咥えて箱だけ元の場所にしまうと、新谷はスラックスの右ポケットから出したジツポを使い、右手だけで器用に口元のそれに火を点け、如何にも美味くて満足そうな表情をし、辺りにニコチン特有の鼻につく匂いをした白い靄のような副煙流を撒き散らしながら、スパSPAと吸い始めた。嫌煙家で煙草の臭いが何よりも苦手な俺は、彼の様子を見て苦々しく思ったものの、煙を吸わないように息を止めて我慢し、やり過ごすことにした。

「は……っ、美味い。………ところで……。」

一服すると、また新谷が俺に声を掛けた。

眼前で喫煙されて息を止める事すら辛いのに、声を出して有害な煙を吸引するなんて正直真っ平御免だったが、無視する訳にもいかぬので俺は返事をした。

「はい？」

「高津君は、この後予定とかあるの？」

「いえ、特には……。」

実際、仕事の予定なんて無かった。というより、一秒でも早く帰宅したかった。仕事で溜まった諸々の疲労を床で休む事で解消したいという事は無論だったが、それ以上に一週間も留守にしていた家の様子が気に掛かったからだ。

「じゃあさ、これからどう？コレ！」

新谷はそう口にする、口の端を緩めたまま右手を顔の高さまで上げ、親指と他の4本の指でCの字を作るが如く軽く握る……まるでグラスを持つて掲げるような仕草をした。

「今からですか？」

と、キョトンとしながら訊き返すと、彼は平然とこう言い放った。

「うん今から。車、ここに置いておいてさ。いい店知っているからね、行こうよ！」

俺は酒の席へ誘おうとしている新谷の神経が信じられず、思わず目を丸くした。二人とも車で来ているのに、こいつは飲んだ後どうする心算なのだろうか？代行でも頼む気か？俺は普通のセダンだからそれでも問題ないが、奴は小さい方とは云え中型免許が必須なバスに乗っている。果たして中・大型車の運転にも精通している運転代行業者がこの街にいるのだろうか？

じゃあ、車を放置してタクシーで御帰還なさる気か？それでも駅のロータリーにバスをほったらかすなんて迷惑行為に違いない。素直に家へ帰るように仕向けるのが適当であろう。

「すみません。お気持ちは嬉しいのですが、やはり遠慮しておきます。ウチで家内が首を長くして私の帰りを待っているでしょうから……。」

俺が頭を下げた断るや否や、新谷の顔がぎゅっと険しくなった。

血が上っているのか、心なしか顔も赤くなっているように思われる。逆鱗に触れてしまったか？

相当機嫌を損ねたのだろうか、

「たつく……、つまんねえな！折角誘ってやったのによ！！」

と、突如逆上して乱暴に吐き捨てると、

「勝手にしろ！」

と言いついて新谷は彼のバスの方へ引き返していった。別に俺は一言たりとも飲酒をしたいとは言っていないのだが……。内心啞然としながら、両手をズボンのポケットに突っ込んで肩を揺らして偉そうに歩くチンピラのような彼の後ろ姿を俺は見送った。

まだ若干残っていた缶コーヒーを一気に飲み干す。ゴミ箱は何処だろうか、とキョロキョロと辺りへ視線を向けると、丁度正面口に隣接するように駅舎内に設けられたコンビニの入り口の前に、ケースの白い色が茶色くくすんでしまった薄汚いゴミ箱が複数置かれているのが目に付いた。

直線距離で20mばかり離れていたそこへゴミを捨てて車に乗り込むと、まるでそのタイミングを見計らったかのように左手首の機械がバイブの振動と共に電話が着信した事を示す電子音を奏で始めた。

「はい！此方、個人、高津タクシーです。」

と電話にでる。

「もしもし、舞原オートセンターです。」

受話器の向こうの相手は源さんだった。

「あ、いつもお世話になっています。どうかしましたか？ひよっとして……？」

俺は、内心わくわくとした期待を込めて尋ねてみた。実は出張前、思わぬ大金が転がり込んで来たからと、その頃欲しいと思っていた新型のBMWの5シリーズを思い切って逃げる事にしたのである。

予想通り、源さんの要件は車が完成した事を伝える物だった。俺は彼に礼を述べると、車のエンジンを点火し、新車を受け取る為に舞原オートセンターへ向かって一路走りだした。

およそ20分後、舞原オートセンターの前に着いた俺は、左ウィンを焚いてハンドルを切った状態で一時停止し、歩行者が居ない事を確認してからじわりとアクセルを踏み込んで歩道の上に乗りと、ゆっくりと工場の敷地の中に入り、社屋の前で車を停めた。

そしてエンジンを切って降車し、施錠した後眼前の建物の方へゆっくりと足を踏み出した。

「どうよ？これ。」

「おお！これは凄い！」

目の前に披露された銀色に輝く新しい自動車を見て、俺は不覚にもかなりの声量で感嘆の声を上げてしまった。残念ながら写真や映像ばかりで実車を直に拝んだ事は皆無だが、それでも源さんの仕事らしく細部まで丁寧に仕上げてあるのがよく分かる、非常に良い逸品だった。

勿論その場で即決し、購入して代金を精算すると、マジエスタから取り外した行灯やタクシーメーターをすぐに新しいF10の535iの方へ移植した。マジエスタは、かつてのプリウスのように瞬間に掻き消すと、ガレージの方へ自動的に転送されてしまった。

受け取った車に乗り込んでエンジンを掛ける。流石天下のBMW。相変わらず3L直6直噴ターボの吹き上がりは天下一品である。否、これも源さんや龍さんの神掛かった調製の結果とも思えるが、兎に角素晴らしい出来だった。

舞原オートセンターを後にした俺は、帰宅する為に中央バイパスに向かつて片側一車線の細い二車線道を南下していた。

既に日は地平線下へ沈み、薄暗い夜空の下、名残惜しく橙色に輝く夕焼けの色と混ざり合って周囲は鈍い紫色に染まっている。

住宅が立ち並んでいる割には街灯が疎らにしかなく、余計に闇影を感じる道の上を白い光のヘッドライトと青白く眩くフォグランプで照らしながら走行する。すると突如、何も無いと思われた2プロック程先の路地との交差点の左奥、距離にして2、30mかそこらかどうか……、手狭な歩道の上に建っていた電柱の裏側に突如、まるで人がそこに佇んでいるかのように黒々とした影が浮かび上がったのが俺の目に飛び込んできた。

「……………」

何だ……？と見つけた刹那、ぞつと背筋が震えるというか、不穏な気配を心の奥の方でチクリと感じたが、俺は足をアクセルからブレーキに移し、ハザードランプのスイッチを入れるとグツとペダルを踏み込んだ。何となくだが、それが左腕を高く挙げ、宛もタクシ―を呼び止めるような仕草をしたように感じたからだ。

車を電柱の傍で止め、其方の方へ振り向く。凄く暗かった所為で顔がよく見えなかったが、シルエツトとほのかに降り注ぐ月明かりから、腰まで伸びたストレートの髪がよく目立つ、白いフレンチコートを羽織った年若い女性である事は判別できた。

俺は自動ドアを操作して後部左側のドアをそつと開けた。だが不思議な事に、『DOOR』の位置にルームランプのスイッチを調節していたのにも関わらず、依然として車内は闇に包まれたままだった。

まさか故障か？冗談だろ……？

不測の事態に少々動転していた俺を余所に、その女は音もなしに

後部座席の左側へ滑り込んできた。

「すみません。四月一日町の……、西尋坊まで行つて頂けませんか？」

機械で変声させたのかと疑う程抑揚のないか細い、しかし忘れようにも忘れる事ができない位聞き覚えがある声で女が俺に向かつてぼそぼそと呟くように行き先を告げる。間違いない、あの女幽霊だ。この間は普通のワンピース姿だったような気がするが、色々と服装パターンを持ち合わせているらしい。

背筋が凍りついたが、その一方で、同じ手には二度と乗らない！という妙な対抗心が俺の中で芽生え始めていた。

「350G程頂きますが、持ち合わせは御座居ますか？」

「……はい？」

まだ目的地へ向かつて動き出さない内から運転手におよその代金を告げられ、その上そいつが半身を回して振り返ったと思ったら、さも料金を請求するが如く掌を上に向けてパラパラと振りつつ右手を伸ばしてきたからだろう。女は目を丸くしているのか、戸惑ったようなキョトンとした声を上げた。

そんな女の奇妙な反応を窺つて、俺は無謀にも幽霊に向かつて大きな態度で挑んだ。

「はい？じゃないですよ。お金持っているの？持っていないの？」

「え……？え……？」

「え？……じゃ判らないですよ。お金があるとするなら、今ここで350G払つて頂ければ西尋坊の方へ連れていきます。が、もしも持ち合わせが無いのでしたら今すぐに降りて他の車に当たってくれ。それだけの話です。……それで、どうなんです？」

「え？ええ？」

青白い月明かりによつて女の顔が白く照らし出される。相当緊張しているのか、どうやらその表情は怯えているようだった。俺はもう少しだけ強く出てみる事にした。

「あのね……、あなた、覚えてないかもしれないけれど……。この前、私の車に乗った時に料金踏み倒したでしょう？ 私はよく記憶していますよ。」

俺はダッシュボード上の運行記録簿を手にとると、運転席側の読書灯を点け、これみよがしにファイルのクリップに挟んだA4の紙の束をペラペラと捲った。

「ここ一月の間に何十人もお客さんを運びましたけど、その中で西尋坊へ行ったのはあなた一人だけ！ 序でに、今まで乗せた客の中で無賃乗車をやらかしたのもお前ただ一人！」

「嘘つかないで！ そんな筈無いわ！ 同じ車には乗らないように気を付けているもの！」

「此方は一人で複数台を、日替わりで運用しているんですよ。で、今日は新車を卸したばかりなんです。」

「そんな……。」

「取り敢えず、払えるなら今ここで350Gきっかり払って下さい。さもなければすぐに下車して下さい。流石に二度も踏み倒されるのは御免だ！」

「……………」

女は黙りこんだのか、急に車内が静寂に包まれた。

と思いきや、不意に左肩を掴まれた感触がした刹那、俺は強大な力で上半身を左後方の方へ押し倒されてしまった。お陰でセンターコンソール上の、運転席と助手席の間の肘置きで左の肩甲骨をしこたまぶつけて痛い思いをする羽目になってしまった。

女は俺を引き倒すだけでは飽きたらなかったのか、更に盛大に力を掛けて両手で俺の首を締め上げてきた。

「つべこべ言わず……………行け！！」

先程までの女の様子からは微塵も想像できない、まるで屈強の男のそのような、低くて野太い、それはもう恐ろしい大声だった。

死への畏怖とこの世にあらぬ者への恐怖から思わず失禁しかけたものの、脅しという最低な手段を用いた女への抗議と、胸の奥から沸々と湧き上がる怒りから、

「巫山戯んな！……！」

と、俺は腹の底から絶叫した。

「幽霊だから無賃で行け？だって。冗談じゃない。こっちは商売でタクシーを運転しているんだ。金を払う客ならいざ知らず、代金を踏み倒すような奴なんて死者でも生者でも金輪際お断りだ！そんなに金を出したくなければ、タクシーを拾うのではなく、その辺の車でもヒッチハイクでもしやがれ！此方は今、家に帰る途中なんだよ。何が楽しくて無賃乗車する奴の為にUターンしなくちゃならないんだ？」

「……………」

いつの間にか幽霊は俺の体から手を引いていたので、俺は彼女に向かつて乱暴に言葉を浴びせながら起き上がった。

「大体さ。四月一日町の方へ向かうなら、彼方の方へ向かうで、どうして此方側で車を停めようとするのかなあ？一々こんな狭い所で転回させられる此方の身にもなつてよ。どう考えたって反対側で捕まえた方が、Uターンせずに済む分お互いに都合がいいんじゃないの？」

「……………だって……………」

「……………」

「だって、向こう側で待っていても1台も空車のタクシーが通らないんだもの！」

「あ……………」

まあ、そうだろうなあ。この道を北上するタクシーなんて、修理工場や整備工場へ修理や整備に出す車か、車検を受けに行く車か、さもなくばそちら方面へ向かう乗客を偶然乗せた車位だろう。余程

の好事家でも無い限り、この辺りで流し営業をしようと思う者は皆無だろう。ここいらでタクシーと云えば、道路の上で捨つ物ではなく、電話を使って門前まで呼び出す物であると言われる程だ。女幽霊の言い分も尤もな事に思われた。

しかしそれは、俺には関係のない、あくまで彼女の『都合』という奴だ。

どの位時間が経過しただろうか……。唐突に幽霊が沈黙を破った。「分かったわ……。払えばいいんでしょう？払えば……。」

女幽霊が差し出してきた左腕の手首に括られていた腕時計のような黒い機械は、どういう訳かぐつしよりと濡れており、辺りに湿気と磯のような塩気の濃い香りを微かに漂わせていた。

「それでは移動料金350Gと、併せて只今の待ち時間料金64G、計414Gを頂きます。」

俺がリーダーを手にしつつメーターに414と手動で入力した途端、しおらしくしていた女幽霊の雰囲気が一変した。

「待ち時間料金ですって？！そんな物まで取られるの？」

彼女は逆上したあまり火病までも併発し始めた。

「信じられない！ありえないわ！」

「まあ、商売ですから。耄り取れるなら小金だろうと耄り取りますよ。嫌なら他の車へどうぞ。」

素っ気無く言い返すと、

「もういいわ！」

と言って女は肩を震わせて立腹し、更に何か喚きながら風に流された靄のように掻き消えて行った。

帰宅して部屋の中に上がり込むと、たった独りで卓袱台の上に食事が盛られた皿を並べて食事の用意をする玉緒のしゃがんだ背中が目に入った。俺が入って来た事を物音が気配で気が付いたのだろう、彼女は徐に俺の方へ振り返り、すっと立ち上がると、スタスタと近

寄つて来た。

「おかえりなさい、あなた。」

「ああ、ただいま……。」

「御飯にします？お風呂にします？それとも……。」

そう言つて火照つたように頬を赤らめると、玉緒は俺の体にそつと寄り掛かった。が、不幸にも俺はそんな彼女に構つてやる余裕も無い程疲れきつていた。はつきり言つて食事を摂るのも風呂に入るのも面倒臭く感じる。眠い……。

「少しだけ休ませてくれないか？疲れた……。」

背中から飛び込むようにベッドの上へ倒れようとした瞬間、玉緒に引き留められた。

曰く、

「じゃあ、先にお風呂にお入りになるのが宜しいですわ。温かいお湯に浸ければ、疲れも吹っ飛ぶでしょうから。」

一見夫に対して気を遣つた良妻の台詞のように思えなくもないが、恐らく本音では、碌に洗濯もしなかった汚い格好のまま布団の上で横になるな、という事だろう。

「わかった。」

と言うと、俺は最後の気力を振り絞るように脱衣所へ向けて歩き出した。

第十五話：裏社会の人との接触

>> 新太郎

現実世界の気候と概ね連動していたのか、猛暑日が一月以上続いた。糞暑かった夏が過ぎ、10月に入って少し経つと流石に暑さも鳴りを潜め、やや肌寒く感じるものの過ごし易い季節が訪れた。もう少し暖かければ小春日和として申し分ないのだが、熱波に襲われるよりはずっとマシだろう。

そろそろワイシャツ一枚だけでなく上着も欲しくなる時分である。下着の上から青くて細かい縦のストライプが全面に描かれたワイシャツ一枚を着、居間兼夫婦の寝室に取り付けてあるクローゼットの前に立った俺は、スラックスとセットでハンガーに掛けられた8着のスーツのジャケットを選びつつ、今日は果たして上着が必要になるだろうか、と我ながら下らない事を思案していた。

こういう事には優柔不安な性格の所為か、なかなか決断を下す事が出来ない。埒が明かないので、台所で食器洗いをしている玉緒の意見を伺ってみる事にした。

「なあ、お前。今日、上着がいると思うか？」

すると彼女は洗い物の手を止め、心底呆れているというか、若干蔑みのような物も混じった表情で俺を見つめ、大きく息を吐いた。

「あなた……、子供じゃないのですから、御自分で判断なさって下さい。」

「そうは言ってもなあ……。」

俺はそう呟きつつ背後に面している窓の方へ振り返った。朝方の空は雲ひとつ無い快晴で、群青色に澄み切った青空が窓硝子の向こういっぱい広がっている。

「今日は特に寒くはならないようですわよ。ただ、然程暖かくなる訳でもないそうですから、あなたのお好きなようになさいなさいま

せ。」

「じゃあ、着て行くか？」

「御自由に……。でも、あなた、始終車に乗っていらっしゃるのだから、正直何方でも構わないのではありません？」

「それもそうか……。それなら着て行くわ。」

俺はクローゼットから紺地に少し広い間隔で極細の白い縦線が入ったスーツを手にとると、スラックスを穿いて黒い皮のベルトと青い絹のネクタイを締め、ジャケットを羽織って身支度した。

筆記用具等を入れた黒い皮のセカンドバッグと運行記録簿を引く掴むと、俺は居間から台所を経由して玄関に向かった。

「それじゃあ、いつてきます！」

「いつてらっしゃい！あつ、そうだ！今日も夕飯はウチで食べますの？」

「たぶん……。夕飯までに帰られそうに無かったら連絡するよ。」

「分かりました。」

玉緒の声に見送られ、靴を履いて廊下へ出る。いつもと変わらない日常だ。

駐車場に降りて自分のガレージの前に立つ。3Lの2JZエンジンをポルトオクターボ化してツインターボ車にした150系クラウンの後期型を呼び出すと、俺はそれに乗り込んで発進させた。

いつも走る道を初奈島中央駅へ向かって進む。峠を越えた後、中央バイパスとの交差点を左折し、自動車専用道と平行して走る側道の方へ入る。

この様々なゲーム世界、もう少し言及すればそれらを構成する大元になった世界中の様々な時代の文化を集成した『リライフ』では、広大な大地だけでなく海までも越えて無駄に縦横無尽に敷き詰

められた高速道路ネットワークによって、物流の9割近く、旅客輸送の半分を自動車が握っている。だがしかし、残りの貨物1割弱、及び交通では全体の4割強を、帝都を中心にして各都市を結ぶ鉄道網が担っている。

大部分はこの世界の中央政府でもある運営が取り仕切る、全世界にある鉄路の大部分を所有する『RR』と呼ばれる国鉄が占めるが、帝都周辺を中心に私鉄も運行されている。

そして、ここ初奈島も初奈島大橋の高速道路のすぐ下を通る複線の線路によって本土と結ばれ、島の何箇所かに国鉄や地元のローカル線の駅がある。その中でも一番大きく、且つ初奈島方面の特急列車や急行列車の終着駅でもあり、故に旅行者を島へ出迎える玄関口として機能しているのが初奈島中央駅である。

このような側面を持つている上に、絶対に枯れない桜として有名な『不枯桜』や下から上へ向かって逆流する『助鯉弱龍の滝』等、珍奇なパワースポットのような名所や謎めいた伝説を持つ観光地をこの島は比較的多く有している。その為一年を通じて観光客の流入が多く、通勤などで使っている地元民も含めると初奈島中央駅の年間利用客数は、島内の他の小さな駅と比べて2ケタ位違う、膨大な数になる。しかもその殆どが、何時来るか不明瞭なバスではなく、常時タクシー乗り場で待機しているタクシーに乗って市内へ繰り出すのだ。

初奈島中央駅のタクシー乗り場で待機していれば、列車から降りてきた客を確実に車へ乗せる事が出来る。そういう意味で俺達タクシードライバーにとってこの駅はまさにドル箱だった。

だから、初奈中央駅へ初奈島で流し営業を生業とするタクシーの大部分が一極集中するのは考えるまでもない事だった。

タクシーは基本歩合制である。客が多く拾えれば儲けものだが、一人も居なかった場合、収入が激減するどころか燃料代などの結構

な出費が申し掛かってくる。一滴もガソリンやLPガスを使わず、ただ待っているだけでお客さんが向こうから出向いてくれるのなら、それに越したことはない。

だから、朝一番の列車が入線してから最終列車が発車する間際まで、初奈島中央駅の中央正面出口のバスターミナルの隣にあるタクシー乗り場では、客待ちをするタクシーが列を成し、駐車場や通路だけでなく、接続する中央バイパスの側道の西行きの方の第一走行帯の上にまで渋滞を形成する形で占有しているような有様だった。

そうして今日も、バイパスの側道を西から走ってきた俺は、駅との交差点の東側にある、バイパスを越えて対向する側道同士を繋ぐ陸橋を経由して転回すると、既に第一走行帯の上で10台程の長さの渋滞を作っていたタクシーの列の最後尾に並んだ。

だが、何処かおかしい。普段第一レーンに掛かるまで並んでいると、ぐるっと回ったタクシープールの中まで100台以上タクシーが列を作っている筈なのだが、という訳か10台位しかない。駅へ入る交差点の手前で渋滞が途切れて終わってしまったているのだ。

色とりどりのタクシーで埋め尽くされていたロータリーが、今朝に限って灰色のアスファルトの色が遠目からもはっきりと見える位閑古鳥が鳴いている事にも驚いた。が、それ以上に交差点の先に青い制服に紺色の野球帽を被り、赤い誘導灯を手にした警備員が数人いる事に俺はただならぬ気配を感じた。

奇妙な事に彼らは、駅の中へ入れないようにタクシーを誘導していた。そしてその度にそのタクシーの運転手と激しく口論しているようだった。

勿論、俺だって例外じゃなかった。

運転席の窓硝子をコンコンとノックされたのでパワーウィンドウを下げると、開口一番こんな事を言われた。

「空車ですか？」

「はあ……、見れば判るでしょう？空車ですよ。」

「あの、申し訳ありませんけどね。駅へ入らずにこのまま……まっすぐ行つて貰えないですかね。」

「はあ？どういう事ですか、それ？」

訳が解からない。

無意識の内に俺は誘導員の顔を睨みつけていたのだろう。彼は少したじろぎつつも高説明した。

「すみませんねえ。実は駅で客待ちするタクシーが交通の妨げになるという事で、前から市や駅の方に苦情が着ていましたね。市と駅とタクシー協会との連携で、空車のタクシーを駅の中に入れないようにする社会実験を今日から行なっているんです。御協力をお願い出来ないでしょうか？」

「……………そう、仕方が無いなあ。」

「すみません。御協力有難う御座います。」

平身低頭にお辞儀する警備員の傍から離れるように俺は静かに車を発進させた。

仕方がない、とは思ふもののやはりしつくりとこない。俺は連合だから、いざとなれば他の街まで行つて稼いで来る事も可能だが、市内で営業している他の事業者や運転手達はどうなるのだろう。初奈島中央駅の集客能に期待というか、自身の収支を依存している奴は相当数いるだろう。空車は入れない、こんな事がまかり通つたら彼らの首を締め上げる事にもなりかねない。

というより、あくまで実験としての一時的な仮の措置として収束すればいいが、万が一この状態が恒久化して自然に定着した場合、俺の方の負担だって尋常ではないものになってしまう。それ以上に折角目の前に宝の山があるというのに指を啜えて素通りしなければならぬなんて口惜しい。何か上手い手はないだろうか？

ふと閃いた。空車お断り、と云う事は駅まで向かう客を乗せてい

る状態ならいくらでも入れると云う事である。なら、それを逆手に取ってしまえばいいのではないか？

途端に俺の頭の中に一つの案が浮かんできた。そうだ、これで行こう。俺は大至急で自宅へ引き返した。

リビングの扉を開けて部屋の中へ足を踏み入れると、丁度お茶を淹れて卓袱台の周りを囲み、茶菓子を啄んでいたらしい玉緒とヨネさんと香澄が一斉に俺の方を振り向いた。

「あら？おかえりなさい、あなた。えらく早いお帰りですね。お仕事は？」

「ああ、まあ……ちょっとな。」

言葉を濁して玉緒の質問をはぐらかすと、俺は3人に相對するように卓袱台へ腰を下ろし、彼女等の顔を順番に見回した。

「ねえ、みんな……、バイトを試してみる気はないか？」

当たり前かもしれないが、彼女等は目を点にして俺の顔を無言で見つめている。少し唐突過ぎたか？先走り過ぎてしまったようだ。急いては事を仕損じる。気を付けなければ……。

俺は今し方遭った出来事を簡単に伝えようと、改めて彼女等に要請した。

「いや、なに……。ただ単に客の振りをして、俺が車を駅内へ入れるまで後ろで座っていてくれたらいいんだ。」

俺は玉緒達に、俺の思い付いた事を簡単に説明した。

まず、玉緒達を初奈島中央口正面の交差点、中央バイパス西行き東側付近、喫茶店か百貨店に待機させる。そして必要に応じて路肩に停めた車へその中の一人を電話で呼び出し、実空車表示を『賃走』に変えた状態で駅の敷地内へ侵入する。

そして、上手く駅の中へ入れたらタクシー降り場で彼女を下ろし待機場所へ下がらせ、自分はスーパーサインを『空車』表示に切り

替え、何食わぬ顔でタクシー乗り場へ車を横付ける。

乗車場で無事に客を拾えたら、その人が向かう目的地まで車を走らせ、料金を受領後駅前まで戻り、待機場所から別の一人を呼び出す。これをローテーションで一向繰り返す。

毎回さくらとして別の人間を乗車させる事で、駅の管理者サイドへ不正通行を発覚させ難くする。これが味噌だ。

「どうだろう？引き受けてくれないか。手間は弾むぞ。」

「でも、社長。それ、わたし達が必要、無くありません？」

と、香澄から突っ込まれて御破談になるとは思わなかったがな。

「たしかに、わたし達がやるよりも、向こうで誰かをお雇いになる方が効率的だと思いますわ。」

「そうですね、玉緒さん。それに社長、わたし達を数時間放置とか平気でやりそうだし……。」

「……………」

御尤も過ぎて立つ瀬がない。

結局、俺独りで初奈島中央駅へ向かう事になった。仕方がない、望は薄いが誰かさくら役になってくれそうな人を探す事にしよう。

……と思ったのだが……

「はい！どんどん入って！どんどん入って！」

「空車発見！はい、左寄って！左に寄って下さ　い！」

「あ……、あの……。うち空車なんやけど……。」

「あ、良いです。良いですから！入って、入って！」

「?????」

中央バイパスを東向きに走って初奈島中央駅前交差点に接近すると、たった一時間弱しか経過していないにも関わらず、反対車線では何人かの誘導員が車道の左端に間合いを取って並んで誘導灯や大きな赤い旗を振り、先程とは打って変わって客が乗車していない車も分け隔てなくどんどん駅の中へ通している光景が俺の目に入って

きた。さっきまで頑なに空車を入れる事を拒んでいた様子を知っているこつちとしては、何だか狐につままれたような気がする。それは他のタクシーの乗務員も同様なのか、

「本当に入っても良いの？」

と異口同音に訝しんでいる。

接近してから初めてその姿を認めたが、東向きから西向きに転回出来る陸橋の傍の歩道にも警備服姿の誘導員が控えていて、俺の車に向かって誘導灯を振り上げつつ、橋を渡って反対車線へ向かうように誘導していた。

道沿いに並ぶ誘導員の指示に従って対向車線へ入り、そのまま道路の左側に車を寄せて交差点を左折する。今朝方の事が嘘のように、何の咎めもなく駅の中へ通されたので、俺はやっぱり拍子抜けした。

朝令暮改なんてレベルではなく即行で通行規制が撤廃された原因は、タクシープールに着いた時に明らかになった。タクシーに乗り込もうと順番待ちをする乗客で、タクシー乗り場の周辺が大混雑に陥っていたからだ。需給の均衡を保つ為に供給要因を制限しようと極端な施策を行った結果、やり過ぎて反対にその需要に追いつかなくなってしまったのだ。

大部分の利用者がタクシーを使う上に、元々人の流入が激しい駅である。空車のタクシーがさっぱり来なくなった事で、まるで堰き止められた砂防ダムの中の川の水の如く、あれよあれよというまにこういう惨状を呈してしまったのだらう。はつきり言って、始める前から容易に予想出来た状況だと思っただが、これ程の大騒ぎになるまで市側が何の対策も取って無かったであろう所に、俺はある意味驚愕した。

当然の事ながら、普段は長時間の待機を強いられる駐車スペースもガラガラで閑古鳥が鳴いており、素通りをして歩道にクラウンを

横付ける。兎に角客を捌く為に来る車来る車に機械的に放り込んで行くので、すぐに俺の車にも男が一人乗り込んだ。

メーカーは判らないが、如何にも高級ブランド品といった感じの、ホスト辺りが好んで身に付けそうな気障な黒いスーツをそれと感じさせずに着こなした背の高い東アジア系の、30前と思しき若い男である。ただ、黄色人種の割には彫りが深く濃い顔立ちと、襟の第一ボタンとすぐ下の第二ボタンを留めずに開けた白い薄手のワイシヤツの隙間から垣間見える、痩せている体型にそぐわない筋肉質な肉体から、こいつ……日本人ではないな……、と俺は直感した。

「どちらまで参りましょう？」

「そうね……。まずは不枯桜を見に行こうかね。」

元々日本語が達者なのか、この世界では機械的に日本語へ翻訳されているのかは定かではないが、男のそれはかなり流暢な部類の代物だった。

「畏まりました。」

まずは……、という男の言葉の発し方に何処か突っ掛かった物を覚えたが、俺は彼の言う通り不枯桜へ向けて車を発進させた。

初奈島中央駅から南西の方、中央バイパスとの交差点から桜小路通りを真っ直ぐ下ったどん詰りに、初奈島市営桜公園という名の、海岸まで広がる東京ドーム一個分程度の規模がある大きな総合市民公園がある。その中心部、放射線状に5本延びた桜並木が交わるロータリーの、円形の植え込みの中央に、何時来ても満開で薄桃色の可憐な花を魅せつける不思議な桜があり、絶対に枯れない事から『不枯桜』と呼ばれ親しまれている。

公園を走る通路は、歩行者専用の散策道等を除けば概ねアスファルトやコンクリートで舗装された、道幅6mから10m程度の広い道ばかりだったので、20km/hの徐行を厳守させられるものの、

50G程度の入園料を払えば不枯桜の間近まで車で接近する事が出来るようになってる。

そして今俺は、男の要望に従って、不枯桜を囲むロータリーを時計回りにグルグルと、少なく見積もってももう50周以上もエンドレスで旋回していた。半径10mかそこらの小さなラウンドアバウトなので徐行しても20秒程度で一周してしまうとはいえ、いくら何でも周り過ぎだ。正直言って目が回ってクラクラする。環状の交差点の中に3本引かれた右方向へ周回する事を示す矢印表示や、芝生を囲み、ラウンドアバウトへの進入口に左折矢印と停止線が描かれた、同じ様に連なる桜並木も、目眩を誘発させる視覚効果を生んでいるようだった。

無駄に回る分料金が嵩むのは良いが、そろそろ勘弁して欲しいと音を上げそうになった頃、

「もういいよ。ありがとうね。」

と、ようやく男が俺に声を掛けた。

「御満足して頂けたでしょうか？」

内心ホツとしつつも、一応の儀礼として俺は後ろの男にそう訊ねた。やはり彼の口調から、不満が滲み出ている、というか引っかけを感じたからだった。

ところが、俺の不安を余所に、男は朗らかに微笑むとこう口にした。

「うん、満足したよ。運転手さん。君、良い人ね。香港なら嫌な顔をせずにグルグル周り続けてくれる人、そうそう居ないよ。」

「それは……、どうも……。それで、次は何方へ参りましょうか？」

「そうね……。運転手さんは何処かお勧めな場所はないの？」

「お勧めですか？……そうですね。」

右にいったいに回っていたステアリングホイールを逆方向へ回して元来た道へ左折しながら、俺は暫し考えた。そして、結局一番近い観光名所へ連れて行く事にした。

そうして、市内にある様々な観光名所に男を連れ回す内に、俺は男と名刺を交換し、色々な世間話を交わすようになっていた。

男、渡された名刺には黄　飛影という名と連絡先だけが印字されていた、は俺に、

「僕はね、香港から来たんだよ。」
と言った。

「香港……、中国の方なのですか……。」

道理で色んな意味で日本人ばくない筈だ。俺は心の中で納得した。
「何時から此方の方においでになられたのですか？」

「今日だよ。」

「今日?!」

俺は仰天してうつかり飛び上がりそうになった。だって、訳が分からず混乱している人間特有の、あの狂気じみた悲愴感や絶望感が、彼からは一切感じなかったからである。右往左往している訳でも、思考停止して付和雷同している訳でも、諦念のあまり妙に達観している訳でもない。平静……、落ち着き……、いやもつと違う何か。兎に角、少なくとも同じ様にトリップを経験した俺から見るとかなり不気味に思う程、彼の仕草や態度は普通その物だった。

いや、態度こそ普通だがその行動も謎だ。普通、見知らぬ新しい場所に突然飛ばされたら、何はともあれ住居の確保（まあ、これは初めから用意されているが）とか、仕事を探して食い扶持を賄うとか、その世界での生活基盤の確立を最優先事項に据えるべきだと思うが、どうしてこいつは呑気に観光などやっているのだろう？　そういうのはある程度色んな事が落ち着いて余裕が出来てからこそ出来るものではないのか？　来て早々にこんな事をするなんて……、狂っている。

おかしい、否怪しいと云えば、黄の手首の機械に頻繁に掛かって

くる電話である。

彼が中国語で話していたから会話の内容こそ推測不可能だったものの、その高圧的でたまに怒気を混ぜる激しい口調から、彼が何処かの組織で相当高い地位にいる事と、一見気さくな印象とは裏腹に剣呑とした性格をしている事が窺われた。

俺は車を走らせつつ、以前同じギルドの事業者である池田と加山と雑談をしている時に彼らが交わっていた遣り取りを臆げながら思い出していた。

「うゝん、何と言ったら良いんですかね？何というか……、裏がある、っていうか……。そんな感じを漂わせている人が増えて来たよね。特にこの1週間で。」

「あ　　！解ります！解ります！お前絶対、こつち来る前に娑婆で何か良からぬ事をやっただろ！と云う感じの……。」

「そうそう、そんな感じ！服装も感じがいいし、言葉遣いも丁寧なんだけど、オーラっていうか、雰囲気がまんま裏稼業で、やーさんの匂いがプンプンしているのとか……。」

「分かります。分かります。絶対お前人殺っているだろ、っていう感じの奴とか……。」

ああ、そうか。あれはそういう意味だったのか……。確かに雰囲気とか、黄の節々から漂ってくるオーラは、俺達堅気の人間にはない何か物騒な物だった。

最後に、

「助鯉弱龍の滝を見たいよ。」

と男からリクエストされたので、俺は島の北部中央に広がる山岳地帯へ車を向けた。

真ん中に一際高く聳える標高千m弱の活火山を中心とし、本土の物には遠く及ばぬものの、緑の豊富な森林と有り余る水源地帯が広

がる山々が連なっている。

そういう所だから、自然と温泉郷や水郷地帯が出来てリゾート化し、その中の象徴として、川が流れ込む深いすり鉢状の窪地の底にある活火山の火口が間欠泉と化して断続的に熱水を吹き上げらせ、水を一段と高い所へ押し上げるのでまるで滝が自然の理に反して逆流しているように見える助鯉弱龍の滝が崇められていた。直ぐ側を川に沿って市道が走り、車窓からも水が爆散して激しい飛沫を上げる様がよく見えるから、パワースポットとしても宣伝し易かったのだろう。今や島の中で定番の観光地の一つになっている。

俺に車を路肩に停めさせ、対向車線側のガードレールの向こうに見える間欠泉をかなり長い間ぼんやりと眺めていた黄は、近くにある温泉街で一番大きくて豪華なホテルへ向かうように突然指示した。言われた通りに車を発進させ、温泉街の奥まった所にある有名な5つ星ホテルの前に車を横付けると、事前に連絡があったのか、俺が後部座席の自動ドアを開けた途端、唐突に濃いサングラスに黒いスーツ姿の、柄の悪いSPのような屈強な男達が3人現れて整列し、その中の一人が要人をエスコートするように車のドアを手で支えた。黄と広東語で交わす遣り取りの様子から、どうやら男達は彼の部下か舎弟のような感じだった。

「高津さん、今日はありがとだね。僕、とっても楽しい時間を過ごせました。また、お願いします。……これ、お礼ね。」

俺の名刺を手渡したからか、俺の名前を親しげに呼ぶと、彼は正規の代金の他にチップとして100万Gも振り込んできた。

いきなりお礼と称して1千万円もポンと手渡されれば誰だって狼狽するだろう。俺だって例外ではない。あまりの金額に仰天し、桁を4つ位多く見間違っているのではなからうかと3度もディスプレイに表示された数字を見直した。

「お……お客様！いくら何でも多過ぎます。喜んで頂けた事は運転手の冥利に尽きますが、こういうのはお気持ちだけで結構です。」

当然、常識的な感覚から受け取れないと判断した俺は、黄に辞退する旨を申し出た。ところが俺が返金しようとする素振りを見せるや否や、彼の笑顔から目だけ笑みが消え、彼は俺の左肩に右手を乗せてこう言った。

「高津さん。忠告するけど、僕の好意は素直に受け取っておいた方が、身のためよ。ありがたく受け取りなさい。その方が身のためよ。うん。」

そのあまりにも低く、脅迫じみて陰鬱な調子に圧倒され、二の句も告げられずにいる内に黄は俺から背を向けて降車し、肩の所まで右手を挙げてバイバイをするように俺に向けてヒラヒラと振りながら、3人の部下を引き連れてホテルの中に入り、そして消えて行った。

俺はその様子を呆然と眺めつつ、とんでもない者に関わってしまったかもしれない、と言い知れようのない不安に駆られていた。

現実世界で居場所を奪われた、マフィアやヤクザといった裏社会の人間達の安寧の逃亡地として、またそうした人間達の多額の資金の流入先として、リライフが利用されているのを俺が風の噂で知ったのは、まだ大分先の事だった。

第十六話：自賠償と車検が切れている奴は逝ってよし

>>新太郎

スーパージャージャーを装着したK A 9型後期のレジェンドを車庫に停め、俺は自宅のある階へエレベーターで上がった。

部屋のドアを開けて玄関に上がり、台所へ入ると夕飯の準備をする玉緒の姿が目に入った。当然だ。早めに切り上げて帰ってきたとはいえ、もう夜の19時半である。

「あら、お帰りなさい、あなた。今日は早いんですね。」

俺の姿に気が付いたのか、此方へ振り向いた玉緒が声を掛けてきた。

「ああ、客足も鈍いし早目に切り上げたんだ。」

「……………」

「ところでお前。今日、俺宛に何か届かなかったか？」

俺がそう尋ねると、玉緒は何かを思い出すように首を傾げた後、

「ええ。リビングの卓袱台の傍に置いてありますわ。」

と答えた。

「そうか、分かった。」

俺はリビングへと足を進めた。

卓袱台の足元には、玉緒の言う通り数枚の封書が乱雑に積み重ねられていた。

取り敢えず一番上の細くて横長の薄翡翠色をした封筒を手にとった。

封筒の表には、濃緑色で桜をモチーフにした市章と『初奈島市陸上運輸局・第二種普通免許可課営業認可部庶務1係』とでかでかと書かれ、プラスチックの透明な窓の向こうに、白い紙に印字された俺の名前と住所が透けて見えている。

糊付けされたフラップ部分にペーパーナイフの刃を入れ、破り開けて中の書類を取り出した。

『個人タクシー連合所属・個人高津タクシー事業所
代表・高津 新太郎殿

R107初奈島中央線（バイパス側道）初奈島中央駅正面口交差点付近におけるタクシー等による慢性的な渋滞の暫定的解決策として、虹色ローテーション作戦（仮）を条例規則で施策するに当たり、上記の者に青色マーク（木曜日のみ空車時駅敷地内進入を許可する）を交付する。

承認印・国土交通省下初奈島市陸上運輸局局长・長谷川 博昭
発行・同第二種普通免許許可課営業認可部庶務1係』

このA4用紙の他に、もう一枚同じサイズの紙で、吸盤付きで窓に貼り付けて下げられるタイプのステッカーが2枚挟まれた物が同封されていた。

『タクシー事業者様、及び乗務員様各位
虹色ローテーション作戦についてのお知らせ

Q・虹色ローテーション作戦って何？

A・初奈島中央駅正面口（北口）付近の客待ちタクシーによる慢性的な渋滞の解消策として市と陸運局が中心となって市内を基本営業地域とするタクシー事業者に対して施行する特措条例規則です。

Q・具体的にどういう事をするの？

A・一週間の七日間を、日曜日を起点にして赤・橙・黄・緑・青・藍・紫の七色に分け、一日に駅に入れる最大空車台数を人為的に制

限します。これにより、利用客の交通の流れを阻害する事なしに渋滞の発生リスクを軽減させます。

Q・何時から実施するの？

A・まだ様子見を含めた姑息的な施策なので、本格的な開始時期は未定ですが、10月23日（日）より試用期間を兼ねて実施致します。また、暫時経過を観察し、その結果次第では漸次完全施策へと移行します。』

この文書には、この下部に一週間のスケジュール対応表があり。それぞれの色が何曜日に割り振られたのか解り易く表示されていた。ステッカーも白い長方形の台紙に青い丸が大きく描かれた、日章旗を彷彿とさせる簡潔な物である。

その下にあつたA3サイズの大きな白い封筒へ手を伸ばす。開けてみると中から個人タクシー協同協会が隔月で刊行している情報機関誌の最新号が滑り出てきた。後で目を通しておこう。

更に最後、薄堇色の縦に細長い封筒を拾い上げ、これも封を切ってみる。すると中から折り置まれたA4の白い紙がハラリと掌に落ちてきた。

その紙にはこんな事が書いてあつた。

『今期の車検、定期整備、自賠責の更新の手続きを完了致しました。

』

タクシーの場合、車検、定期整備は2年、自賠責保険の更新手続きは1年に一度必ず行わなければいけないと法律で決められて、俺はこの時期に諸々の手続きをする心算でいたから、その報告の書状だろう。この世界では機械は簡単に電子データに戻す事ができるから、態々指定工場や認証工場まで車を持ち込まなくても、データ化

された車がガレージから勝手に工場の方へ送られて整備され、お金も自動振込で請求されるから、此方は特に何もする必要がない。しかも事故らない限り滅多に壊れる事が無いから、現実世界の糞な車検制度のように何万円もボラれる事もない。精々バッテリーやオイルのような消耗品を交換して、1台当たり千Gが関の山である。

しかも、これらの事は個人タクシー連合や連盟といったギルドが、個々の事業者と、整備工場と各地の陸運局を仲介して面倒な手続きを代行してくれる。だからこそ安価で簡略に事を進める事が出来るのである。

もしも、これらの申請や更新手続きを俺独りでやらなければならぬ、なんて事になれば、俺のように何十台も車を運用している運転手は間違いなく死ぬ。

ちゃんと法律に遵守するように全ての手続が行われた事を書面に軽く目を通して確認すると、夕飯を盛った皿を運びに玉緒がリビングへ入って来たので、俺は一先ず晩飯を済ませる事にした。

さて、その週の週末から、『虹色ローテーション作戦』は予定通り開始されたが、事前にタクシードライバーの方へ詳しい説明がなされていた事と、適宜に空車を入れて偏った受給の停滞を防いだ事により、懸念された程の混乱は見られなかった。

俺も、初奈島中央駅に入れる木曜日と、予約が入った日を除けば、専ら帝都が、たまに近隣の都市の繁華街へ流し営業をしに遠征していた。特に金曜から週末に掛けては、深夜から未明まで飲み明かす酔い客が多く拾える事もあって、深夜営業をする割合も増やすようにしていた。

そうやって行動範囲を広げていけば、利用する休憩場所とか給油所とかも増えてきて、結果的により多くの同業他者と知り合って親

しくなる機会も増加した。

そうしたネットワークを太くしていくと、スーパーのタイムセール情報を遣り取りする主婦達の井戸端同盟のように、どこで何処の時間帯に客入りが良いか、どここのスタンドがより安値か、あそこの昼食は美味しい、という感じで様々な噂や流言が清濁の区別なく耳元で飛び交うようになっていた。

その日も、VQ30DETTのY33グロリアのアルティマで営業していた俺は、ガソリンの残量が心許無くなったので、休憩も兼ねてスタンドへ給油しに寄った。

そのスタンドはその都市で一番大きなスタンドで、普通車20台、大型車が6台も一度に給油できるだけでなく、周辺の給油所の中でレギュラー・ハイオク・軽油の3点セットの他にLPガスを唯一扱っていたので、一帯のタクシーが給油の為に終始集結していた。すると、自ずと色々な風の噂が耳の中に流れ込んでくる。

例えばほら、向こうの給油機の両側にそれぞれ連盟カラーの18系クラウンのロイヤルサルーンの後期型とY34セドリックを並べ、燃料補給しながら談笑している二人の男の会話が耳を澄ませば聞こえてくる。

「……ハハハ、そうなんだ！」

「そうなんだよ。そうなんだよ。」

「へえ……。あ、そう言えば聞いたか？」

「何を？」

「何か、個人タクシーの営業許可の法規定を今度変えるとか……。」

「そうなのか？」

「ああ……。よく知らんが、大掛かりな改定になるらしいぞ。」

「ふゝん、でも俺等には関係無いだろう？これから申請する人間

は兎も角……。」

「それがさあ、ギルドに所属しなくても個人タクシーを開業できるようになるらしい……。」

「はあ？直接協会に事業者登録するのか？」

「さあ、そこまでは知らん。たぶんそうじゃないか。」

「そんな事しようとする馬鹿がいるのか？書類の申請や車検の手続きだけで余裕で死ねるぞ。」

だよなあ、と俺は心の中で男達の内の一人の意見に同意した。何だかんだと言つて門戸を一応開いているけれども、自分達の既得権益を守る為に、基本的にこの業界は新規参入に対して排他的だ。俺だって客の取り合いが確実に激化するから、出来れば新しく人が入って来て欲しくはない。それに金を貰つて客を運ぶ以上、一定以上の安全とサービスの価値を常に保っていなければならない。その為、個人タクシー協同協会に事業者として所属して営業許可を得るには次のような基準を満たしている事を証明し、膨大な書類を作成して審査を受けなければならないのだ。

- ・乗務する事業者本人が、指示された第一種免状と共に第二種免状も所持している事。
- ・事業で使用する車が、法規定通りに造形された物であり、かつ指定された種類の車検及び定期整備を義務付けられた旅客事業用ナンバーを正式に取得した車両である事。
- ・事業者本人を証明できる物を二種類以上所持している事。
- ・営業拠点において、その住所等が架空の物でない事と、該当住所に事業所が存在する事を証明する必要書類を準備する事。

こういった物の関係書類を100種類近く用意して審査して貰わなければならない。自動車関係の書類こそ、販売会社や指定工場、陸運局が代行して準備してくれたりするが、それ以外と保険と組合

への加入手続きは自分で行わなければならない。はつきり言って非常に面倒臭い。

事業者と協会を仲介し、さらにそんな煩わしい手続きを一気に引き受けてくれる、それがギルドなのである。

それだけではない、客の斡旋、保険事業と労働組合の代行窓口、トラブル時の弁護士の紹介、銀行業務等もギルドの主要な役割だ。確かに少々高めの献金を収めなければならないが、全体から見ればギルドに所属している事は俺達個人事業主にとって、本来の稼業に存分に集中出来るという意味で非常に有利な事なのだ。

もしもギルドに入らない事に利点を見出すとすれば、精々税金以外の収入を自分の物に出来る事と、ギルドの規定に囚われずに自由に運行車両を設定出来るかもしれない事位である。

まあ確かに、スーパーカーのタクシーとか軽自動車のタクシーとか、既存の枠では実現不可能な車両が出てくる余地があるのは大変面白そうだと思うが、そんな些細な事ために態々茨の道を突き進む必要は全く無い気がする。

ところが、俺の予想に反して居たのである。そんな馬鹿が……。

10月ももうすぐ終わる頃の週末だった。

前日、遠出して飲んだ拳句深夜の長距離バスに乗り遅れた酔い客を、本土とは別のもう一つの巨大な大陸として隔離されたファンタジーゲームの世界との間を定期的に結ぶ高速船が就航する、南の方にある音羽という大きな港湾都市へ運んだその帰路。片道2車線の高速道路の、はみ出し禁止の黄色い実線の車線が引かれた10km超もある物凄く長いトンネルを、テールライトだけ後期型に組み換え、3LにボアアップさせたツインターボのJZX100系のチェイサーのツアラーVの前期型を走らせていると、後ろからグングン

と近付いて来る自動車の白いライトがルームミラーに映っている事に気付いた。

俺の後ろにぴったりと張り付いたその車は、白いランボルギーニ・ガヤルドだった。車高の低い楔形のフォルム、シャープな三角形の形状がクールなライトレンズ、ガルウイングの大きなドア……、嘆息する程格好良い。が、何かおかしい。屋根の上に何か黄色いランプを取り付けている。余計な装飾など無用だろうに。

よくよく見ると、ランプに何か文字が描いてある。『たくしい』と……。

いやいや英語、せめて片仮名で書けよ！なんで平仮名？と心中で突っ込んでいると、そいつがパッシングをして煽ってきた。

ところが生憎、俺のすぐ前にも100km/hでのろのろと走る、明らかに許容量超過しているだろと言いたくなる、車体が風船のようにパンパンに膨らむまで廃材を堆く積み上げた10tの幌付き車の大型トラックが居た。

だからスピードが出せないというのに、後ろの車は俺の車に向かって、さっさと行け！とも言わんかの如くピカピカとハイビームを点滅させ、盛大にクラクションを鳴らした。

ビ

ッ！ビッビ

ッ！

流石に蟬谷に青筋が立ったような気がする。こんな時にリアフォグがあれば閃光を煌めかせて牽制する事が出来るのだが、残念ながらこの車には欧州車と違って純正のリアフォグは付いていなかった。抜かった。改造する時に、リアバンパーの所にも装着しておいて貰えば良かった！後の祭りだ。仕方がない、帰ったらまだリアフォグが付いていない日本車や米国車にも漸次装着して、全車標準装備化を目指すか……。

なんて事を考えていたら、前に行くトラックの尾灯が突然消え、車全体が一つな大きな影となり眩ばかりの白い光に包まれた。トネルの出口だ。

俺はロービームを切ってスモールまで落とすと、右ウインカーを点滅させて車線変更の準備をした。

黄色い実線が途切れ、白い破線に変わった。今だ！俺はほんの少しだけステアリングを右に切った。

その刹那、なんと後ろのガヤルドも俺とタイミングを被せて車線変更してきた。しかもノーウインカーのフルスロットルで。危ない！俺は条件反射でペダルが壊れそうになる位ブレーキを蹴っ飛ばして限界まで踏み込み、ABSを効かせながらフルブレーキを掛けた。

ガコンツ！という大きくて鈍い轟音と衝撃と共にチェイサーが左側の路肩の方へ1m程弾き飛ばされた。バランスを崩して後輪がスリップしたけれど、そこは俺もプロドライバーだ。咄嗟にカウンタ―を切って（ドリフト時など、後輪や駆動輪が横滑りした時、体勢を整える為、滑り始めた方向と逆方向へステアリングを切る事。左を向いて車が滑り始めたらその分ハンドルを右に切る。まあ、そんな事を気にしなくても、常に自分が行きたい方向を見据えてそちらの方向へハンドルを回せば良いだけなのだが……。）車体を真っ直ぐに立て直したから、ガードレールに突っ込むなんて事態は辛くも避けられた。

でも、絶対フロント部分に凹みが出来ているよな。だって事故を起こしたのだから……。俺はげんなりしつつもハザードを点滅させ、すぐ先にある路肩の緊急退避帯へ車を横付け、エンジンを停止した。目の前には、やはりハザードを焚いた先程のガヤルドが、五月蠅いエンジン音をがなりたてながら停車していた。

警察に通報して電話を切った後、俺はそのまま個人タクシー連合

の無線番号へ掛け直した。

「はい、どうしましたか？どうぞ。」

オペレーターの若い男の声が、手首の機械から漏れ出て来る。

「此方、営業番号109、高津タクシーです。どうぞ。」

「109……高津……。了解、確認しました。どうぞ。」

「現在、事故遭遇にて音羽自動車道上り、竹原IC手前の路肩にて停車中。どうぞ。」

「事故ですか？どうぞ。」

「事故です。どうぞ？」

「通報は済ですか？どうぞ。」

「済です。どうぞ。」

「了解。状況報告お願いします。どうぞ。」

「追い越し時での車線変更中、二重追い越しを仕掛けた後続車に釜、両車損傷あり。どうぞ。」

「了解。怪我とかはありませんか？どうぞ。」

「今のところは感じません。相手の負傷は現状不明です。」

「了解。万が一の場合もあるので一応病院へ行つて下さい。それと、事故証明と共に診断書もギルドの保険窓口の担当者へ提出して下さい。どうぞ。」

「了解しました。どうぞ。」

通話を終わると、俺はそつとドアを開けて車外へ出た。

チエイサーは、やはり右横、フロントフェンダーから前を思いきり凹まされ、破れ外れたフロントバンパーのフルエアロがベリツと捲れて超鋼鉄製のバンパーが頭になり、右側のヘッドライトがずれ落ちて、辛うじて配線ケーブルによってぶら下がっている。ただ、見た感じラジエーターやインタークーラー、オイルクーラーと云った冷却系の破損や油漏れが見られない事から、何とか自走は出来そうだ。

一方ガヤルドは、真後ろから見ると特に何も無さそうだったが、前に回り込むと思わず絶句する程、凄まじい惨状を呈していた。

きつと、俺のチェイサーに接触した後、中央分離帯に激突し、そのまま跳ね返った勢いで緊急避難帯に突っ込んで停止したのだろう。台形型の退避場の斜めに走るガードレールと遮音壁にドアから前の部分をぺしゃんこにしてめり込んでいた。エンジンは後ろにあるミッドシップ車とはいえ、左のホイールは天を、右のタイヤは左に切れて、前輪が互いにあらぬ方向を向いている状態では、自走などとても無理だろう。

砕け散って真っ白になった窓の向こう側の運転席で人影が動いたから、運転手は無事のようだけれど、茫然自失しているのか一向に車の外へ出て来る気配がない。

そうこうしている内に、後ろの方からサイレンの音が遠く聞こえ、振り返ると暗いトンネルの中から赤いパトランプとハイビームを点けた170系クラウンの白黒パトカーが2台、黄色いパトランプを灯した黄色い200系ランドクルーザーの道路パトカーが1台、此方へ向かって疾走して来るのが見えた。

警察官と共に力づくでガヤルドから運転手を引っ張り出した。

ドライバーは、俺とそう歳の変わらない、まだ二十代になったばかりと思われる何処かなよなよした情けない雰囲気を纏ったかなり痩せている若い青年だった。何だろう、俺も人の事を言えた義理ではないが、物凄いオタク臭さがある。

そうして、その若い男と俺は、パトカーで駆けつけた4人のお巡りさんに囲まれ、それぞれ事情聴取を受ける事になった訳だ。が、早速何方に非があるかという問題で、双方拗れる事態になった。

俺は、前を走行するトラックを追い越そうと、事前に右ウインカ

―で予告していたにも関わらず、俺が車線変更したと同時に、相手が二重追い越しを咬ませてきて衝突した、と主張した。しかし当の若者は、自分のガヤルドが追越車線を走っていたら俺のチェイサーが急に車線変更してきた、と言い掛かりをつけてきたのだ。

当然、俺は奴もトンネルの中で後続車として同じ第一通行帯を走行していた、と反論した。ところが、それを実証できる物がない。それは相手も同様のようだった。

結局、その所は簡易裁判が保険屋同士の話し合いで細かい過失割合は追々決めていく、と云う事で何とも釈然としない決着を迎えたが、問題は寧ろその後だった。

「え？君、任意に入ってないの？」

「はあ……。」

項垂れる同業同世代の青年を見て、俺は呆れて二の句が継げなかった。本当にガヤルドに緑ナンバーを付けてタクシー車両として使っている事にも仰天したが、一般のドライバーでも入っていて当然とされている任意保険に加入していないだなんて信じられない事だった。

「しかもお前、この自賠責保険証明書の期限、とつくの昔に切れているぞ！」

「え？マジですか？」

強制保険ばかりではない、よく見たらフロントウインドウに貼ってある車検のステッカーの日付も、3日前の物だった。車検切れである。恐らく、車検と自賠責の期限が残り少ない時に営業用車両として申請して通ってしまったのだろう。絶対定期整備も碌にやってないのだろうなあ。タクシーでなくとも、こういう無駄に高性能な車に乗っている場合、万一の事も考えて整備には一番に気を遣うものなのだけれど……。

「では、致し方ない。君、一体何処のギルドの所属なの？こっちのギルドの担当からそちらに掛け合って、立て替えて貰うから、教えてよ。」

俺は内心苛立ちながら相手の男に詰め寄った。ところが、しどろもどろに呟いた男の返答は、またしても俺の想像の域を超える物だった。

「いや……、その……。入っていないんです。ギルド……。」

「は？じゃあ、何？ギルドすっ飛ばして直接協会に加入しているの？」

「はあ……。まあ……。」

俺は愕然としつつも、心の中で何となく納得した。だって、たとえばどうしようもない程小さな零細ギルドでも、まともな組織なら、料金やサービスの質だけでなく、車検や整備や保険関係といった安全安心に直結する法規手続きを所属事業者にきちんと履行するように仕向けさせるからである。

結局、ガヤルドは警察官が応援として呼んだ積載車の上に乗せられ、俺は別の警官からベージュ色のガムテープを拝借し、バンパーとライト部とボディーをガムテープで覆って応急処置を施した。そして当の相手の男は、無車検走行、及び無保険走行の現行犯で逮捕され、2台の内的一方のパトカーに乗せられて連行されてしまった。

その後も自分の車を運転し、何とか自力で初奈島に辿り着くと、俺はすぐに警察署で事故証明書を発行する手続きを行い、源さんの所へ車を持ち込んで修理し、領収書を受け取ると大きな市民総合病院へ行き、医師の診察と精密検査を受けた。

幸い、これと目立つ損傷は見られない、との事だったが、

「今回だけはたまたま見つからない程損傷箇所が小さかったという可能性もあります。痛み等、何か体調の不調を感じたらすぐにお越

し下さい。」

と、医者から念押しされた。

そして一週間後、郵送された事故証明書と自賠責と任意保険の請求書類、修理に掛かった諸経費の領収書と診断書を市販の茶色い大きな封筒に同封し、俺はギルドの初奈島支部本事務所の中にある、個人タクシー協同協会の保険担当の窓口に提出した。

さて、裁判所が出した過失割合3：7を根拠に、保険屋と相手の男の間での示談交渉によって、一旦俺の保険から補償した分を相手に補填させて万事解決！という運びとなる予定だったが、後日保険関係手続きの担当者から掛かってきた電話によって事態は一変した。なんと、共済は、相手が金銭的にも社会的信用においても支払い能力がない、と判断して彼への請求を破棄したのだという。要するに俺の保険から出した分は相殺されるどころか、返って来ないという事らしい。

「という事は……、つまり……。」

俺は額から冷や汗をかきながら息を飲んだ。電話の向こうから聞こえてくる壮年男性の担当者の言葉は非情なものだった。

「来期からの保険料が値上げされますね。」

嘘だ つ！やだ

！ただでさえも排気量が大きな高出力車を複数台所有している上に年間航続距離も長いから、今でも保険料が高めでちょっと苦しい位なのに、この次の審査から更に上乗せで払わなければいけないのかよ。

「何とかこれ、次の審査事項から外して貰えませんか？」

俺はいけない事だと認識しつつも担当者に相談した。

「難しいですね。今回は高津さんも事故の当事者ですから……。」
彼は苦笑していたが、慰めかこんな言葉も発した。

「ただ、今回の場合、相手が無保険無車検の重篤な違反を犯してい

ましたから。その事も考慮して値上げは微小、来期に補償請求が無ければまた以前の保険料に下げられる筈です。それ程気に病む必要は無いと存じますよ。どのみち、請求があつた時点である程度は保険料の審査の対象となりますから。」

いざという時の為の保険、そのお陰で確かに今回は金銭的な出費をせずに済んだが、その代わり、事故の相手側が無保険だったばかりに来年度の保険料が上がるという形で返ってきた。

何だかなあ……。何処か腑に落ちない出来事として、この出来事は俺の胸に刻まれる事になった。

余談だが、高津タクシー仕様にリアフォグという項目が新しく加わった。

早速龍さんに頼んで、所有している全てのリアフォグ無しの車のリアバンパーを加工して、バンパーの上部両端に細長い赤色LED灯の明るいリアフォグランプを1つずつ埋め込んで貰った。ヘッドライトかフロントフォグ点灯時しか作動できず、それ単体で消灯できるようにダッシュボードの右端に専用のスイッチも取り付けた。これで何時濃霧や大雨や猛吹雪に遭遇しても安心である。多分……。

第十七話：道路情報ラジオは1620KHz！

>>新太郎

とある木曜日の夕方、玉緒と香澄、そしてヨネさんと共に夕食を摂りつつ何気なくテレビを視ていると、こんなロングCM、というより特番が流れてきた。

『祝！幻想郷八岐草薙自動車道がいよいよ開通！』

というタイトルコールで始まったその番組は、道路公団が新規に施工した高速道路を広く認知させる為に製作したもので、どうやら今度の日曜日、片側暫定2車線（本当は分離帯付き片道2車線の4車線で完成する予定なのに、建設費と維持費をケチる為に半分の片側の2車線だけを造って対面交通式として先行で供用させ、残りの半分は様子を見ながら漸次着工するという吝嗇な方法。何故か日本の地方の高速道で非常によく見られる。少し太くした中央線の上にプラスチックゴム製の柔らかいポールを並べて仕切っただけなので、高速で対向する車同士が正面衝突する大惨事が起こる可能性が高く、実際そのような悲劇が頻繁に見られる危険な方式でもある。）で開通するその道路の開通式と周辺の観光施設の宣伝も兼ねてイベントを催すらしい。

黒々とした真新しいアスファルトが映える、深々とした山間部の高速道路の路上で、リポーターの若い女性とスーツを着て粧した公団のお偉いさんと地元の行政部のトップらしきおっさん達が並んでテレビに映っている。そして彼らの話によると、どうやらこの道路が通る周辺の市町村には温泉郷とか秘湯とかかが結構あるらしい。

今まで国道とは名ばかりの1〜2車線の林道のような、冬季閉鎖も当たり前前の道路しか通ってなくて陸の孤島になっていたとかで、

「交通の利便性や集客力の向上の面から、地元住民は高速道路の完成に歓喜している、これから全土に向かって自分達の村の魅力をどんどん発信したい！」

と、相当期待を込めているのか力強い言葉で言い切っていた。

食事を終え、ヨネさんと香澄が帰った後、卓袱台の上にラップトップPCを置き、ゲーム内インターネットで新しく出来た道路の詳しいルートを調べる序でに幻想郷周辺の情報についても検索してみる。

確かに高く険しい山々を縫うように走る九十九折の細い国道と、その一般道の上や下を糞長いトンネルと高さが半端ない高架を使って緩やかなループを描く高速道路の周辺には温泉や温泉宿街が多く点在しているようだった。湯治客のレビューに目を通す限り、何処もかなり評判も良いらしい。

ただ、この地方は標高が高い上に豪雪地帯なので、夏場から今位の時期には濃霧が、冬から春に掛けては猛吹雪が辺り一面を席卷し、年がら年中数m先すら見通せない危険な視界不良の状況が続くのだという。だから走行する際は十分注意するように、と道路公団の道路周辺案内に注意書きが、霧で真っ白になった山間の2車線道路の緩やかな右カーブをテールライト共に真っ赤に煌くリアフォグランプを灯して疾駆する白い3代目エステイマの後ろ姿の写真と共に添えられていた。

普通なら敬遠して然るべきなのだろうが、俺はついこの間未装着車に後付けのリアフォグを付け、リアフォグランプ全車標準装備化を達成したばかり（EUの法規定で定められているメルセデスやBMW等の欧州車は当然として、キャデラックやレガシイ等、ヨーロッパへも輸出している極一部のアメ車や日本車にも純正でリアフォグを標準装備として搭載している車がある。そういう車では、高津タクシー仕様に改装した後もリアフォグを残し、以前から視界不良の時は少しでも後続車からの被視認性を上げる為に使っていた。）だったので、新しく設置したバックフォグライトの効果を確かめたい、と思ってますます行ってみたくなった。

台所で食事の後片付けをしている玉緒の背中に向かって、

「たまには息抜きも兼ねて温泉へ行かないか？」

と提案すると、二つ返事で承諾したので、俺は次の週末に彼女を連れて出掛ける事にした。

その週の土曜日の朝。3・5Li-VTECエンジンに換装してスーパーチャージャーを装着し、高津タクシー仕様にしたUA5型インスパイアの助手席に玉緒を乗せた俺は、薄っすらと白い日差しが雲の隙間から差すものの鈍い鼠色をした曇天の下、ポツポツと小雨が降る中を車幅灯とフロントフォグライトを点灯した状態で、アパートの駐車場から外へ向かって走りだした。

遠出をするには生憎な天気だが、時間が経てば晴れる可能性も無くはないし、走行自体に支障をきたす程でもない。俺は気にせず、時々ワイパーを動かして窓に付いた水滴を拭いながらR107バイパスへ向かって走り続けた。

市道から交差点を左折して側道のR107へ入り、そのまま加速車線から初奈島中央バイパス本線へ合流する。気の所為か、空が俄に暗くなってますます雨の勢いが増してきたようだ。昨日の天気予報では降水確率30%の曇だと報じていたのだが……。

「なんか、一雨来そうだな。すぐに止むかと思ったのにな……。」

追越車線走り続ける白い現行のRB4型オデッセイを20m程後ろから100km/hを少し超過する速度で追走しながら、俺は隣に居る玉緒に話し掛けた。

「段々と雨脚が強くなっているような気がしますけれど……。あなた、大丈夫ですか？」

「大丈夫、これしきの雨位、どうって事はないさ。」

あれよあれよという間に降りが酷くなり、ボタツ……ボタツ……と大粒の雨粒がフロントウィンドウに叩きつけられて円盤状に圧壊

し、素早く2本の黒いワイパーに吹き飛ばされていく様を見つめつつ不安気に気遣った女房に、俺に任せろ！といったような気概を含ませて、俺は敢えて笑顔で応えた。

その後も天気予報は物の見事に大外れし、六郷JCTを本初高速の上りから陸南自動車道の下りへと合流した頃には、大盥をいつぱいに満たした水を頭のすぐ上からぶち撒けたかと思う程の大量の雨水が、滝のように雲から地面へ叩きつけるように降り注いでいた。

ただでさえ土砂降りと激しく目の前を往復するワイパーでよく見えないのに、猛スピードで走る自動車、特に大型のトラックやバスが勢い良く跳ね上げた盛大な水飛沫によって、すぐ50m程先にいる筈の車のテールランプの明かりさえ判らないようになってしまっている。俺はロービームを点けると、後続車に自分の車の存在を教える為にリアフォグランプの点灯スイッチを入れた。

押しボタン式の縦長の長方形のスイッチを押すと、白く光るリアフォグのマークのすぐ上に、赤いLED光の細い横長の四角いパイロットランプが点灯する。もともと自分の視野を確保ではなく、純粹に他車に自車への注意喚起をさせる為の灯火なので効果の程は不明だが、無いよりはマシだろう。

それより、こんな天気だからハイドロプレーニング現象（ウェットでもタイヤの摩擦力を維持する為の溝の排水能力に対して、路面の水溜まりの水量が大きくなった時に起こるスリップ現象。表面張力でタイヤが地面から完全に離れて水に浮いた状態なので、加減速や舵輪、一切の操作が不能に陥る。もしも雨の日にタイヤがスリップした時は、諦めてアクセルから足を離し、自然に速度が落ちてタイヤが地面に接触するまでそのまま真っ直ぐ滑り続けるしか対応策が無い。）が起きかねないので、普段エンジンの限界までガンガン回す俺ですら100km/hを超えないように気を付けているのに（一般的なタイヤの場合、ハイプロ現象が起きる確率は100km

ノhを超えるとグツと上昇する。）、150km/h以上の速度で突っ走っている奴らは何を考えているのだろう？死にたいのか？赤く輝くリアフォグを白い飛沫の奥から瞬かせつつ抜き去って行くBMWやRV車を見て、俺はそんな事を思った。

そうこうしている内に、前方を90km/h程のスピードで走る、尾灯を赤く灯した15t位の大型のコンテナ車のトレーラーの灰色の大きな影が徐々に近付いてきた。

俺はドアミラーと後方目視で追越車線に車が走っていない事を確かめると、タイヤと相談しつつ、空転を起こさない範囲で緩急をつけて徐にアクセルを踏み込んでいく。目と鼻の先では、トレーラーのタイヤが巻き上げた雨水が1m以上の高さの大きな白い水の壁となって、まるで通せんぼをする子供のように此方の視界を塞いでいる。トレーラーから先がどうなっているのか全然見通せない。あれに飛び込まなくてはいけないのか？そう考えるだけで、正直俺は気が滅入った。

タイヤと呼ばれる物には、晴天時専用のガチレース仕様ののつぺらぼな物を除けば、表面張力の強い水の力によるタイヤの摩擦力の消失を防ぐという目的で、サイピングと呼ばれる排水用の溝が掘ってある。

普通はそのへんで走っている乗用車のように、波打ちとか阿弥陀籤のようなパターンで細い溝をタイヤに対して縦方向に何本も平行に沢山引いてある、というのが定石だ。が、トラックなどの大型車のタイヤに関していえば、単純にタイヤに普通車のようなスリットを入れると摩擦力の減衰による動力性能の低下が無視出来なくなる為、雨水を掻き出しつつも地面を蹴り上げて進む為に、タイヤの側面から中心線に向けて、まるでブロックでも切り出したのかと見間違えう程の幅が広くて深い溝が等間隔で左右互い違いに彫り込まれている。

これが、猛スピードで走るトラックが、やたらと水を跳ね上げる原因である。大きなゴム製の水車が鬼回転しているような物だから、水飛沫が上がるのはある意味当然な事なのだ。

トレーラーを追い抜く為意を決し、進む水柱の内部へと突入する。
ゴオオオオオオオオ……ブシャアアアアア……。

物凄く多量の水が、車体の左側から吹き掛かり、ボンネットやフロントウィンドウ、車の左側面に叩きつけられる。全く前が見えない。精々トレーラーの側面に付けられた青い標識灯が認識できる程度である。もしも、これを抜けたすぐ先に車がいたら……。そんな事を想像して、恐怖から俺は冷や汗を流し、ハンドルをぎゅっと力を込めて握んだ。

急に水飛沫が止み、明るい視界が開いた。トレーラーの前に出たのだ。俺は左ドアミラーに今し方追い抜いた青色の二代目日野・プロフィアの白いヘッドライトとフォグランプが映っているのに目を留めると、左ウインカーを出してすぐに第二通行帯へ車線変更した。追越車線走り続ける事は違法行為だし、それに何時までも一番右側のレーンに居続けて、猛スピードで水柱の中に突っ込んで来た奴にお釜を掘られるのは真っ平御免だ。

走行車線へ完全に車が収まった刹那、後ろのプロフィアが撒き上げる水飛沫の中から無灯火の銀色の初代アテンザのセダンが勢い良く飛び出し、そのまま140km/h近いで速度で追い抜いて行った。リアフォグを点灯しているとはいえ、後5秒だけでも退避が遅れれば確実に玉突き衝突していた筈だ。

道中を進む内に、雨は降やむどころかますますその勢いを増していた。道路に引かれた白線さえも判り難くなる位、路上には水が溜まってちよつとした川のようになっている。車の後ろの方からバシヤバシヤとタイヤが水を跳ね上げる音が車内まで響き、ドアミラー

や後ろのドアの窓から、立ち上がった白い水柱が続々と顔を覗かせ
ては吹き飛ばされていく。

『大雨注意！ただ今100km/h制限実施中。スピード落とせ！』
『灯火規制中。ヘッドライトや補助前照灯をせよ！』

と云う表示を繰り返し、電光掲示板が黄色い警告灯を明滅させてい
た。

一時はどうなるかと危惧した程酷かった土砂降りも、段々と収束
する兆しを見せ始め、陸南道からR25経由で中央高速へ乗り換え
る為に戸賀ICで高速を降りた頃には、全天を灰掛かった厚い雲が
覆うもののすっかり雨脚は遠のいていた。ただでさえ難所である忍
忍ロードを最悪のコンディションで挑まずに済んで、ワイパーのス
イッチを切りつつ俺は心底ホッとした。

深い山の中を通って行く道路なので、崖側に鬱蒼と覆い茂る木々
によって昼間でも薄暗いが、ヘッドライトを点けて前方を照らして
いれば走行に支障はない。

大きく深い杉の木立の間から、突然白い鉄柱に固定された、『1
620KHz・道路情報ラジオここから』と書かれた案内標識が視
界に入ってきたので、俺はカーオーディオに手を伸ばし、『（（（（（
な模様が描かれたボタンをポチッと押した。

『……ます。……こちらは、国土交通省です。12時35分現在、
R25、R321、R1、R229及びその近辺を走行中のドライ
バーの方へ道路情報をお知らせします……。』

ドア下にあるスピーカーから女性の合成音声が届いてくる。

『R1を走行中のドライバーの方に、交通集中による渋滞のお知らせ
です。帝都方面上り車線、空賀忍び里第3交差点空賀IC方面口
を先頭に約3kmの自然渋滞が発生しています。巴里方面下り線、
大型ダンプカーと軽自動車が出し合い衝突して3名の死傷者が出る交
通事故が発生しました。この影響により小金井坂交差点北およそ1

k m付近を先頭に5 k m弱の渋滞が発生しています。R 1下りを走行中の方は十分ご注意下さい。』

今のところ、有益な情報は無いな。

『次に、R 2 9 9を走行中のドライバーの方にお知らせします。現在、R 2 9 9及びその近郊の道路において、交通事故または渋滞の情報は入っておりません。引き続き安全運転を励行して下さいますようお願いします。』

これも全然関係ないな。

『最後に、R 2 5、及びR 3 2 1を走行中のドライバーの方にお知らせです。1 2時3 7分現在、大雨の為設定されていたR 2 5 R 3 2 1重複区間、戸空道路の一時通行制限は、上下線共に解除されています……。』

お、そうだったのか？ラッキーだったな……。

『ただ今、戸空道路の一部区間に於いて、更なる安全な交通を実現する為、現在改修工事を行っています。その影響で皆様に御迷惑を掛けしますが、該当区間で第二通行帯を通行禁止にし、車線規制を行なっています。前方によく注意して運転して下さい。皆様の御理解と御協力をお願い致します。』

そうなのか、気を付けよう。そう思った俺は無意識に道路の先を注視した。

『ドライバーの皆さん。長時間の運転で疲れが溜まっていますか？適度な休憩は安全運転にとっても重要です。急いでいるからと無理をせず、サービスエリアや道の駅、道路沿いのコンビニエンスストアやファミリーストラン等で適宜休憩を取りましょう。……以上、国土交通省が道路情報をお知らせしました。……このラジオは、道路情報ラジオ空賀がお送りしています。……こちら……。』

一通り放送を聞いたので、俺はラジオを切った。どうせこれ以上聞いたところで、さっきの放送がループで流れるだけである。

しかし、まあ……。休憩か……。そろそろ初奈島の自宅を出発し

て2時間近くになるし、トイレが近くなりつつある気もする。昼飯を兼ねて暫しの休息を取るのも良いだろう。そう言えば、この先の麓にそこそこ美味の蕎麦屋がある、という噂を聞いた事がある。寄ってみるか……。

「なあ、お前。」

俺は、目線だけは上り坂の左カーブの先を睨みつつも、玉緒に声を掛けた。

「何ですか？あなた……。」

「そろそろ昼飯にしないか？」

「あら、もうこんな時間ですね。」

カーナビの画面の隅に表示された時計は、既に『12:42分』という時刻を表示していた。

「蕎麦でもいいか？この峠を越えた所に蕎麦屋があるんだが、結構美味しいらしい。」

「良いですわね。」

ハンドルを握って車を走らせながら夫婦で他愛もない事を談笑する。なんかこういうのも良いなあ、と思っていると、後ろからかなりのスピードで黒いキャデラックの初代CTSが接近してきた。どいう訳か、俺の車に向かってパッシングしている。

何だろう？と怪訝に思いつつ運転席側のドアミラーに目を遣ると、キャデラックはクラクションをプツ！と軽く鳴らすと追い越しを仕掛けてきた。

他人をおちよくっているのか？と思っと思わず右側に並走する黒い車を睨み付けると、その車の運転手が俺の方を向き、後ろ！後ろ！とでも言うかのように、仕切りに車の後方を指さすジェスチャーを繰り返している姿が目に入った。

そして、キャデラックは完全に俺の車の前に出ると、ナンバープレートと両側にバックランプと共に装着されたリアフォグを2回明滅させた。

まさか……。嫌な予感がしてふと手元のリアフォグのスイッチへ視線を移すと、しっかりと赤いパイロットランプが煌々と点灯していた。

やばい！リアフォグを消すのを失念していた。視界不良の時には大活躍する安全装備も、見通しの良い時には眩し過ぎて後続車のドライバーを幻惑させる厄介物となってしまう。俺はすぐにリアフォグを切ると、1回パッシングして、教えてくれてありがとう！と、走り去って行くキャデラックに向かって礼をした。

峠の道の頂上を越え、九十九折の急な高速カーブが連続する長い下り坂に差し掛かると、俺は車のエンジンブレーキを効かせる為にギアをセカンドレンジに入れた。

暫く連続するなだらかなS字カーブを鼻歌交じりに攻略していると、左側の路肩に突然、

『この先工事中！左車線に移れ！』

『徐行』

とそれぞれ書かれた工事用の簡易な警告表示看板が2枚置かれているのが目に入った。どうやら先程ラジオで周知していた道路工事区間に差し掛かりつつあるらしい。右側の申し訳程度の路肩に赤い霧灯を点けた朱色のパイロンが追越車線を斜めに横断する形で等間隔で並び、その前に左車線へのレーン変更を指示する矢印表示が複数個置かれていた。

中央を走る白い破線のすぐ右側に綺麗に整列した、何処までも続く赤いパイロンの列を脇目に見ながら走って行くと、パイロンの内側に10tのダンプカーやショベルカー、ミキサー車やロードローラーにクレーン車、その他それを操ったり掘ったり交通整理をしたりする黄色いヘルメットに青い作業着を来た大勢の作業員が懸命に働いているのが次々と目に入る。

どうやら崖の斜面につつかえ棒のように垂直な鉄柱を立て、崖側へ張り出すように道路を拡幅し、路側帯のスペースを設ける事で頑丈なガードレールを敷設する算段のようだ。これで少しは走り易くなればいいのだが……。俺は少しだけそんな期待をした。

麓近くまで降りて、生垣が造られた中央分離帯を挟んで対向車線を走行する車と顔を合わせる事が出来るようになった頃、件の蕎麦屋が行く手の右側に見えてきた。青い瓦葺きの寄棟造りの日本家屋のような店舗で、『蕎麦食事処・尾張屋』と書かれた白い大きな看板と紫色の暖簾を掲げている。

丁度中央分離帯が切れている所から敷地内に設けられた駐車場へ出入り可能なようになっていたので、右ウインカーを焚いて車の鼻先を中央分離帯の裂け目に突っ込むと、対向車が途切れるのを待ってから俺は対向車線を横断してそこへ入場した。

歩道に乗り上げて駐車場に入ってから気が付いたのだが、入り口の所にこんな立看板が立てられていた。

『5ナンバー車推奨駐車場！大型車の駐車は遠慮させて頂いております。悪しからず。店主』

だが、辺りを見回してみると、プリウスとかオーリスとかのようなコンパクトからマジエスタとかシーマのようなセダン、果てはエルグランドやアルファードのような大型サイズのミニバンに至るまで、結構……というかほぼ3ナンバー車しか停まっていない。どうやら普通の駐車場より若干だけ一車当たりのスペースを狭くしてより多く駐車できるようにした駐車場のようだった。

だから、少々狭いなとは思ったが、特にドアミラーを折り畳まななくてもぎりぎりインスパイアを駐車する事が出来た。リアバンパーを灰色のブロック塀に接触するまで後退したにも関わらず、やけにノーズが飛び出しているような気がしないでもないが、多分差し支える事は無かろう。

ベンガラが塗布された細やかな細い木枠に硝子が填った、日本家屋によくあるタイプの、古めかしく見せかけた引き戸をガラガラと開けて、俺と玉緒は店内に足を踏み入れた。

表の窓から差し込む光以外は裸電球の間接照明の明かりだけなので薄暗いが、5人位が座れるカウンターと、そのすぐ向かいに4人がけの四角いテーブル席が3つ、奥にこれまた4〜6人程入れそうな、爽やかな青さが目に染みる琉球畳が敷かれた4畳の座敷席が1つあるだけの小さな店である。カウンターは明るい白色の檜の一枚板、テーブルは黒檀、座敷の鴨居や天井の梁には年月を経て炭の如く黒く変色した杉の木を使い、壁は濃い黒色の土塀、床は黒い大理石のタイル貼りである。中々に雰囲気の良い店だ。店主の趣味趣向が窺えるというものである。

店内にはカウンターの内側で蕎麦を手打つ、襟が藍色の白い甚兵衛タイプの七分袖の調理着に和帽子を被った、輪郭の角張った角刈りがよく似合うまだ若い亭主と、客の注文を取る、ポニーテールがよく似合う、黄色いセーターと裾の長い青いジーンズのパンツの上から薄桃色のエプロンを着けた、物腰の柔らかそうな可愛らしい女将の他に、家族連れやカップルも含めて6組、都合12人の客しか居なかった。まあ、15台しか停められないとはいえ、俺の車も含めて8台しか駐車場に駐車していない時点で予想は出来ていたが……。

「いらつしやいませ。」

此方に気が付いたのか、主人と女房が同時に俺達に声を掛けてきた。

女房の方が続け様に口を開ける。

「何名様でしょうか？」

「2名です。」

ピースサインのように握り拳の上から人差し指と中指を立てて俺が答えると、女将さんは困ったような表情で背後に顔を向け、店内の中を見渡した。既にテーブル席は、手前の方から順に赤ん坊を連れた夫婦、子無しの夫婦、恐らく出会って間もないであろう何処か余所余所しいカップルが腰を掛け、カウンター席は男の独り客で奥の3席が埋まっている。

テーブル席で他の夫婦やカップルと相席と云うのは気不味くて嫌だし、人の出入りがある度に寒風が当たりそうなレジ近くのカウンター席で食べるのも気が引けた。風が当たaraぬように玉緒を奥に座らせれば彼女を他の男の隣に座らせる事になるし、だからと言って俺が奥に行けば彼女に寒い思いをさせてしまう事になる。まさにジレンマだ。

さて、どうしたものか……、と考え倦ねていると、

「なら、お座敷の方はどうですか？」

と女将が提案してきた。

異論は無いのでそのまま奥の間に通される。

土間から一段と高くなっている横長の長方形の4畳間に合わせるように、ベンガラと漆を塗って黒く染めた楠の大きな四角い卓袱台が鎮座し、入り口の障子と反対側に2枚ずつ、残りの辺に1枚ずつ、計6枚紫色の座布団が敷いてある。カウンター側から見て向かって右側奥に造られたちよつとした床の間には、杉の一本丸太に華麗に彫刻を施した立派な床柱と、レプリカが贋物が定かではないが、真っ白な紙に滲みや染みを付けてそれらしくした雪舟の山水の水墨画の掛け軸が掛けられている。床の間の傍に取り付けられた家庭用の白いビーバーエアコンのやや場違いな感が否めないが、概ね雰囲気の良い座敷である。

玉緒と二人、靴を脱いで座敷に上がって上着を脱ぐ。俺が床の間、

玉緒を反対側に腰を下ろしたものの、用を足しなくなったのでジャケットだけ置いて俺は立ち上がった。

靴を履きながら女将に声を掛ける。

「すみません、お手洗いは何処にありますか？」

「トイレならそこに御座いますよ。」

女将が指し示した方、丁度カウンターと反対側へ目を向けると、カップルが蕎麦を啜るテーブル席と座敷の間に、一人一人分の奥まったスペースがあり、すぐ突き当たった壁に木のドアが立て掛けられているのが見える。ドアには『お手洗』と書かれた白いプラスチックのプレートが螺子留めされていた。

さっさと小便を済まして手を洗い、ハンカチで手を拭きつつ座敷へと引き返すと、入れ違うように今度は、

「ごめんなさい、あなた。わたしもちょっと……、おトイレに……。」

と玉緒が立ち上がった。

「ああ、行つて来い。そこにトイレあるから。」

「はい、わかりました。」

玉緒がトイレへ発つて少しすると、女将がメニューを渡しに来た。

「あら、奥様は？」

「ああ、すみません。今丁度、手洗いに行つていて……。」

「ああ、そうですか。では、此方、当店の御品書きで御座います。」

どうぞ、ごゆっくり……。」

そう言い残して女将は去つて行った。

玉緒が戻つて来るまでの間、2冊渡された『お品書き』と称する青色のコクヨの小さな大学ノートのページをパラパラと捲り、軽く目を通す。

笹蕎麦や盛り蕎麦といった冷たい蕎麦やかけ蕎麦のような暖かい

蕎麦まで、それぞれ数種類のラインナップがあるのは当然として、天そばやきつね蕎麦等の繋がりから天井のような丼物も幾つか出し、更に味噌汁とかちよつとした副菜まで付属したセットもあるらしい。見かけによらず、飲み物の種類もかなり豊富に取り揃えているようだ。

ふと顔を戸口の方へ向け、他の客が食事をする様子を失礼も承知で観察すれば、皆旨そうに蕎麦を啜る様が見て取れる。美味いという評判自体は本物だと思われた。

玉緒がトイレから戻ってきて、それぞれメニューを読み、互いに何を頼むか決めた頃、まるで頃合いを見計らったかのように女将さんが注文を取りに来た。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「私の方に盛り蕎麦の並を1つ、家内の方に山菜蕎麦の暖かいのを1つ、お願いします。」

「は？」

「え？えーっと、……盛り蕎麦とかけ蕎麦の山菜を1つずつ……。」

まるで意味が解らないとでも言うかと思う表情で女将に訊き返され、もしかや上手く伝わって居なかったのか？と焦った俺は、思わず自分が注文を復唱してしまった。

ところが、女将は別に俺の発言を聞き漏らした訳ではないらしい。「盛り蕎麦と暖かい山菜蕎麦ですか？本当にそれで宜しいのですか？」

「……………？え、ええ…………。」

「実は、ウチは月見蕎麦がお勧めなんですよ。月見蕎麦になさいませんか？」

「はあ、そうなのですか？でも、私は暖かい蕎麦は苦手なので、やはり冷たい盛り蕎麦を…………。」

「いえいえ、ウチの月見蕎麦は、暖かいお蕎麦が苦手な方でも美味しく召し上がって頂ける位、絶品、ですから。」

「……………」

『絶品』と、その言葉だけやけに力を込めて月見蕎麦を勧めてくる女将を呆然と見上げて、俺と玉緒は揃って絶句していた。よく周りを見渡せば、カウンターの一番奥の席で主人と雑談しつつきつね蕎麦を食べている常連らしい男性を除いて、店内にいる他の客は皆月見蕎麦を摂っている。どうやらこの蕎麦屋は相当通った馴染みの客という例外を除けば、須らく全ての客に月見蕎麦を提供するべきだ、という信条を掲げている何とも傍迷惑な店らしい。

チエーンでない個人経営の飯屋でこういう、自信作を注文する事を強要してくる店がある事を聞いた事はあるが、まさか自分がそういう物に遭遇するとは思わなかった。

まあ、ここは無用のトラブルを防ぐ為にも、女将さんの勧めに従っておく方が無難だろうか……。

結局、俺と玉緒は二人共月見蕎麦の暖かいのを注文した。

蕎麦は噂通り、いやそれ以上に美味しかったし、味と分量の割に値段もお手頃だったから満足したが、腹は膨れても腑に落ちない、何とも言えぬ気分になりながら俺達は蕎麦屋を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2901s/>

ネットゲの世界に取り込まれたから個人タクシーを始めた～高津タクシー物語～

2011年11月7日03時25分発行